九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日・韓両国語の伝聞表現のモダリティ : 話者の表現意図を中心に

呉, 先珠

https://doi.org/10.15017/1654600

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

KYUSHU UNIVERSITY

日・韓両国語の伝聞表現のモダリティ

-話者の表現意図を中心に-

呉先珠

2016 年 1 月

目　次

１章 序論 1

１.１研究背景 1

１.２研究目的 2

１.３研究方法 2

１.４用語の解説と本稿の立場 3

１.４.１モダリティとムード、証拠性(Evidentiality)の関係 3

１.４.２引用と伝聞の区別 12

１.４.３伝聞とは何か 14

２章 先行研究 17

２.１日韓両国語の命題とモダリティをめぐって 17

２.１.１日本語の陳述論からモダリティまでへの道程 17

２.１.２韓国語の「따옴 어찌 자리 토(引用副詞格助詞)」からモダリティまでへの道程 23

２.２日本語の文構造とモダリティ分類 28

２.３韓国語の文構造とモダリティ分類 31

３章 日韓両国語伝聞表現の変遷 34

３.１日本語伝聞表現の変遷と文法化 34

３.１.１日本語史の通時的区分 34

３.１.２日本語伝聞表現の変遷 35

３.１.２.１「そうだ」の変遷 35

３.１.２.２「ようだ」の変遷 38

３.１.２.３「らしい」の変遷 39

３.１.２.４「という」の変遷 41

３.１.２.５「って」の変遷 42

３.１.２.６「とか」の変遷 43

３.２韓国語伝聞表現の変遷と文法化 45
３.２.１韓国語史の通時的区分 45
３.２.２韓国語伝聞表現の変遷 46
３.２.２.１引用動詞の位置 46
４章 現代日本語の伝聞表現のモダリティとカテゴリー化 52
４.１推論「そうだ」「ようだ」「らしい」の証拠とモダリティ 53
４.１.１推論「そうだ」の証拠とモダリティ 54
４.１.１.１推論「そうだ」の先行研究 54
４.１.１.２推論「そうだ」の証拠の入手経路 55
４.１.１.３推論「そうだ」における話し手の心的態度を表す戦略 56
４.１.１.４推論「そうだ」の情報が聞き手に及ぼす影響 58
４.１.２推論「ようだ」の証拠とモダリティ 58
４.１.２.１推論「ようだ」の先行研究 59
４.１.２.２推論「ようだ」の証拠の入手経路 59
４.１.２.３推論「ようだ」の話し手の認識態度を表す戦略 61
４.１.２.４推論「ようだ」の情報が聞き手に及ぼす影響 62
４.１.３推論「らしい」の証拠とモダリティ 63
４.１.３.１推論「らしい」の先行研究 63
４.１.３.２推論「らしい」の証拠の入手経路 64
４.１.３.３推論「らしい」の話し手の心的態度を表す戦略 65
４.１.３.４推論「らしい」の情報が聞き手に及ぼす影響 67
４.１.４推論「そうだ」「ようだ」「らしい」の証拠とモダリティの関係 68
４.２伝聞「そうだ」「ようだ」「らしい」の情報とモダリティ 69
４.２.１伝聞「そうだ」の情報とモダリティ 69
４.２.１.１伝聞「そうだ」の先行研究 69
４.２.１.２伝聞「そうだ」の情報の入手経路 70
４.２.１.３伝聞「そうだ」の情報源とテンス 71

４.２.１.４伝聞「そうだ」の話し手の心的態度を表す戦略 72
４.２.１.５伝聞「そうだ」の情報が聞き手に及ぼす影響 74
４.２.２伝聞用法「ようだ」の情報とモダリティ 74
４.２.２.１伝聞用法「ようだ」の先行研究 75
４.２.２.２伝聞用法「ようだ」の情報の入手経路 75
４.２.２.３伝聞用法「ようだ」の情報源とテンス 76
４.２.２.４伝聞用法「ようだ」の話し手の表現意図を表す戦略 78
４.２.２.５伝聞用法「ようだ」の情報が聞き手に及ぼす影響 80
４.２.３伝聞用法「らしい」の情報とモダリティ 80
４.２.３.１伝聞用法「らしい」の先行研究 80
４.２.３.２伝聞用法「らしい」の情報の入手経路 81
４.２.３.３伝聞用法「らしい」の情報源とテンス 82
４.２.３.４伝聞用法「らしい」の話し手の心的態度を表す戦略 83
４.２.３.５伝聞用法「らしい」の情報が聞き手に及ぼす影響 85
４.２.４伝聞「そうだ」「ようだ」「らしい」の情報とモダリティの関係 85
４.２.５推論表現と伝聞表現の連続性とモダリティ 88
４.３複合助動詞「という」「って」「とか」の情報とモダリティ 90
４.３.１伝聞用法「という」の情報とモダリティ 90
４.３.１.１伝聞用法「という」の先行研究 90
４.３.１.２伝聞用法「という」の情報の入手経路 91
４.３.１.３伝聞用法「という」の範疇 92
４.３.１.４伝聞用法「という」の情報源とテンス 95
４.３.１.５伝聞用法「という」の話し手の心的態度を表す戦略 96
４.３.１.６伝聞用法「という」の情報が聞き手に及ぼす影響 98
４.３.２伝聞用法「って」の情報とモダリティ 98
４.３.２.１伝聞用法「って」の先行研究 99
４.３.２.２伝聞用法「って」の情報の入手経路 99
４.３.２.３伝聞用法「って」の情報源とテンス 100

４.３.２.４伝聞用法「って」の話し手の心的態度を表す戦略……101
４.３.２.５伝聞用法「って」の情報が聞き手に及ぼす影響……102
４.３.３伝聞用法「とか」の情報とモダリティ……103
４.３.３.１伝聞用法「とか」の先行研究……103
４.４.３.２伝聞用法「とか」の情報の入手経路……104
４.３.３.３伝聞用法「とか」の情報源とテンス……104
４.３.４.４伝聞用法「とか」の話し手の心的態度を表す戦略……105
４.３.４.５伝聞用法「とか」の情報が聞き手に及ぼす影響……112
４.３.５伝聞用法「という」「って」「とか」の情報とモダリティの関係……113
４.３.６推論表現と伝聞表現の連続性とモダリティ関係……114
４.４連体修飾形「とのことだ」「ということだ」の情報とモダリティ……116
４.４.１伝聞「とのことだ」の情報とモダリティ……116
４.４.１.１伝聞「とのことだ」の先行研究……117
４.４.１.２伝聞「とのことだ」の情報の入手経路……117
４.４.１.３伝聞「とのことだ」の情報源とテンス……118
４.４.１.４伝聞「とのことだ」の話し手の心的態度を表す戦略……119
４.４.１.５伝聞「とのことだ」の情報が聞き手に及ぼす影響……122
４.４.２伝聞用法「ということだ」の情報とモダリティ……123
４.４.２.１伝聞用法「ということだ」の先行研究……123
４.４.２.２伝聞用法「ということだ」の情報の入手経路……123
４.４.２.３伝聞用法「ということだ」の範疇……124
４.４.２.４伝聞用法「ということだ」の情報源とテンス……125
４.４.２.５伝聞用法「ということだ」の話し手の心的態度を表す戦略……125
４.４.２.６伝聞用法「ということだ」の情報が聞き手に及ぼす影響……126
４.４.３伝聞表現「とのことだ」「ということだ」の情報とモダリティの関係……126
４.５推論表現と伝聞表現の情報とモダリティ関係……127
４.６日本語伝聞表現の情報共有認識……131
４.７日本語伝聞表現と意外性……133

４.８日本語伝聞表現の機能的分類とカテゴリー化 134

５章 現代韓国語伝聞表現のモダリティとカテゴリー化 136

５.１現代韓国語伝聞表現の分類 136

５.２伝聞表現の文法範疇と意味範疇 140

５.２.１伝聞表現の文法範疇 140

５.２.１.１終結語尾形伝聞表現 142

５.２.１.２接続語尾形伝聞表現 151

５.２.２伝聞表現の意味範疇 155

５.２.２.１伝聞表現の意味範疇① 155

５.２.２.１.１終結語尾形伝聞表現 156

５.２.２.１.２接続語尾形伝聞表現 159

５.２.２.２伝聞表現の意味範疇② 164

５.２.２.３推論表現と伝聞表現の連続性 172

５.３韓国語伝聞表現の情報とモダリティ 174

５.４韓国語伝聞表現の情報共有認識 178

５.５韓国語伝聞表現と意外性 185

５.６韓国語伝聞表現の機能的分類とカテゴリー化 187

６章 日本語伝聞表現と韓国語伝聞表現の比較 190

６.１日韓両国語のモダリティの範疇 190

６.２日韓両国語伝聞表現の文構造の比較 190

６.３日韓両国語伝聞表現の由来と文法形式の比較 192

６.４日韓両国語伝聞表現の総合比較 194

７章 結論 196

参考文献 201

付録:日韓両国語の学習教材分析 210

１.１日本語学習教材の分析 210
１.１.１機能的分析 210
１.１.２項目分析 213
１.２韓国語学習教材の分析 226
１.２.１機能的分析 227
１.２.２項目分析 229

＜図1. 本稿におけるモダリティとムードの位置づけ＞ 7
＜図2. ムードとモダリティ、証拠モダリティの位置づけ＞ 10
＜図3. 証拠性の考え方＞ 11
＜図4. 認識のモダリティと証拠モダリティの移動の可能性＞ 11
＜図5. 推論「そうだ」の証拠の入手経路＞ 56
＜図6. 推論「ようだ」の証拠の入手経路＞ 60
＜図7. 推論「らしい」の証拠の入手経路＞ 65
＜図8. 伝聞「そうだ」の情報の入手経路＞ 71
＜図9. 伝聞用法「ようだ」の情報の入手経路＞ 76
＜図10. 伝聞用法「らしい」の情報の入手経路＞ 82
＜図11. 推論表現と伝聞表現の連続性＞ 90
＜図12. 伝聞用法「という」の情報の入手経路＞ 91
＜図13. 伝聞用法「って」の情報の入手経路＞ 100
＜図14. 伝聞用法「とか」の情報の入手経路＞ 104
＜図15. 伝聞用法「という」「って」「とか」の情報とモダリティ＞ 114
＜図16. 推論表現から伝聞表現までの情報とモダリティ＞ 116
＜図17. 伝聞「とのことだ」の情報の入手経路＞ 118
＜図18. 伝聞用法「ということだ」の情報の入手経路＞ 123
＜図19. 連体修飾形伝聞表現の情報とモダリティ＞ 127
＜図20. 日本語伝聞表現における推論表現から伝聞表現までの情報とモダリティ＞ 130
＜図21. 韓国語伝聞表現における情報とモダリティ＞ 177

＜表1. 伝聞の諸定義＞ 15
＜表2. 日本語学・日英対照言語学におけるモダリティの分類＞ 29
＜表3. 日本語史の時代分類(沖森 他)＞ 34
＜表4. 韓国語史の時代分類＞ 45
＜表5. 推論「そうだ」「ようだ」「らしい」の話し手の表現意図＞ 69
＜表6. 伝聞(用法)「そうだ」「ようだ」「らしい」の話し手の表現意図＞ 88
＜表7. 推論表現と伝聞表現の話し手の表現意図＞ 88
＜表8. 伝聞用法「という」「って」「とか」の話し手の表現意図＞ 114
＜表9. 推論表現と伝聞表現の話し手の表現意図＞ 115
＜表10. 伝聞「とのことだ」、伝聞用法「ということだ」の話し手の表現意図＞ 126
＜表11. 日本語伝聞表現の推論表現と伝聞表現における話し手の表現意図＞ 128
＜表12. 日本語伝聞表現の機能的分類＞ 134
＜表13. 韓国語伝聞表現＞ 138
＜表14. 韓国語の引用・伝聞の基本構造＞ 139
＜表15. 伝聞表現の文法範疇＞ 141
＜表16. 伝聞表現の文法範疇-終結語尾形伝聞表現＞ 142
＜表17. 伝聞表現の文法範疇-接続語尾形伝聞表現＞ 151
＜表18. 伝聞表現の意味範疇①＞ 155
＜表19. 伝聞表現の意味範疇①-終結語尾形伝聞表現＞ 156
＜表20. 伝聞表現の意味範疇①-接続語尾形伝聞表現＞ 160
＜表21. 伝聞表現の意味範疇②＞ 165
＜表22. 推論表現と伝聞表現の連続性＞ 172
＜表23. 韓国語伝聞表現における話し手の表現意図＞ 175
＜表24. 意外性に関わる伝聞表現＞ 185

＜表25. 韓国語伝聞表現の機能的分類＞ 188

＜表26. 韓国語引用・伝聞の基本構造＞ 193

＜表1. 伝聞表現分析に用いた日本語教材＞ 211

＜表2. 各日本語教材の推論・伝聞表現のレベル＞ 211

＜表3. 伝聞表現分析に用いた韓国語教材＞ 227

＜表4. 各韓国語教材の推論・伝聞表現のレベル＞ 227

１章 序論

１．１研究背景

昭和初期の大言海(1934:1212)によると、伝聞とは、「人傳ニ聞キ知ルコト。キキヅタエ。」とあり、また従来の日本語伝聞研究においては「情報の受け渡し」とされ、引用表現研究の中で副次的な表現として、または個別表現の分析と類似表現同士の相違点の解明に重心を置いて研究されがちであったと思料する。

一般的に 20 世紀までの情報源は、新聞・テレビなどのメディア、書籍、固定電話などといった手段による入手方法であったため、情報と話し手との物理的距離は遠くても、限られた情報であるが故に心理的には身近なものとして受け入れられ、その真偽判断に主眼を置いて情報処理されたことも多々あったであろう。

しかし、携帯電話やインターネットが世界中に普及し、世界は Global 化とも Flat 化したともいわれる現代の情報化社会においては、指先を動かすだけで世界中の情報へ容易にアクセスできる上に、SNS などを通じ瞬時に情報発信が可能となっている。

そのため、情報と話し手の物理的距離は近くなったものの、世界中から押し寄せる厖大な情報の真偽判断となると、それらをどこまで信用していいのか不安がつきまとう。その結果、話し手は、たとえば「らしい」や「とか」を用いることで、自分が発信している情報が話し手本人によるものではなく、尚且つ話し手本人にとっても不確か・曖昧な情報であるといった表現意図を表す戦略をとる(4.2.3、4.3.3 参照)のが通例であるが、これまでの伝聞研究にこのような時代の変化が充分に反映されているとは言い難い。

また、従来の日韓両国語の伝聞研究においては、個別表現の研究に重点が置かれ、情報の授受及び真偽判断に力点を置いた研究が主流となってきた。また日韓両国語の伝聞表現の比較研究においても頻度数など量的比較に止まっている傾向がある。

しかし、日韓両国語の伝聞表現はその由来と文法形式の違いが見られ、伝聞表現のモダリティにまで影響を与えていると言える。日本語伝聞表現は推論から由来するものと助詞から由来するもの、引用から由来するものの3種類があり、助動詞、複合助動詞、連体修飾形により現れる。また、推論から由来しているもの(「そうだ」、「ようだ」、「らしい」)と助詞から由来するもの(「とか」)は話し手の主観を含むことができる反面、引用から由来しているものは他者からの情報に対し、客観性を維持しようとする傾向が強い(「という」、「って」、「ということだ」、「とのことだ」)。韓国語伝聞表現はその殆んどが引用から由来しているため、複合助動詞と連体修飾形により現れる。韓国語は膠着語の特徴が伝聞表現にも強く現れ、接

辞(Modal affix)が文末に加えられたモーダル性の強い表現が多いため、他からの情報に話し手の主観が介入しやすく、聞き手を話し手の方に誘導しようとする(特に、意味範疇②)特徴があり、伝聞表現の数も日本語より遥かに多いと言える。さらに、文末接続形式においても日本語の場合、「命題めあてのモダリティ」は助動詞、複合助動詞などが、「発話伝達のモダリティ」は終助詞が担っているが、韓国語はこれらが語彙的に現れる場合もあり、「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界を明確にすることができないため、両国語伝聞表現の全体像を描くためには伝聞表現の由来、文形成などを踏まえた広い意味での研究が必要である。

１．２研究目的

本稿の目的は、伝聞研究に情報、話し手、聞き手の３要素を中心とした「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」という視点を導入し、①情報共有の確保(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③話し手の心的態度を表す戦略(客観的、不確か、曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)の四つの側面から、日韓両国語伝聞表現の特徴を含む全体像を描くことに主眼を置いて考察することである。加えて、伝聞とは話し手と聞き手の情報共有の手段でありながら、情報に対する発話時の話し手の心的態度を、聞き手に理解してもらうための戦略であり、情報に対する聞き手の信頼度にまで影響を及ぼすのが常であるということを確認することである。

１．３研究方法

日本語伝聞表現は推論から由来するもの、引用から由来するもの、助詞から由来するものの3種類があるため、推論、引用、助詞から伝聞に至るまでの変遷を眺望した上で、現代日本語の伝聞表現を助動詞、複合助動詞、連体修飾の3形式に分けて考察する。韓国語伝聞表現はムードが存在する上に、その殆んどが引用から由来しているため、日本語の複合助動詞に当たる複合語尾と連体修飾形の構成になるが、伝聞表現が複雑に縮約・省略されており、接辞の有無によりモーダル性に変化が現れるため、韓国語伝聞表現は日本語より遥かに多い。このように話し手の心的態度を表す方法は一様ではないため、本稿では両国語伝聞表現の比較に当たり、伝聞表現の通時的・共時的変遷を考慮に入れつつ、「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」を情報と話し手の関係のみならず、話し手の表現意図に影響を

与えるものとして話し手と聞き手、情報と聞き手の関係といった3要素の中で考察する。

１．４用語の解説と本稿の立場

日本語伝聞表現は主に助動詞、複合助動詞、助詞により表されるのに比べ、韓国語伝聞表現はムード形式の存在により、ムード形式が終結語尾に組み込まれた形で現れる。また日本語においては証拠性がモダリティの下位範疇として研究される傾向があるが、韓国語においては証拠性をモダリティの下位範疇に位置づけるか、それとは違う独立した文法範疇とするか未だ議論が続いている。本論に先立ち、この節ではモダリティは勿論、モダリティ研究に関わる概念としてムードと証拠性の用語解説と概念を纏め、モダリティに対する本稿の立場を明らかにしたい。

１．４．１モダリティとムード、証拠性(Evidentiality)の関係

伝聞表現における話し手の心的態度の表れ方は言語によって違うが、大きくモダリティ、ムード、証拠性(Evidentiality)の三つの形式・概念がそれに関わる。まず、モダリティとは何かを探ってみよう。

欧州においてモダリティ研究が 1970 年代に盛行した。その影響を受けつつ、日本語のモダリティ研究は 1980 年代から 1990 年代にかけて活発化し、益岡(1991)、仁田(1991)など優れた研究成果が得られた。

モダリティとは、元々、英語学(一般言語学)で用いられる用語であった。しかし、日本語研究に投入されたモダリティの概念は英語学のモダリティとは多少違う特徴を持っている。英語学研究においてのモダリティとは、主に命題内部をめぐる話し手の主観的表現を指しているが、日本語研究においてのモダリティは、命題と共に文を構成する二大要素[1]とされ、話し手があるコトガラ(命題)について抱く何らかの主観的態度のみならず、それをどのように聞き手に提示するのかという伝達の態度までをも含む広い概念である。そのため、副詞や助動詞、終助詞、文類型、敬語、イントネーションなど幅広い研究テーマに及んでいて、その研究の幅の広さにより、ヴォイス、テンス、アスペクトのような他の文法カテゴリーより

1 文の構成に命題とモダリティという異質の二要素を認めることは、日本語以外の言語ではあまり一般的ではないことに対し、宮地　他(1990)では印欧語の命題とモダリティの対立が日本語におけるほど文法化していないからではないかと述べている。

モダリティに関わる表現の種類が遥かに多い[2]。この違いは日本語モダリティ研究の背景にあると言えるが、英語学におけるモダリティ研究は Modal logic、つまり論理学がモダリティ研究の源である反面、日本語のモダリティは山田(1936:677)を始めとする「陳述論[3]」から始まっているためである。

モダリティとその分類に関わる Dynamic modality、Deontic modality、Epstemic modality の個別用語は、Huddleson&Pullum(2002：178-179)の解説によると、

＊Dynamic modality とは、節(特に主語名詞句)によって言及された人の性質や意向などに関り、

＊Deontic modality とは未来の事態の実現に対する話し手の態度、

＊Epstemic modality とは過去又は現在において事態の事実性に対する話し手の態度に関するものであると定義付けている。つまり、Dynamic modality は主語の能力・意志を表し、Deontic modality は命題内容の規範に対する話し手の社会的判断(命令・禁止・許可・依頼)の当為性を表すもので、Epstemic modality は命題に対する話し手の発話時における事態の可能性と必然性、証拠に対する判断を表すものであるといえよう。

英語学におけるモダリティは下に示す例文の如く、例えば「Must」のような一つの法助動詞が deontic modality と epstemic modality の両方の意味合いを成し、また「Can」のように deontic modality と dynamic modality の両方の意味合いを成すことができる。

a. John must be home by ten; Mother won’t let him stay out any later.
(deontic modality)

b. John must be home already; I see his coat. (epstemic modality)
(Sweetser1990:49)

c. He can come in now. (deontic modality)

d. He can run a mile in under four minutes. (dynamic modality)
(Palmer2001:89)

このようなモダリティの多様性は英語に限っての特殊な現象ではないようだ。

2 しかし尾上(2001:442、468)は終助詞をモダリティから除外し、さらにテンス、アスペクトとモダリティを重層的・階層的関係ではないとし、日本語のモダリティは叙法(事態の描き方)のタイプに対応する述定形式が場合によって様々な意味を文にもたらすものとして把握すべきだと述べ、益岡のような「主観表現全般」をモダリティとする論議は言語学上のモダリティ概念とは隔絶した、日本だけで主張される特異な“モダリティ”論であると批判している。

3「陳述論」の詳細については2.1.1を参照。

Sweetser(1990:49)によると、印欧諸語、セム系諸語、フィリピン諸語、ドラビダ諸語、マヤ語諸語、フィン・ウゴル諸語などの言語からもモダリティの多様性が見られる[4]と指摘されている。

しかし、英語の 3 分法のモダリティに比べ日本語のモダリティは deontic modality と epstemic modality の 2 分法のアプローチにより、「う(よう)」、「まい」[5]以外は単一表現であるため、命令・禁止・依頼・許可を表す「なければならない」、「てもいい」、「てはいけない」などが deontic modality を、事態の可能性と必然性を表す「かもしれない」、「はずだ」と証拠に対する判断を表す「(し)そうだ」、「ようだ」、「(する)そうだ」などが epstemic modality に属し、おおよそモダリティの非多様性が認められる。韓国語は‘-ㄹ 수 있다(l swu issta)[6]’、‘-어야 하-(eya ha)’が epstemic modality 以外にも deontic modality と dynamic modality を表すことができることから、複数の研究者においてモダリティの多様性が認められている。

さらに現代日本語文法における文とは、命題(Proposition)とモダリティ[7](Modality)の 2 大別により成立していると見做す一連の流れの中で研究され続けてきた。たとえば、仁田はモダリティを「言表事態めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」に分けているが、言表事態めあてのモダリティとは、発話時における話し手の言表事態に対する把握の仕方の表し分けに関わる文法表現である。一方で発話伝達のモダリティとは、文をめぐっての発話時における話し手の発話・伝達的態度のあり方、つまり言語行動の基本的単位である文が、どのような類型的な発話・伝達的役割や機能を担っているのかの表し分けに関わる文法表現で

---

4 Palmer1986:121-125、2001:86-89も参照。

5「う(よう)」、「まい」は以下のような文が想定できることからモダリティの多様性が認められると思われる。
私は南へ行こう。(dynamic modality)・ちょっと歩きましょう(deontic modality)・これでいいだろう(epstemic modality)/二度とやるまい。(dynamic modality)・そんなことあるまい。(epstemic modality)

6 임동훈(2008:228)では以下のような用例をあげて韓国語モダリティの多様性を指摘している。
가.철수는 100m를 15초 안에 뛸 수 있다.(dynamic modality)
가’.철수는 100m를 15초 안에 뛸 수 있었다.(deontic modality)
나.(지키는 사람이 없으니)이제 철수는 도망갈 수 있다.(deontic modality)
라.철수는 항상 남의 일에 참견해야(만) 한다.(dynamic modality)
(라)の‘-어야 하(eya ha)-’は普通義務を表すためdeontic modalityに属するが、上記のように個人の性質を表す場合はdynamic modalityに属する。

7 Modalityという用語は英語学の法助動詞(modal auxiliary)に当たる概念で、中右(1979:223)により、日本語研究に適用され「モダリティ」という用語で呼び始められた。「モダリティ」という用語以外にも山田孝雄(1936:677)の「陳述」概念に対する批判をきっかけに、諸学者により「詞・辞」「コト・ムード(mood)」「言表事態(dictum)・言表態度(modus)」「主体的・客体的」などの用語で研究されてきた。(詳細は2.1.1参照)

ある。

さて、日本語のモダリティの概念をめぐっては、二つの立場が存在する。

A：中右実(1979)、仁田義雄(1991)、益岡隆志(1991)、
宮崎和人(2002)、日本語記述研究会編(2003)など

B：尾上圭介(2001)、野村剛史(2003)、大鹿薫久(2004、2005)、
黒滝真理子(2005)、澤田治美(2006)、木下りか(2013)、工藤真由美(2014)など

A の立場とは、文の意味を大きく客観的側面と主観的側面に区分する立場である。即ち、文において「客観的内容を表す命題」とそれによる「話し手の主観的判断」、つまり「命題」に対する発話時における話し手の意志や希望といった心的態度全般を「モダリティ」と見做す立場であるがゆえに、モダリティは命題を包み込むような形で階層構造化されていると言う。

B の立場とは、英語学における叙実法（直説法、indicative mood）、叙想法（仮定法、subjunctive mood）の観点から、ただ単に現実の事態表象を語るだけの叙実法の観点と、それが非現実世界に属する事態を語るという叙想法に分け、事態と話し手の現実との関連性を述べることに関わる意味を「モダリティ」と見做す立場である。

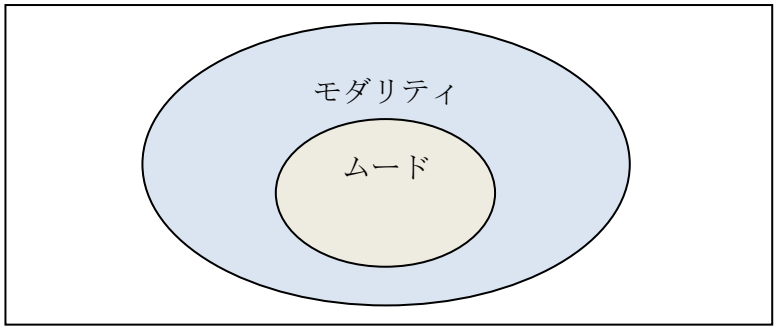
本稿では話し手の表現意図に主眼をおいているため、モダリティに対する A の立場をとり、モダリティとは、話し手の事態に対する把握の仕方、および、それに対する話し手の表現意図の表し方に関わる意味的範疇とする。また伝聞のモダリティとは、話し手が事態(命題)をどのように認識し、伝達しようとしているのかに関わる何らかの意図の表しであると見做す。

本論に入る前に、ムードとモダリティの関係も参照して、本稿における考察を容易にして置きたい。まず英語学においてのムードとは、Jespersen(1924:313)によると命題内容に関わる話し手の心的態度(certain attitudes of the mind)が動詞の活用形として表わされるものと定義しているが、この定義は現在まで諸学者により支持されている。Bybee(1984:16)は、ムードは形式的に Modal の機能を持っている動詞の標準化された文法範疇と述べ、直接文、主観文、命令文、条件文の屈折として現れるとし、モダリティは言語の意味要素に関わる意味論的分野であるとした。また、Bybee et al(1994:177)ではモダリティを動作主体(agent-oriented)モダリティ、聞き手(speaker-oriented)モダリティ、認識(epistemic)モダリティに分け、動作主体モダリティは普通屈折(ムード)で現れないとしてモダリティから

除外した。つまり、彼はムードをモダリティの上位概念として位置づけているのである。また、ムードを真理値ではなく、話し手が断言を選択するか、これとは対照される機能を選択するかに関わるものと見做し、モダリティは話し手の命題の真理値に対する断言であると定義している(Bybee et al(1994:239-240))。

宮崎　他(2002:122)ではムードをモダリティの中核とし、ムードの語形は活用という動詞の語形変化の体系の中に組み込まれて存在すると述べた。澤田(2006:118)は、法(ムード)[8]は事柄のありかた(その事柄は現実的なのか、仮想的か、あるいは希求的か)を表すための文法的なカテゴリーであるとした。このように日本語においてもムードが動詞の語形変化に関わる文法的カテゴリーであるのに比べ、モダリティは言語の個別的・類型的なあり方に縛られない、一般性の高い概念であり、その現れ方こそ様々であるが何らかの形ですべての言語に関り得る文法概念(益岡 1991,2013:202)である。

以上のようにムードは、言語行為の一部形式化といえ、述語の語形変化に関わる文法体系の中で存在する話し手の心的態度を表す文法形式であり、モダリティは意味論的概念において話し手の心的態度を表しているため、モダリティには副詞、助動詞、助詞、終助詞、イントネーションなども含まれ、ムードより大きい範疇を形成することのできる上位の概念であると考えられる。またムードによって表される話し手の心的態度は形式化されている故に、モダリティにより表される話し手の心的態度より直接的であると思われ、論者はこの観点からも以下の<図 1>のようにモダリティをムードの上位概念に位置づける。



＜図 1. 本稿におけるモダリティとムードの位置づけ＞

さて、日本語と韓国語において、ムードとは述語の語形変化が一定の文法カテゴリーの中で実現されることにより話し手の心的態度を表す文法的範疇であり、モダリティとは心的

8 (ムード)は筆者によるもの。

態度を表す意味的範疇であると考えると、〈図 1〉のようにムードとモダリティを文法的範疇と意味的範疇の対立関係におき、ムードがモダリティに含まれるとすることにより、話し手の心的態度を幅広く捉えることができる。さらに、こうすることにより、推論・伝聞表現の両方に用いられる「ようだ」、「らしい」など、語形変化をとらない助動詞などもモダリティという概念の中で統合できる。以上のように〈図１〉の観点に立つと、日本語伝聞表現においてはムードとモダリティの対立がなく、韓国語においては、ムードとモダリティの対立は存在するものの、ムード形式がモダリティに組み込まれた形で現れる場合もあるため、このような両国語の比較にも対応でき、中国語のように活用を持たない孤立語(language isolate)にも対応できるのではなかろうか。

一方で最近、伝聞表現研究において注目されている概念の一つとして Evidentiality がある。Evidentiality は多くの学者においてモダリティとは違う領域として理解されており、日本では主に証拠性あるいは徴候性という用語で訳されている。しかし、証拠性(Evidentiality)[9]とは本来情報の出所、つまり情報源(Information Source)を表す文法範疇であり、例えば、話し手が発話の場に用いている命題が自分の感覚的経験によるものか、何かの証拠をもとに推測・推論したものか、それとも人から聞いた情報(伝聞)であるかを表す概念である。500 以上の言語を調査した Aikhenvald(2004:17)によると、証拠性を表す文法要素はすべての言語に存在するのではなく、全世界の言語のうち約 4 分の 1 にのみ証拠性が文法範疇として存在すると述べ、伝聞(Reported speech)も証拠性に属させている。

証拠性の範疇に関しては、認識のモダリティの下位範疇と見做している立場(Palmer1986、2001:9、Bybee et al1994、Givon1995:112)や証拠性と認識のモダリティが上位の一般的範疇(hyper category)を成し、両者が部分的に重なると理解している立場(Plungian2001:354)、証拠性のみを表す独立的文法要素を持っているチェチェン語、ネパール語などの存在から証拠性と認識のモダリティはまったく違う範疇とする立場(Aikhenvaid2004:1)がある。

Palmer(2001:35)は、命題(事態)に対する話し手の判断を表す Propositional modality の枠組みの中に、認識のモダリティと Evidential modality を属させ、証拠性をモダリティの下位範疇と見做した。

その一方で、Plungian(2001:354)は、証拠性と認識のモダリティは、実現された言語標識の層位において、互いに重なって現れることも可能だが、それぞれが情報に対する入手の仕方と、情報の信頼度に対する評価という二つの異なる側面を持つ意味範疇で、この二つは

9 以下、証拠性と記する。

連続体として一直線ではないが、環境(状況)によって互いに重なる領域を持つこともあると述べている。Aikhenvaid(2004:1)においても、証拠性は‘own right’の中の一つの範疇に属し、‘epistemic’など‘modality’の下位範疇、またはテンス・アスペクトの上位・下位範疇ではないと言う。

汎言語的には、証拠性が形態論的に独立した文法範疇として現れる言語もある[10]ため、証拠性と認識のモダリティを独立した個々の文法範疇として扱った方がいいかもしれない。

このように、証拠性をモダリティとは違う独立した文法範疇であると見做している研究者は、汎言語的観点から人間の認識領域の活動の中における事態に対して、文または言葉としてそのように表出するに至った何らかの原因を追究した結果、証拠の存在に気づき、次第に証拠性といった独立した文法範疇の提唱に至ったと考えてよいだろう。

しかし、逆に言えば、証拠の出所を明示するということが、話し手の事態に対する表現意図を間接的に示すものであると考えるならば、証拠性はモダリティの一部分を成しているとも解釈できる。つまり、証拠性が人間の主観的認識活動に間接的に関わるものとして、認識のモダリティの一部を成しているとみてよい筈である。

以上の考察に従って、本稿では、証拠性とモダリティを次のように位置づける。

①すべての言語において証拠性の現れ方は一様に纏められるものではなく、言語ごとに違った現れ方をしている[11]。

②証拠性は話し手の陳述内容に直接関わる証拠の出所を提示することで、陳述内容の真偽に対する話し手の信頼・確信の程度の表明に間接的に関わっているとみることができるため、証拠性は情報の出所のみならず情報の真偽判断とも繋がっていると言え、本稿においてはモダリティの一部を成していると見做す。さらに、証拠性という用語は、これを独立した文法範疇として見做した場合の名称であると考えられるため、仮に証拠モダリティ[12]と名づける。

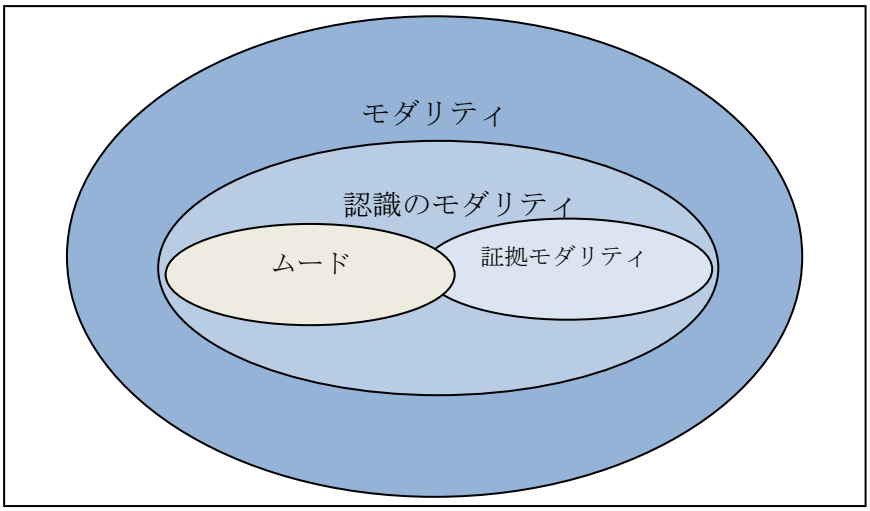
よって本研究では伝聞表現の比較にあたり、証拠性を認識のモダリティの下位分類とし、仮に証拠モダリティと名づけ、ムード、モダリティ、証拠モダリティについて<図 2>のよう

10 홍택규(2010:190)では ‘구세계 증거성 벨트(旧世界証拠性ベルト)’という名で動詞の文法体系の中で証拠性は、極東、ウラル、中央アジア、西アジア、バルカン地域にかけて帯状に発達するが、この地域以外で証拠性が動詞の文法体系内に発達している言語はあまりないと述べている。

11 日本語はムードとモダリティの対立を持たないが、韓国語の場合‘-더(te)-,-던(ten)-,-는(nun)-’などの語尾がムードやテンス、アスペクト、証拠性に跨っているので、モダリティと証拠性の境界が曖昧な言語であると考える。

12 Palmer(2001:35)は証拠性をモダリティの下位分類とし、Evidential modalityとしている。

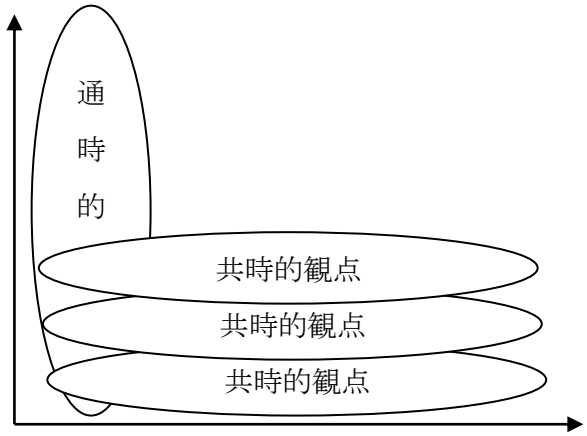
な立場のもとで研究を進めることにする。



＜図 2. ムードとモダリティ、証拠モダリティの位置づけ＞

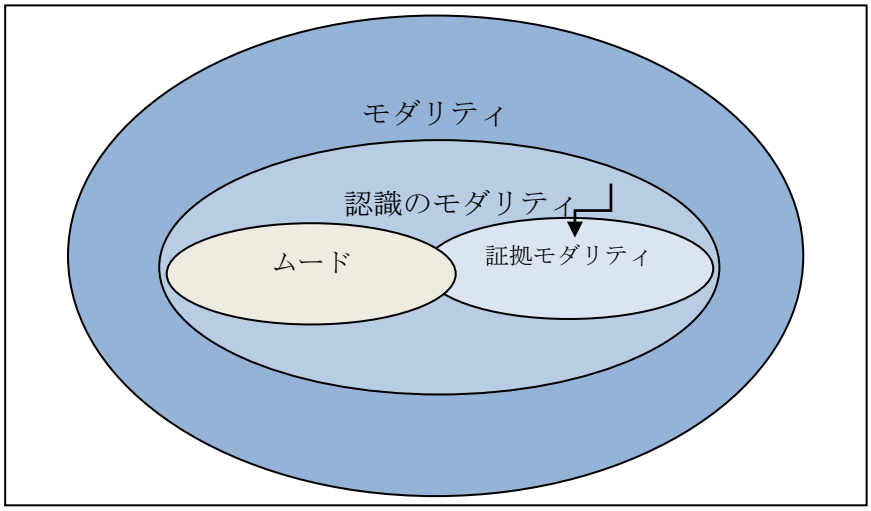
通時的観点から見ると、周知の通り、上代日本語の「なり(～という音が聞こえる:情報の出所)」が、中古時代には「伝聞推定」表現に発展した。また中古時代「様態」を表す助動詞「やうなり」が、近世に入ると、体言や助詞を伴って「比況」を表したり、終止形を伴って「朧化法的断定」を表したが、近代に至ると「伝聞」にも用いられるようになった。そして「(し)そうだ」も近世後期までは推量・伝聞両方を表していたが、江戸末期に入ると推量は「(し)そうだ」が、伝聞には「(する)そうだ」が用いられるようになった。さらに助詞「とか」にしても、そもそも「並列」の意味であったものが、次第に物事を断定せずに曖昧にいう「ぼかし」へと代わり、ついには「伝聞」にも用いられ、話し手と情報の間の距離感などを表すほどになった。

こうした事例から判断して、一つの表現の中においての用法は、時代の流れによって消滅する場合もあれば、より抽象化されたり、意味的・実用的言語に変化したりして、機能的な変化・意味的な拡大を起こすと認定される。このことを前提にすれば、証拠性を汎言語的な観点で共時的に研究する傾向が強いだけに、本稿の論者は、モダリティと証拠性の関係を、一言語内の通時的変遷過程の中で、通時的観点を縦軸に、共時的観点を横軸にして理解すべき概念であると提起し、モダリティと証拠性も言語的相対性に対する配慮のなかで研究されるべきであると考える。よって、以下<図 3>に図式化したような観点から論旨を進めていくこととする。



＜図 3. 証拠性の考え方＞

以上のようにそれぞれの言語社会においての認識のモダリティと証拠性の関係や範疇の問題はその言語社会の歴史の中で理解されるべき(「なり」、「やうなり」、「(し)そうだ」、「とか」の例から)であり、通時的観点からは、上位概念(認識のモダリティ)から下位概念(証拠モダリティ)への移動も可能であると考えられる。



＜図 4. 認識のモダリティと証拠モダリティの移動の可能性＞

本稿においてのムード、モダリティ、証拠性の位置づけを<図 4>の通りに示した上で、本稿の研究範囲と立場を明らかにすると、次の通りである。

①モダリティはムードの存在有無にかかわらず、すべての言語に適用できる普遍的概念であり、ムードの上位概念として位置づける。

②証拠性には間接的ではあるが事態に対する何らかの話し手の表現意図が必ず加わると思われ、モダリティの下位範疇とし、仮に証拠モダリティと名づける。

③ムードと証拠モダリティの関係は韓国語のようにムード形式が過去の経験や報告のみならず推量・予測にも用いられる言語があることから、この二つの概念が同じように認識のモダリティの下位範疇を成し、部分的に重なり合うと見る。

④日本語伝聞表現のモダリティを表すのは動詞の活用ではなく助動詞、複合助動詞[13]、助詞である。しかし韓国語においてはムード形式も伝聞表現に組み込まれた形で現れるが、ムード形式を分離せず、一つの表現として扱うことで、日本語と同じ条件下におき考察を進める。

さらに伝聞研究においてのモダリティは、情報・話し手・聞き手の３要素を中心に「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」という側面で、

①情報共有の確保(自己情報か他者情報か)、

②情報の入手経路、

③話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、

④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)

を念頭に入れて考察する必要性について言及した。Givon(1995:113-115)においても、モダリティは真実や確信の問題ではなく、意志を備えた人間同士の社会的相互作用という観点で考察されるべきで、認識のモダリティにおいては聞き手の異見、話し手の主張を裏付ける証拠、話し手と聞き手の間の相対的な力関係、相手に対する統制力や権威なども考慮すべきである(Givon(1995:166-167))と述べている。

以上を踏まえて、話し手と聞き手の間で各種の情報を共有する際、話し手は自らの心的態度を表すための戦略に、話し手と情報の関係のみならず、情報が聞き手にどのような影響を及ぼすのかを考慮に入れて「客観的・不確か・曖昧」など意味関係の中から選択して発話すると考えてよければ、それは客観的情報に対する話し手の「認識的情報再構築」という行為と言える。

また、話し手が「認識的情報再構築」を図る上での手順として、情報を自己の認識世界における現実状況に合致させつつ、自らの主観が介入することがあることも指摘しておきたい。

１．４．２引用と伝聞の区別

13 複合語尾伝聞表現をモダリティ研究の対象としない傾向があるが、本稿では話し手の主観的認識表現・表現意図に主眼を置いた広義のモダリティ研究を目指しているため、複合語尾伝聞表現もモダリティの枠組みに入れて考察を進めることにする。

Jespersen(1924:290)によると、引用とは他人が言うことや言ったこと(考えることや考えたこと)と述べられている。加えて、以前話し手本人が話したことや考えたことも引用範疇に入り得るものと判断される。これまでの先行研究で、直接引用と間接引用のそれぞれの特徴や相違点、区別については多くの研究結果が蓄積されてきているが、引用と伝聞の区別や伝聞の特徴に関してはあまり触れられていないのが現状である。そのため、本稿の考察を進める前に、伝聞とは何か、引用とはどのように違うのか、またどのような表現が伝聞に関わるのかについて考えてみる。

本稿では中畠(1992)[14]を参考にしつつ、伝聞表現の用例を集めた。中畠(1992:21)によると伝聞は命令・疑問・意思・勧誘など陳述度の高い成分とは共起しないとしている。しかし、これは一部助動詞や伝聞「そうだ」を基準にした伝聞定義であると思われ、実際は「とのことだ」も伝聞専用の表現であるにも拘らず、以下のように命令・疑問・勧誘・丁寧形に後接することが確認できる。よって伝聞がこれら陳述度の高い成分と共起できないという彼の定義は、広義の伝聞表現を対象とする本稿では適用し難いところがある。

a. 後日会社に、金融会社から電話があり、給料の３０％を差し押さえてくれとのことでした。びっくりして、本人に確認したところ実は、３００万の借金ですとのこと。
b. それでも１年くらいはまだいいですよとのこと。冬タイヤももう一冬なら越せそうとのこと。
c. 今朝、じいじから電話あり。息子が電話対応をし、よくわからないが昼一緒に行こうとのこと。おばあちゃんが美容院から帰ってきたら電話するねっていう電話だった。
d. 女王陛下がお話ししたいことがおありだそうです。少し、お時間をいただけないでしょうかとのことでした。

以上のことから、本稿では中畠(1992)を参考し、引用の範疇に入るものを以下のように設定した。

①話し手の自身の思考・考えを言語化している。
②話し手の自身の前述や直前の発話を再度リピートしている。
③コミュニケーションの場において聞き手の考えを内容整理、あるいは先取りして言語

14 中畠(1992)では統語的な面から伝聞を①元の発話者が特定される必要がない、②命令・疑問・意思・勧誘など陳述度の高い成分と共起しない、③「た形」をとらない、④伝え手の心的態度をもとに事柄を捉え直していると定義している。

化している。

④聞き手の前述や直前の発話をリピートしている。

⑤もとの発話と現発話の間の時間差が見られず、発話相手の交代や発話の場の移動が見られない。

⑥必ずもとの話者が特定され、話し手による情報の再構築や内容面での捉え直しが見られない。

⑦他から入手した情報を当事者に確認する

さらに以下の五つを伝聞として見做す。

①もとの発話者と現発話者が異なる。

②他から入手した情報を話し手の表現意図をもとに捉え直していると認められる。

③情報源が明示される表現もあれば、明示されない表現もあるが、どちらも話し手による情報の再構築が見られる。

④もとの発話と現発話の間に時間差または場の移動が認められる。

⑤必ず聞き手が存在する。

したがって以上の 5 点を充足しているものを本稿では伝聞として認めている。また中畠(1992:21)において伝聞は「た形」をとらないとしているが、本稿では認識のモダリティ、とりわけ伝聞を事態に対する話し手の主観的判断と考えているからこそ、伝聞表現における「た形」は情報に対する話し手の心理的距離を表す[15]と考える。それゆえに話し手のなんらかの表現意図の表しの一方法として、命題と発話時現在の話し手を切り離して提示することで命題と距離をおきたい話し手の戦略が表れていると見做して考察を進めたい。

１．４．３伝聞とは何か

15 Halliday(1970:336)のいうモダリティは文の概念的意味の外側で、どのテンスとも結びつき、テンス領域の外に置かれ、話し手の現在時にのみ関与するとしている。しかし本稿は情報に対する話し手の何らかの表現意図に重点を置いているため、テンス、つまり「た形」も現実と距離を置きたい話し手の表現意図と見做している。工藤(2003:49)においても、「過去の出来事の表現にあたって、過去形と非過去形のどちらを使用するかは、その出来事に対する、話し手の心理的態度が決める。客観的＝中立的な場合は本来的に過去形を使うが、感情・評価移入的な場合は非過去形である。あるいは、同じ出来事を、前者では心理的距離をおいて客観的にとらえ、後者では時間的距離が感じられないものとして発話時における心理的アクチュアリティー性を表現する」と述べられている。このことからも伝聞のモダリティにおける「た形」を話し手の心理的距離の表れと見做すことができるだろう。

本稿においての伝聞の範囲を設定したところで、諸研究者の伝聞の定義を以下の〈表 1〉により確認しておこう。

＜表 1. 伝聞の諸定義＞

藤田 (2002:398)	「伝聞」の表現とは、一般に他から伝え聞いているところを述べるものであって、引用表現との連続性が問題にされることも多いが、引用表現のように所与のものを所与のものとして再現してみせるのではなく、むしろ、そうした他から入手した情報を**自らの知識・コトバとして表現**するところに本質がある。
澤西 (2002:38)	そこに示されている用法は話し手自ら構築したものではないということを聞き手に提示しつつ、聞き手に示しているコトガラ(命題)は話し手が情報処理し**再構築した、確定的もの**であるという話し手の判断を聞き手に示す。
宮崎　他 (2002:160)	伝聞とは、情報を「取り次ぐ」ことであると言われているが、「(する)そうだ」や伝聞用法の「らしい」は、情報の受け渡しをするというより、話し手が「**どのようなことを聞いて知っているか**」を伝えるというのが、基本的な機能である。
日本語記述研究会 (2003:175)	情報伝達に際して、その情報が他者から取り入れたものであるということを表す。他者からの情報によって知りえたことを**知識としてたくわえ**、それを聞き手に伝達するというのが基本的な機能である。
仁田 (2009:172)	伝聞は**命題内容の仕込み方、入手の仕方**に関わるもの。伝聞[16]は、 (ⅰ)命題たる事態は第 3 者からの情報である。 (ⅱ)第 3 者からの用法を聞き手に**取り次ぐ**、という伝達性を基本に有している。

以上の伝聞定義をみると、伝聞とは第 3 者から入手した情報を話し手が再構築した確定的なもので、それを話し手の知識として提示するものと纏められる。しかし、この立場だと情報と話し手の関係のみ重視され、話し手の情報再構築に影響を与える諸要素、つまり話し手の表現意図、コミュニケーションの場や話し手と聞き手の関係、情報と聞き手の関係といった要素があまり考慮されていないように見受けられかねない。

以上の考察を踏まえ、本稿では「伝聞とは、話し手が過去のある時点で第３者から入手し

16 仁田･益岡(1989:49)は伝聞について、言表事態における未確認さは、推量といった話し手の推し量り作用、推し量りの確からしさ、徴候の存在の元での推し量りなどを表す諸形式と共通性を有しているものの、話し手の推し量りといったものを表しているのではない点においては大きく異なると述べている。

た情報を、新たなコミュニケーションの場において自身の表現意図により行う認識的再構築である」と定義し、認識的再構築の過程に情報・話し手・聞き手の関係が考慮されるとする。

２章 先行研究

日本語のモダリティ研究は山田(1936)の陳述論とそれに対する批判から始まっているといっても過言ではない。そのため、日本語のモダリティ研究は命題とモダリティに2大別され、文において客観的部分を命題、主観的部分をモダリティとし、モダリティは命題を包み込む形で現れるとされている。しかし、韓国語の場合、ムードとモダリティの対立があり、ムードとモダリティの概念と用語が混在し、これら用語以外にも諸研究者により法、叙法、様態、膠着素、文終結法などそれぞれの用語と概念で定義付けられている。

この章では日本語と韓国語のモダリティの発展過程に重点をおいて、諸研究者によりどのように解釈されて来たのかを概観すると共に、日本語と韓国語のモダリティが文においてどのように現れるのかを確認する。

２．１日韓両国語の命題とモダリティをめぐって

文においてモダリティはヴォイス、アスペクト、テンスの外に位置し、文の性格を決める役割を果たしているが、日韓両国語の命題とモダリティに関する定義は今なお議論が続いている。日本語のモダリティは山田(1936)の「陳述論」により始まったと言え、韓国語のモダリティは최현배(1937)における文の分類から始まっているため、文終結レベルで研究されてきた。近来、英語学の導入により、ムードとモダリティの対立関係の定義を中心に研究されているが、とりわけこれまでの先行研究はムードに焦点が置かれ、モダリティ研究は疎かになっている傾向がある。

２．１．１日本語の陳述論からモダリティまでへの道程

上述したように日本語においてモダリティと命題は共に文を構成する 2 大要素である。元々は英語学(一般言語学)で用いられる概念であったモダリティは、日本語研究史を辿ると、山田孝雄の「陳述」、時枝誠記の「詞・辞」、三尾砂の「主観的表現・客観的表現」、芳賀綏「モドゥス」、寺村秀夫・三上章「コト・ムード」、渡辺実「陳述・叙述」、仁田義雄「言表態度・言表事態」などがモダリティと類似の概念だと判断される。その中でも山田孝雄が提示した「陳述」という用語と概念を契機として、「文」とは何か、どのようにして文が成立し・認識されているのか、「文」の定義はいかにあるべきかなどについて、大久保(1968:257)が「陳述

論争」と命名したほどに、多くの学者の間で論争が起こることとなった。いわゆる陳述論争は、日本語のモダリティの特徴を理解し、我々の所与の議論にあたって不可欠であると考えるために、以下に纏めて概観する。

山田「陳述論」

山田(1936)によると、文の本質は述語の統合にあると定め、その職能により語を体言、用言、副詞、助詞に４分類する。その中でも用言はすべての品詞の中でもっとも重要なものであり、用言の用言たるべき特徴は統覚(統一)の作用、即ち「陳述の力」をもつこと、つまり述語になれることであるとして、以下のように述べている。

> 「一の語又は語の数多の集合体が、文とするを得る所以のものはその内面に存する思想の力たるなり。惟ふに思想とは人の意識の活動にして種々の観念が、ある一点に於いて関係を有し、その点に於いて結合せられたるものならざるべからず。而してこの統一点は唯一なるべし。意識の主点は一なればなり。この故に一の思想には必ず一の統合作用すべきなり。今これを名づけて統覚作用といふ。この作用これ実に思想の命なり。この統覚作用によりて統合せられたる思想の言語といふ形にてあらはされたるもの即ち文なりとす。」(山田 1936:901)

山田(1936)の陳述の概念を纏めると、述語のあらわす「陳述」とは思想上、主位概念と賓位概念との対比により存立することを先在の条件として、その二者の関係が異か同かを明らかにするための精神的作用の言語的発表であり、文には単一なる思想が必要であると主張している。この単一なる思想とは一の統覚作用によって統括されるもので、陳述作用とは話し手の判断・断定であり、一の句は一回の統覚作用が行われるということを示す。

山田は「文」構成の単位として「句」を設定し、単文は一つの句であり、一回の統覚作用により組織された思想の言語上の発表である(1936:917)としているが、山田の句は文の成立する素を意味するものであるため、山田の「陳述」は文ではなく句レベルの問題になり、句と文の違いが明確に規定できていないことになる。

さらに「句」を「述体の句」と「喚体の句」に分け、述体の句は命題になれる二元性を有する句、述格を中心に構成されたもの、例えば「山田は学者だ」であり、喚体の句は直感的な一元性の句、情意を投射する、呼格を主成分としてたてるもの、例えば連体格の「妙なる笛の音かな」といったものである(1936:936-938)と規定したが、後に時枝(1937)、三宅(1937)、三尾(1939)からの批判の種になる。

橋本進吉の「文の外面的形態」

橋本(1934:18,22)では、「言語は音聲によって、思想を表はすものである。一定の音聲に一定の思想が結び、その音聲が思想を表はす符號となり、その音を聞けばその思想を浮かべ、その思想が思ひ浮かべばその音を發し得るといふやうになって初めて言語が成立つ」と音声を思想の投影とした。さらに文においても音を重視し、以下のように述べている。

①文は音の連続である。

②文の前後には必ず音の切れ目がある。

③文の終わりには特殊の音調が加はる。

橋本の「文」の定義は山田が文の内面的意義について語った点と対比され、文の外面的形態に重点を置いていると言える。

時枝誠記の「言語過程説・詞辞非連続説」

時枝(1937)においては、言語は分裂総合によって展開する思想の流れを、これに対応する音声あるいは文字を媒材として、これを文節的に線條的に外部に表現する所の心的過程の一形式であり、思想の外部的表現である人間の言語は何等かの統一的表現を目指していると、文の統一性を強調した。また、文の本質は、意味内容と意識作用との合体融合からなる思想の表現で、思想は概念過程を含む「詞」と概念過程を含まない「辞」の相互結合により表現すべき異質の要素であると述べた(時枝 1937:1772)。しかし時枝の所謂「詞辞非連続」でいう概念過程を経たか経ていないかのような二者択一の考え方は、命令形「行け」のように詞と辞が共存するようにみえる中間物の位置づけが困難になり、後年に至り三宅武郎・大野晋・渡辺実により「詞辞連続説」に発展する。

時枝は山田文法の文においての統覚(統一)作用に賛成しつつも、山田文法でいう喚体句に対する概念(呼格助詞に陳述作用を与えたこと)、述語としての用言においての「属性」と「陳述」の関係の問題(時枝は陳述は「零記号の辞」を含む辞によって担われるとし、用言に陳述はないものと考えた)を挙げ、「陳述論争」を引き起こした。

時枝(1937a,b)は文の条件として①具体的思想の表現であること、②統一性があること、③完結性があることの三つを挙げている。

三宅武郎の「詞辞連続説の先駆者」

三宅(1937:77)では、山田(1936)の「陳述論」でいう用言の連体形においての陳述の力について、「完全に陳述をなせるものにあらず(三宅 1937:77)」と述べ、「花咲く樹」または「花の

咲く樹」においては主位概念と賓位概念の対立統合や陳述の力が行われていないのではないかと疑いを示した。また三宅は、「行く。」「行く？」「行く！」の用例からこれらが違った意味を表せるのはイントネーションによるものだと指摘し、陳述の範囲を用言からイントネーションにまで拡大させた。さらに三宅は、節(山田でいう句)に陳述の力が加わって文になる、陳述は節より上の、文を成立させるものであるとした。

三宅は動詞の語幹が属性概念(意義)の宿るところ、語尾が陳述の力の宿るところとし、辞(主体表現)に当たるサマは、助詞にも副詞にもあらわれるが最も顕著なのは用言の活用語尾にあらわれるサマとし、このような用言の活用語尾にあらわれるサマを「ムウド」（現代で言う「ムード」）と呼ぶ。このような考え方は時枝の「詞辞非連続説」に対する批判「詞辞連続説」の先駆となる。

三尾砂の「断定作用」

三尾(1939:66)は、山田(1936)の陳述作用なる概念の中に二つの相違なる概念(「陳述作用」と「陳述の力」)が混在していることを批判した。つまり山田の「統一作用＝陳述作用」という概念について、「統一作用」と「陳述作用」は別個の独立的作用であるとし、さらには用言一語のみ統一作用を担うことに疑いを持ち、「統一作用は瞬間的に一語にのみ宿るものでもなければ、一文に於いて所々に断続して働くものでもない。最初より最後まで連続する流れである。仮に用言が統一作用に最も多く関与するとしても、それと、用言にのみ統一作用があるとする事とは別である(三尾(1939:72)。」とした。このように三尾は統一作用は単語と単語の分離、連携においても有効であると認めたのである。

三尾は陳述作用を判断の本質をなすもの、即ち断定作用でなければならないとした。

さらに三尾は判断の形勢において、①個々の概念を統一し、統一された全体を形成する統一作用、②事態と事実の両領域に関わる高次元の統一作用、③成立した事態が対象そのものの事実に基づくことを断定する断定作用の三つに分けている。統一作用の力を文全体の要素に拡大したこと、さらに陳述作用を事態と事実関係の断定とすることにより、現代日本語のモダリティの概念に近い概念として解釈したと言える。

金田一春彦の「不変化助動詞」

金田一(1953:1)は「不変化助動詞の本質」で陳述論、中でも「主観的表現」と「客観的表現」について論じている。ここで金田一は、時枝文法で言う「詞」と「辞」の概念を否定し、主観的表現に用いられる語は文の末尾以外に立ち得ないとし、終止形の「う、よう、まい、だろう」のみが話者の意志・推量を表す主観的な表現になり得る(1953a:10)とした。また「た、だ、

ない、らしい」のような助動詞は「客観的表現」を表す助動詞であると論じている。そして、用言が客観的表現のほかに主観的表現をも兼ねるという山田の用言の「陳述作用」を批判し、命令形以外の用言は事態を純客観的に表現している(1953a:17)と規定した。更には時枝文法で高い評価を得た丁寧形「です、ます」においても、聞き手に対する敬意を表す助動詞というより社交的場面に用いられる文語体であり、客観的表現である(1953b:31)とみている。金田一の以上のような主張は現代日本語においては事態(命題)を客観的なものとし、それ以外の副詞、文末表現、終助詞などを主観的と認めているのと比べ、多少隔たりを感じる。

松下大三郎の「感動詞」

松下(1928:625)では、日本語には「ね」、「な」をつけるような「了解の共鳴に関する感動態」があるとし、「言語から感動態を除いて談をしたならばそれは全く片言である。到底聞くに堪えないとし、文法学の目からみると欧州語にはそういう嫌いがある。この点に於いて日本語は人情語兼知能語であって欧州語は専ら知識語である、この「感動態」こそ日本語の特色である」と述べた。

松下(1930:49)においては、日本語の品詞を名詞、動詞、副詞、副體詞、感動詞に5分類し、「あゝ」、「おや」、「おい」、「はい」の類を感動詞と称した。彼は感動詞以外の名詞、動詞、副詞、副體詞の四種はみな概念を表すもので、概念は人の心意に存する主観的現象であると同時にこれに対する客観的存在が予想されていると述べられている。彼は「おや」、「はい」のように、自己だけで他詞の補助を受けなくても一つの断句をなすものを実質感動詞といい、「なお」、「ねえ」などを実質的意義を概念詞(名詞、動詞、副詞、副體詞)に譲り、自己は唯形式的意義だけを表すものとし、形式感動詞とした。文においての感動詞、終助詞の役割に目を向けたことは讃えるべきである。しかしながら、名詞のみならず動詞、副詞にも客観性を認めている点、彼の言う動詞が助動詞を認めず、現代日本語において助動詞として認められている「らしい」を特殊動助詞(接尾辞)としている点は、現代日本語のモダリティ研究において副詞、動詞、助動詞、終助詞などが話し手の主観的な領域に属する点において認められにくい。

芳賀綏の「モドゥス」

芳賀(1962:54)は言語記号の運用は主体的表現によってしめくくられて、はじめてセンテンスとなり得るとし、主体的表現を「述定のモドゥス」と「伝達のモドゥス」と名づけた。更にこれらを「述定文(中核:断定・推量・疑い・意志など、外郭:感動など」と「伝達文(中核:命令・呼びかけ・応答など、外郭:もちかけなど」に分け、文の外郭に位置するモドゥスを「包

み紙」とし、これが語る内容を左右はしない代わりに、語る態度を微妙に反映する、もの言いにとりどりのニュアンスを添える日本語の一つの特色だと述べた。

渡辺が終助詞に陳述の概念を限定したのに比べて、芳賀は松下と同じく感動詞、もちかけとした。

渡辺実の「詞辞連続説」

渡辺(1968:20)は、「叙述と陳述」で時枝が言う「詞」の概念を「体言」に限定し、「用言」は体言と異なる性質を持つ「叙述詞」と称した。述語の述語たる積極的特徴は述語のいとなみを完了させ、叙述内容に完結性を与える、即ち一つの完結した叙述内容を生み出すことであり、同時に、述語の「高次の叙述の詞的素材性」が否定できないことを述語の消極的特徴、述語の限界とした。さらに、終助詞は叙述詞的素材性を支配してあくまでも「辞」であり、文を完結させる言語主体の言い収めのいとなみを託された語彙であると見た。

しかし陳述を言語者めあての主観的な働きかけとした彼の考え方は、後に芳賀綏に批判されることになる。また山田と三宅において問題になった終止形述語と連体形の連体修飾語との差はそれが独立的か依存的かという程の差だけで、両者は相互に連続するものであるとして、いわゆる「詞辞連続説」を提唱した。

渡辺は「文」とは有機的統一体とし、文は外面的には形態的独立体、内面的には意義的完結体、構文的には職能的統一体であるとし、これを言語における三つの側面とした。

中右実の「モダリティ」

中右(1979:223)は認識のモダリティをモダリティの中心に据え、文の意味は「モダリティ」と「命題」からなるという階層意味論の理論的枠組みを確立させ、英語学で使われていたモダリティの概念を初めて日本語に適用させた人物である。また中右(1999)では、モダリティは発話内容による発話態度を限定し、全体として「陳述緩和」の機能をすると述べた。モダリティは「発話時点における話し手の心的態度」であるため、「発話時点」、「話し手」、「心的態度」の３要素概念の組み合わせであり、ここでいう発話時点とは「瞬間的現在時」であると規定した。中右のモダリティの定義は現代日本語のモダリティ論に大きい影響を与え、現在まで日本語モダリティの基本概念として仁田、益岡らに引き継がれている。

仁田義雄の「モダリティ」

仁田(1991:18)によると、「モダリティ」とは、現実との関りにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握のし方、および、それらについての話し手の発話・伝

達的態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現であるとし、文を＜言表事態＞と＜言表態度＞の質的に異なった二つの層から成り立っていると述べている。＜言表事態＞とは、話し手が現実との関りにおいて、描き取った一片の世界、文の意味内容のうち客体的な出来事や事柄を表している部分であり、言表事態の中核である命題核、さらにヴォイスやアスペクト、みとめ方、テンスなどによって形成されるとした。またテンスは、言表事態と言表態度の分水嶺的存在であり、言表態度を形成するのはモダリティと丁寧さであると述べた。芳賀は、文は述定文・伝達文のうち片方だけでも文を成すことができると見たが、仁田は文において言表事態と言表態度は程の差こそあるが、どちらも欠かすことのできない要素であるとした。

益岡隆志の「モダリティ」

益岡はモダリティを「主観性の言語化されたもの」、客観的に把握される事柄ではなく、そうした事柄を心に浮べ、ことばに表す主体の側に関わる事項の言語化されたものとした。

益岡(1991)ではアスペクトまでをモダリティ領域としていたが、その後執筆した益岡(1997)ではテンスまでを、さらに益岡(2000:87-97)では命題とモダリティの境界は認めつつも、その境界は絶対的な形で分割するものではないという柔軟な見方を採っている。

２．１．２韓国語の「따옴 어찌 자리 토(引用副詞格助詞)」からモダリティまでへの道程

日本語のモダリティが山田(1936)の「陳述論」から始まったのに比べ、韓国語のモダリティは최현배(1937)における「終止法:베풂월,물음월,시킴월,꾀임월」以来、文の終結形は話し手の陳述態度・目的により決定、終結語尾が選択されるという考えから、文終結法として文の分類に重点をおいた研究が主流を成していたが、英語学の導入以来、モダリティ、様態、叙法、法などの名で話し手の心的態度を中心に研究されている。

また、日本語における認識のモダリティはムードと対立しないが、韓国語における認識のモダリティはムードと対立する場合がある。さらに、韓国語のテンス、アスペクト、ムード、モダリティはそれぞれの意味範疇をしっかり持っていると同時に、各意味範疇が他の意味範疇に跨っている。たとえば未来・予測・推量をあらわす先語末語尾‘-겠(keyss)-’、過去・報告を表す‘-더(te)-’などが終結語尾らと統合され‘-겠네(keyssney)、-더라(tela)’、‘-더구나(tekwuna)’を作ることもできる。さらには‘-겠(keyss)-’の意味機能の多様さから‘-겠(keyss)-’と‘-더(te)-’が統合され‘-겠더라(keysstela)’のような複合語尾を作ることができるが、この際の‘-겠(keyss)-’は未来の意味ではなく予

測・推量の意味機能を表す。このように韓国語のムードはテンスと深い関りを持ち、テンスはムードをもとに成立しているため、ムードは諸学者の研究においてもテンスと一緒に研究されているか、テンスの範疇においてムードを扱っている場合が多い。

최현배の「引用副詞格助詞」

최현배(1937:232)では、韓国語の品詞を名詞、代名詞、数詞、動詞、形容詞、指定詞、冠形詞、副詞、感動詞、助詞に 10 分類している。動詞と形容詞を用言としているが、用言は体言と共に文の基本を成し、体言の様子がどのようだ、またはどのようにしているのかを説明していると述べている。また用言の一番の特徴は説明作用にあり、この作用は人間の思考の統一作用であり、体言と用言の関係を明らかにすることでこれらを説明することであると述べている(1937:169)。

최현배(1961:757)によると、따옴 어찌말(引用副詞語)とは他人の言葉を引用したことを表す副詞の名称で、名詞や文に引用副詞格助詞“-고(ko)、-라고(lako)”をつけて作ると述べられている。

また引用文を話し手が聞き手に何かを共にすることを要求しているか(勧誘)、話し手の個別的な考えを表しているか(叙述)、聞き手との関係のもとにあるか、それは話し手中心か(疑問)、聞き手中心であるか(命令)によって分類しているため、文に語用論の概念を間接的に取り入れていることが見受けられる。

김민수の「法性」

김민수(1971:268)は、文とは伝える内容を現実と関連づけて表すものであり、よって必ず現実に対する話し手の様態的関係が現れると述べている。これまでの構造文法と生成文法の研究成果を纏め、文の終結部(語尾)に叙法・謙譲・時相(テンス)を、本体部(語幹)には敬語・叙相・法性を属させている。さらにこれらを共に‘様態素’に属させる新しい文法体系を提示した。彼はモダリティを‘法性’と呼び、‘-려고 한다(lyeko hanta)、-ㄹ 수 있다(l swu issta)’などの補助動詞や依存名詞と統合した形を様態表現とした。

남기심の「テンス否定」

남기심(1972:228-230)は、Jespersen の 3 分法の影響で韓国語のテンスがその本質把握に至らなかったとみて、韓国語にはテンスはなく、動作相のみ存在すると述べた。そのため、従来テンスを表すとされてきた先語末語尾‘-겠(keyss)-,-더(te)-’などはムードのみを表すとし、‘-겠(keyss)-’を未確認ムード、‘-더(te)-’を回想ムードという用語で説明し

た。英語学においての文の分類方法をそのまま韓国語に導入することに対する彼の指摘は適切であるが、一つの文において未確認ムードの‘-겠(keyss)-’と過去の直接体験を背景とする回想ムード‘-더(te)-’が‘-겠더(keysste)-’のような統合形式が成立できることから、彼の主張は諸学者によって批判された。

さらに、남기심(2001:385)において、韓国語の文末語尾には、話し手の聞き手に対する態度や、命題に対する態度が表されるとし、話し手の態度を文法的形式として表すことを叙法と称している。特に、話し手の聞き手に対する態度を表す叙法を意向叙法、話し手の命題に対する態度を表す叙法を様態叙法と名づけている。

서정수の「ムード1とムード2」

서정수(1990:157)は、ムードのなかに文終結語尾とそれに先立つ先語末語尾の両方を配置し、以下のように定義した。

Mood1、文末形態：聞き手に対する話し手の心的態度を表す。

Mood2、先行文末形態：文章の内容に対する話し手の態度を表す。

以上の定義から考えると、本稿の対象である日本語伝聞表現のモダリティは殆んどがムード1に属するが、韓国語伝聞表現はムード1に属するものとムード2に属するものに分かれることになるため、文末表現形式の異なる日本語と韓国語の比較には適切ではない。

고영근の「3分法」

고영근(2004:29,2009 가:318-319)及び고영근・구본관(2008:193)では、従来同じ文法概念として扱われてきたムードと叙法(Modality[17])を区別し、ムードは話し手の心的態度に関り、意味領域が一定の動詞の活用形として具現化される形態的文法範疇であり、原則として先語末語尾により表れ、叙法は話し手の態度が名詞・副詞などの語彙や語順、語調(イントネーション)などで表されるとした。

고영근・구본관(2008:380)では、ムードは話し手の事態に対する認識が文法化したものとし、Jespersenの3分法に倣い、韓国語のムードをFact mood(叙実法：否定法、直説法、回想法)、Though Mood(叙想法：推量法、強調法)、Will-mood(叙意法)の三つに分けている。Fact moodとThough Moodは無意志的ムードで先語末語尾として表され、Will-moodは意志的ムードとして語末語尾で表されるとした。

17 ()は筆者によるもの。

임홍빈の「膠着素(Agglutinative Element)」

임홍빈(2005:44)では、ムードを韓国語で叙法と訳すことは欧州の言語的特徴を無理に韓国語に当てはめたものであるため、膠着素(Agglutinative Element)という新しい用語を用いて説明している。彼は膠着素には助詞、先語末語尾、語末語尾が含まれるとしている。また膠着素は一定の意味特性を持ち、先行構成に一定の文法的意味や姉妹項(Sister member)についての意味、Modal 的意味を加えている。さらには膠着素を体言区と用言区に分けているが、先語末語尾と語末語尾は用言区膠着素に属させた。

권재일の「時制法」

권재일(1982:7,1998:76,86-100)では、韓国語の文体法を命令法と勧誘法にみられる叙意法、タメロにあたる‘-지(ci)’などの叙相法のみをムードとして扱い、他は文終結の一類型に過ぎないとみてムード範疇として扱いにくいとした。また時制法というカテゴリーの中にテンス、アスペクト、モダリティを位置づけた。

윤석민「文終結法」

윤석민(2000:45)では、文終結法はすべて話し手の心的態度と関りを持っているという点で主観的情緒を表していると言えるが、特に強く感じる主観的情緒は弁別的に認識し反映することができると述べた。また、ムードが命題自体に対する心的態度を表しているのに対し、文終結法として表れるモダリティは、命題内容が随行する談話に対する話し手の心的態度、話し手の主観的情緒も表すことができるとしている。

장경희「先語末語尾はモダリティ」

장경희(1995:193)は、韓国語のモダリティを命題に対する話し手の精神的態度と定義し、主に先語末語尾‘-더(te)-、-겠(keyss)-’、語末語尾‘-구나(kwuna)、-네(ney)-、-지(ci)’がその役割を担っていると述べ、これ以外の終結語尾は聞き手に対する話し手の態度を表すのみで、上記の表現は他人の態度を表すことはできないとした。また、モダリティの主観性は、命題に対する理解不足以外にも話し手の主観性を表すために使われる場合もあるとし、すでに知っている事柄を相手が先に話題にした場合は、その情報に対する話し手の認知的状況を表す形式にもなると述べている。

임동훈「必然性と可能性」

임동훈(2008:219)では、モダリティとは命題の事実性(factuality)と実現性(actualisation)に対する話し手の態度と見做し、談話の類型や叙実法・叙相法に関わる内容を表す場合はムードとし、可能性・必然性などに関わる内容を表す場合はモダリティという用語を使うことが伝統的概念に適しているのみならず、韓国語のモダリティにも適していると述べた。また、証拠性を evidential modality としてモダリティの下位範疇に位置づけている。

이선영「必然性と可能性」

이선영(2014:319)によると、ムードは命題が文単位で実現される様相に関わる文法範疇で事態に対して断定したり、ある過程のもとでその結果を予想したり、非現実態に対してその行為を統制する方法で表れ、ムードの区別は情報に対する‘断言と非断言の区別’であり、モダリティは情報に対する命題性の差を表すとした。従来、ムードはモダリティが動詞の活用として表れた形であると定義されてきたが、文法範疇の実現様相が形態的であるか語彙的であるかということだけで、それぞれ違った呼び名をつけることは国語文法の全体的記述方法とは距離があることを指摘し、ムードをモダリティの上位に分類することを提案した。이선영(2014)はモダリティの実現方法は文法的実現と語彙的実現があるとみて、モダリティの意味特徴を命題の必然性と可能性を限定するものと定義した。

김태엽「終結語尾のみモダリティ」

김태엽(2001:87-90)では、間接引用文に結合された内包語尾(先語末語尾)には、もとの話し手と引用話者の心的態度がまったく反映されず、上位動詞の終結語尾において表れると述べられている。話し手が聞き手に伝えようとしている命題内容をどのような態度で表すかというのは、文を締める終結語尾により表されるが、聞き手に対する話し手の心的態度は大きく、①話し手の考えを聞き手にそのまま伝えている場合、②聞き手に何かを望んでいるという意を伝えている場合の二つに分けている。

임채훈「感覚的証拠」

임채훈(2008:206)では、韓国語は証拠モダリティが必須的に実現される言語ではなく、随意的にさまざまな語尾に分散して表される言語であり、特に‘五感’を通じて文が表す事件や命題を直接知覚したという‘感覚的証拠’が特定の語尾により示されるとしている。

以上、韓国語における主なモダリティとムードの定義を確認した。韓国語のムードとモ

ダリティに関する諸学者の立場は、①用言の活用に関わるものをムードとし、文終結に関わるものをモダリティとする立場、②用言の活用に関わるもののみモダリティとする立場、③必然性と可能性のみモダリティとする立場の三つに大別することができる。しかし、ムードとモダリティの用語と定義からして、ムード、叙法、様態、法性、モダリティなどが混用されている側面がある。本稿はモダリティとムードの定義づけに目的があるのではなく、コミュニケーションの場における話し手の表現意図という観点から、広義の意味で伝聞に用いられる表現のカテゴリー化を通じ、伝聞のモダリティと、その意味機能、言語的特徴を確認することが目的である。前述したように、日本語の伝聞に関わる助動詞は用言の活用をとらない上に、日本語のモダリティが普通、助動詞・終助詞・文類型・敬語など幅広い範疇に及んでいる反面、韓国語はムード形式が存在し、ムードがテンスの役割も兼ねているため、ムードとモダリティの対立が認められる言語であり、名詞・動詞以外にも助詞や語順・イントネーションもモダリティに入るが、おおかた文終結形をモダリティとして研究する傾向がある。このように言語形式が違う両国語の比較にあたり、本稿では韓国語伝聞表現のムードとモダリティを分離せず、一つの表現形式と見做すことで、両言語の比較条件を一致させ、考察を進めることにする。

２．２日本語の文構造とモダリティ分類

日本語において、文は命題とモダリティに 2 大別される。モダリティは命題を包み込む形で現れるというのが今日の日本語モダリティ研究の定説である。日本語モダリティ研究においてのモダリティの領域、つまり、どこまでが命題の領域でどこからがモダリティの領域に入るのか、またモダリティの範疇や分類に関してはいまだ議論が続いているが、大よそ態、相、時制のようなものはすべて命題の領域に入るとされている(仁田 1991、益岡 1997)ため、以下のように図式化することができる。仁田(2000)においては、日本語のモダリティは命題めあてのモダリティ[18](言表事態に対する把握のあり方・捉え方)と発話・伝達のモダリティ[19](発話・伝達の機能類型、話し手の発話・伝達的態度のあり方)に分けられている。

18 益岡(1991)の判断系モダリティにあたる。

19 益岡(1991)の表現系モダリティにあたる。

①[[[[[[格]態]相]成立]時制]モダリティ]

↓

↓　モダリティはさらに 2 大別される

↓

[[[　　彼も来る　　]だろう　　]ね　　]

[[[　　命題　　]命題めあてのモダリティ]発話・伝達のモダリティ]

加えて、日本語学及び日英対照言語学におけるモダリティ分類は以下の<表 2>の通りである。

＜表 2. 日本語学・日英対照言語学におけるモダリティの分類＞

	モダリティの分類			
仁田(1991)	言表事態めあてのモダリティ		発話・伝達のモダリティ	副次的モダリティ
	情意系の待ち望み、認識系の判断		働きかけ、表出、述べ立て、問いかけ	
益岡(1991)	判断系のモダリティ		表現系のモダリティ	
	取り立てのモダリティ、みとめ方のモダリティ、テンスのモダリティ、価値判断のモダリティ、真偽判断のモダリティ		表現類型のモダリティ、ていねいさのモダリティ、伝達態度のモダリティ	
中右(1994)	S モダリティ(命題態度)		D モダリティ(発話・伝達態度)	
	真偽判断のモダリティ、判断保留のモダリティ、是非判断のモダリティ、価値判断のモダリティ、拘束判断のモダリティ		談話(テクスト)形成のモダリティ、発話態度のモダリティ、情報取り立てのモダリティ、対人関係のモダリティ、感嘆表出・慣行儀礼のモダリティ	
仁田(2000)	命題めあてのモダリティ		発話・伝達のモダリティ	
	認識のモダリティ、当為評価のモダリティ			
日本語記述文法研究	表現類型のモダリティ	先行文脈と文との関係づけを表すモダリ	事態に対する捉え方を表すモダリティ	聞き手に対する伝え方を表すモダリ

会 (2003)		ティ		ティ
	情報系(叙述のモダリティ、疑問のモダリティ) 行為系(意志のモダリティ、勧誘のモダリティ、行為要求のモダリティ)	説明のモダリティ	評価のモダリティ、認識のモダリティ	丁寧さのモダリティ、伝達態度のモダリティ
湯本 (2004)	命題内容モダリティ		発話態度モダリティ	
	命題内容実現、命題内容真偽(断定判断、不確実判断)		命題内容評価判断、対人関係判断	
澤田 (2006)	命題的		事象的	
	言語行為的、態度的		力動的、存在的、束縛的	
益岡 (2007)	判断のモダリティ		発話のモダリティ	特殊なモダリティ
	真偽判断のモダリティ、価値判断のモダリティ		発話類型のモダリティ、対話のモダリティ	説明のモダリティ、評価のモダリティ

ところで前にも触れているが、本稿では日本語伝聞表現が属する証拠モダリティを認識のモダリティの下位分類に属させている(1.4.1 参照)。その理由は、伝聞とは過去のある時点で入手した情報を新たなコミュニケーションの場における話し手の表現意図により再構築したものであり、情報の出所を明らかにすることは話し手の表現意図に間接的に影響を与えるため話し手の情報再構築と関わる。そして、このような一連の再構築は人間の認識領域内の働きに他ならないからである。

日本記述文法研究会(2003:133)においても認識のモダリティとは、その事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表すものとし、現実に対する基本的な認識的態度である判断・推量、その事態の成立の蓋然性を表す可能性・必然性、また何らかの証拠によって事態をとらえていることを表す推定・伝聞表現を認識のモダリティに属させている。

一方で韓国語の推論・伝聞表現も認識のモダリティに属するが、韓国語はムードとモダリティの対立がある上に、伝聞表現においてもムードがモダリティに組み込まれた複合語尾

が用いられる場合がある。さらには膠着語の特性が伝聞表現にも現れ、いくつかの語尾を重ねて結合させることにより話し手の心的態度をよりモーダル性強く表現することもできる[20]。以下韓国語の文構造とモダリティを分類について確認する。

２．３韓国語の文構造とモダリティ分類

韓国語にムード形式が存在することから、これまでの先行研究はムード形式に主眼が置かれ、モダリティに関する研究は疎かになっていると言っても過言ではない。また、モダリティはムードに対立する概念、又は終止法の中で文終結形として扱われ、ムードとモダリティの用語と概念においても法、叙法、様態、膠着素、文終結素などの用語と概念が混用されていた。最近モダリティの範疇が名詞、副詞、動詞、形容詞、語順、イントネーションにまで拡大しつつあるが、日本語ほどモダリティの下位範疇に対する研究にまでは至っていない。

韓国語のモダリティの分類においては、英語学の 3 分類を受容している研究が多いが、이기갑(2006)のように認識のモダリティと証拠のモダリティを分類し、モダリティを認識のモダリティ、証拠モダリティ、義務モダリティ、力学的モダリティに 4 分類している研究もある。とりわけ、証拠のモダリティにおけるこれまでの先行研究は文法体系のもとでのモダイティの体系確立に対する研究が主流を成しており、장경희(1995)、임동훈(2008)においても認識のモダリティとして、‘-더(te)-、-네(ney)、-겠(kess)-、-구나(kuna)、-지(ci)’のみ認めているなど、認識のモダリティの下位範疇に対する定義までは至っていない。

以下、文においての韓国語モダリティの構造を確認するが、韓国語のテンスはムードにより現れ、ムード形式がモダリティに組み込まれた形で現れる場合が多い。

20 たとえば、‘-다더라(tatela)’はムード形式‘-더(te)-’が文終結形と結合されて作られたものである。‘-다고 했다지(tako haysstaci)’は‘-다고 하다(tako hata)’の過去「‘-다고 했다(tako haysta)’+‘-다지(taci)’」が付いたもので、‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’は「‘-다고 하다(tako hata)’+連体形語尾‘-는-(nun)’+依存名詞‘-거-(ke)’＋存在詞‘-있다(issta)’+‘-지(ci)’」により構成されている。

①[[[[[[格]態]相]成立]ムード]モダリティ]

↓

↓　ムードがモダリティに組み込まれて現れる

↓

[[[　　철수도 오　　]겠　　]지　　]

[[[　　命題　　]時制・ムード　　]モダリティ]

英語と日本語の認識のモダリティは助動詞により現れる場合が多いのに比べ、韓国語のモダリティはModal affix、つまり接辞が加えられ、複合語尾、連体修飾形で現れる場合が多く、伝聞表現の数も多いと言える。そのため、韓国語のモダリティ研究が文法体系を重視し、限られた範疇の中で研究されているのだと思われる。また、日本語は「命題めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の境界が明確であるのに比べ、韓国語の場合、ムードとモダリティの区別は明確であるが、「命題めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の間に明確な境界を画すことは難しい。研究者によってはムードを「命題めあてのモダリティ」、文終結を「発話・伝達のモダリティ」とする意見もあるものの現実性に欠けているところがある。なぜなら、日本語の「発話・伝達のモダリティ」は「ね、よ」のような終助詞により表され、「命題めあてのモダリティ」の外に付くため、品詞的にも明確な違いがあり、その境界も明確であるが、韓国語の場合は‘-다지(taci)’と‘-다지 뭐야[21](taci mweya)’のような用例から考えると、まずこれらはムード形式が現れないため「命題めあてのモダリティ」が欠けていることになり、‘-지(ci)’と‘-지 뭐야(ci mweya)’が共に「発話伝達のモダリティ」を表すことになる。従って、この‘-지(ci)’と‘-지 뭐야(ci mweya)’の違いは文法的に説明し難い。

また、日本語の連体修飾形伝聞表現「とのことだ」、「ということだ」は他から得た情報を客観的に提示するのに用いられる反面、韓国語の連体修飾形伝聞表現‘-다는 거다(tanun k

[21] ‘-다지 뭐야(taci mweya)’を‘-다지(taci)’＋‘뭐야(mweya)’に分析し、さらに、‘-다지(taci)’の‘-지(ci)’を「既知」の意味と分析する研究者もいるが、‘-다지(taci)’は‘내가 지갑을 어디에 뒀다지?(財布、どこに置いたのかしら)’のように 話し手の独り言に用いられると、「既知」の意味を消失してしまう。さらに‘-다지(taci)’の‘-지(ci)’を「不確か」と見ることもできるが、‘-다지 뭐야(taci mweya)’の場合、「不確か」の意味はなく、情報に対する話し手の強い信頼をもとに聞き手を話し手の方へ誘導しているため、‘-다지(taci)’＋‘뭐야(mweya)’に分離することは難しいと判断する。さらに、‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’の場合、‘-는(nun)-’+‘-거(ke)’+‘-있지(issci)’のように‘ムード＋依存名詞＋文終結’の形で話し手のある程度の確信を表していると言えるが、モダリティを表す‘-지(ci)’が文の最後に付いている。

eta)’などは聞き手を話し手の方へ誘導する表現であるため、情報を主観的に提示すると言える。

さらに、日本語と韓国語の伝聞は間接引用をもとにしているが、日本語は、直接引用から間接引用に文が再構築される過程に話し手の認識が関与していると見做されているのに比べ、韓国語は、間接引用の文構造が中和されることにより、もとの話し手の心理的態度はもちろん現発話の場の話し手の心理的態度も現れない(김태엽(2001:201))とする見解もある。

しかし、本稿では文構造の再構築は話し手の認識世界において行われるものであることを理由に、話し手の心的態度が文に反映されていると見做し、日本語と韓国語の伝聞表現の比較を進める。まず、第3章では日本語伝聞表現の変遷を、第4章では現代日本語の伝聞表現を考察し、第5章で韓国語伝聞表現を考察する。

３章 日韓両国語伝聞表現の変遷

日本語と韓国語は共に膠着語(agglutinative language)に属し、統語論的観点からは主語・目的語・動詞と語順が一致し、主語が現れなくても文が成立するなど言語類型的に共通点が多いと言える。しかし、日本語伝聞表現は主に助動詞、複合助動詞により現れ、あまり縮約されない[22]のに比べ、韓国語伝聞表現は主に複合助動詞[23]により現れ、複雑に縮約・省略される。このような日韓両国語伝聞表現における相違はモダリティの現れ方にも影響を及ぼすと考えられ、この章では両国語伝聞表現がどのように文法化されてきたのかを含め、日韓両国語伝聞表現の変遷を概観したい。

３．１日本語伝聞表現の変遷と文法化

現代の日本語伝聞表現は推論から由来するもの「そうだ、ようだ、らしい」と、引用から由来するもの「という、って、ということだ、とのことだ」、助詞から由来するもの「とか」があるが、歴史的には助動詞「けり」、「なり」、「めり」、「ごとし」、「らし」などが過去回想や伝聞、伝聞推定用法で用いられた。これら伝聞や伝聞推定表現は現代日本語伝聞表現と形式的な繋がりはあまり見られないが、後から登場する「さうな」、「やうな」、「らしい」との意味的関連の中から概観して置きたい。

３．１．１日本語史の通時的区分

日本語史の時代区分は古代と近代に分ける 2 分法から 7 分法まで以下の通り五つの分類方法がある。

＜表 3. 日本語史の時代分類(沖森 他[24])＞

2 文法	3 分法	4 分法	5 分法	7 分法	政治史的区分

22 「って」の起源には諸説がある(3.1.2.5参照)。

23 韓国語文法では助動詞を品詞として認めていないが、日本語の複合助動詞に当たる表現として終結語尾がある。しかし、日本語と違い韓国語は先語末語尾がムードとテンスの役割を担い終結語尾に先行する場合もある。本稿では主に伝聞に用いられる先語末語尾と終結語尾を一つの表現として扱うため、今後複合語尾という用語を用いる。

24 沖森 他(2010:4-6)

古代	古代	古代	上代	上代	奈良時代及びそれ以前
			中古	中古	平安時代
	中世	中世	中世	中世前期	院政・鎌倉時代
近代				中世後期	室町時代
	近代	近世	近世	近世前期	江戸時代前期
				近世後期	江戸時代後期
		近代	近代	近代	明治以後

本稿では日本語の史的分類が目的ではなく、伝聞表現の変遷を意味の移動という文法化の観点からとらえるために、どのような変遷過程を経ているのか概観することを目的としているので、伝聞に用いられる助動詞を現代日本語と意味・形態面で繋がりが認められるものに限り、必要に応じて上代、中古、中世前期・後期、近世前期・後期、近代、現代に 8 分類して確認する。

３．１．２日本語伝聞表現の変遷

日本語伝聞表現には「といふ」のように、もともと引用・伝聞として用いられた表現もあるが、もとを辿ると過去の回想や様態を表す表現から推論、引用、伝聞に発展した表現が多い。この節では現代日本語の伝聞に用いられる諸表現の中で推論表現の「そうだ、ようだ、らしい」引用表現「という、って」、助詞「とか」がどのように発展し、現在に至ったのかを通時的観点で確認する。

３．１．２．１「そうだ」の変遷

中古以前の伝聞表現を先行研究を用いて上代から概観してみると、上代には過去の事実の伝承的回想表現として用いられた「けり」、「なり」があった。「なり」は詠嘆用法で、「～とする音が聞こえる」の意味であったようだ(吉田 2010:637)。吉田(1972:67)では「けり」は過去の事実の発見、伝承的回想で傍観的に柔らかいとし、原田(1955:44)は「けり」は現実のかなたに対象化された世界に事象を顧望して、事の始終を語り、事理を語るような性質の表現であるが、とりわけ現実時点で過去を思い浮かべる中で、伝聞用法として用いられたとみられるとしている。「けり」以外にも「とふ」、「ちふ」、「といふ」、「とならし」が伝聞用法として、また詠嘆推量の「なむ」も伝聞推定として用いられたようである。

中古時代に入ると、上代には過去の伝承的回想用法として用いられた「けり」が弱化し、詠嘆の意味で用いられた「なり」が伝聞推定用法として用いられるという意味の拡大が起こる。

「けり」、「なり」は中世前期以後次第に口語では用いられなくなる。中世に入ると、「さうな(そうだ)」が登場するが、当時はまだ伝聞や伝聞推定[25]の意味はなかったようだ。

「さうな」は後に「そうだ」に音韻変化するが、「そうだ」は漢字「相」に指定の助動詞「だ」が付いたものであり、その語源は「さう」と同源であるとい言われている[26]（松下 1930:192)。

吉田(1972：211)では「そうな」は江戸時代前期と後期とでは接続・意味などに差異があるとし、前期では連用形に接続するものは様態の意味を表し、体言または連体形に接続するものは推量の意味を表すとした。後期には体言につくものは衰え、終止形接続となり推量のほか伝聞の意味も表すようになったと述べている。

上述したように、当初は伝聞や伝聞推定ではなく様態を表すのみであったものが、近世後期に入り連用形の「(し)そうだ」と終止形の「(する)そうだ」に機能分化されるといった変化を遂げた。

岡部(2011:200)は、江戸時代の終止形「ソウダ」は〈伝聞〉を表す場合と〈推定〉を表す場合があるとし、推定としては、内実推定・原因推定[27]の両方に使われ、さらに終止形「ソウダ」の関心は該当事態の未確認性を述べるという点のみにあり、それが現状の内実なのか原因なのかという点には無関心であると述べた。このことから類推すると「そうだ」の持つ様態・未確認推定という意味が伝聞推定へ繋がり、おおよそ確認の意味を持つ「様態」と未確認の意味を持つ「推定」が意味的衝突を起こし、連用形「そうだ」が様態を、終止形「そうだ」が伝聞を表すようになったと考えられる。

湯澤(1954:407)によると江戸語の「そうだ」は伝聞以外にも「ようだ」、「らしい」のように

---

25 小松(1980:28)では「伝聞推定」の「推定」を「推理」にかなり近い概念とし、「伝聞推定」「推理」「推定」「推量」について以下のように定義している。「推理」とはわれわれの認識作用の一つの面で、普通には、既知の判断(知識)あるいは前提から新しい判断(知識)あるいは結論に到達する過程をさす。「伝聞推定」は、新しい判断(知識)に到達するための既知の判断(知識)・前提を、「他人のことば」と規定したものであり、「推定」は、新しい判断(知識)に到達するための既知の判断(知識)あるいは前提を必要とする認識作用で、「推量」といわれるものは、結論の段階においても、なお、それが、表出主体が創造した観念であることを保持する意味である。

26 吉田(1972:83)では、室町時代には平安時代の接尾語「げな」も推量・様態を表す助動詞として用いられたようだが、「そうだ」と同じく伝聞や伝聞推定の意味はなく、近世に入って終止形に付くものが伝聞の意味として用いられたと述べている。

27 岡部は推定を以下の内実推定と原因推定の二つに分けている。
内実推定：今現在起こっているであろう出来事を推定する。
原因推定：過去の出来事を推定する。

推量を表すこともできるが、「ようだ」、「らしい」のいずれの意味であるかははっきり判断し難いものが少なくなく、また意味の違いに応じる形の違いがないので、そのいずれに用いたのであるか(推量の「ようだ」の意味なのか「らしい」の意味なのか)は、前後の関係や事柄の性質から判ずるより外ないと述べている。(例は湯澤(1954)から)

a. ヲヤ最(も)う外を花市へ出る者の通ル声がするから、夜が明ケましたそふだヨ

(雪の梅、二、10 ウ)

b. ヤ傘屋の六郎兵衛さんが亡(なくなッ)たさうだネ(風呂、前下)

上記の(a)は推量の「ようだ」と思われ、(b)は推量の「らしい」とも伝聞とも見受けられるため、意味上では現代日本語「ようだ」、「らしい」の用法と大きな違いはなかったと思われる。

吉田(1971:343)は「そうだ」を他説引用とし、経験のある純粋な推量ではなくて、不確実・曖昧な推量の意をあらわすとしている。

このように上代語「なり」の意味が詠嘆から伝聞推定へ、また「そうだ」が様態から推量、さらに伝聞へと意味拡大・機能分化しているが、ここで注目すべきは「「様態」>「推量」>「伝聞」」の順で意味拡大が起こるということである。なぜ純粋な話し手の経験・体験を表す「様態」表現から、他者からの情報を表す「伝聞」、その次に話し手の未確認による不確かな「推量」表現に変化せず、「様態」>「推量」>「伝聞」の順番に意味拡大していくのか。直接経験・体験をもとに断言する「様態」表現が、間接経験・体験を表す推量に用いられるようになったのは、様態表現が話し手の主観を投影しやすくなるにつれ、断言・確信の程度が弱まり、物事を間接的に表現したい話し手の表現意図が反映されているからと考えられる。さらに、「伝聞」表現においても何らかの形で必ず情報に対する話し手の主観、つまり表現意図が組み込まれるが、その際、伝聞という間接的情報に対する印象や確信度、さらに話し手の状況や現発話の聞き手との関係などを考慮に入れ、時には断言[28]を避け、不確かなことであるように間接的に提示したい話し手の表現意図の働きにより推論表現が伝聞表現に発展したと推測される。このように「様態」>「推量」>「伝聞」の順に発達していくことは伝統的文法化の考えから言うと、客観的コトガラを表す様態表現の文法化が進むにつれ、主観性を含みやすくなったため推量表現に意味拡大する、あるいは情報伝達において発生する話し手の表現意図の表出方法の変化により伝聞表現に意味拡大していくのだと考えられる。「なり」、「そうだ」、

28 Palmer(1986)ではLyons(1977)を引用し、事実の直裁的言明(すなわち断言)は話し手が自分の断言する事実に対する態度を明らかにすることであるため、認識論的には‘non modal’であると述べられている。

「ようだ」、「らしい」をみる限り、これらは「様態・推量表現の意味拡大」の一つのプロセスであると判断する。

３．１．２．２「ようだ」の変遷

「ようだ」は上代語「ごとし」、「めり」に相当し、比況・様態を表す助動詞とされている。上代の「ごとし」の語源に関しては諸説があるが、その中でも「ごと」は体言の「事」、「し」は接尾語的なもの（三矢重松（1908）『高等日本文法』、時枝誠記（1941）『国語学原論』、大野晋（1955）『時代別作品別解釈文法』、岩井良雄（1974）『日本語法史』、吉田金彦（2010）『吉田金彦著作選』）という説がある。吉田（2010:813）も「ごとし」に関して「事」に付く「し」を形容詞的接尾語とし、「し」は推量の「まし」、「べし」、「らし」における〈決定辞〉の「し」と異なるところがなく、形容性指定判断を含む意とし、これが動詞性による比況判断となると、中古で盛んに用いられることになる「やうなり」という形式がこれにあうと述べた。上代語の視覚による様態表現の助動詞「めり」も現代では普通「ようだ」と訳されているが、上代語の現代語訳は一種の比喩的言語解釈であるため、「めり」と「ようだ」の間の連続性を類推することは難しい。さらに「めり」は「ようだ」より限られた意味で用いられていたようだ。小林（1936:209）は「めり」について、「もと「目」「見る」などと語源を同じくし目撃する意味を現すことから、客観的にさうと斷定してよいことを、「自分はさう見る」とやゝ斷定を控へる気持ちを持ち、斷定を婉曲に言ひ表す助動詞」と述べており、小松（1980:188）は「「めり」は客観的実在の反映を受けながら、主観を現実として定位し、認識できる意味をもつ助動詞」としている。

一方で、上代語の「ごとし」と中古に登場する「やうなり」の間にも意味的類似はあっても、形態的連続性を類推することは難しい。平安時代において漢文学では「ごとし」が、女流仮名文には「やうなり」が比況・様態を表す表現として使い分けられ、また女性の会話においては「めり」が用いられたようだが、その後「めり」は次第に消滅し、「ごとし」は文語化され、一部残っているのみである。

中世になると、「やうなり」が「やうな」に音韻減少し比況・様態を表していたが、近世に入り体言や助詞に付く「やうな」は比況の意を表し、終止形に付くものは朧化法的断定の意を表していたとみられる。

近世の「やうな」は主に推量の助動詞として扱われているが、湯澤（1954:506）は、江戸時代の「ようだ」は以下の用例(b)のように直接に断定しないで、客観的状勢か自分に「そう見える」「そう思われる」という心持を表すとし、またこれを自分に用いると、用例(c)のようにただ自分がそういう気がするという意味になると述べた。（例は湯澤 1954）

a. おまへの頭巾はいつもよりあたらしくなったやうだわたしの目がかすんだせへかの
（風呂、前上）

b. 大分お障子が破れたやうだ(いろは、四五)

c. ホンニはらがへったよふだ(徳五、四五六)

「やうな」は「ようだ」に音韻変化を起こしているが、「ようだ」は名詞「様」に助動詞「だ」の付いたもの(吉田 1971:334、湯澤:505)とされている。岡部(2011:197-198)は現代語の「ようだ」は内実推定、原因推定両方に用いられるが、江戸時代の「ようだ」は内実推定のみを表し、話し手が自らの感覚によって直接捉えた事態の様子や自己の内的感覚を描写し、言語化する用法であると述べている。

３．１．２．３「らしい」の変遷

上代の助動詞「らし」は二つの用法があったようだ。小松(1980:155)は第一の用法を、客観的な事実を明示し、それを根拠として、現在の事態を主観的に推量判断する場合とし、第二の用法を、客観的事実に、主観的な判断を、確信をもって、結合する推量判断の場合としている。奈良時代の文献にも第二の用法は第一の用法よりはるかに少なく、中古になると、第二の用法は完全に消滅したと言う。このように第一の用法においての主観的推量判断が第二の用法より優位的に働くことで第二の用法が中古以後には衰退したという変遷は、上代から中古へと時代が移るに従って、「らし」に含まれる客観的事実による話し手の確信が弱まっていることを表している。言い換えると、話し手の確信を投影する、あるいは断定する力が弱まったことが原因ではないかと推察される。(例は小松(1980:155)から)

＜第一の例＞

沖辺より潮満ち来らし韓(から)の浦にあさりする鶴鳴きてさわきぬ(万葉集・一五)
（根拠）

み山には霰降るらし外山なるまさきのかづら色づきにけり(古今集・二〇)
（根拠）

＜第二の例＞

わがせこがかざしの萩に置く露をさやかに見よと月は照るらし(万葉集・一七)

玉に貫く花橘をともしみしこのわが里に来鳴かずあるらし(万葉集・一七)

「らし」は元々「らし」が付かない方の事実を根拠として、「らし」の付いた方の文を推定す

る複文構成であった。

小松(1980:195)は助動詞「らし」は、平安中期以後は、和歌では、「らむ[29]」に圧倒され、散文では「めり」に、その位置が奪われて、はなはだしく衰退したと見ている。

近世になると「らしい」が登場するが、吉田(1971:323)は、最初は体言接続として用いられることが普通で、属性を表す形式詞をつくる接尾語「らしい」から発展段階にあり、推量として用いられているのは後期に多いと指摘している。

今日の助動詞「らしい」は古代語の「らし」の系統を引く語と思われ、湯澤(1954:512-513)によると「らしい」は以下の用例(a)のように体言について、推量する意味を表すが、用例(b)のように副詞に付いたり、一例ではあるが用例(c)のように活用語の終止形に付いたものもあるため、その用法においても現代と大きな違いは見られないと述べている。(例文は湯澤1954 から)

a. 是もまづ破談ばなしらしいノ(八笑人、三下、八オ)

b. ム、そふ〔然〕らしいよ (徳五、八二)

c. あの○○さんは、おぬしに余程(よっぽど)気があるらしい(いろは、七〇)

一方で、高山 他(2012:177)は明治期の「活用語＋らしい」の多くは、「～といった感じだ」「～といった様子だ」といった「そのような様子をしている」という事実を表すもので、推量・推定は表していなかったと考えられると述べている。

現代日本語助動詞「らしい」は客観的推量の助動詞でありながら、場合によって「伝聞」と見受けられる用例もしばしば見られる。金田一(1953:28)が「・・・ト推定サレル状態ニアル、または属性ヲモッテイルという意」だと説いているように、助動詞「らしい」は客観的様子を表すものであるため、話し手にとっては客観的コトガラを発していることになる。しかし、他者の言葉を伝える伝聞に用いられる際には、他者の話という客観的証拠と証拠に対する未確認の意味が衝突を起こし、不確かな伝聞表現になっているのではないかと推察される。

以上のように、現代日本語において伝聞を表すことのできる助動詞「そうだ」、「ようだ」、

29 吉田(2010:581-592)は「らむ」の用法を以下のように纏めている。

1. 現在を表す副詞と共に用いられて、明瞭なる現在推量の意を表す。
2. 疑問語と共に用いられて、深い疑惑的推量・不安の意を表す。
3. 現時点に立って自然・人事に対し軽く単純な客観的推量の意を表す。さらに、吉田(1972 : 69)では推量度のもっとも強い助動詞で奈良・平安時代ともに用いられ、現在の状態を推量するものであると記している。

「らしい」は、登場初期には主に物事に対する確かな「様態」を表す助動詞から、次第に「推定・推量」の意味を持つことになり、遂には「伝聞」を表すまで意味的変遷を遂げている。さらに上述したように、「様態」＞「推量」＞「伝聞」の順に発達していくということは、①それぞれの表現が文法化の段階で、話し手の主観が介入しやすくなったために、これらの表現に含まれる話し手の断定・確信が弱まり、比較的客観的コトガラを表す様態表現から推量表現として意味拡大するようになった、②伝聞という客観的な事態に対する話し手の〈事実関係未確認〉という認識態度が、「推量・推論」を介することで話し手の責任感を減らし、表しやすくなるというの２点で説明できるだろう。このように論理的、分析的なことから情意的なものへ、客観的表現から主観的表現へ、主観的表現からより主観的表現への変化は一言語内の通時的変遷過程でしばしば確認できる。このことは、近来、推論・伝聞研究に用いられている証拠性という概念を共時的観点で個別の文法範疇とみることは適切ではなく、一言語内の通時的観点に、共時的観点を照らし合わせる形で研究されるべきであることが分かる。

３．１．２．４「という」の変遷

「と」の語源に関して確かなものはないが、上代から現代まで続けて用いられている。小林(1936:229)では、「指定の意味のある「そ」「さ」と語源を同じくするもので(s-t の変化)「とかく」「とまれかくまれ」「とある家」などの「と」とも関係があり、名称・状態・目標等を示す語に添へて「それ」と指示する為に用ひるのが本義、引用の語句に「云々と云った」と云うのは、上の句をさうして「さう云った」と云ふこと」と述べられている。また、橋本(1969:139)は助詞「ぞ」を「と」といった例があるなどから、古くから「と」という指示する意味のことばがあったとするのもさほど不自然ではないとした。

上代から「といふ」は伝聞推定表現としてすでにみられているが、吉田(2010:796)では「と」は作者の単純な肯定的指定の判断を表すとし、並列・共同・目標の意の「と」を格助詞、「である」という指定的陳述を濃厚に示すものは助動詞とみられると述べている。また「といふ」の縮約として「とふ」、「ちふ」[30]があったようだ。

多くの研究者により「と」に指示・指定の意味があるとされている一方で、上代から「と」は、格助詞として並列と連用修飾にも用いられた。本稿では「という」の引用・伝聞性は本来「と」の持っている並列の意味から起因しているのではないかと推測している。要するに「と」の持つ並列の意味が、前件と後接するものが等位(対等)であることを示すことから、前件の

30 『時代別国語大辞典』(1967)三省堂

考えや話と後接の「いう・おもう」が等位(対等)であることを指すとみているということである。このように引用・伝聞の「と」について、等位(対等)関係を示すとみることで近代に登場する「とて」や現代の「とか」などと理論上繋ぎ易くなるだろう。

３．１．２．５「って」の変遷

今日の「って」は、「という」の砕けた言い方、縮約形という認識が強い。しかし、「って」は、通時的には指定の「と」に助詞「て」が付いた「とて」が「って」になったものと考える説（湯澤(1957)『増訂　江戸言葉の研究』、此島(1966)『国語助詞の研究：助詞史の素描』、三枝(1977)「「って」の体系」、松村(1989)『大辞林』）と、指定の「と」に確認の助動詞「て」が付いた「とて」が「って」になったものと考える説、「と言って」を語源とする説(松重(1971)『日本文法の諸問題』、田中(1977)「助詞 3」)の三つがある。松重(1971:248)は「と」、「って」の形の成立は「といって＞とて＞って＞て」の順で変化していると述べている。先行研究から上代において「とて」は、大きく分け「引用」と「逆接」の二つの意味があり、この二つの用法は『源氏物語』にも見られる。(例は此島 1966:150 から)

a.「見奉りてくはしく御有様も奏し侍らまほしきを，待ちおはしますらむを，夜ふけ侍りぬべし」とて急ぐ（「桐壺」）
b. この人の宮仕の本意かならずとげさせ奉れ。われなくなりぬとて，口惜しう思ひくづほるな（「桐壺」）
c. 翁いふやう、「我、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となりたまふべき人なめり。」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。(「竹取物語」)

此島(1973：150)は(a)の「とて」は「引用」、(b)は「とも」と置き換えられることから「引用」と「逆接」の両方に取れるとしている。しかし室町時代頃までは、まだ逆接用法の「とて」の用例は少なく、江戸時代になると「とて」の用法がかなり自由になり、さらに近世後期になると「とて」と「とって」が混用[31]されるが、「とって」は「といって」の縮約であり、 共時的に「とて」「とって」同一語の二形と見ている。(用例 a, b, c は此島 1966:151、d は吉田 2010:382 から)

a. どうして人の足で一さんにかけたとて、猪に追ッつかれるものかナ(浮世風呂・二下)

31 Trougott(2010)の文法化の一方向性「A>A+B>B」においての「A+B」の段階に当たると考えられる。

b.貴さまたちにいってきかせたとって、馬の耳に風だらうが・・・(膝栗毛・四上)

c.盛りばの小児だとて、鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあらうし・・

(浮世風呂・四上)

d.「揃ったかておもしろいことあらへん。」(尾崎士郎『人生劇場』)

吉田(1971:446-447)によると、「とて」は指定の助動詞「と」に確認の助動詞「って」が付いた複合助動詞であるため、「とて」の間に形式動詞「する」、「言う」、「思う」が介在できると述べられている。さらに「として」、「と言って」、「と思って」から中間の動詞が抜け「とて」になることがあり、現代には促音化し「って」になっているが、さらに促音がなくなり「て」となることがあるとし、上記の用例(d)を挙げている。

また R.Suzuki(2007:211)は「って」を通時的観点から分け、Type1:1830 年代に引用として用いられた「って」は、Type2:1880 年代には名詞の次に付いて「導入」、Type3:1930 年代には「んだって」の形で文末に用いられ伝聞や自己の考えを表し、それ以後に Type4:「Repair」用法の順に発展していると述べている。

このように中古から「引用」・「逆接」として用いられた「とて」が近世には「とて」、「とって」の重層化の過程を経て、現在には「って」に形態形式・機能の変化を起こし、「って」、「んだって」の形で引用、伝聞は勿論、導入、強調、問い返し、訴えかけなどさまざまな用法に拡大している。このような意味拡大は「って」が主に話し言葉に用いられることから語用論的動機付けがあったからであると考えられる。

３．１．２．６「とか」の変遷

「とか」は従来、格助詞「と」に係助詞「か」が付いたものと言われ[32]、二つまたはそれ以上の事物を並立させる並列助詞として用いられ、また曖昧さを表す表現としても使われてきた。「とか」の古くからの形や例を見つけることはできなかったが、湯澤(1954:552)は a のような用例を挙げ、江戸時代の「とか」は断定しないで、ぼかしていう時に用いられると述べた。

a.それこそマまことに能月日の下とかに生まれた運とやらでございますヨ

(英対、二、一九オ)

32 日本国語大辞典(1975:557)によると、不確かな想像または伝聞を表す。文中に用いて、文末の語句と呼応する場合と、文末に用いられる場合がある。

このように「とか」が並列助詞から曖昧さを表す表現、不確かな推量、さらに伝聞用法にまで用いられるようになったのには、次のような理由があるのではないかと推測する。つまり、「とか」の「と」の持つ前件と後件の等位の意味と、「か」の持つ疑問の意味が衝突を起こし曖昧性・不確かさを表す表現として用いられることになり、それが伝聞の事実関係未確認による不確かな特性に適合しやすかったため意味拡大したものと考えられる。

このように「と」の持つ並列の意味から「と」の後に付く動詞「いう・おもう」、あるいは接続詞「て」、助詞「か」の意味機能により意味の違いが生じる。即ち「という」の場合は「と」の前件と「いう」が等位(対等)関係で結ばれ、「A=B」であることを表し、「とて」の場合は「といって」の変化形であるが、主に話し言葉で用いられることから語用論的動機付けにより「って」に代わる。「とか」は伝聞に用いられる際には、等位(対等)を表す「と」と助詞「か」の持つ疑問の意味の働きにより曖昧な伝聞表現になると考えられる。さらに「という・とおもう」の引用・伝聞表現、「って」の引用・導入・伝聞、「とか」の並列・ぼかし・曖昧な伝聞表現に意味拡大していくことは話し手の認識作用により意味論的・実用的変化が起こったためであると考えられる。

以上を纏めると、助動詞「そうだ」、「ようだ」、「らしい」の場合は「様態」>「推量」>「伝聞」の順に意味拡大していると考えられる。これら助動詞が客観的事実を描く「様態」>「伝聞」>「推量」の順ではなく、「様態」>「推量」>「伝聞」の順に意味拡大していく理由としては、①それぞれの表現が文法化の段階において客観的コトガラを表す様態表現に含まれる断定・確信が弱まり、話し手の主観が介入しやすくなったため推量表現として意味拡大する、②伝聞の客観的事態に対する〈事実関係未確認〉という話し手の一歩引き下がった認識態度が、「推量」を介することで表しやすくなるという２段階で説明できる。また「という」、「とか」などにおいての基本的な「と」の役割は「並列」の意味であると解され、「と」を介して前文と後文の「いう・おもう・はなす」などが等位(対等)関係にあることを示している。「とか」に関しては、「と」の等位(対等)の意味と「か」の持つ疑問の意味が衝突し、意味変化を起こしていると推察される。

次節の 3.2 では韓国語伝聞表現の変遷と文法家について概観し、4 章、５章では、共時的観点から現代日本語と現代韓国語におけるそれぞれの伝聞表現の話し手の認識態度や、それによる聞き手の情報の真偽判断への介入について、伝聞表現同士の置き換えを通して考察する。

３．２韓国語伝聞表現の変遷と文法化

現代韓国語は15世紀「訓民正音」の創制から始まるとされている。それ以前は漢字を借用して文字を表記していたが、漢字にはない古代韓国語の発音を表記するために用いられた吏讀、漢文を読みやすいように吐を付けるために用いられた口訣(助詞と語尾)があった。しかし、多くの資料が消失しており、判断材料が乏しいため、それらの把握が難しいのが現状であるが、本稿では現代韓国語の引用・伝聞表現の基本形が‘-다고 하다(tako hata)’に固まったのは近代に入ってからであると推測される。

３．２．１韓国語史の通時的区分

韓国語の史的区分の方法を見ると、3分法～7分法と諸学者により分類方法が異なるが、古代・中古・中世・近世・現代に分けるか、古代・前期中世・後期中世・近代・現代に分ける5分法が広く認められている。以下の<表4>は諸研究者の韓国語史の時代区分を纏めたものであるが、本稿において現代以前の韓国語伝聞表現の変遷を考察するためには、現代韓国語の元になる15世紀の「訓民正音」の創制後が重要であるため、「訓民正音」の創制前後により中世国語を「前期中世国語」と「後期中世国語」に分類している李基文(1961)の5分法の韓国語史分類をもとに韓国語伝聞表現の変遷を考察する。

＜表 4. 韓国語史の時代分類＞

<table>
<tr><th>3 分法</th><th>4 分法</th><th>5 分法</th><th>6 分法</th><th>7 分法</th><th>政治史的区分</th></tr>
<tr><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>形成期</td><td>－</td><td>檀君時代</td></tr>
<tr><td>古代</td><td>古代</td><td>古代</td><td>古代</td><td>新羅語</td><td>新羅時代</td></tr>
<tr><td rowspan="3">中期</td><td rowspan="3">中世</td><td>前期中世</td><td>中古</td><td>高麗語</td><td>高麗時代</td></tr>
<tr><td rowspan="2">後期中世</td><td rowspan="2">中世</td><td>朝鮮初期</td><td rowspan="4">朝鮮時代</td></tr>
<tr><td>朝鮮中期</td></tr>
<tr><td rowspan="3">近世</td><td rowspan="2">近代</td><td rowspan="2">近代</td><td rowspan="2">近代</td><td>朝鮮後期</td></tr>
<tr><td>朝鮮末期</td></tr>
<tr><td>現代</td><td>現代</td><td>現代</td><td>現代</td><td>ハングル専用以降</td></tr>
</table>

３．２．２韓国語伝聞表現の変遷

現代韓国語伝聞表現は引用から由来しており、引用の基本形が‘-다고 하다(tako hata)’であることに異存はないだろう。古代韓国語、前期中世韓国語における漢字語借用表記と「訓民正音」の創制後の韓国語は大きな違いがあるため、本稿は現代韓国語との繋がりを考慮し、後期中世韓国語から考察の対象とする。

現代韓国語の間接引用文は自己や他者の言葉、つまり情報を叙述、疑問、命令、勧誘の四つのどれかに捉え直して伝えるのが基本であるが、後期中世韓国語も同じだったと考えられる。しかし、後期中世韓国語においてはまず直接引用と間接引用を区別し難く、間接引用から伝聞を区別することも難しい。それ故、後期中世韓国語における伝聞表現の分類はこれからの課題とし、本稿では主に引用動詞の位置と引用格助詞‘고(ko)’、‘라고(lako)’について考察する。

３．２．２．１引用動詞の位置

後期中世韓国語引用文は引用格助詞‘고(ko)’、‘라고(lako)’が現れず、[被引用文]－[引用動詞]]といった現代韓国語引用文と同じ構造も見られるが、引用動詞が被引用文に先行する[引用動詞－[被引用文]]の構造が多く見られる。これは現存している資料が主に中国から入って来た仏書を直訳したものであるため、中国語の主語・動詞・目的語構造が影響を与えたと言われている。

권재일(1998)は中世韓国語引用文は引用動詞‘닐오ᄃᆡ’の有無により、①[＋導入節：動詞有]、②[±導入節：動詞無]、③[－導入節]の三つに分け、①は中世韓国語に多く、③は現代韓国語に多く現れると述べられている。안주호(2003)も引用動詞の場所により中世韓国語引用文を、①[Subj－引用動詞－[被引用文]]、②[Subj－引用動詞－[被引用文]－ᄒᆞ(-)]、③[Subj－[被引用文]－引用動詞]の三つに分けている。この中で①は中世韓国語に多く見られ、③は現代韓国語の基本形、②は①と③の過渡期に多く見られると述べている。

一方で유춘평(2012)は中世韓国語引用文を、①[引用動詞－[被引用文]]、②[引用動詞－[被引用文]－(ᄒᆞ-)]、③[[被引用文]-引用動詞]、④[[被引用文]－(-ᄒᆞ아)－引用動詞]の四つでに分けている。ここでは、直接引用・間接引用区別なく、先行研究から中期韓国語文末引用文の文構造と特徴を概観する。

[引用動詞－[被引用文]]

a. 護彌 닐오ᄃᆡ 소리쁜 듣노라(석상 6:15ㄱ)

b. 王과 夫人괘 눈 어드워 소ᄂᆞ로 문지시며 니르샤ᄃᆡ 네 내 아ᄃᆞᆯ 善友ᄂᆡ다 어버ᅀᅵ 너 그려 이리 受苦ᄒᆞ다라(월석 22:64-5)

c. 護彌 닐오ᄃᆡ 그리 아닝다(석상 6:16ㄱ)

d. 難陁ㅣ 솔ᄫᅩᄃᆡ 하ᄂᆞᆯ도 마오 이 地獄애 아니 들아지이다(월석 7:14)

e. 目連이 묻ᄌᆞᄫᅩᄃᆡ 어미 地獄애 이션 디 오랄씨 더브러 恒河水ㅅ ᄀᆞ새 가 믈머겨 ᄇᆡ 안ᄒᆞᆯ 싯겨지이다(월석 23:90ㄱ)

f. 菩薩이 對答ᄒᆞ샤ᄃᆡ ᄒᆞ마 주글 내어니 子息ᄋᆞᆯ 議論ᄒᆞ리여(월석 1:7ㄱ)

上記の用例は主に‘닐오ᄃᆡ’、‘니르샤ᄃᆡ’、‘솔ᄫᅩᄃᆡ’、‘묻ᄌᆞᄫᅩᄃᆡ’のような引用動詞が被引用文に先行され、文末には引用動詞が現れていないが、これは先ほど言及しているように中国から入手した仏書の直訳が主であったため、中国語の影響により引用動詞が被引用文の前に置かれている直接引用文である。また現代韓国語は引用動詞が文末に置かれ、敬語体先語尾の‘-(으)시-’も‘하시다’のように文末引用動詞に付くが、中世韓国語の中で、引用動詞が被引用動詞に先行する場合は‘對答ᄒᆞ샤ᄃᆡ’、‘ 니르샤ᄃᆡ’のように敬語形先語末語尾‘-(으)시-’も被引用文の前に来ることができ、それ以外のムードを表す先語末語尾‘-더-’、‘-던-’などは見られない。이기문(1961 : 166)では‘닐오ᄃᆡ’の‘-오-’は先語末語尾、‘ᄃᆡ’は譲歩の語尾としている。

[引用動詞－[被引用文]－(ᄒᆞ-)]

a. ᄂᆞ미 당다이 내그에 무로ᄃᆡ 涅槃ᄒᆞ실 쩌긔 므슷 마ᄅᆞᆯ ᄒᆞ시더뇨 ᄒᆞ리니(석상 23:30ㄱ)

b. (如來)盟誓ᄒᆞ샤ᄃᆡ 道理 일워ᅀᅡ 도라오리라 ᄒᆞ시고(석상 6:4ㄴ)

c. 經에 니ᄅᆞ샤ᄃᆡ 諸佛 니ᄅᆞ샤미 空法을 여르시ᄂᆞᆫ 道ㅣ 니 내 이 法을 爲ᄒᆞ야 身命을 ᄇᆞ료리라 ᄒᆞ시니라(영가 상:45ㄱ)

d. 王ㅣ ᄒᆞ샤ᄃᆡ 내 아ᄃᆞ리 어딜셔 ᄒᆞ시니(월석 2:7ㄱ)

上記は被引用文の前後両方に引用動詞が現れている用例である。被引用文の前に来る引

用動詞は‘닐오ᄃᆡ’、‘니르샤ᄃᆡ’、‘ᄉᆞᆯᄫᅩᄃᆡ’、‘ᄒᆞ샤ᄃᆡ’などで、文末引用動詞は‘ᄒᆞ고’のような接続語尾、‘ᄒᆞ시니’のような先語末語尾で文が終了しているか語末語尾で文が終了しているか曖昧な文、‘ᄒᆞ야ᄂᆞᆯ’のような未完了形、‘ᄒᆞ시니라’のような完了形が現れる。이윤희(1986：205)によると‘ᄒᆞ-’は被引用文と繋がり、話法動詞「니르＋‘-오ᄃᆡ’」と論理的等価関係を維持させ、ムードと文体法の機能要素を統合し文を接続したり終結する役割をすると述べられている。また、(b, c, d)の場合、敬語形先語尾の‘-(으)시-’が‘무로ᄃᆡ・・・ ᄒᆞ리니’、‘니ᄅᆞ샤ᄃᆡ・・・ ᄒᆞ시니라’のように被引用文の前後両方の引用動詞に現れ、文のバランスを取っていると思われる。

被引用文の文末は‘ᄒᆞ시더뇨’、‘어딜셔’で確認できるように、疑問、感嘆がそのまま現れることから直接引用として用いられていることが分かる。‘도라오리라’、‘ᄇᆞ료리라’は話し手の何らかの意志を表わしているが、허웅(1975)によると、2･3人称で話し手の聞き手に対する命令、強要に「-오/우+리-」形が現れる場合が多いと述べられているが、(c)の‘ᄇᆞ료리라’の‘료’がこれに当たると考えられる。現代韓国語はムード形式がテンスの役割も兼ねており、‘하더라(hatela)’、‘하던데(hatentey)’‘하는데(hanuntey)’のように発達しているが、中世韓国語は引用文においてはムード形式があまり用いられていない。これは現在残っている中世韓国語資料は翻訳書が多く、直接引用形を取っているものが多いのが一つの原因であると考えられる。

さらに現代韓国語の引用表現は文末引用動詞と被引用文の間に引用格助詞‘고(ko)’、‘라고(lako)’が介在するが、中世韓国語は文末引用動詞にもこれらが現れない点で違いがある。[引用動詞－[被引用文]－(ᄒᆞ-)]構造は19世紀まで残存しており、19世紀末の新聞資料に以下のような用例が確認できる。

a. 북셔 신쟉로 평경동시교 살던 죠챵헌이가 다년 신병으로 견딜슈 업스니ᄭᅩᆺ스ᄉᆞ로 싱각 ᄒᆞ야 골ᄋᆞᆫᄃᆡ 내 병이 죵시 낫지 안코 항샹 이 모양 일진ᄃᆡ ᄎᆞ라히 일즉 죽ᄂᆞᆫ 것이 오히려 낫다 ᄒᆞ고 스ᄉᆞ로 우물에 ᄲᅡ져 죽엇다니 그 졍경이 진실로 참혹 ᄒᆞ고 불샹 ᄒᆞ더라

(독닙:1898.08.01.)

b. 외국 신문들이 우리 독립신문을 보고 칭찬을 대단히 ᄒᆞ며 말ᄒᆞ기를 시쟉 ᄒᆞ기ᄂᆞᆫ 젹게 시쟉 하엿스나 ᄭᅳᆺ츤 크게 되라라고 ᄒᆞ며 ᄯᅩ ᄒᆞᆫ 신문은 말ᄒᆞ기를 신문쇽에 잇ᄂᆞᆫ 말이 모도 죠션

빅셩의게 유죠홀 말이라고 ᄒᆞ며 또 ᄒᆞᆫ 신문 ᄒᆞ나ᄂᆞᆫ 말ᄒᆞ기를 죠션이 지금 브터 춤 기화 될 일을 힝 ᄒᆞᆫ다고 말ᄒᆞ엿더라(독닙:1896.05.05.)

上記の用例(a)の‘골ᄋᆞᄃᆡ・・・낫다ᄒᆞ고’のように 引用格助詞‘고’が確認できず、文末語尾‘-다’の次に‘ᄒᆞ고’が繋がる‘‘낫다’ ᄒᆞ고’の構造もあれば、(b)の文末の‘말ᄒᆞ기를 ・・・ᄒᆞᆫ다고 말ᄒᆞ엿더라’のように引用格助詞‘고’が介入されている用例も確認できる。

[[被引用文]－引用動詞]

現代韓国語の引用文・伝聞の一般的形である[[被引用文]－引用動詞]構造は中世韓国語にも見られる。

a. 그 아기 닐굽 설 머거 아비 보라 니거지라 ᄒᆞᆫ대(월석 8:101ㄴ)

b. 스승이 죽거늘 둘히 제여곰 어버ᅀᅴ그에 侍墓 살아지라 請ᄒᆞ야ᄂᆞᆯ(삼강 효자:35ㄱ)

c. 太子ㅣ 門 밧글 보아지라 ᄒᆞ야시ᄂᆞᆯ(석상 3:16ㄱ)

d. 性이 본래 神奇히 아라 제 그러커니 뉘 尊堂ᄋᆞᆯ 엇뎨ᄒᆞ료 무ᄅᆞ리오(금삼 4:54ㄴ)

e. 大衆이 이 寶塔ᄋᆞᆯ 보고 疑心ᄒᆞ야 엇던 因緣으로 이 寶塔이 짜해셔 소사나거뇨 ᄒᆞ더니
(월석 21:209ㄱ)

引用動詞‘ᄒᆞᆫ대’、‘ᄒᆞ더니’にはムード形式が見られるが、이기문(1961)によると、中世韓国語の‘-ᄂᆞ-’は現在続く動作、‘-더-’は過去未完了の動作、‘-리-’は未来の推測と述べられている。中世には‘龍과 鬼神과 위ᄒᆞ야 說法ᄒᆞ더시다(석상 6:1)’のように敬語体先語末語尾の前に‘-더-’が来ることができたが、허웅(1975:795)によると、‘-더-’と‘-(으)시-’の結合は自由であり、その順番は任意的であったと述べられている。

[[被引用文]－引用動詞]構造は近代韓国語に多く見られるが、19世紀には引用格助詞‘고’が発達することになる。次は１９世紀末の新聞記事の用例である。

a. 경샹도 영쳔에 사ᄂᆞᆫ 박현옥 이가 팔월변이후에 셜원ᄒᆞᆯ 경윤이 잇서 ᄌᆞ긔 힘것 쥬션ᄒᆞ엿더니 이왕 경부에서 그말을 듯고 잡으라 ᄒᆞᄂᆞᆫ고로 고향으로 망명도쥬 ᄒᆞ엿더니 난민들이 괴슈가 되라고 ᄒᆞ기로 난민과 셕기기 슬혀 근일에 셔울노 왓더니 난민들이 박씨의 집을 불질너다더라(독닙:1896.04.10)

b. 길에셔 신문지들을 보고 샹하 노쇼 귀쳔 업시 다 말ᄒᆞ기를 이신문지에 ᄒᆞᆫ말이 지극히 올코 ᄯᅩ 볼만ᄒᆞᆫ말이 만타고 ᄒᆞᄂᆞᆫᄃᆡ 그즁에 유지각 ᄒᆞᆫ이와 각부 관원들이 ᄒᆞ기를 신문샤원을 보고 이신문 ᄒᆞᄂᆞᆫ 거시 ᄆᆡ우 깃부고 감샤ᄒᆞ다고 ᄒᆞ더라(독닙:1896.04.09)

c. 한셩부에셔 ᄒᆞᄂᆞᆫ 말이 귤원슈가 한니 지내도 아니 내노니 뎌희 령ᄉᆞ관을 쇽여 스무 날을 한ᄒᆞ여 공문샹에 실슈가 된다고ᄒᆞ며 ᄯᅩ 한셩부에셔 령ᄉᆞ관에 죠희 ᄒᆞ엿스되 답쟝이 아직 업다고 말ᄒᆞᆫ다더라(독닙:1896.05.09)

d. 이 다음 부터ᄂᆞᆫ 무론 어느셔 ᄌᆞᄂᆡ던지 도젹이 잇서 당쟝에 거즛 몰으ᄂᆞᆫ톄 ᄒᆞ거나 잇흔 놀에 곳 잡지 아니 ᄒᆞ면 ᄒᆡ방곡 ᄆᆞᆺ흔 슌검들은 경무청에셔 혹 파면도 ᄒᆞ고 혹 벌봉도 ᄒᆞᆫ 후에 ᄂᆡ부로 보고 ᄒᆞᆫ 것이요 ᄒᆡ 셔장과 밋 총슌은 ᄂᆡ부에셔 중벌ᄒᆞ겟노라고 ᄂᆡ부에셔 경무청으로 훈령 ᄒᆞ엿다더라(독닙:1898.08.04)

上記の用例から引用格助詞‘고’が確認できるが、‘괴슈가 되라고 ᄒᆞ기로’、‘감샤ᄒᆞ다고’、‘실슈가 된다고ᄒᆞ며’のような用例を見る限り、全ての用例に情報源が現れている点、用例(d)‘중벌ᄒᆞ겟노라고’のようにもとの話者の言葉があまり再構築されていない用例が多い点から、引用格助詞‘고’は他者の言葉を直接引用的に用いる際に使われたと推測される。

上記の用例は新聞記事から収集した用例であるため、文末引用形は用例(a, f)のような‘다더라’が最も多く、(c)の‘말ᄒᆞᆫ다더라’如く‘-ㄴ다’も確認できる。これは後期中世現在時相の先語末語尾‘-ᄂᆞ-’と平叙文語尾‘-다’の統合形であるが、이현희(1994:67)によると‘-ᄂᆞ다>ㄴ다’の変化は18世紀には終わったと述べられている。

これまで後期中世韓国語を中心に引用における文体法と引用動詞の位置関係を概観した。後期中世韓国語の間接引用は現代と同じく叙述法、疑問法、命令法、勧誘法の四つに分けられるが、直接引用と間接引用の区別が難しい。また引用格助詞がなく、引用動詞が被引用文

に先行する[引用動詞－[被引用文]]、[引用動詞－[被引用文]－(ᄒᆞ-)]、[[被引用文]－引用動詞]の三つのパターンが見られ、直接引用と解される文が多かった。後期中世韓国語は引用文の文末も接続語尾‘-고’や外観的に先語末語尾‘-니’で文が終了しているものもあり、ムード形式‘-더-、-던-’なども現代ほど積極的に使われなかったと考えられる。近代には引用格助詞‘고’が現れるが、当時は他者の言葉を直接引用的に用いる際に使われたと推察される。

４章 現代日本語の伝聞表現のモダリティとカテゴリー化

第 3 章では日韓両国語伝聞表現を通時的観点から概観した。第 4 章では、現代日本語の伝聞に用いられる表現 8 つを「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」に注目し、①情報共有の手段(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)を確認することで、話し手の表現意図に影響を与える要素としての情報と話し手、話し手と聞き手、情報と聞き手の関係を考察する。

本論に先立って、推論[33]「そうだ」、「ようだ」、「らしい」における話し手の判断というのは、何らかの証拠を見たり聞いたり感じたりしたことに対する話し手の主観的判断であるため、話し手は命題内容に積極的に関与し、能動的に命題内容を生成すると言える。その反面、たとえば、伝聞「そうだ」は情報の内容を他から入手した間接的なものと既定事実にした上で、その情報に対する話し手の受け入れの態度を表しているため、そういった面において消極的である。同じく、推論表現も伝聞表現も話し手による情報伝達が情報共有の確保手段であることに変わりないが、両者の根本的違いは話し手が情報の生成に積極的に関わるか否かにあると推定する。しかしながら、伝聞表現が情報の生成に全く関わらないわけではなく、他から入手した情報であっても推量表現「ようだ」を用いて話し手の自己責任のもとで聞き手に伝える場合もあれば、「らしい」を用いて不確かな情報であるというニュアンスで伝える場合もある。このことから、証拠や情報を再構築する主体としての話し手の表現意図が伝聞表現の選択に関わっていると言える。

さらに、伝聞のコミュニケーションの場には、必ず聞き手が存在する。そのため、コミュニケーションの場における話し手の表現意図の表出に影響を与えるものとして、聞き手の存在も重要である。また逆に、それぞれの伝聞表現の持つ情報受け入れ時の話し手の表現意図、心的態度には違いが見られ、それにより話し手が用いる情報が聞き手の情報判断に及ぼ

33 第4章に入るにあたり、本稿で対象としている各表現の用語を次の通り整理して置く。
本稿においては伝聞、伝聞用法、伝聞表現という用語を用いているが、論旨を進めるうえでの便宜を図るため、「(する)そうだ」、「とのことだ」のように伝聞以外の意味用法がないものには、伝聞「そうだ」・伝聞「とのことだ」と表記している。また、「ようだ」、「という」などに関しては、「ようだ」に思考作用が認められるため推量という用語ではなく推論という用語を用い、「という」に関しては引用と関わっていることから、伝聞に用いられる「ようだ」、「という」を推論・引用と区別をつけるために、伝聞用法「ようだ」・伝聞用法「という」と表記する。さらに特定の個別表現ではなく、複数の表現を指す場合は伝聞表現と表記することにする。

す影響にも差がある。そのため、伝聞表現はコミュニケーションの場における情報と話し手、聞き手の 3 要素の関係の中で理解されるべきである。

まず、4.1 では日本語伝聞表現「そうだ、ようだ、らしい」が推論から由来していることから、推論「そうだ、ようだ、らしい」の意味用法を考察した後、4.2 でこれらが伝聞として用いられた際にはどのような意味に変わるのかを確認する。4.3 では引用と助詞由来の複合助動詞伝聞表現を、4.4 では連体修飾形伝聞表現を考察する。そして 4.5 で第 4 章における考察の纏めとして、「推論表現から伝聞表現までの情報とモダリティ」を提示する。そのため、各表現の先行研究を概観し、話し手の表現意図を①情報共有の確保(自己情報か他者情報か)、②証拠の入手経路、③話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)の 4 点から情報と話し手、聞き手の 3 要素の関係を確認していく。

４．１推論「そうだ」「ようだ」「らしい」の証拠とモダリティ

寺村(1991:223,261)では二次的ムードの助動詞には二種類があるとし、以下の通りに定めた。

概言のムードを表すもの[34]・・・ダロウ、マイ、(降り)ソウダ、ヨウダ、ラシイ、
(降る)ソウダ
説明のムードを表すもの[35]・・・ハズダ、ワケダ、コトダ、トコロダ、モノダ、ノダ

一方で宮崎 他(2002:143)では、認識のモダリティを〈可能性・必然性〉と〈証拠性〉に２分類し、〈可能性・必然性〉には「かもしれない、にちがいない、はずだ」を、〈証拠性〉には「ようだ、みたいだ、らしい、(し)そうだ、(する)そうだ」を属させ、〈可能性・必然性〉と〈証拠性〉の対立の基本は、話し手の内的思考による認識であるか、外的状況の観察に基づい

34 寺村(1984:222)によると、「概言の助動詞」は、ある事態の真偽について、それを自分が直接見たり、経験したりしたのでないから確言はできないが、自分の過去の経験や現在もっている知識、情報から、概ねこうであろうと述べる表現であると述べられている。

35 寺村(1984:222)では「説明の助動詞」を、現に事実として聞き手が知っていることについて、その事態が生じた理由、原因とか、背景とか、あるいはある状況に照らしてみた場合の特別な意味、意義とかを、相手に説明しようとするものと述べている。

た認識であるか、ということにあると述べた。

本稿において、これまで現代以前の「そうだ」、「ようだ」、「らしい」を用いる際には先行研究に倣い、「推量」、「推量表現」という呼び方をしてきたが、本稿では話し手が証拠をもとに、それを聞き手に意味のある情報として伝えるまでの過程に話し手の思考が含まれると見ている。つまり証拠と周囲の状況とを結ぶ過程において認識的思考が認められることから、「そうだ」、「ようだ」、「らしい」に「推論」という概念が共通的[36]に働いていると見ているのである。また近来は「証拠性」という用語がこれら助動詞を束ねる用語として活発に用いられるようになった。「証拠性」とは、日本語記述文法研究会(2003:163)によると、「何らかの証拠に基づく認識を表す形式類」、益岡(2007:145)では「ある証拠に基づいて推定を行うもの」と述べられている。「証拠性」という用語以外にも仁田(2000:153)においては「徴候性判断：命題内容として描き取られた事態の成立が、存在している徴候や証拠から引き出され捉えられたもの」、三宅(2006:119)においては「実証的判断：命題が真であるための証拠が存在すると認識する」という用語が用いられ、呼び方こそ違っていても証拠の存在に重点を置き、証拠が認識と結び付けられていると捉えている点において共通している。本稿では、証拠性を認識のモダリティの一部分を成すものとし、証拠モダリティと名づけているが、その理由は、証拠というのは話し手の外的状況(証拠)による内的判断であり、話し手の表現意図の表し方に間接的に関わるものであると考えられるからである。

４．１．１推論「そうだ」の証拠とモダリティ

これまで、推論「そうだ」は感覚的証拠を直観的に捉えるとされていたため、推論「そうだ」に思考性はあまりないとされていた。この項では推論「そうだ」の特徴を証拠の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、聞き手との関係の中から確認する。

４．１．１．１推論「そうだ」の先行研究

日本語記述文法研究会(2003:171)によると、推論「そうだ」の基本的な意味は、話し手がその事柄を徴候との関連においてとらえていることを表すものであると述べられている。また、金昌奎(2013)は、「そうだ」は直観的判断、非思考的判断を表す推量表現としているが、呉(2014)は、「そうだ」は直観的で主観的、先入観の働いた推量、主観的状況把握による推量と述べている。

36「そうだ」が直観的判断に用いられることから「推論」の過程を経ることを認めにくいという見方もあり得るが、本稿では「そうだ」に思考作用が全く介入しないとは考えていないため、「そうだ」の「推論」の過程を認める立場である。

４．１．１．２推論「そうだ」の証拠の入手経路

上述したように、推論「そうだ」の情報共有の確保手段は話し手による情報伝達であるが、その情報は話し手により生成されたものである。ここでは、話し手はどのような経路で、何を証拠として情報を生成しているのかを確認する。

(1)a.「知れたらどうしよう。」と娘はいうとちょっと泣きそうな顔をした。

（高等学校教科書選）

b.（漁に出ている父と息子、大きい魚をみて父が息子に）

「ぬかるなよ。今日の相手はてごわそうだ。」（6 年生の教科書）

c. ふっと陽子は、胸がつまりそうだった。（6 年生の教科書）

d. 公園をみおろした。夏の真昼の公園はがらんとして、せみの声ばかり。外は

きょうも暑そうだなあなんて思っていると、うしろで中谷君が大声をだした。

（おめでとうがいっぱい）

e. そのような失敗にさえ、なんとか理屈をこじつけて、上手につくろい、ちゃんとした

ような理論を編み出し、苦肉の芝居なんかとくとくとやりそうだ。

（太宰治の女生徒）

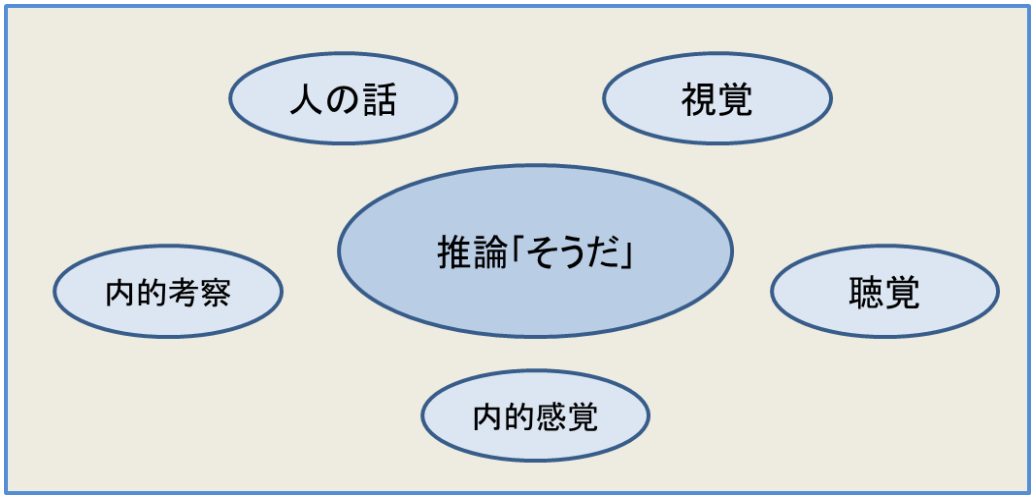
f.（人の話を聞き[37]）

「それなら大して害もなさそうだ。その手ごわい野蛮人どもの裏をかく作戦についちゃ、

ビルおじさんが手をかしてくれるだろうよ」（オ・ヘンリ傑作選）

以上の用例から推論「そうだ」の情報の出所、つまり何を証拠としているかを図式化してみると以下の〈図 5〉の通りである。

37 本稿では推論表現においての人の話は、他者の話を伝えるのではなく、目の前の相手の話を聞いて、それを証拠に判断することを言う。



＜図 5. 推論「そうだ」の証拠の入手経路＞

以上の用例(1)と<図 5>のように、推論「そうだ」は話し手が直接かつ感覚的に捉えた証拠に基づいている場合が多く、特に眼前の視覚的証拠による判断の言語化に用いられる場合が多いため、証拠となるものの気づきから言語化までの時間的距離が短いと思われる。さらに推論「そうだ」の判断から言語化までの直観性は、(1. a)のように命題の動的事態が今にも生起可能であると捉える場合にも多く用いられるが、推論「そうだ」のこのような動的事態に対する直観的生起可能性は、他の助動詞では表せない「そうだ」の特徴でもある[38]。それ以外にも「聴覚[39]」、あるいは(1. c)の「胸がつまりそうだった[40]」のような自分の内面的な感覚や(1. d, e)の周囲の状況把握による判断も推論「そうだ」の証拠になるが、この「状況把握」の過程において話し手の思考が見られる。(1. f)は人の話を聞いて、その話をもとに推論する場合であるが、このように相手の話を聞いてそれによる話し手の意見を言うまでの過程に、何らかの思考作用が関わると考えられるため、本稿では「そうだ」にも推論の力があると見做す。

４．１．１．３推論「そうだ」における話し手の心的態度を表す戦略

今回収集した用例から結論を先取りすると、推論「そうだ」の特徴は、「経験による直観的

38 (1. a)と同じように判断の直観性が認められる用例として以下の用例が挙げられる。
a. シャツのボタンがとれそうだ。
b. 雨が降りそうだ。

39 たとえば、雷の音や物音。

40 本稿では「そうだった」が単純に過去を意味しているのではなく、過去のある時点に起こった事態の存在に気づいた時点が、発話現在時より以前であるという時間相の観点から、話し手の情報と心理的距離を表すための方法として捉えている。つまり、話し手の心的態度を表す一つの戦略として、「そうだった」を用い、話し手と情報の間に心理的距離をおく効果があると見ているのである。これは「ようだった」「らしかった」に関しても同じ観点を保持する。

気づき・自己の内面的感覚による主観的判断・周囲の状況把握による思考性判断」が主な意味機能であると言える。用例(1)の「a.(娘は)泣きそうな顔をした」、「b.(大きい魚をみて)手ごわそうだ」は、娘の顔を見る、また大きい魚を見つけるなど直接証拠による直観的気づき、「c.(私は)胸がつまりそうだった」は自己の内面的感覚によるものであると言える。ただ、直観的とはいえ、「d.(公園をみおろし、外の状況を一つ一つ統合してみたら)きょうも暑そうだ」、「e.(相手の普段の性格から)とくとくとやりそうだ」は、周りの状況把握から結論にいたるまで話し手の思考性が全く介入していないとは言い切れない。さらに「f.それなら大した害はなさそうだ」は、相手から聞いた話を証拠として話し手の意見を述べている間接証拠の例であるが、思考に費やされた時間は短いながらも、証拠から結論にいたる間に話し手の思考の介入が認められる。ただしその思考性の程度は必ずしも強いものではない。

推論「そうだ」の特徴としては外的証拠を言語化するまでの時間が短く、また話し手自身の内面的感覚にも用いられることから、話し手は証拠をかなり確実なものとして認識していることが分かる。

推論「そうだ」により表される話し手の心的態度を表す戦略を確認するため、用例(1)の推論「そうだ」を「ようだ」に置き換えてみると次のようになる。

(2)a.＊[41]「知れたらどうしよう。」と娘はいうとちょっと泣くような顔をした。

b.(漁に出ている父と息子、大きい魚をみて父が息子に)
＊「ぬかるなよ。今日の相手はてごわいようだ。」

c.＊ふっと陽子は、胸がつまるようだった。

d.?[42]公園をみおろした。夏の真昼の公園はがらんとして、せみの声ばかり。外はきょうも暑いようだなあなんて思っていると、うしろで中谷君が大声をだした。

e.?そのような失敗にさえ、なんとか理屈をこじつけて、上手につくろい、ちゃんとしたような理論を編み出し、苦肉の芝居なんかとくとくとやるようだ。

f.?「それなら大して害もないようだ。その手ごわい野蛮人どもの裏をかく作戦についちゃ、ビルおじさんが手をかしてくれるだろうよ」

(2.a～b)は直観的気づきという「そうだ」の特徴が「ようだ」に引き継がれず非文になり、(2.c)は自己の内的感覚ではなくなるため「ようだ」に置き換えできない。(2.d)は「ようだ」に

41 文として成立できないということを意味する。

42 文としては成立つが、表現の置き換えによりもとの文と意味的違いが生じていることを意味する。

置き換えると思考の程度が高くなり、話し手の自己の目による観察といった外的証拠への依存度が低くなる。(2.e)は「そうだ」より「ようだ」に置き換えた方が思考性の程度が高くなることが分かる。このことから推論「そうだ」より「ようだ」の方がより高次の思考的判断による推論で、話し手の認識世界において内面化[43]された結果を言語化しているため、証拠から言語化に至るまでの時間も長く感じられる。(2.f)も「ようだ」に置き換えると、相手の話を聞いてすぐその話に対する話し手の意見をいうのではなく、話し手の認識領域内で内面化された考察の結果として提示しているように感じられる。

また羅聖榮(1992:362)では推量「そうだ」は命題の実現に対する予測を表すなど、命題は常に非過去に限られると述べているが、今回の調査で(1.c)のような「そうだった」形が収集できた。(1.c)の「そうだった」は話し手の表現意図により情報と話し手の心理的距離を表すものと思われ、時間的距離を用いて心理的距離を表していると考えている。

以上のように推論「そうだ」は「ようだ」に置き換えると、主に視覚による直観的判断(1.a,b)と話し手の内面的気づき(1.c)を表すものは文として成立しなくなる。また、周囲の状況把握による判断(1.d,e)に関しては、思考性が認められるものは「ようだ」に置き換えできるが、「そうだ」と「ようだ」の内面化の程度の違いにより、思考性の程度が高くなるため意味的違いが生じることが分かった。

４．１．１．４推論「そうだ」の情報が聞き手に及ぼす影響

推論「そうだ」は内・外部の直接的刺激を短時間で直観的に言語化するため、話し手にとっては証拠に対する信頼が高いと言える。そのため、推論判断が話し手の主観に強く影響されていることから、聞き手に対する配慮は感じられず、聞き手は情報の真偽判断に聞き手の介入可能性が低い。

以上のことから分かるように、推論「そうだ」は話し手の主観性が強い推論表現で、「経験による直観的気づき・自己の内的感覚による主観的判断・周囲の状況把握による思考性判断」が主な意味機能であるが、ただしその思考の程度は必ずしも強くない。

４．１．２推論「ようだ」の証拠とモダリティ

「ようだ」は感覚や観察による証拠を話し手の思考を通して言語化する推論・推量表現で、伝聞にも用いられるが、他にも「様態・比況・例示・婉曲」を表す際にも用いられる。しかし、

43 Deci & Ryan(1985:130)は内面化とは外発的動機づけから内発的動機づけに動機づけが変化する過程としている。

本稿の目的は広義の意味で推論表現と伝聞表現を結びつけ、伝聞表現の全体像を描くことであるため、「様態・比況・例示・婉曲」といった他の用法には触れず、推論「ようだ」のモダリティ、表現意図を情報の入手経路、証拠と話し手の心的態度を表す戦略、聞き手に及ぼす影響からみた特徴の中から確認する。

４．１．２．１推論「ようだ」の先行研究

柴田(1982:88-89)は「ようだ」、「らしい」について、証拠の直接・間接性と心的距離という観点から分析している。「ヨウダ」は話者との距離が近い事態について、それが実現・実在する確実度を直接的な根拠にもとづいて判断・推定するときに用い、「ラシイ」は話者との心理的距離が遠い事態について、それが実現・実在する間接的な根拠にもとづいて判断するときに用いると述べている。金昌奎(2013:30)は推量表現の「ようだ」について、体験・経験などによる感覚的判断、主・客観的判断、中ぐらいの確信的判断による推量を表すときに用いられるものとし、益岡(1991:120)は判断の根拠が直接的か間接的かを根拠に、判断の根拠が直接的な場合は「ようだ」が、「間接的」な場合は「らしい」が用いられると論じている。早津(1988:52)は事態を自己の領域の外側のものとしてとらえようとする場合には「らしい」が用いられ、自己の領域の内側のものとしてとらえようとする場合には「ようだ」が用いられるとし、これらを「“ひきはなし”の態度」、「“ひきよせ”の態度」と称している。

しかし三宅(2006:123)では「ようだ」、「らしい」は、証拠の存在を認識しているのであって、証拠から、あるいは証拠に基づいて命題を推し量ったり推論していることを表すものではないとし、その認識にいたるまでには、広い意味での「状況」の中に証拠を見出し、その証拠と命題とを結びつける過程が存在すると述べた。また吉田(1971:330,2010:278)は客観的な情勢からそのように思われるという推定の意を表すとしている。

４．１．２．２推論「ようだ」の証拠の入手経路

推論「ようだ」の話し手の情報共有の確保手段は話し手による情報伝達であるが、その情報は基本的に話し手により生成された情報である。ここでは推論「ようだ」は何を証拠としているのか、どのような経路で証拠を入手して情報を生成しているのかを確認する。

(3)a.(友達に会いに来たというおしゃべりな相手の話を聞き終わった警官が、)
「しかし、再会までの期間が、かなりながいようだ。きみが西部へ出かけてから、その友達から便りはあったのかね？」(オ・ヘンリ傑作選)
b.ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみたことがある。ところが清にも別

段の考えもなかったようだ。　　（坊ちゃん）

c.（部屋の外の音に気づいて）

あんまりいいところではなさそうよ。うわさをすればかげと言いますが、二人帰って来たようよ。（愛と死）

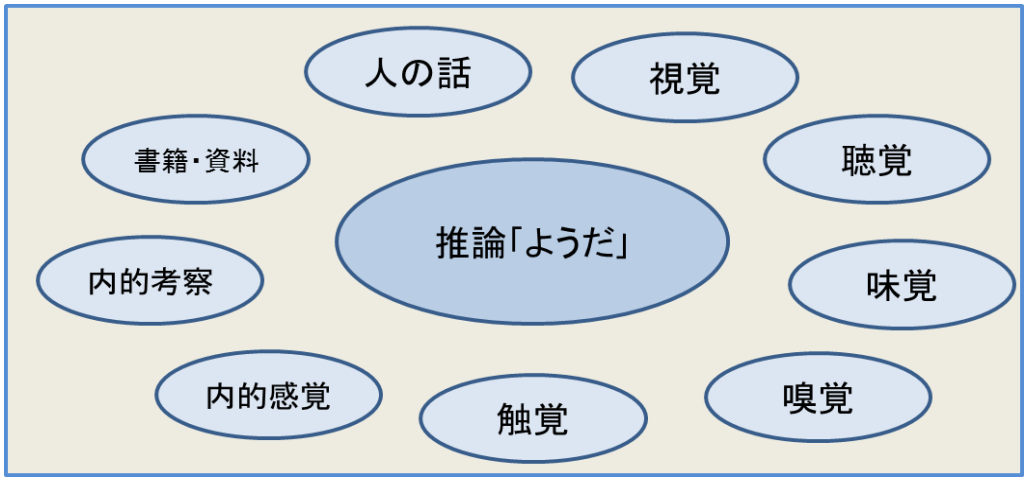
d.（意識を失って病院のベットに横になっている息子の笑っているような顔を手で指し、）

大丈夫さ、顔を見ろよ。笑っている。上機嫌だったようだ。　　（青春漫画）

e. いまから夫婦げんかの予習は早いようですね。（愛と死）

f. キツネは、かなり好奇心をそそられたようだ。（小さな王子）

推論「そうだ」が「視覚・聴覚・内的感覚・内的考察・人の話」を証拠としていることに比べ、「ようだ」は「そうだ」のそれに、「味覚・触覚・嗅覚・書籍などの資料」が加わることから、以下の〈図6〉のように体験・経験で得られるほぼ全ての証拠が「ようだ」の証拠の対象になる。



＜図 6.　推論「ようだ」の証拠の入手経路＞

直接経験を表す「味覚」においても思考が見られるが、たとえば「ケーキを食べた」と仮定してみると、そのケーキが美味しかったならばすぐに「おいしい」と反応し、逆に美味しくなかったならば「おいしくない」と反応する。しかし、口のなかに入れたケーキの味が「おいしい・おいしくない」とすぐ反応できない、ケーキの味についておいしいというべきかおいしくないというべきか迷った場合は、「おいしいようだ・おいしくないようだ」が認められる[44]

44　もちろん「ようだ」の判断の証拠が間接的で、「おいしいようだ」が伝聞になる可能性もあるが、それは4.2.2伝聞用法「ようだ」で扱うことにする。

ことから、「内的思考」が「ようだ」の特徴であり、「ようだ」は直接入手した証拠が、話し手の認識世界で内面化された高次の思考のもとで言語化されると言える。

４．１．２．３推論「ようだ」の話し手の認識態度を表す戦略

用例(3)の(3. a, b)は、相手の話を聞いてその話を証拠に「a. 再会までの期間が、かなりながいようだ」、「b. 清にも別段の考えもなかったようだ」と判断する主観的判断で、(3. c)は外からの足音又は人声に気づき「c. 二人帰って来たようよ」と判断している主観的判断である。(3. d)は意識を失い、病院のベットに横になっていながらも笑っているような息子の顔や、事故が起こる直前の嬉しそうな電話の声を証拠に推し量って「d. 上機嫌だったようだ」と判断したもので、(3. e)も話し手の完全な主観的判断で「夫婦げんかの予習は早い」と自分の内的思考を言語化している。(3. f)は普段と違うキツネの言動の観察から、「f. かなり好奇心をそそられたようだ」と推論判断しているため、これらは体験・経験的証拠による判断と言える。

以上から「ようだ」は直接、見たり聞いたり話されたりしたことを証拠に考察した主観的判断であり、話し手の用いるコトガラが、話し手の認識の産物である証拠として「ようだ」を用いていると言える。即ち、話し手は証拠を「そうだ」のように直観的に受け入れ言語化するのではなく、証拠が話し手の認識の中で内面化された話し手の思考、話し手の主観によるものとして話し手の責任のもとで提示しているのである。

用例(3)の「ようだ」を以下のように「らしい」に置き換えると、「ようだ」が「らしい」より内面化された高次の思考による判断であることがさらにはっきり分かる。

(4)(友達に会いに来たというおしゃべりな相手の話を聞き終わった警官が、)

a.?「しかし、再会までの期間が、かなりながいらしい。きみが西部へ出かけてから、その友達から便りはあったのかね？」

b.?ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみたことがある。ところが清にも別段の考えもなかったらしい。

c.(部屋の外の音に気づいて)
?あんまりいいところではなさそうよ。うわさをすればかげと言いますが、二人帰って来たらしい。

d.(意識を失って病院のベットに横になっている息子の笑っているような顔を手で指し、)
?大丈夫さ、顔を見ろよ。笑っている。上機嫌だったらしい。

e.?いまから夫婦げんかの予習は早いらしいですね。

f.?キツネは、かなり好奇心をそそられたらしい。

以上のように「ようだ」を「らしい」に置き換えると、目の前の人の話を聞いたりしたことに対する推論の結果ではなくなる場合がある。(4.a～c)は直接聞いたことによる推論であるが、これらを「らしい」に置き換えると距離感が感じられ、(4.d)は直接見たことによる主観的推論判断だったものが他から聞かされた伝聞表現になり、(4.e)も同じく話し手の主観的推論判断から伝聞になるため、直接的経験・体験による主観性の程度は「ようだ」が高く、より話し手の認識世界において内面化された表現であると言える。また(4.b)の相手から聞いた話による思考的判断や、(4.f)のキツネの行動の観察からの主観的推論判断は、「らしい」に置き換えることはできるものの話し手の主観性が弱まってしまう。また「らしい」が(4.c,f)のような話し手の経験・体験による主観的判断に用いられないことはないが、「ようだ」がより居座りのいい、話し手の認識世界で内面化されたコトガラを言語化している主観的推論判断であると思われる[45]。さらに聞き手の受け入れ態勢から考えると、聞き手は(4.b,d,e)を「伝聞」として受け取る可能性が高いことからも、「ようだ」より「らしい」が証拠への依存度が高い客観的判断であることが分かる。

このことから、「ようだ」が「らしい」より①証拠が話し手の認識世界で内面化され、②証拠を話し手の責任のもとで言語化している主観的推論判断になる。

４．１．２．４推論「ようだ」の情報が聞き手に及ぼす影響

推論「ようだ」の情報と話し手の関係は、外的証拠による判断であってもそれが話し手の認識世界で内面化され、話し手の自己責任のもとで言語化されているため、話し手と証拠との間の距離は密接で信頼度も高い。同じく、外的証拠が話し手の認識世界で内面化される過程で、話し手と証拠の関係のみならず聞き手と証拠との関係も考慮される(詳細は 4.2.2.4 参照)。しかし、聞き手の立場から考えると、聞き手は「ようだ」により言語化された情報を話し手の主観性の高い判断として受け入れるため、聞き手は情報判断に介入できるが、その程度は低い。

以上の考察から推論「ようだ」と「らしい」には情報の内面化の程度、情報の入手経路は何

45 以下はコーパスから収集した用例であるが、以下のようにaの「らしい」は打消しができるが、bの「ようだ」は打消しができない。これは「ようだ」を用いる際の話し手は主観的判断としてコトガラを自分の領域に入れているため、自分の主観的判断を打ち消すことができないからだと思われる。このことからも「ようだ」が「らしい」より主観的推論表現であることが確認できる。

a.多分、ここでも彼等は部族語であるグルン語を交じえているらしいが、本当のところは分からない。

b.*多分、ここでも彼等は部族語であるグルン語を交じえているようだが、本当のところは分からない。

か、それは話し手にとって主観的か客観的かという違いがあると言える。「ようだ」を用いる際の話し手は現実世界の証拠を身近なものとして受け入れ、話し手の認識世界で内面化し、話し手の責任のもとで言語化しているということが、他と違う「ようだ」の特徴と言える。

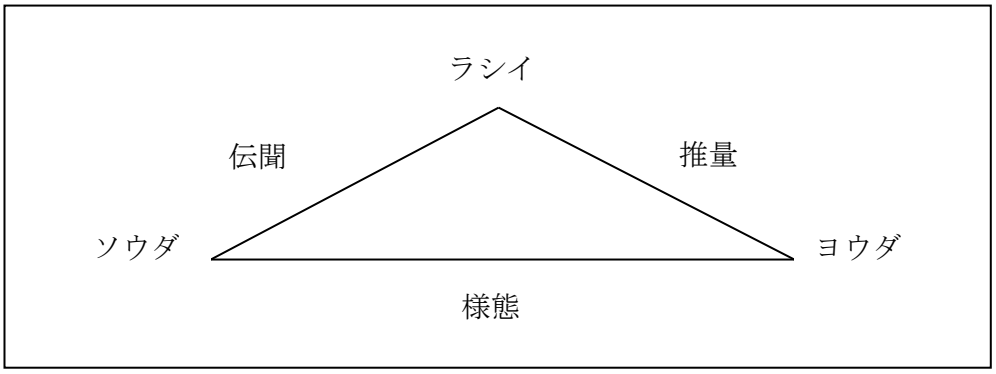
４．１．３推論「らしい」の証拠とモダリティ

諸学者において近来「らしい」が多用されていることが指摘されている。恐らく推論・推量表現であった「らしい」が伝聞に多用されるようになったこともその一つの原因であると思われる。このことから、推論「らしい」の特徴である証拠を不確かなものとして提示する話し手の表現意図が、近来の社会変化により責任やトラブルを避けたい現代人の心理とマッチングしていると考えられる。

４．１．３．１推論「らしい」の先行研究

寺村(1991:249)はラシイには、話し手が自ら見聞きしたことをよりどころに、それを何ごとかの徴候だろうとみなして推定する場合(～シソウダに近接)と、他からの情報をよりどころに推定する場合(伝聞のソウダに近接)とがあるとし、そのような二面性、あいまい性がラシイの本性というほうが当たっているのかもしれないと述べている。さらにはヨウダとラシイは話し手が自分の観察をもとに(いわば自分の責任で)推測しているのか、何らかの他からの情報をもとにいっているのかが聞き手にはよく分らないあいまいな表現である点が共通していると述べた。

澤西(2002:36-41)は伝聞の「そうだ」は話し手が確定的と判断したコトガラに直截に積極的に伝達できる表現であり、「だろう」と同じように上記の意味でいたって主観的な伝聞表現であるとした。「らしい」は基本的には「そうだ」よりも多用されているとの印象さえあるが、本来の推量の機能が、コトガラ(命題)に対する話し手の距離感を示すことになっていると思われると述べた。中畠(1992:15)は以下のような図で伝聞と推量表現の共通性を示している。



中畠によると、ラシイは伝聞と推量両方の意味を表すことが可能であり、そのどちらであるか判然としない場合が多いとした。その理由としてラシイの判断の根拠が、言語情報であっても、それ以外の情報(目やその他の感覚器官で捉えた現状把握)であってもよいという点を挙げている。さらに伝聞と推量について判断の根拠が言語情報か言語外の情報かという違いはあるが、はっきりと境界を画すことのできない近似性(特にラシイの場合)を有していると述べた。金昌奎(2013:31)は、推量助動詞「らしい」を根拠的判断、確信的判断、客観的判断による推量を表すと述べた。

更に金成燁(2013:74)では「らしい」形式はそれが用いられている文の「事態内容の質的違い」により、話し手情報度 0%の事態内容で情報再構築の余地もない「引用」と、事態内容の捉え方から話し手が情報を再構築した「伝聞+推し量り」、そして話し手による直接情報構築に移行している場合、推し量り性の強い「らしい」の用法として用いられていると論じている。

４．１．３．２推論「らしい」の証拠の入手経路

推論「らしい」の情報共有の確保手段は話し手による情報伝達である。推論「らしい」も他の推論表現と同じように、何らかの証拠をもとに、話し手が積極的に情報生成するのが基本であるが、それを話し手と距離を置いて伝えるのが他の推論表現と違う推論「らしい」の特徴である。まずは用例を用いて「らしい」の証拠の入手経路を確認して見たい。

(5)a. 考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。(坊ちゃん)

b. 判然とした事は言わないから、見当たりがつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと言うのらしい。 (坊ちゃん)

c. 啓太郎の談話から想像すると、貝島が我ながら老練な処置だと思って己惚れていた餓鬼大将操縦策は、半ば成功したにも拘らず、いつの間にかその弊害も多くなっているらしかった。(小さな王国)

d. 沼倉にどれほど強い腕力や肝っ玉があるにもせよ、彼とてもやっぱり同年配の鼻ったらしに過ぎないのに、「先生はこう云った」というよりも、「沼倉さんがこう云った」と云う方が、彼らの胸には遥かに恐ろしくピリッと響くらしい。(小さな王国)

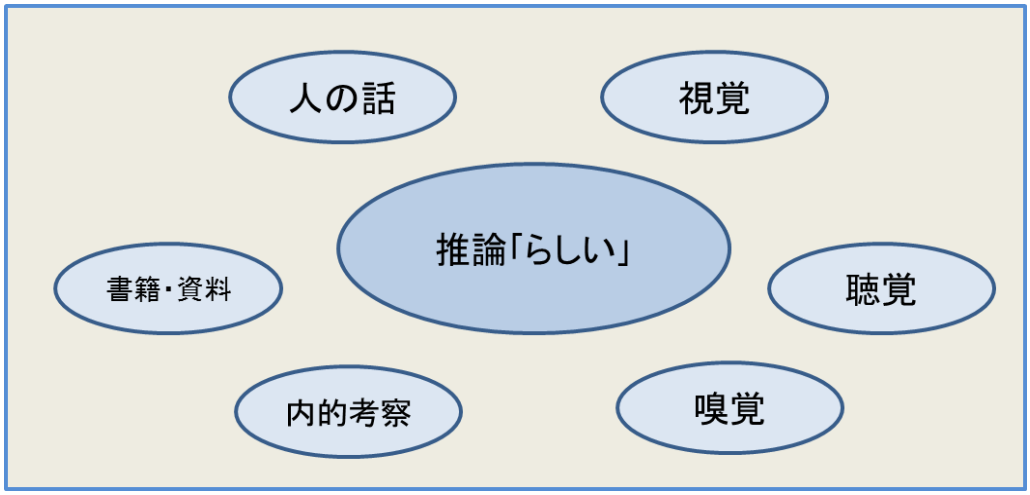
e. わたしは知らない。働いたらしくもある。しかしその結果は働いたことにならず、かえって自分をその女にりっぱに見せることにやくだてたらしい。(死と愛)

f. そっと頭をもたげ、息をのんで耳を澄ました。すぐ足元で、水が流れているらしい。

（中学校の教科書）

g. 殊に彼らは、誰よりも沼倉一人を甚だしく恐れているらしい。（小さな王国）

用例(5)の如く、推論「らしい」は話し手の内的考察にも用いられ、証拠の存在を暗示し、それによる話し手の考察を述べる時にも用いられる。推論〈らしい〉の情報の入手経路を纏めると以下の〈図7〉のようになる。



＜図 7. 推論「らしい」の証拠の入手経路＞

先行研究においても、「らしい」は「ようだ」と一緒に研究される場合が多いが、「ようだ」が話し手の「味覚」「触覚」「内的感覚」にも用いられたことに比べ、推論「らしい」はこれらには用いられず、「ようだ」より外的証拠に依存している傾向がある。

４．１．３．３推論「らしい」の話し手の心的態度を表す戦略

用例(5)の「らしい」は、「a. 考えてみると」、「b. 判然とした事は言わないから」、「c. 啓太郎の談話から想像すると」をみると分かるように、話者の主観的推論による判断に用いられていることが容易に推察できる。これらは判断の主体は話し手であるが、証拠の存在を表に出し情報伝達においての負担を軽減するために、はっきりいい切らず不確かに用いている。さらに多くの先行研究において、過去はモダリティ領域に入らないと述べられているが、(5. c)の「いつの間にかその弊害も多くなっているらしかった」のように「らしかった」が用いられることもある。このように「らしかった」を用いることで、話し手は、考察の結果を発話時現在と時間的距離を置いて提示することにより、心理的距離をも示すことができると考える。また、(5. d)のように(先生が)生徒たちの行動を観察した結果、「「沼倉さんがこう云った」と云う方が、彼らの胸には遥かに恐ろしくピリッと響く」といった結果に辿り着いたこと

から、結果導出における時間的長さや考察の程度は推論「そうだ」より長く、証拠への依存度は「ようだ」より高く感じられる(4.2.3 参照)。さらに従来の研究において「らしい」は、話し手自身のことには用いられないとされているが、(5.e)のように「らしい」を話し手自身のことに用いている用例があった。(5.e)は自己の内面的省察ともいえる用例であるが、このように自分のことであってもそれを他人事のように推論として表現することで現在の自分と距離を置くことができる。(5.f)は「水の流れる音」という聴覚的証拠の存在、(5.g)は息子から聞いた「彼ら」についての話を証拠に判断している。

推論「らしい」を用いる際の話し手の心的態度を確認するために、(5)の用例を推論「そうだ」に置き換えると以下の通りになる。

(6)a.*考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じていそうだ。

b.*判然とした事は言わないから、見当たりがつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと言いそうだ。

c.*啓太郎の談話から想像すると、貝島が我ながら老練な処置だと思って己惚れていた餓鬼大将操縦策は、半ば成功したにも拘らず、いつの間にかその弊害も多くなっていそうだった。

d.*沼倉にどれほど強い腕力や肝っ玉があるにもせよ、彼とてもやっぱり同年配の鼻ったらしに過ぎないのに、「先生はこう云った」というよりも、「沼倉さんがこう云った」と云う方が、彼らの胸には遥かに恐ろしくピリッと響きそうだ。

e.*わたしは知らない。働いたらしくもある。しかしその結果は働いたことにならず、かえって自分をその女にりっぱに見せることにやくだてそうだ。

f.*そっと頭をもたげ、息をのんで耳を澄ました。すぐ足元で、水が流れていそうだ。

g.*殊に彼らは、誰よりも沼倉一人を甚だしく恐れていそうだ。

以上のように、「らしい」に込められた話し手の主観的認識態度と直観的判断態度が、推論「そうだ」のそれより低い反面、 話し手の思考・考察の程度・証拠への依存度は推論「そうだ」より高いため、置き換えできず、(6.a～g)全てが文として成立しないことが分かる。次に、用例(5)の「らしい」を「ようだ」に置き換えてみる。

(7)a.考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているようだ。

b. *判然とした事は言わないから、見当たりがつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと言うようだ。

c. 啓太郎の談話から想像すると、貝島が我ながら老練な処置だと思って己惚れていた餓鬼大将操縦策は、半ば成功したにも拘らず、いつの間にかその弊害も多くなっているようだった。

d. *沼倉にどれほど強い腕力や肝っ玉があるにもせよ、彼としてもやっぱり同年配の鼻ったらしに過ぎないのに、「先生はこう云った」というよりも、「沼倉さんがこう云った」と云う方が、彼らの胸には遥かに恐ろしくピリッと響くようだ。

e. わたしは知らない。働いたらしくもある。しかしその結果は働いたことにならず、かえって自分をその女にりっぱに見せることにやくだてたようだ。

f. そっと頭をもたげ、息をのんで耳を澄ました。すぐ足元で、水が流れているようだ。

g. 殊に彼らは、誰よりも沼倉一人を甚だしく恐れているようだ。

以上のように「らしい」を「ようだ」に置き換えると、「ようだ」は人の話という客観的証拠も話し手の認識世界で内面化され、話し手の自己責任のもとで言語化しているため、(7. b, d)のように明らかに人から言われたことによる推論の場合は、置き換えできない場合もある。しかし、そのほかの用例は「ようだ」と「らしい」が、「視覚・聴覚・内的考察・書籍など資料・人の話」による証拠を言語化しているという面で共通しているため、置き換え可能である一方で、話し手の主観的判断性が強くなっていると考えられる。そのため、話し手の内的考察に「らしい」が用いられた(5. e)は(7. e)のように、「ようだ」に置き換えた方が却って居座りがいいように感じられる。よって、発話に伴う判断の責任、証拠の内面化の程度は「ようだ」より「らしい」の方が低いと言えるだろう。以上のことから、「らしい」が「ようだ」より、人から言われたことや書籍など資料による情報を言語化するのに適していると判断できる。さらに言うと、「らしい」により用いられたコトガラが話し手によるものなのか、それとも何かの証拠によるものなのかさえはっきりしないものの、証拠の存在を暗示しているという点で、「ようだ」より客観的判断であると言える。

４．１．３．４推論「らしい」の情報が聞き手に及ぼす影響

推論「らしい」の話し手と証拠との距離は「ようだ」より遠い。しかし話し手は、証拠を不確かなものとして提示することで、証拠と聞き手の関係を考慮に入れることができる。つまり話し手の用いる情報が聞き手と関りがある情報である場合、話し手はそれが確かな情報であっても、よく知らないこと・不確かなこととして提示することで、聞き手に配慮すること

ができるということである。しかし、聞き手の立場から考えると、推論「らしい」に含まれる発話に伴う判断の責任、証拠の内面化の程度の低さ、また「らしい」が証拠を不確か・曖昧なものとして提示していることから、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。

上記を纏めると、推論「らしい」は外的証拠による考察、内面的考察による思考的判断にも用いられるが、証拠の存在を暗示していることから、話し手の証拠への依存度は「ようだ」より高い客観的判断である。そのため、話し手の証拠の真偽判断の主観性は「ようだ」より低くなり、従って話し手の情報再構築の程度も「ようだ」より低いと言える。

上記を踏まえて推論「らしい」の特徴を纏めると、以下のようになる。

４．１．４推論「そうだ」「ようだ」「らしい」の証拠とモダリティの関係

これまで推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」の個別用法について確認したが、ここではこれら推論助動詞における情報共有の確保手段と証拠の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響をもとに、推論表現と伝聞表現の関係について考えてみたい。

推論助動詞「そうだ」、「ようだ」、「らしい」を纏めてみると、これらの助動詞の情報共有の確保手段は話し手による情報伝達であるが、その情報というのは、証拠をもとに話し手が積極的に情報生成したものである。

推論「そうだ」は「視覚・聴覚・内的感覚・内的考察・人の話」といった主に直接証拠を直観的に言語化するが、判断が瞬間的に起こるため話し手の主観性は強いと言える。「ようだ」は「視覚・聴覚・味覚・嗅覚・内的感覚・内的考察・書籍など資料・人の話」といった証拠を、話し手の思考を通して内面化して言語化するため、主観的判断に用いられるが証拠への依存度は「そうだ」よりは高い。推論「らしい」も、「視覚・聴覚・内的考察・書籍など資料・人の話」による証拠を言語化し、主観的判断にも用いられるが、「ようだ」との置き換えから、証拠の内面化の程度は「ようだ」より低く、証拠に対する依存度は「ようだ」より高いことが分かる。同じく、証拠に対する依存度が他の推論表現より高いため、証拠判断の信頼度の側面から考えると、話し手にとっては証拠の存在を意識している客観的判断になるが、聞き手にとっては証拠の存在は予想できても、それが話し手にとっても不確かなものとして提示されることから、聞き手の証拠へ信頼度は低いと考える。同じく、「らしい」は証拠に依存しているという点で、「ようだ」より話し手の情報再構築は低く感じられる。以上を纏めると、以下の〈表 5〉の通りである。

＜表 5. 推論「そうだ」「ようだ」「らしい」の話し手の表現意図＞

証拠性	特　　徴	証拠依存	話者関与
「らしい」	視覚・聴覚・内的考察・外的証拠による考察・資料など文字化されたもの・人の話による思考的判断に用いられる。また何らかの証拠の存在を暗示する客観的判断にも用いられるが、証拠を不確かなものとして提示する。	高 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 低	低 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 高
「ようだ」	視覚・聴覚・味覚・嗅覚・内的感覚・内的考察・資料など文字化されたもの・人の話による証拠を話し手の認識世界において内面化し、自己判断のもとで言語化しつつ、主観的判断・思考的判断を加える。		
「そうだ」	視覚・聴覚・内的感覚・内的考察・人の話による直観的気づきを表しているため、証拠の気づきから言語化まで時間的に短く、自己の内的感覚による主観的判断・周囲の状況把握による思考性判断に用いられる。		

４．２伝聞「そうだ」「ようだ」「らしい」の情報とモダリティ

これまで確認した通り「そうだ」、「ようだ」、「らしい」はもともと様態・推論表現であったものが、伝聞に機能分化されたり、伝聞に用いられるようになった。この節では伝聞に用いられる「そうだ」、「ようだ」、「らしい」はもとの推論とどのような違いがあるのかを確認しつつ、これらそれぞれの表現に含まれる話し手のモダリティ、表現意図はどのように違うのかを確認したい。

４．２．１伝聞「そうだ」の情報とモダリティ

第 3 章で確認したように、「そうだ」は近世前期まで主に様態・推量表現として用いられ、「終止形＋そうだ」の形で伝聞として用いられるようになったのは、近世後期に入ってからである。ここではまず、現代日本語伝聞表現「そうだ」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞「そうだ」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．２．１．１伝聞「そうだ」の先行研究

先述した通り、推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」における話し手の判断というのは、

何かの証拠を見たり聞いたり感じたことによる主観的判断であるため、話し手は命題内容の生成に積極的に関与し、能動的に命題内容を形成することができる。その反面、伝聞は情報の内容を他から入手したもの・事実として認識した上で、その情報に対する話し手の伝達態度のみを表しているため、情報生成の面からいうと消極的である。しかしながら、他から入手した情報であっても、推論「ようだ」を用いて話し手の自己責任のもとで聞き手に伝える場合もあれば、「らしい」を用いて証拠の存在を暗示しながらも、不確かな情報であるといったニュアンスで伝える場合もある。このことから、証拠や情報をコントロールする主体として、コミュニケーションの場における話し手の表現意図に対する理解が必要であると考える。

宮崎 他(2002:160)では典型的な伝聞表現として「(する)そうだ」を取上げ、「(する)そうだ」は、情報伝達に際して、その情報が他者から取り入れたものであることを明示するために使用される形式であると述べた。また、伝聞とは、情報を「取り次ぐ」ことであると言われているが、「(する)そうだ」や伝聞用法の「らしい」は、情報の受け渡しをすると言うより、話し手が「どのようなことを聞いて知っているか」を伝えるというのが、基本的な機能ではないかと述べた。寺村(1984:258)では伝聞「ソウダ」は自分が聞いたこととして、それを現在、相手に価値ある情報として伝えようとするものであるが、その「内容」というのは、単にある状況から話し手が推測したことではなくて、誰かの言語表現によって知り得た内容であるという点で「ラシイ」と区別されると述べられている。

４．２．１．２伝聞「そうだ」の情報の入手経路

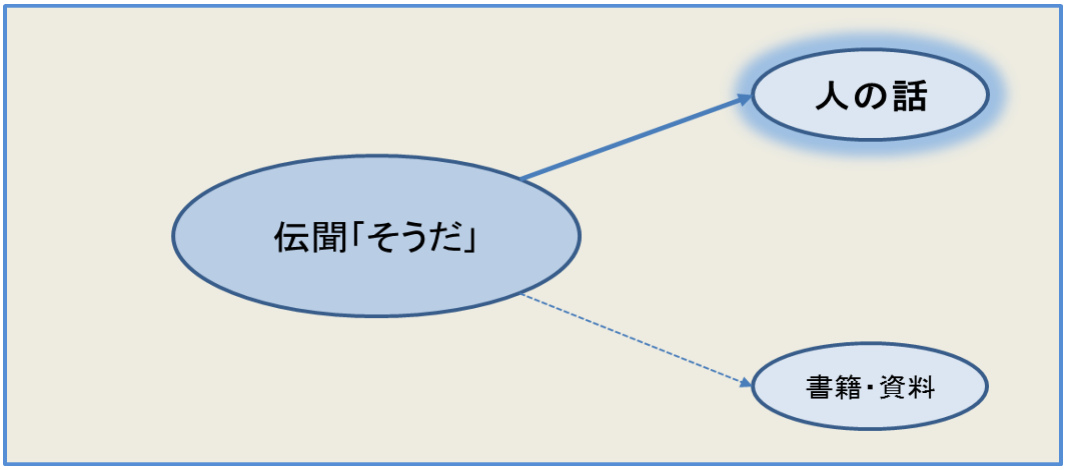
上述したように伝聞・伝聞用法として用いられる表現は他から得た情報を伝えているため、情報生成の面においては消極的で、他から入手した情報を伝える際の話し手の伝達態度が重要である。ここでは、伝聞「そうだ」の情報の入手経路を確認するが、伝聞「そうだ」は推論「そうだ」から機能分化されるとき、「伝聞」という特殊な機能のみ引き継いでいるため、「視覚・聴覚・内的考察」のような感覚による証拠には用いることができない。

(8)a. あとで聞いたらこの男が一番生徒に人望があるのだそうだ。(坊ちゃん)
b. 赤シャツの言うところによると船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行って、宮崎からまた一日車へ乗らなくっては着けないそうだ。(坊ちゃん)
c. 三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。(坊ちゃん)
d. レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えたことがあるそうだ。(吾輩は猫である)
e. しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。

（吾輩は猫である）

f. そして昔はその辺には熊がごちゃごちゃいたそうだ。（セロ弾きゴージュ）

用例(8)から伝聞「そうだ」の情報の入手経路を纏めると〈図8〉のようになる。



＜図 8. 伝聞「そうだ」の情報の入手経路＞

以上のように今回の調査の限り、伝聞「そうだ」で用いられる情報の入手経路は、書籍など読み物による証拠よりメディアや人の話による音声化された情報が殆んどであった[46]。

４．２．１．３伝聞「そうだ」の情報源とテンス

以下の用例をみる限り、伝聞「そうだ」に情報源が必ず明示される必要はない。

(9) a. あとで聞いたらこの男が一番生徒に人望があるのだそうだ。
b. 赤シャツの言うところによると船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行って、宮崎からまた一日車へ乗らなくっては着けないそうだ。
c. 三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。
d. レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えたことがあるそうだ。
e. 天子は知らん顔をしてやはり二本指でじゃがいもを皿へとったそうだ。
f. そして昔はその辺には熊がごちゃごちゃいたそうだ。

46 〈図8〉から細い点線と太い直線の違いは、点線より直線の方が多用されるという意味である。以下同様に表記する。

(9.a)は情報源が誰か明示されず、文脈からも情報源が確認できない用例で、(9.b,c)は情報源が明示されている用例であり、(9.d～f)は言い伝えの機能をしている。今回収集した用例のなかでは、このように昔話や言い伝えに用いられる「そうだ」もあったが、この場合は情報源が明示されない場合が多い。伝聞「そうだ」は情報を肯定的に受け入れており、昔話や言い伝え、諺においては話し手の認識世界の中ですでに一つの知識として位置づけられているため、情報源が提示されなくてもよいと考えられる。

また伝聞「そうだ」の場合は「って」と違い、聞き手(B)は話し手(A)に聞いたことを話し手(A)にそのまま返す際には、「そうだ」を用いることはできないとされているが、今回の調査で幾つか用例が現れた。しかし、これは手紙による遣り取りであるため違和感なく用いられていると推察される。

(相手に最後の晩餐をみた、君には見せられないが君の写真には最後の晩餐の絵をみせたという手紙をもらい、)

(9)g.『最後の晩餐』ごらんになったのですってね。ほんとうにそんなにすばらしい絵なの。
私も見たかったわ。私の写真に見せてくださったそうでありがとう。　(愛と死)

さらに「そうだ」のテンスに関しては「そうだった」形は一つも確認できず、「そうだ」の形をとるのが普通である。伝聞「そうだ」という名称からも分かるように、伝聞のみに用いられることから、「そうだ」によって用いられる情報が他から入手した情報であることは容易に推察できる。さらに受け入れた情報をある程度確定的なものとして肯定的な姿勢で伝えているため、「そうだった」にして情報と距離を置く必要がない。要するに、敢えて「そうだった」と、情報と話し手の間に心理的距離を置く必要がないため、「そうだ」の形をとるのが普通であると思われる。

４．２．１．４伝聞「そうだ」の話し手の心的態度を表す戦略

伝聞「そうだ」は否定・過去の対象にならない上に、命令・疑問・勧誘・丁寧形は「そうだ」に前接できず、多くの場合文末に用いられる。用例(9)および以下の用例(10)をみると、伝聞「そうだ」は情報の内容には直接関わっていないため、そういった面で責任を問われることはない。しかし、話し手は情報をある程度確実なものとして受け入れており、情報を肯定的な姿勢で聞き手に伝えているという点で、話し手の心的態度を表す戦略が働いていると言える。

(10) a. また夫の家に帰らなければならないと思うと、いつまでも病気していたい気もするといっていたそうだ。　　（友情）

b. あの人はうちのお父さんとはちょうどお前たちのように小さいときからのお友たちだったそうだよ。　　（銀河鉄道の夜）

c. わたしたちに会って回っていたころのルロイ修道士は、身体じゅうが悪い腫瘍の巣になっていたそうだ。　　（中学校の教科書）

d. この病気の人は、動物の毛をすいこまないほうがよいのだそうだ。
（小学校 5 年生の教科書）

上記の用例(10)の「そうだ」を「らしい」に置き換えて、情報に対する話し手の心的態度を表す戦略を確認してみる。

(11) a. また夫の家に帰らなければならないと思うと、いつまでも病気していたい気もするといっていたらしい。

b. あの人はうちのお父さんとはちょうどお前たちのように小さいときからのお友たちだったらしいよ。

c. わたしたちに会って回っていたころのルロイ修道士は、身体じゅうが悪い腫瘍の巣になっていたらしい。

d. この病気の人は、動物の毛をすいこまないほうがよいらしい。

以上のように伝聞「そうだ」は主に他者の話による情報を言語化するのに対し、「らしい」は、他者の話以外にも視覚・聴覚・内的考察による推論を不確かなものとして言語化できるため、「そうだ」を「らしい」に置き換えると、伝聞「そうだ」の持っている情報に対する確信、肯定的姿勢が感じられず、推論「らしい」の特徴を引くことになる。そのため、情報を自信がない・不確かなものとして伝えることになる。このことから伝聞「そうだ」は、少なくとも「らしい」よりは情報を確かなものとして認識しており、ある程度確信を持って伝えていることが確認できる。

今度は用例(10)の「そうだ」を「という」に置き換えてみよう。ただし、伝聞用法「という」は主に書き言葉で用いられるのに対し、(12, b)は会話用例であるため、「といった」を用いることにする。

(12)a. また夫の家に帰らなければならないと思うと、いつまでも病気していたい気もするといっていたという。

b. あの人はうちのお父さんとはちょうどお前たちのように小さいときからのお友たちだったといったよ。

c. わたしたちに会って回っていたころのルロイ修道士は、身体じゅうが悪い腫瘍の巣になっていたという。

d. この病気の人は、動物の毛をすいこまないほうがよいのだという。

このように伝聞「そうだ」を「という」に置き換えると、話し手は情報と距離を置き、客観的立場から伝えることにより、情報に対する話し手の肯定的な伝達姿勢はほとんど感じられず、情報の真偽判断は聞き手に委ねられることになる。

４．２．１．５伝聞「そうだ」の情報が聞き手に及ぼす影響

伝聞「そうだ」の話し手の心的態度を表す戦略は、情報にある程度確信を持って肯定的な姿勢で聞き手に伝えることにある。だからこそ「そうだ」は終助詞「ね」をつけることで聞き手に同調を求めることはできても、直接疑問詞「か」を付け、情報内容に疑いを表すことはできない。また、「そうだ」の前文に命令・疑問・勧誘・丁寧形は入らず、話し手の認識世界においてこれらを削除しているため、「そうだ」を用いる際の話し手は情報内容の再構築に関わっていると言える。一方で聞き手の立場から考えると、話し手により用いられた情報は、ある程度信用するに値するゆえに、情報に対する聞き手の認識的関与は低くなり、情報の真偽判断に消極的になる。このことからも、伝聞「そうだ」は話し手寄りの伝聞表現であると言うことができる。

４．２．２伝聞用法「ようだ」の情報とモダリティ

先ほど 4.1.2 で推論「ようだ」は、主観性の高い推論表現であることを確認したが、ここでは伝聞に用いられる「ようだ」を伝聞用法「ようだ」と名づけ、伝聞用法「ようだ」をめぐる諸説について確認し、推論「ようだ」の特徴が伝聞用法「ようだ」にどのような影響を与えるのかを確認すると共に、伝聞用法「ようだ」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞用法「ようだ」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．２．２．１伝聞用法「ようだ」の先行研究

森田(1980:508,1989:1185)によると、手がかりとなる根拠が、他者から入ってきた情報(伝聞)である場合は、「らしい」であって「ようだ」は使えないとし、「ようだ」の伝聞性を否定している。一方、仁田(1992:9)では以下のような例は伝聞性の強い「ようだ」としている。

私が学者から聞いた話では[47]、地震の研究はかなり進んでいるようですが、まだ予知というところには、、、、。(仁田(1992:9)から)

上記の「ようだ」は、「学者から聞いた話では」と自分の入手した情報の出所を明かしていることから、伝聞とも見受けられる。また学者から聞いたいろいろな情報を思考を通して整理し、その結論として「地震の研究はかなり進んでいるようですが、、」と話しているようにも見受けられる。

４．２．２．２伝聞用法「ようだ」の情報の入手経路

推論「ようだ」は、「視覚・聴覚・味覚・内的感覚・内的考察・書籍など資料・人の話」による証拠が話し手の思考を通して内面化された情報を聞き手に伝達する。そのため、推論「ようだ」の情報共有の確保手段は、話し手が証拠をもとに推論した情報の伝達である。一方で伝聞用法「ようだ」は他者から入手した情報を伝達しているため、「書籍などの資料と人の話」のみを情報としており、その中でも以下の用例(13)のように主に書籍など読み物による情報を伝える場合が多い。

(13)a. チリメディアの報道によると、クラブ・ブルージュに所属する FW ニコラス・カスティージョ(21)の獲得に迫っているようだ。http://www.goal.com/jp/news(2015/1/26)
b. 新聞によると彼が自殺したようだ。http://tatoeba.org/eng/sentences/show/145168
c. この手紙は、投稿主によると、そんなに昔に用意したものではなかったようだ。投稿主が昨年、着物を干した時に封筒はなかったという。
(2014 年 12 月 22 日　読売新聞)
d. ポーラ文化研究所(東京)によると、明治時代に断髪が広がり、七三分けの髪形の男性も登場。その後、会社勤めをする男性の髪形として定着していったようだ。

47 下線は筆者によるもの。

（2013 年 9 月 18 日　読売新聞）

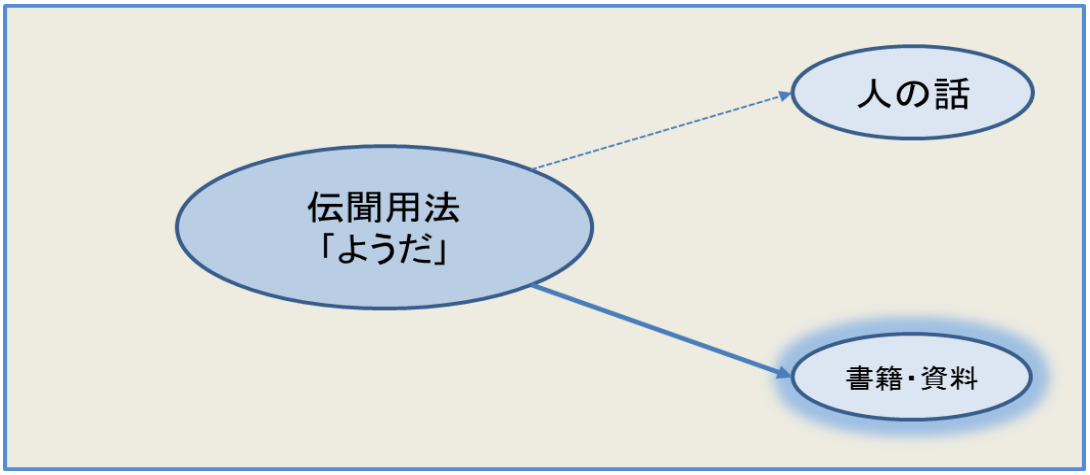
e. このほど発表された巨大ロボットは、古代の土器や土偶、仏像からイメージされたもので、マスコミ向けの資料によると、このロボットは“鷹の爪”史上最大の敵のボスキャラとされているようだ。　（2013 年 7 月 7 日　読売新聞）

f. 総務省の調査によると、スマホの世帯普及率は 2012 年末で 5 割。対応のサービスを充実させることで、テレビ視聴を促す工夫が続いているようだ。

（2013 年 6 月 26 日　読売新聞）

g. プロデューサーによると、福田監督の作品は「大人も子供も楽しめる」ものといい、映画祭に参加して監督、福くんとも、大人も子供も笑い、興奮できるエンターテインメント作としての手ごたえを感じたようだった。（2013 年 02 月 27 日　読売新聞）

用例(13)から伝聞用法「ようだ」の情報の入手経路を図式化すると、以下の<図9>の通りである。



＜図 9.　伝聞用法「ようだ」の情報の入手経路＞

４．２．２．３伝聞用法「ようだ」の情報源とテンス

用例(13)を用いて、伝聞用法「ようだ」の情報源とテンスを確認して見たい。

(14) a. チリメディアの報道によると、クラブ・ブルージュに所属する FW ニコラス・カスティージョ(21)の獲得に迫っているようだ。

b. 新聞によると彼が自殺したようだ。

c. この手紙は、投稿主によると、そんなに昔に用意したものではなかったようだ。投稿

主が昨年、着物を干した時に封筒はなかったという。

d. ポーラ文化研究所(東京)によると、明治時代に断髪が広がり、七三分けの髪形の男性も登場。その後、会社勤めをする男性の髪形として定着していったようだ。

e. このほど発表された巨大ロボットは、古代の土器や土偶、仏像からイメージされたもので、マスコミ向けの資料によると、このロボットは“鷹の爪”史上最大の敵のボスキャラとされているようだ。

f. 総務省の調査によると、スマホの世帯普及率は2012年末で5割。対応のサービスを充実させることで、テレビ視聴を促す工夫が続いているようだ。

g. プロデューサーによると、福田監督の作品は「大人も子供も楽しめる」ものといい、映画祭に参加して監督、福くんとも、大人も子供も笑い、興奮できるエンターテインメント作としての手ごたえを感じたようだった。

以上は、ネットや新聞記事から収集した用例である。(14.a～f)はいずれも報道、新聞、投稿、資料といった間接的な情報による伝聞である。さらに「a.チリメディアの報道によると」、「b.新聞によると」、「c.投稿主によると」などは、情報源をはっきり明かしている。先ほど確認したように、伝聞「そうだ」と伝聞用法「という」は情報源を明かさなくてもいいのだが、伝聞用法「ようだ」は情報源を明らかにすることで他からの情報であることを明示し、一応話し手と情報との間に距離を置くが、推論「ようだ」の持つ主観的判断の意味が強く、他から入手した情報に話し手の考えや思考が加わっているかのように提示する。つまり、他からの情報であっても話し手の認識世界において内面化されているため、話し手の主観が交えられ、情報の再構築が行われているものと考えられる。そのため、伝聞用法「ようだ」によって提示される情報の審議判断も話し手の自己判断に近く伝わるのである。

ただし、(14.g)は直接インタビューによるもので、「ようだった[48]」形を用いているが、伝聞「そうだ」が「そうだった」形をとらないのに比べ、伝聞用法「ようだ」は情報と距離を

48 羅聖榮(1996:21)によると、「花子は合格したようだった」の「ようだった」のような形は、話し手にとってそのように見えたという過去の出来事であって、それは事実となって客観化され、命題の構成要素の一部として機能しているとみている。しかし、本稿では推量表現の「そうだった」、「ようだった」、「らしかった」形を客観化された命題の一部というより、情報と話し手の心理的距離を表しているとみている。なぜならこれらはすでにテンスの外にあるため、単純に過去を意味しているのでもなく、 過去のある時点に起こった事態の存在に気づいた時点が、発話現在時より以前であるという時間相の観点から、話し手の情報と心理的距離を表すための方法として捉えている。つまり、話し手の心的態度を表す一つの戦略として、「そうだった」、「ようだった」、「らしかった」を用い、話し手と情報の間に心理的距離をおく効果があるとみているのである。

置くことができ、伝聞「そうだ」よりも話し手の主観が介入しやすいと見ていいだろう。

４．２．２．４伝聞用法「ようだ」の話し手の表現意図を表す戦略

4.2.2.3 の伝聞用法「ようだ」の情報源とテンスから伝聞用法「ようだ」は、他から得た情報に話し手の主観が加わり、情報を話し手の自己判断に近いものとして提示していることはすでに確認した。

今度は用例(14)の「ようだ」を「そうだ」に置き換え、話し手の表現意図を表す戦略を比較してみたい。

(15)a.??チリメディアの報道によると、クラブ・ブルージュに所属する FW ニコラス・カスティージョ(21)の獲得に迫っているそうだ。

b.??新聞によると彼が自殺したそうだ。

c.??この手紙は、投稿主によると、そんなに昔に用意したものではなかったそうだ。投稿主が昨年、着物を干した時に封筒はなかったという。

d.??ポーラ文化研究所(東京)によると、明治時代に断髪が広がり、七三分けの髪形の男性も登場。その後、会社勤めをする男性の髪形として定着していったそうだ。

e.このほど発表された巨大ロボットは、古代の土器や土偶、仏像からイメージされたもので、マスコミ向けの資料によると、このロボットは“鷹の爪”史上最大の敵のボスキャラとされているそうだ。

f.??総務省の調査によると、スマホの世帯普及率は 2012 年末で 5 割。対応のサービスを充実させることで、テレビ視聴を促す工夫が続いているそうだ。

g.*プロデューサーによると、福田監督の作品は「大人も子供も楽しめる」ものといい、映画祭に参加して監督、福くんとも、大人も子供も笑い、興奮できるエンターテインメント作としての手ごたえを感じたそうだった。

以上のように伝聞用法「ようだ」を伝聞「そうだ」に置き換えると、ほとんどが居座りの悪い文になるが、これは伝聞用法「ようだ」と伝聞「そうだ」の証拠の入手経路の違い、情報源と「そうだ」の共起関係から起因していると思われる。即ち、伝聞用法「ようだ」は、主に書籍など資料による情報を話し手の思考を通して言語化しているので、伝聞として用いられるためには必ず情報源を必要とするが、伝聞「そうだ」は、主に話されたことを証拠としていることと、必ずしも情報源を提示する必要がないことから、伝聞用法「ようだ」を伝聞「そうだ」に置き換えると居座りの悪い文になってしまう。また(15.g)が文として成立しないのは「ようだ

った」は、情報と心理的距離を置いている表現であるのに対し、伝聞「そうだ」が「そうだった」形をとらないことからである。

以下の(15.h)は、男主人公が A さんと電話で話したことを、女主人公に伝えるときに用いられた「ようだ」の用例で、話し手の意図的情報操作に「ようだ」が用いられている用例である。(15.h)のような話し手による情報操作は、伝聞用法「ようだ」がもともと証拠を話し手の思考を通して言語化する推論から伝聞に意味拡大しているため、話し手の認識世界における内面化の過程で情報の操作が起こり得ると思われる。

(男女主人公はおばあさんを避けてサウナに来ていた。その時、男に A さんから電話があった。男は A さんから「おばあさんはすでに実家に帰った、もう家に帰ってきてもいい」との話を聞いた後、一緒にいる女主人公にウソをつく)

(15)h. (おばあさんはまだ帰らず)つい先出前を頼んだようだ。(屋根部屋のプリンス)

このように伝聞用法「ようだ」を用いて話し手は情報を人為的に操作することができる。(15.h)の「ようだ」を伝聞「そうだ」に置き換えると、より確実な伝聞表現になることから話し手の主観の介入可能性が低くなる。

(15)h′.つい先出前を頼んだそうだ。

認識モダリティにおける「力のダイナミックス」に関して二つの捉え方がある。まず Sweetser(1990:59-65)は、証拠や推論の力により結論に導かれる(話し手が推論者として推論する/強制される)とする立場であるが、Langacker(1991:273-274、1998:85)は、ある結末に導かれるのは話し手(特定の個人)ではなく、実在性(reality)の進展的勢い(evolutionary momentum)に内在されているとする立場である。

しかし(15.h)の置き換えから、伝聞表現の選択は証拠の入手経路と、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響による統合作用によって決められると言え、証拠と話し手を取り巻く状況とが話し手の「認識的再構築」により「結び付けられる」ことが分かった[49]。即ち、本稿では言語表現は話し手の認識世界での認識的再構築という「結び付きの過程」

49 三宅(2006)では「ようだ」「らしい」は、証拠の存在を認識しているのであって、証拠から、あるいは証拠に基づいて、命題を推し量ったり、推論していることを表すものではない、その認識にいたるまでには、広い意味での「状況」の中に証拠を見出し、その証拠と命題とを結び付ける過程が存在すると述べている。

において、「結び付けられる」と考えているのである。

４．２．２．５伝聞用法「ようだ」の情報が聞き手に及ぼす影響

これまでの考察から伝聞用法「ようだ」は他からの情報を話し手の思考を通して内面化し、推論のように提示することを確認した。そのため、情報の操作も可能であるが、そのような情報操作は情報と話し手、情報と聞き手の関係といった話し手を取り巻く状況が影響を与えていると思われる。

しかし聞き手の立場から考えてみると、伝聞用法「ようだ」が推論「ようだ」の特徴、つまり話し手の主観的推論判断という特徴を引き継いでいるため、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。

４．２．３伝聞用法「らしい」の情報とモダリティ

推論「らしい」は証拠を不確かなものとして提示することで話し手の責任を軽減する特徴があった。この項では推論「らしい」の特徴が伝聞用法「らしい」にどのような影響を与えるのかと共に、伝聞用法「らしい」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞用法「らしい」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．２．３．１伝聞用法「らしい」の先行研究

寺村(1991:249)によると、ラシイには、話し手が自ら見聞きしたことをよりどころに、それを何ごとかの徴候だろうとみなして推定する場合(～シソウダに近接)と、他からの情報をよりどころに推定する場合(伝聞のソウダに近接)とがあるとし、そのようなあいまい性がラシイの本性というほうが当たっているのかもしれないと述べられている。さらにはヨウダとラシイは話し手が自分の観察をもとに(いわば自分の責任で)推測しているのか、何らかの他からの情報をもとに言っているのかが、聞き手にはよく分らないあいまいな表現である点が共通していると述べた。早津(1988:56)は「らしい」が間接的情報を元にした判断に用いられること、直接的情報であっても、「ひきはなし」の態度で捉える場合に用いられるという特徴が、「らしい」が伝聞表現に用いられるということと関りがあると述べている。

澤西(2002:45)は、「らしい」は基本的には「そうだ」よりも多用されているとの印象さえあるが、本来の推量の機能が、コトガラ(命題)に対する話し手の距離感を示すことになっていると述べている。中畠(1992:17)は、ラシイは伝聞と推量のどちらの意味も表すことができるが、そのどちらであるか判然としない場合が多いとしている。その理由としてラシイの判

断の根拠が、言語情報であっても、それ以外の情報(目やその他の感覚器官で捉えた現状把握)であってもよいということにあるとし、さらに伝聞と推量とは、判断の根拠が言語情報か言語外の情報かという違いはあるが、はっきりと境界を画すことのできない近似性(特にラシイの場合)を有していると述べている。

４．２．３．２伝聞用法「らしい」の情報の入手経路

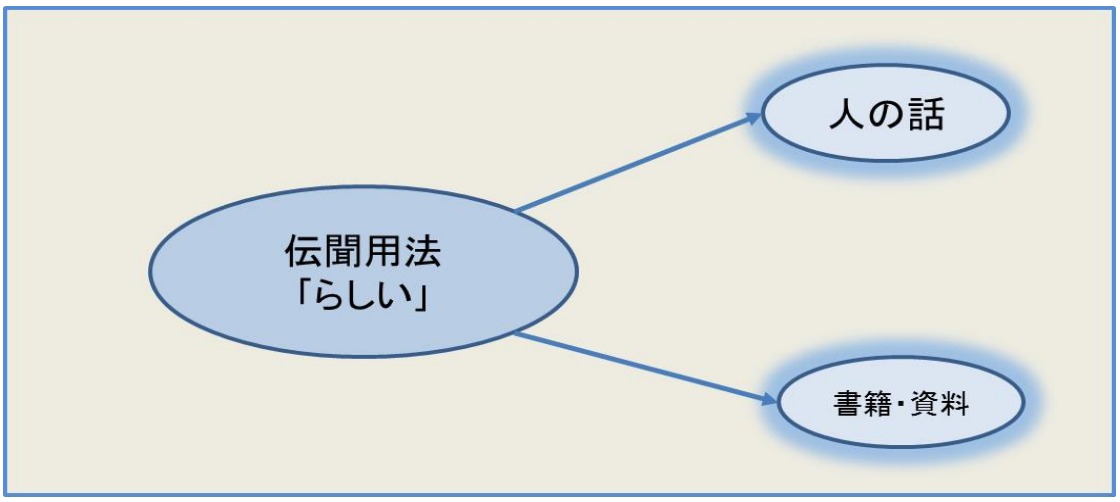
近年の IT 産業の発達に伴い、インターネットやスマートフォンを通じ、世界中の情報が簡単に検索できるようになったが、当然それらの情報がすべて真であるとは限らない。そのため、情報に対する真偽判断の側面においても、推論のように不確かな情報として表現することが多くなり、日常生活において「らしい」が多用されるようになってきているのではないかと推測される。ここでは伝聞に用いられる「らしい」を伝聞用法「らしい」と称することとして、情報の入手経路を確認する。

伝聞用法「らしい」の情報共有の確保手段は他から得た情報を伝達することであるが、伝聞「そうだ」が主に話されたことを証拠とし、伝聞用法「ようだ」が主に書籍や資料を証拠としていたことに比べ、伝聞用法「らしい」は、書籍のような読み物であっても話されたことであってもよい。

(16) a. あの映画は面白いらしいよ。
b. 午後から天気が崩れるらしいです。
c. しかしたいがいの人はいいかげんに恋して、いいかげんに結婚するのだね。それがまたりこうらしい。(愛と死)
d. 妹の友だちに大宮君の従妹がいるのだそうだが、その人から大宮君のことはよく聞かされるらしいよ(愛と死)

(16. a, b)は「らしい」と「そうだ」が、話されたことによる証拠という面で共通していることから伝聞としてとれる内容であるが、(16. c)は「いいかげんに恋して、いいかげんに結婚する」方が、「りこうだ」という話をどこかで聞いて伝えている伝聞とも、周りの人を観察してみたらそれが「りこうだ」と思うようになった話し手の推論判断ともとれる。(16. d)も「妹の友だちに大宮君の従妹がいるのだそうだ」までは、おそらく「妹」から聞いた伝聞であるか、妹は「その人から大宮君のことはよく聞かされるらしい」というのは、妹の行動や話ぶりからの推論判断である可能性もあり、妹から「友達の話では、大宮さんは・・・」という風に聞かされたことを「らしい」を用いて提示している可能性もある。そのことを踏まえ、伝聞用法

「らしい」の情報の入手経路を図式化すると、以下の<図 10>の通りになる。



＜図 10. 伝聞用法「らしい」の情報の入手経路＞

すでに確認したように「らしい」は証拠の存在を暗示し、不確かに提示する推論判断であり、伝聞にも用いられる。伝聞用法「らしい」は書籍など資料を証拠にする場合もあるが、話し言葉で多用され、入手した情報に対する話し手の疑い・不確かといった態度が感じられる表現である。

４．２．３．３伝聞用法「らしい」の情報源とテンス

以下のように、比較的正確な情報を提供していると思われる新聞記事などに「らしい」が用いられた用例があった。

(17) a. 福崎署の発表によると、西口さんは、この日午前１１時頃、大阪府内の登山同好会のメンバー約２０人と一緒に入山。岩場で足を滑らせ、落ちたらしい。
（2013 年 10 月 7 日　読売新聞）

b. 市教委によると、５年生の児童が配膳中に見つけた。切り干し大根の袋の一部で、調理員がはさみで切った際に切れ端が混入したらしい。
（2013 年 7 月 12 日　読売新聞）

c. 秋田臨港署の発表によると、同園では同日、親子行事があり、バルコニーには園児と保護者ら計約７０人がいた。プールは裏返しの状態で立てかけてあり、陽ちゃんは凹凸に手足をかけ、よじ登っていたらしい。（2013 年 6 月 17 日　読売新聞）

d. 和田は「彼らによると、僕はずっと、映画を撮りたいと言っていたらしい。それで、

『俺たちが応援するから撮れ』と言われてうれしくて、福井で撮ろうと話が進んでいった」と振り返る。　　(2013 年 4 月 5 日　読売新聞)

(17. a～c)は新聞記事であり、「a. 福崎署の発表によると」、「b. 市教委によると」、「c. 秋田臨港署の発表によると」など情報源が明示されているにも拘わらず、「らしい」を用いて記事の内容が不確かであるかのように伝えている。主に事件・事故に関わる記事に「らしい」が用いられる場合が多いが、これら記事に「らしい」が用いられるのは、この記事を書いた時点では「a. 転落の原因」、「b. 袋の端切れが混入した経路」、「c. 陽ちゃんの事故の原因」が不確かで、他の原因がある可能性もあることから、情報発信者としての責任感を軽減させるため、情報を不確かに提示しているか、記事を書いた記者が直接取材したものではないため、断言できないといったニュアンスを与えることが目的であると推測される。また「d. 和田は」は資料や報告ではなく人による 2 次伝聞であるが、「彼らによると」を用いて、「僕はずっと、映画を撮りたいと言っていたらしい」と、「自分が本当にそのようなことを言ったのかどうか身に覚えがない」ということをアピールするときには、「１人称」で用いられることも可能である。このように「らしい」が「1 人称」で用いられたときは、たとえ自己のことであっても現在の自己と情報との間に距離を置き、客観的に表すことが目的であると考えられる。

４．２．３．４伝聞用法「らしい」の話し手の心的態度を表す戦略

用例(16)、(17)の会話や新聞記事に用いられた「らしい」を「そうだ」に置き換えると、情報に対する話し手の確信や肯定的態度を強くすることで新聞記事の場合は逆に不自然になることもある。

(18) a. あの映画は面白いそうだよ。
b. 午後から天気が崩れるそうです。
c. ?福崎署の発表によると、西口さんは、この日午前１１時頃、大阪府内の登山同好会のメンバー約２０人と一緒に入山。岩場で足を滑らせ、落ちたそうだ。
d. ?市教委によると、５年生の児童が配膳中に見つけた。切り干し大根の袋の一部で、調理員がはさみで切った際に切れ端が混入したそうだ。
e. 秋田臨港署の発表によると、同園では同日、親子行事があり、バルコニーには園児と保護者ら計約７０人がいた。プールは裏返しの状態で立てかけてあり、陽ちゃんは凹凸に手足をかけ、よじ登っていたそうだ。
f. *和田は「彼らによると、僕はずっと、映画を撮りたいと言っていたそうだ。それで、

『俺たちが応援するから撮れ』と言われてうれしくて、福井で撮ろうと話が進んでいった」と振り返る。

このように「らしい」を「そうだ」に置き換えることにより、情報に対する確信度が高まっているように感じられる。一方で、伝聞「そうだ」が情報を肯定的に受け入れる表現であるため、新聞記事においては「18. c 福崎署の発表によると」、「18. d 市教委によると」のように情報源がはっきり出ていると却って不自然になる場合もある。また「らしい」は(18. f)のように、自分もよく覚えていないなどの気持ちを込めて自分の言動を表すことができるが、伝聞「そうだ」はもっぱら他から入手した情報を伝えているため、「そうだ」に置き換えることができない。

以上のことからも「らしい」は証拠による客観的推論判断として、ときには「ようだ」に近い経験・体験からの主観的判断、さらには伝聞をも表すことができると言える。しかし、伝聞用法「らしい」はやはり推論「らしい」の影響を強く受けているため、他から入手した情報であっても情報の真偽に関してはそれが話し手にとっても不確か・よくわからないといったニュアンスで話し手の推論のように距離を示すことになる。

その影響で、推論「らしい」が情報伝達の場で用いられる場合は、情報が話し手の経験・体験・考察によるものなのか、それとも他から入手したものなのかさえ曖昧な場合がある。それゆえに「らしい」も「ようだ」と同じく、話し手の認識世界の中で主観的情報操作が可能であると思われる。たとえば、以下の(18. g)ような用例を確認してみよう。

(彼女と友達らと旅行に行く当日、友達らが全員約束の場所に来なかったので電話したら、友達は彼と彼女が２人でデートできるように気遣ってくれたらしく、「彼女と２人で楽しんできて」と言われた。その後、なぜ誰も来ないのかと心配そうに尋ねる彼女に)

(18)g. それが、その、いろいろと用事があるらしい。　(僕の世界の中心は君だ)

(18. g)は友達から直接「彼女と 2 人で楽しんできて」と言われているにも拘わらず、彼女にはそのことが言えず、「いろいろと用事があるらしい」と「らしい」を用いて不確かに伝えている。このことからも、「らしい」も話し手の認識世界の中で主観的情報操作が可能であると言えるだろう。

また話し手がコミュニケーションの場で「らしい」を用いているのは、他から入手した情報を伝達していても、その情報となるものの内容が情報を発信した当事者から直接聞いたものではなかったり、話し手が直接確認していないコトガラであるといった情報に対する話し

手の自信のなさ・疑いなどが加わり、不確かな情報であるという認識を聞き手に示す役割を果たしていると思われる[50]。しかし、このように情報を不確かなものとして判断するという認識世界の行為こそ、話し手の情報に対する何らかの表現意図であると言える。

４．２．３．５伝聞用法「らしい」の情報が聞き手に及ぼす影響

以上の考察から伝聞用法「らしい」は、話し手が用いる情報が不確かな情報であるという態度で伝えることで、情報と距離を置き、情報伝達においての話し手の責任感を軽減することができる。

しかし聞き手の立場から考えると、話し手の情報に対する自信のなさから、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。さらに上記の(18.g)のように情報が聞き手と関りを持っている場合、話し手は聞き手に対する配慮から「らしい」を用いることも可能であるため、情報伝達と情報の真偽判断において話し手と聞き手がお互いに影響を与えていると言える。

ここまでを纏めると、上代語の「らし」は「あるサマダ」、「あるヨウスダ」といった事象の状態を表したり、ある事実を証拠としてまたは理由として推量する意味を持っていた[51]。しかし、現代日本語の「らしい」は、何か見聞きしたことを証拠として言語化しており、証拠内容が話し手の認識世界で内面化されているものの、その内面化の程度は「ようだ」より低く、証拠となるものを不確かなものとして提示しているため、証拠に対する話し手の伝達態度の面においては伝聞「そうだ」ほど肯定的ではない。その影響で、伝聞として用いられるときも不確かな伝聞表現になるのではないかと推測される。

４．２．４伝聞「そうだ」「ようだ」「らしい」の情報とモダリティの関係

これまでの考察で、推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」における話し手の判断は、何かを見聞きしたり、話し手の五感を通じて感じた証拠による主観的判断であるため、話し手は命題内容の生成に積極的に関与し、能動的に命題内容を形成することができる。その反面、

---

50 たとえば、情報伝達の場を元の発話の場、１次伝聞、２次伝聞、３次、、と設定して、元の情報伝達の場を、A(話し手)→B(聞き手)にしよう。そして、B(話し手)→C(聞き手)を１次伝聞、C(話し手)→D(聞き手)を２次伝聞にすると、Aの発話がB→C→D・・まで伝わっていく間、元のAの話の内容の信憑性や正確性が薄れていく場合もある。以下は映画から収集した用例である。

A(情報提供者)：大掛かりなスパイ活動が計画されています→B(警察・課長)：大掛かりなスパイ会の計画があるそうだ→C(刑事)：課長の話では大掛かりなスパイ会の計画があるらしいです→D(刑事)、、このようにもとの情報が正確であっても、情報が人から人へと伝わっていく過程で情報内容が不確かなものになっていく可能性もあり得る。

51 岩井良雄(1974:192)『日本語法史』笠間書院

伝聞は情報の内容を他から入手したもの・情報の存在を事実として認識した上で、その情報に対する話し手の受け入れ態度のみを表しているため、情報生成の面においては消極的である。しかしながら、他から入手した情報であっても、推論「ようだ」を用いて話し手の自己責任のもとで聞き手に伝える場合もあれば、「らしい」を用いて証拠の存在を暗示しながらも、不確かな情報であるといったニュアンスで伝える場合もある。このことから、証拠や情報をコントロールする主体である話し手と情報、聞き手の 3 要素の関係の中で、コミュニケーションの場における話し手の表現意図を理解する必要があると主張したい。

次は伝聞で用いられる「そうだ」、「ようだ」、「らしい」を比較し、情報と話し手の表現意図を比較して考察してみよう。

(19) a. また夫の家に帰らなければならないと思うと、いつまでも病気していたい気もするといっていた(そうだ/??ようだ/らしい)。
b. あの人はうちのお父さんとはちょうどお前たちのように小さいときからのお友たちだった(そうだ/?ようだ/らしい)。
c. わたしたちに会って回っていたころのルロイ修道士は、身体じゅうが悪い腫瘍の巣になっていた(そうだ/ようだ/らしい)。
d. しかしたいがいの人はいいかげんに恋して、いいかげんに結婚するのだね。それがまたりこう(だそうだ/*のようだ/らしい)。
e. 妹の友だちに大宮君の従妹がいるのだそうだが、その人から大宮君のことはよく聞かされる(そうだ/??ようだ/らしい)。

(19. a〜e)をみると、「そうだ」の場合はどれも伝聞を意味するが、「ようだ」に置き換えると、(19. a, b, c, e)は「ようだ」は人から聞かされないと知りえない情報であるためどちらかと言うと伝聞として受け入れられるものの、「〜〜によると」など情報源が提示されていないため、非完全な伝聞になり、やはり情報が話し手の認識の中で内面化されていると感じられる。また、(19. d)は「ようだ」に置き換えると、推論になってしまう。よって「ようだ」が一番居座りがいいのは、直接的な体験・考察による主観的表現で、状況から伝聞として読み取れる場合でも情報源が提示されないと物足りない感じになる。また伝聞用法「ようだ」は情報に話し手の主観的判断が加わっているというニュアンスが感じられる。さらに上記の用例を、「らしい」に置き換えると他から聞いたこと、つまり伝聞ではあるが、その情報が真であるかどうかは不確かで、情報と距離をおいた伝聞表現になる。

(19)f. この病気の人は、動物の毛をすいこまないほうがよい
(のだそうだ/*ようだ/らしい)。

g. チリメディアの報道によると、クラブ・ブルージュに所属する FW ニコラス・カスティージョ(21)の獲得に迫っている(そうだ/ようだ/らしい)。

h. 新聞によると彼が自殺した(そうだ/ようだ/らしい)。

i. この手紙は、投稿主によると、そんなに昔に用意したものではなかった
(そうだ/ようだ/らしい)。投稿主が昨年、着物を干した時に封筒はなかったという。

j. 総務省の調査によると、スマホの世帯普及率は 2012 年末で 5 割。対応のサービスを充実させることで、テレビ視聴を促す工夫が続いている(そうだ/ようだ/らしい)。

(19.f)も、他から情報を入手しないと知り得ない情報であるため「ようだ」に置き換えできず、「そうだ」は伝聞を、「らしい」は他からの情報であっても本や資料で知り得た知識であっても証拠とするため、推論判断とも伝聞ともとれる。

(19.g～j)は、「g. チリメディアの報道によると」、「h. 新聞によると」、「i. 投稿主によると」、「j. 総務省の調査によると」と情報源を明かしている。多くの場合、「そうだ」は情報源を明かさなくてもいいが、このようにわざわざ情報源を明かすことにより情報と話し手の間に距離感が感じられる。「ようだ」を用いると、話し手が用いている情報は他からの情報であるが、それが話し手の認識世界の中で内面化され、話し手の責任のもとで言語化され、「らしい」に置き換えると、伝聞表現ではあるが、話し手の情報に対する距離感が感じられる。

以上を纏めると、伝聞用法「ようだ」は、主に報告・調査などの資料を読み、それを証拠に話し手の思考を通して言語化しているため、情報が思考の過程で内面化され、話し手の考えのように伝える主観性の高い伝聞表現となる。従って、主観性が高いゆえに情報伝達の際の話し手の責任も高くなる。「らしい」は書籍・新聞などの資料だけではなく、話されたことも伝えられ、証拠に依存した伝聞表現であるため、「ようだ」よりは客観的姿勢がみられるが、情報を話し手が直接確認していないなどの不安から、情報を不確かなものとして用いている。同じく、書籍などの資料と話されたコトガラの両方の伝達に用いられているため、伝聞として用いられる際にもそれが書籍などの資料を証拠としているのか、誰かから聞かされたことを証拠としているのかさえ不確かである。「ようだ」、「らしい」についてのこのような結論は、「証拠」から「認識」が導かれているかのように見受けられるかもしれないが、実際はそうではない。つまり、話し手の認識世界において「証拠」と「認識」が情報の入手経路、話し手の表現意図を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響に対する話し手の考慮から「認識的再構築」により「結び付けられる」ものである(例えば(15.h)の「ようだ」)と推察される。

伝聞「そうだ」は情報が真であるとある程度確信を持って、肯定的に受け入れているとの姿勢がみられ、そういう点で「ようだ」、「らしい」より客観的伝聞表現であると言える。ここまでの考察を纏めると以下〈表 6〉の通りである。

＜表 6. 伝聞(用法)「そうだ」「ようだ」「らしい」の話し手の表現意図＞

伝聞用法	特　　徴	証拠依存	話者関与
「そうだ」	伝え聞いた情報が真であると、ある程度確信を持って肯定的に認識していること。 話し言葉、書き言葉両方に用いられる。	高 ・ ・ ・ ・ ・ ・ 低	低 ・ ・ ・ ・ ・ ・ 高
「らしい」	伝え聞いた情報を不確かなものとして認識、情報と話し手の間に距離を置く。		
「ようだ」	主に本や書籍など資料による情報を伝えるときに用いられ、他から入手した情報であっても話し手の認識世界で内面化され、話し手の責任のもとで言語化される。		

４．２．５推論表現と伝聞表現の連続性とモダリティ

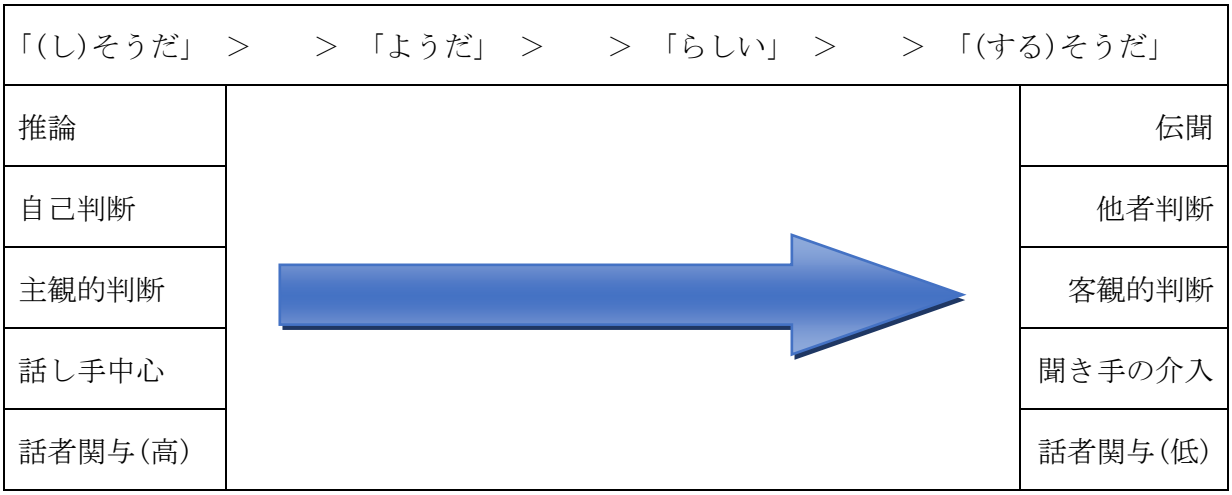
陸心芬(2007:118-120)は、「ようだ」、「らしい」、「そうだ」の三つの形式が情報のストックや発話態度によって繋がっているとし、「そうだ」と「という」が話し手の主観的な認識態度という点で連続していると述べている。しかし情報判断の主体と情報への依存の程度、話し手の情報への関与と情報に対する聞き手の介入の面から考察してみると、推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」は情報判断の主体という面で共通しており、伝聞用法「ようだ」、「らしい」は情報の内面化という面で共通している。加えて伝聞用法「らしい」と伝聞「そうだ」は情報依存の面で共通していると言えるだろう。さらに、本稿において推論表現が伝聞に用いられ、推論と伝聞の境界がなくなることを、仮に推論表現と伝聞表現の連続性と名づけて考察を進めているが、その結果は以下の〈表 7〉の通りである。

＜表 7. 推論表現と伝聞表現の話し手の表現意図＞

推論と伝聞表現	特　　徴	証拠依存	話者関与
伝聞「そうだ」	伝え聞いた情報をある程度確信を持って肯定的に認識していること。話し言葉、書き言葉両方に用いられる。	高 ・	低 ・

推論・伝聞用法「らしい」	視覚・聴覚・内的考察・外的証拠による考察・資料など文字化されたもの・人の話による思考的判断に用いられる。何らかの証拠の存在を暗示する客観的判断であるが、証拠を不確かなものとして提示する。	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 低	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 高
推論・伝聞用法「ようだ」	視覚・聴覚・味覚・嗅覚・内的感覚・内的考察・資料など文字化されたもの・人の話による証拠を話し手の認識世界において内面化し、自己判断のもとで言語化しつつ、主観的判断・思考的判断を加える。		
推論「そうだ」	視覚・聴覚・内的感覚・内的考察・人の話による直観的気づきを表しているため、証拠の気づきから言語化まで時間的に短く、自己の内的感覚による主観的判断・周囲の状況把握による思考性判断に用いられる。		

呉(2013)は、情報判断の主体、話者関与の高低、聞き手の認識態度から、推論表現と伝聞表現の連続性を「(し)そうだ」>「ようだ」>「らしい」>「(する)そうだ」と、矢印が右に移動するほど情報に対する話し手の関与が低くなり、情報判断が自己判断から他者判断になると述べている。本稿においてさらにつけ加えると、矢印が右に移動するほど主観的判断から客観的判断になり、話し手中心の情報判断から、情報判断に聞き手の介入可能性が高くなる。以上のことから、<図 11>の通り、話し手の情報への関与が高くなると主観性の高い・自己判断に近い伝聞表現になり、逆に話し手の情報への関与が低いと、その分情報への依存度が高くなるため客観的伝聞表現になることが分かる。



＜図 11. 推論表現と伝聞表現の連続性＞

４．３複合助動詞「という」「って」「とか」の情報とモダリティ

伝聞用法「という」は引用由来の伝聞表現であるが、「って」は「と」の変化形とも、「という」の縮約とも、伝(つつ)の名詞化とも言われ、伝聞用法「とか」は助詞由来の伝聞表現である。これらはその由来は様々であるが、現代日本語において伝聞に用いられるという共通点があるため、この節では複合助動詞伝聞表現とし、コミュニケーションの場における情報共有の確保手段、情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中からこれら伝聞表現に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．３．１伝聞用法「という」の情報とモダリティ

「という」は、上代から「といふ」の形で使われ続けてきた。また代表的な引用表現として多くの研究者により研究され、すでに研究され尽くしたような表現であると言える。並列・共同・目標の「と」は格助詞と思われ、「という」は前接の命題と「と」に後接する「いう」を並列関係に置くことで前件と後件が対等関係にあることを指し、「である」という指定的陳述を濃厚に示すものは助動詞と考えられる。まずは、伝聞用法「という」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞用法「という」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．３．１．１伝聞用法「という」の先行研究

中右(1994)では、モダリティの二つのタイプの中で発話態度のモダリティを、一定の談話コンテクストのもとで話し手がみずからの発話行為についていだく何らかの意識(意図、

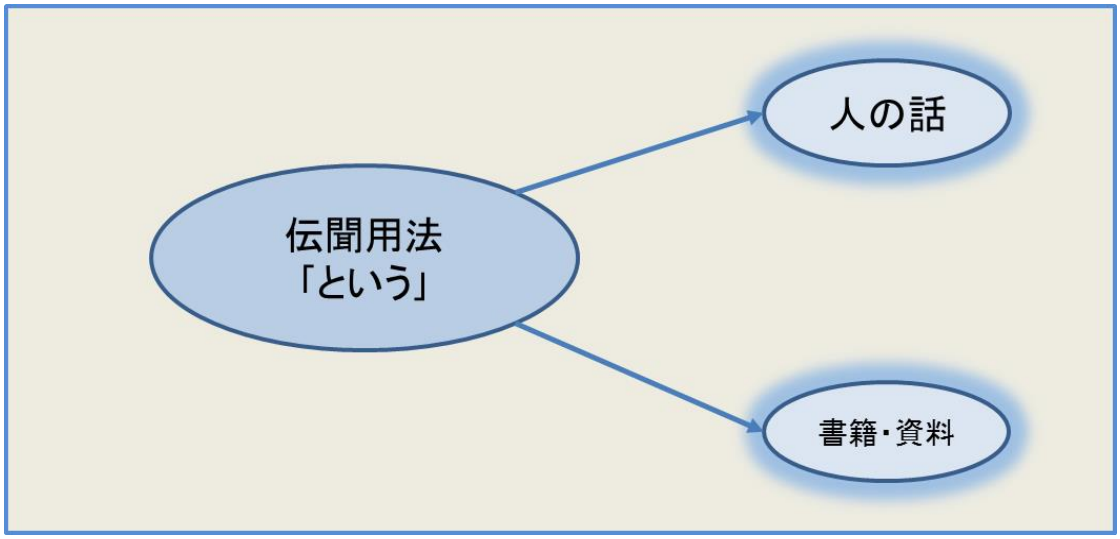
姿勢)と定義し、更に伝聞形、「という」、「と聞く」、「そうだ」を判断留保のモダリティとしている。一方で、羅聖榮(1996:116)では伝聞「ソウダ」と「トイウ」を比較し、「ソウダ」が、知り得た情報を容認して有意義な情報として、命題内容の真を話し手が引き寄せの態度で伝えるのに対し、「トイウ」は、根拠となる事柄を一般的情報として伝えようとする、つき離しの心的態度が働いているものと述べている。

推論とは違い、伝聞においては話し手が命題内容、つまり情報内容を能動的に生成することはできない。しかし、情報とどのように関わろうとしているのかという、表現意図を表す戦略の一つとして、話し手により情報内容がある程度確かなもの(例えば「そうだ」)として提示される場合もあれば、所与のものが所与のもの(例えば「という」)として提示される場合もある。また、他から入手した情報であっても、話し手の自己責任のもとで伝える(例えば「ようだ」)こともでき、さらには、たとえ確かな情報であっても、不確かなもの・曖昧なものとして話し手と距離を置いて聞き手に伝える(例えば「らしい」)こともできる。

そのため、本稿では、伝聞においての情報判断は、情報がコミュニケーションの場において情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響と結び付けられた結果、話し手により選択されるものと見做している。即ち、伝聞表現というのは、情報とどのように関わろうとしているのかという、話し手の表現意図により選ばれるものと見ているのである。

４．３．１．２伝聞用法「という」の情報の入手経路

〈図12〉は伝聞用法「という」の情報の入手経路を図式化したものである。



＜図12. 伝聞用法「という」の情報の入手経路＞

伝聞用法「という」は、書籍など資料による情報の伝達にも用いられるが、話されたことによる情報伝達にも多用されている。ただし、「という」が用いられるコミュニケーションの場は小説や説明文など書き言葉が主である。

４．３．１．３伝聞用法「という」の範疇

従来、「という」は他人の言葉はもちろん、自己の発話や考えの引用にも用いることができることから、引用表現として扱われてきた。しかし、宮崎 他(2002:164)は、言い伝え的な特徴をもつことが「という」の特徴であるが、通常の伝聞にも使用され、なお普通体の「という」が使用されるのは、書き言葉に限られているとした。このように、「という」が書き言葉で多用されることも、「という」が伝聞として用いられているのか、あるいは引用として用いられているのかを分かりにくくする一つの原因になると考えられる。

前にも触れているが、中畠(1992:19)は伝聞は命令・疑問・意志・勧誘など陳述度の高い成分とは共起しないとしている。しかし、これは一部助動詞や伝聞「そうだ」を基準にした伝聞定義であると思われ、実際は、「そうだ」と同じく伝聞のみの意味機能を持っている「とのことだ」が以下のように、命令・意志・疑問・勧誘・丁寧形に加え終助詞にも後接できることから認められにくい。

(20)a. 後日会社に、金融会社から電話があり、給料の３０％を差し押さえてくれとのことでした。びっくりして、本人に確認したところ実は、３００万の借金ですとのこと。
（現代日本語書き言葉均衡コーパス）

b. 冬タイヤももう一冬なら越せそうとのこと。　（現代日本語書き言葉均衡コーパス）

c. 今朝、じいじから電話あり。息子が電話対応をし、よくわからないが昼一緒に行こうとのこと。おばあちゃんが美容院から帰ってきたら電話するねっていう電話だった。
（現代日本語書き言葉均衡コーパス）

d. 女王陛下がお話ししたいことがおありだそうです。少し、お時間をいただけないでしょうかとのことでした。　（現代日本語書き言葉均衡コーパス）

このように、伝聞「とのことだ」が報告文などの文末に現れ、「とのことだ」の前に「命令・疑問・意志・勧誘・丁寧形」がそのまま残ることは、過去の出来事に対する発話時の、もとの話し手の心的態度を前面化する効果があると思われる。さらに、「という」が伝聞として用いられた際、以下のように話し手による捉え直しが想像できることから、伝聞「という」に先

行する「命令・疑問・意志・勧誘」が、必ずしももとの話し手の発話であるとは限らない場合もある。

(20)e.お父さん：ゴーシュさんはとてもいい人でぜんぜん怖くないから彼のところに行って習ってみたら。
→だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人で怖くないから行って習えと言ったよ。

以上のようにお父さんに「習ってみたら」と言われたもとの発話を、話し手の表現意図をもとに、「行って習え」と命令形に捉えなおすことも可能であるからである。

さらに、中畠(1992:21)では伝聞は「た形」をとらないとしている。認識のモダリティを、現実世界の可能性や必然性に対する話し手の主観的判断に限定するならば、過去をとらないという認識の仕方もありうるが、本稿では証拠モダリティにおいての「た形」を、話し手の表現意図を表す戦略の一つとして捉えているため、話し手は、情報と発話時現在の自分とを離して提示することで情報と心理的距離を確保することができると考える。そのため、「という」は「といった、といっていた」のように「た形」をとることも可能であると思われ、実際に第 2 言語・外国語としての日本語学習教材にも、「と言っていた」を伝聞として提示している場合が多かった。

(21)a.先生は試験はむずかしいと言いました。(日本語初級)
b.メアリーさんは忙しいと言っていました。(Genki Japanese)

一般的に、直接引用が他者や自己の話・考えをそのまま「“”」で取り囲み、話し手の主観の介入をブロックしているのに対し、伝聞「という」は、他から入手した情報を他者に伝える際に直接引用の証である「“”」を取り除くなど、最小限の再構築過程を施していると言える。本稿は、このように「できるだけもとの形を維持しようとする」という話し手の表現意図も、広義の意味で伝聞のモダリティとして見做す立場である。また、このような立場から考察することで、伝聞表現という一つのカテゴリーの中で、伝聞に用いられる表現間の違い、たとえば情報伝達の場においてどのような経緯で「そうだ」が選ばれ、あるいは「という」が選ばれているのか、伝聞表現それぞれに含まれる話し手のモダリティや表現意図、聞き手に及ぼす影響などについて把握することができる。よって、本稿では実際の言語使用の面を考慮

し、命令・疑問・意志・勧誘など陳述度の高いものや、「た形」をとるものも構文形式の面で逸脱していない限り伝聞とする。

ただし本稿では、以下のように他から入手した情報を「様態」的に捉えて説明しているものは伝聞表現としない。

(22)a. そんなめんどうをなるだけせぬようにして、さっさと引っ越すのだというのである。
（雁）

b. 持ち主は湯島切通しの質屋で、そこの隠居がついこのあいだまで住んでいたのが亡くなったので、ばあさんは本店へ引き取られたというのである。（雁）

c. ある日娘を外へ呼んで、もうだんだんかせがれなくなるおとっさんにらくがさせたくはないかといって、いろいろに説きすすめて、とうとうがてんさせて、そのうえでおやじに納得させたということである。（雁）

d. 亭主のうちにいるときにははなはだしくして、るすになると、かえって醒覚したようになってはたらいていることが多いということである。（雁）

以上は、他から得た情報を「という」を用いて表しているが、「伝聞」として用いられているというより、小説などで読者の理解を助ける目的でコトガラの様態を説明していると思われ、伝聞ではなく「様態」とする。このように、伝聞ではなく様態的に捉えられる理由として挙げられるのは、「というの、ということ」に後接する指定詞「である」の影響であると推察される。

中畠(1992:21)では、「引用」と「伝聞」を区別する大きな要因は、元の話者の心的態度をそのまま伝えるか、新たに話し手が自己の心的態度をもとに述べるかにあると定義した。この観点からも上記の用例(22)は、もとの話し手の心的態度を直接引用的にそのまま伝えているものでもなく、また現発話の話し手の心的態度をもとに、新たに捉え直しているものとも考えられないが、その原因として挙げられるのが、やはり「というのである・ということである」の「である」の存在である。「である」は主に説明文に用いられる断定・指定を表す助動詞であるため、その影響で上記の用例は「様態」の性格が強いように感じられる。

本稿では引用の範疇に入るものとして、

①話し手の自己の思考・考えを言語化したもの。

②話し手の自己の前述や直前の発話を再度リピートしているもの。

③コミュニケーションの場において聞き手の考えを先取りして言語化したもの。

④聞き手の前述や直前の発話をリピートしたもの。

⑤もとの発話と現発話の間の時間差が見られず、発話相手の交代や発話の場の移動がみられないもの。

⑥話し手による情報の形式や内容面での捉え直しがないもの。

⑦他から入手した情報を当事者に確認する

以上の七つを設定した。また伝聞表現としては、

①もとの発話者と現発話者が異なるもの。

②他から入手した情報を話し手の主観的認識態度や表現意図をもとに捉え直していると認められるもの。

③情報源が明示される表現もあれば、明示されない表現もあるが、どちらも話し手による情報の再構築が見られるもの。

④もとの発話と現発話の間に時間差または場の移動が認められるもの。

⑤必ず聞き手が存在するもの。

以上の五つを設定し、伝聞表現の用例を集めた。③の情報源に関して伝聞「そうだ」、伝聞用法「という」は必ずしも情報源を明示する必要がないが、伝聞用法「ようだ」、「って」、「とのことだ」は情報源を明示するか、文脈から把握できないと伝聞に用いることができず、伝聞用法「とか」に関しては情報源が明示されないのが普通である。このような点を踏まえ、本稿では情報源が話し手の情報に対する心理的距離を間接的に表すことができると見做す。

(23)a.そこで並みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝した<u>と言うぜ</u>。

（吾輩は猫である）

b.(母によると)狭い道を広くするため、昭和四十五年に、道ぞいにあった家をそのまま今の所に動かした<u>というのです</u>。(3 年生の教科書)

これらは、引用というよりは伝聞といった方が適しているように見受けられる。(23.a)は、伝聞「そうだ」と同じように言い伝えに用いられていて、(23.b)も、母親から伝え聞いたことを読み手に伝えていると思われる。伝聞用法「という」は書き言葉に用いられる伝聞表現であり、話し言葉では主に「と言っていた」が用いられる。

４．３．１．４伝聞用法「という」の情報源とテンス

伝聞用法「という」は、情報源が明示されている場合や、文脈から情報源が読み取れる場合にも使われるが、昔話や言い伝えのように普通情報源が明示されない場合にも用いられる。

以下伝聞用法「という」の情報源を確認してみることにする。

(24)a. もりうちを続けるなら、男幸は十七代目になるという。(6 年生の教科書)

b. 「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人で怖くないから行って習えと言ったよ。」(セロ弾きゴーシュ)

c. 校長さんが、ようまあ考えてみとこうとお言いたげな。 (坊ちゃん)

d. (生徒によると)ぜひ見物しろ、滅多に見られない踊りだと言うんだ。(坊ちゃん)

e. (母によると)狭い道を広くするため、昭和四十五年に、道ぞいにあった家をそのまま今の所に動かしたというのです。(3 年生の教科書)

f. そこで並みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝したというぜ。

(吾輩は猫である)

以上をみると分かる通り、伝聞用法「という」は、(24. b, c)のように情報源が明示される場合や、(24. a, d, e)のように文脈から情報源が読み取れる場合もあるが、(24. f)のような昔話や言い伝えには、情報源が明示されないのが普通である。よって、情報源の明示義務はないと言える。またテンスに関しては現在形「という」だけではなく、(24. b)のように「といった」形も確認することができた。

さらに、伝聞用法「という」は、前文に終助詞や丁寧形は付けられなくても、「命令・勧誘・意志」などが再構築過程で脱落しないことから、話し手による情報の再構築は行われるが、その程度は低く、小説の地の文など書き言葉に用いられる客観的伝聞表現であると考える。

４．３．１．５伝聞用法「という」の話し手の心的態度を表す戦略

上記の用例(24)の伝聞用法「という」を以下の通り伝聞「そうだ」に置き換えて、「という」と「そうだ」の話し手の心的態度を表す戦略の違いを確認してみる。

(25)a. もりうちを続けるなら、男幸は十七代目になるそうだ。

b. *「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人で怖くないから行って習えそうだ。」

c. *校長さんが、ようまあ考えてみとこうそうだ 。

d. *ぜひ見物しろ、滅多に見られない踊りだそうだ。

e. 狭い道を広くするため、昭和四十五年に、道ぞいにあった家をそのまま今の所に動か

したそうです。

f.*そこで並みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝したそうだぜ。

以上のように(25.b,c,d)は、伝聞「そうだ」のもつ構文制約により、「命令・意志・勧誘」などが共起できないため、「そうだ」に置き換えできない。(25.f)も、「そうだ」は終助詞「ぜ」と共起できないため、非文になる。一方で(25.a,e)は、「という」を「そうだ」に置き換えることにより、情報に対する話し手の認識態度、肯定的な姿勢が現れる。このことから伝聞用法「という」を用いる際の話し手の表現意図は、情報をできるだけ入手したままの形で伝えることで情報と話し手を引き離し、話し手の情報の真偽判断は留保することにある。

さらに、伝聞用法「という」と伝聞「そうだ」が一つの文章で一緒に現れている用例をみてみると、「そうだ」を用いる際の話し手の肯定的姿勢が一段と明らかになることが分かる。

(26)a.「材料はええもんを使わなあかん」というのが先代の口癖だったという。この菓子も、クルミと砂糖というシンプルな組み合わせではあるが、アメリカ産のオーガニッククルミに徳島県産の和三盆糖とこだわりをみせる。おいしくて体にもよい菓子を目指しているそうだ。　　(読売新聞　2015年　5月　2日)

b.昨晩来てくれたそうだね。留守で残念でした。妹はかえってよかったと言っていたがね。　　(愛と死)

以上のように、一つの文に「そうだ」と「という」が一緒に用いられている場合、話し手は「そうだ」あるいは「という」の重複を避けるために、これらを交互に用いているということも考えられる。さらに、(26.a)のように「そうだ」は情報と話し手の物理的距離が近い場合に用いられ、「という」は、情報と物理的距離が遠い場合に用いられると見ることもできる。

つまり、(26.a)の「材料はええもんを使わなあかん」という先代の口癖は、話し手にとって直接確認できないことであるため、物理的に遠く捉えて「という」を用い、情報と話し手を切り離して距離感を表し、「おいしくて体にもよい菓子を目指している」に「そうだ」を用いているのは、話し手が菓子職人に直接聞かされたことであるため、物理的に近く捉えているからであると見ることができる。

しかし、(26.b)をみると、話し手が「昨晩きてくれたそうだね」というのは、「先ほど大宮さんが来ていた」と妹に聞かされた話で、「かえってよかった」は、話し手の妹が話し手に直接話したことであるため、物理的距離は妹の発話である「かえってよかった」の方が近いと言える。しかしながら話し手は物理的に遠い「昨晩きてくれた」に「そうだ」を用い、物理的に近

いと思われる妹の発話「かえってよかった」に「と言ってた」を用いている。

以上の用例から、伝聞「そうだ」、伝聞用法「という」の選択に話し手の心理的距離が反映されたと判断され、伝聞「そうだ」と伝聞用法「という」は同じく情報伝達に用いられるが、「そうだ」は情報と話し手の間の心理的距離が近いということを明示したい場合に、「という」は心理的距離が遠いことを明示したい場合に選択されると考えられる。よって、(26. a, b)のこのような選択は話し手の認識世界で起こり、話し手の表現意図に合わせて選択されるものであると言えるのではなかろうか。

４．３．１．６伝聞用法「という」の情報が聞き手に及ぼす影響

伝聞用法「という」は伝聞「そうだ」に比べ、情報伝達において、もとの発話に対する話し手の構文形式の捉え直しがあまりなされないが、これは話し手の表現意図により、情報と話し手の間に心理的距離があるという態度を示していると思われる。そのため、「命令・疑問・意志・勧誘」がそのまま表され、話し手は情報の再構築過程にあまり関わらず、話し手の情報の真偽判断は保留される。しかし、聞き手の立場から考えると、情報に対する話し手の情報の真偽判断が保留されているため、聞き手は「という」により用いられた情報の真偽判断に介入することができる。

以上のことから、伝聞用法「という」の方が伝聞「そうだ」より客観的伝聞表現であると考えられ、伝聞用法「という」は主に情報の受け渡しにのみ関わっているため、話し手の情報に対する確信度も伝聞「そうだ」より低く、情報に対する肯定的姿勢も見られないと言える。

４．３．２伝聞用法「って」の情報とモダリティ

今日の「って」は、「という」の砕けた言い方、縮約形という認識が強いが、「って」により用いられる文が引用であるか伝聞であるか曖昧な場合もある。本稿では伝聞を、「話し手が過去のある時点で第 3 者から入手した情報を、新たなコミュニケーションの場において話し手自身の表現意図によりおこなう認識的再構築である」と定義しているが、「って」においても話し手の表現意図による情報の認識的再構築が見られる。つまり、元の話者の発話と現話者の発話の間に文の構造変化が認められるため、「って」の伝聞としての機能を認める立場である。ただし、「って」は「とて」から由来する「と」の変化形、或いは「という」の縮約であるため、引用に近い伝聞表現になり、終助詞は含まないが「命令・疑問・勧誘」が入り得ることから、情報と距離を置きたい話し手の認識態度が見られる。また、「という」が主に書き言葉に用いられるのに比べ、「って」は話し言葉に用いられることから、「という」の話し言葉形伝聞表現でもある。

この項では伝聞用法「って」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞用法「って」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．３．２．１伝聞用法「って」の先行研究

先述した通り「って」は、通時的には指定の「と」に助詞「て」が付いた「とて」が「って」になったものと考える説（湯澤(1957)『増訂　江戸言葉の研究』、此島(1966)『国語助詞の研究：助詞史の素描』、三枝(1977)「「って」の体系」、松村(1989)『大辞林』）と、指定の「と」に確認の助動詞「て」が付いた「とて」が「って」になったものと考える説、「と言って」を語源とする説（松重(1971)『日本文法の諸問題』、田中(1977)「助詞 3」）の三つがある。松重(1971:248)は「と」、「って」の形の成立は「といって＞とて＞って＞て」の順で変化していると述べている。

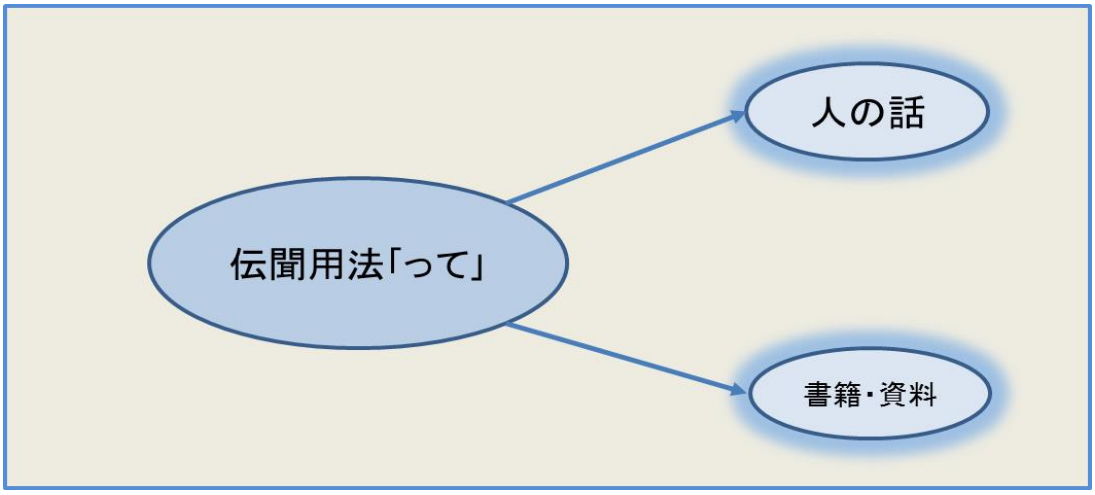
現代日本語の発話末の「って」に関する研究は、三浦(1974)、堀口(1995)、山崎(1996)、三枝(1997)、岩男(2003)、加藤(2010)などがある。これらの研究は、主に「って」の用法を明らかにすることに注目した研究であった。三浦(1974)は、「と」と「って」の置き換え可能性に注目した研究で、堀口(1995)は、引用される発話の場と発話主体により、これらを 8 つに分類している。山崎(1996)は、「って」を引用・伝聞・提題・強調の四つに分け、そのうち引用と伝聞について論じている。三枝(1997)では、「って」の発話末用法のなかで、伝聞・問い返し・訴えかけの三つの用法を取り上げ説明している。岩男(2003)では、引用部の情報が誰からもたらされたのかに注目し、知識未定着用法・押し付け用法・表出的用法・伝聞的用法に分けている。加藤(2010)では、話し言葉においての引用標識「と」と「って」に注目し、①休止系、②後続部省略形、③引用部並列系、④帰結確認用法、⑤精緻化情報確認用法、⑥言明用法、⑦理解困難表示用法、⑧意外感表示用法、⑨伝言取次ぎ用法、⑩伝言情報表示用法、⑪自己演出用法と、「と」と「って」の機能による分類と、文においてのこれら機能の拡張による分類がなされている。

このように、「って」の分類に関しては他の研究で詳しく考察されているため、本稿では伝聞用法「って」に絞り、情報共有の確保手段、情報の入手経路とテンス、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響を考察する。

４．３．２．２伝聞用法「って」の情報の入手経路

伝聞用法「って」は、「とて」の「と」の変化形、「という・と話す・と聞く」の「と」の変化形、「と言って」の縮約との諸説がある。しかしたとえその語源がどうであっても引用・伝

聞の意味機能があることは確かである。「って」の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、「という」は主に書き言葉で用いられるのに比べ、伝聞用法「って」は書籍など資料による情報にも用いられるが主に人の話による情報に多用される。そのため、伝聞用法「って」の情報の入手経路は以下の〈図 13〉の通りである。



＜図 13. 伝聞用法「って」の情報の入手経路＞

４．３．２．３伝聞用法「って」の情報源とテンス

伝聞「そうだ」と伝聞用法「という」は、情報源が必ず明示される必要がないのに対し、「って」は、情報源が文脈から分かるものや、「って」の前後に現れるものが多かった。

(27) a. 旅へ出て、あんまり心持ちの悪い時はちょっと飲むといいって、おっかさんが言ったぜ。（いちょうの実）
b. だって、いけないんですって。風が毎日そう言ったわ。（いちょうの実）
c. だって、水生が僕に、家へ遊びに来いって。（中学生の教科書）
d. (お父さんによると)するとある日いたちに見つかって食べられそうになったんですって。（銀河鉄道の夜）
e. 兄はそう言っていましたわ。あなたはあなたの持っているいちばんいいものを文学であらわすか、なにか他の形であらわすか、それはわからないが、なにかへんな力を持っているって。（愛と死）
f. さそりがやけて死んだのよ。その火が今でも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ。（銀河鉄道の夜）

上記の用例をみてみると、「a. お父さんが」、「b. 風が」、「c. 水生が」、「e. 兄が」、「f. お父さんから」など、「って」の前後に情報源が明示されていることが分かる。また、(27. d)は文脈上お父さんから聞いた話を伝えており情報源が分かりやすい。したがって、「って」は、情報源を必ず必要とすると言える。

テンスに関しては、伝聞用法「って」は「という・と話す・と聞く」など「と」の変化形であると思われ、「って」自体はテンスを持たないが、「って」の前に「言う・話す・聞く」が現れる場合はこれらにテンスが委ねられ、「言った・聞いた」になる。

４．３．２．４伝聞用法「って」の話し手の心的態度を表す戦略

ここでは、「と」の変化形、若しくは伝聞用法「という・と話す・と聞く」などの縮約とみられる「って」は、どのように用いられるのかを確認した後、伝聞用法「って」の話し手の心的態度を表す戦略を確認するため、伝聞「そうだ」、伝聞用法「という」との置き換えを行うことにする。

(28) a. あれ、ティファニーの店で二千二百ドルもしたんですって。(オーヘンリ傑作選)
b. 昔はこの海にぞくぞくとくじらが現れたってね。潮流が村に近づいているし、好物のいかやあじが多いせいらしい。 (6 年生の教科書)
c. 昔のバルドラの野原に一匹のさそりがいて小さな虫なんか殺して食べて生きていたんですって。 (銀河鉄道の夜)
d. わたしはほしいんだけどね。ぱぱはねこがきらいなのよ。ばけるから、いやなんだって。 (小学校 5 年生の教科書)
e. 相手は今でもお前の話をするってさ。(屋根部屋のプリンス)

以上の用例を「そうだ」に置き換えると、以下のようになる。

(29) a. *あれ、ティファニーの店で二千二百ドルもしたんですそうだ。
b. 昔はこの海にぞくぞくとくじらが現れたそうね。潮流が村に近づいているし、好物のいかやあじが多いせいらしい。
c. 昔のバルドラの野原に一匹のさそりがいて小さな虫なんか殺して食べて生きていたそうだ。
d. わたしはほしいんだけどね。ぱぱはねこがきらいなのよ。ばけるから、いやなんだそうだ。

e.*相手は今でもお前の話をするそうさ。

(29.a)は、丁寧体の「んです」と伝聞「そうだ」が置き換えできず非文になり、(29.b～d)は「そうだ」に置き換えた場合、話し手は他から入手した情報に対し、それが真であるとある程度確信を持ち、肯定的姿勢で伝えていると思われる。さらに、伝聞「そうだ」は、情報に対する肯定的な姿勢から終助詞「ね、よ」以外は共起できないため、(29.e)の「お前の話をするそうさ」は非文になる。さらに、「って」が主に話し言葉で用いられるためか、「って」を「そうだ」に置き換えると情報伝達においての臨場感がなくなってしまう。

以下では、「という」に置き換えて情報に対する話し手の心的態度を表す戦略を確認してみよう。

(30)a.*あれ、ティファニーの店で二千二百ドルもしたんですという。

b.*昔はこの海にぞくぞくとくじらが現れたというね。潮流が村に近づいているし、好物のいかやあじが多いせいらしい。

c.*昔のバルドラの野原に一匹のさそりがいて小さな虫なんか殺して食べて生きていたんですという。

d.*わたしはほしいんだけどね。ぱぱはねこがきらいなのよ。ばけるから、
いやなんだという。

e.*相手は今でもお前の話をするというさ。

主に話し言葉で用いられる伝聞用法「って」を「という」に置き換えた場合は、情報と話し手の距離や情報に対する話し手の関与の面においての違いはあまり感じられないが、(30.a, c, d)のような「んです、んだ」の「ん」と「という」が共起できないことから、話し言葉には、「という」より「って」を用いた方がコミュニケーションにおける臨場感と、話し手の情意を表出しやすいことが分かった。また、(30b, e)は終助詞「ね、さ」と「という」が共起できず非文になる。

４．３．２．５伝聞用法「って」の情報が聞き手に及ぼす影響

伝聞用法「って」は「と」の変化形であり、「という・と聞く・と話す」の縮約とも解されるが、伝聞用法「という」と違い、主に話し言葉で用いられるという特徴から、モーダル性の強い表現や終助詞がついた「んですって」、「ってね」、「ってさ」、「ってよ」などと共起しやすいことが分かる。

さらに、伝聞用法「って」と伝聞用法「ようだ」は情報源を明示するか、文脈のなかで情報源が確認できなければ用いられないという点においては共通しているが、伝聞用法「ようだ」と違い、「命令・疑問・勧誘」がそのまま残り、情報に対する話し手の内面化の程度が低いことから、情報に対する話し手の関与が低い客観的伝聞表現であると考えられる。

伝聞用法「って」には、情報と距離を置きたい、情報の真偽判断を保留したいという話し手の表現意図が窺える反面、情報伝達の面においてはモーダル性の強い表現や終助詞と共起しやすく、積極的に関わっていることが分かる。しかし、聞き手の立場から考えると、伝聞用法「という」と同じように情報を客観的に伝えていることに変わりはない。

４．３．３伝聞用法「とか」の情報とモダリティ

「とか」は、従来格助詞「と」に係助詞「か」が付いたものといわれ、二つまたはそれ以上の事物を並立させる場合や、曖昧さを表す表現として用いられていた。また、最近では「映画をみたい」というところを、「映画とかみたい」と、「を」の代わりに「とか」をつける場合もある[52]。このように「並列・曖昧」用法で用いられてきた「とか」が、伝聞に用いられるようになったことは比較的最近のことで、例えば「とか」は「明日は雨だとか」のように文末に用いられ、伝聞の役割を果たす。この項では伝聞用法「とか」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞用法「とか」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．３．３．１伝聞用法「とか」の先行研究

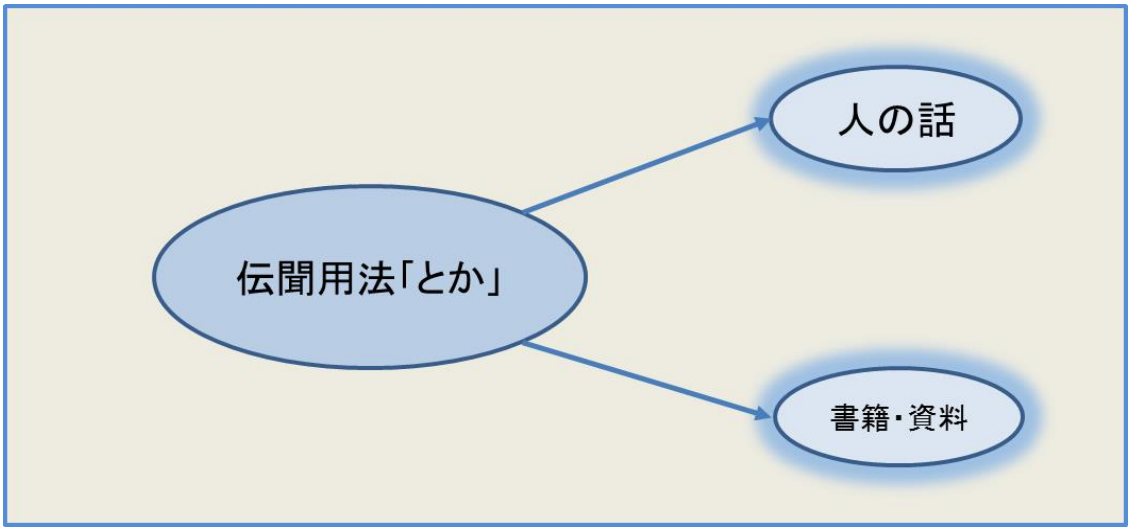
「とか」は、「先生は明日戻られるとか」や「明日は雨だとか」のように、「とか言う」の述語省略形としても用いられるが、辻(1990:18)は、このような「とか」を対人関係の拘束力を緩衝するための語用論的方策であるとした。つまり、「とか」を用いることにより、発話によって設定される対人関係上の責任・拘束から逃れ、衝突を避けるための機能をなしているということである。砂川(1999:73)は、「とか」はもともと、明確な並立を表す格助詞「と」と、疑問を表す助詞「か」が文法化されたものであるため、「とか」表現には、並立性と曖昧性が共存すると述べている。また、並立助詞と一見無関係にみえる引用句に、「とか」が文法化して引用マーカーとなるのは、「とか」表現の並立性、曖昧性と、引用というコンテクストのもつ並立性、曖昧性が比喩的に類似していると考えるからであると指摘した。本稿では、情報の伝

52 『現代用語の基礎知識』(1993)にはこのような「とか」の用法を若者ことばと定義し、「表現を和らげる無意味な付け足し」としている。

達に用いられる「とか」を伝聞用法「とか」と称することとして考察を続ける。

４．４．３．２伝聞用法「とか」の情報の入手経路

以下は伝聞用法「とか」の情報の入手う経路を図式化したものである。



＜図 14. 伝聞用法「とか」の情報の入手経路＞

伝聞用法「とか」の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達である。〈図 14〉のように、伝聞用法「とか」は書籍や資料による情報、話された情報の両方の情報を伝達することができるが主に話された情報に多用される。

４．３．３．３伝聞用法「とか」の情報源とテンス

ここでは、伝聞用法「とか」の情報源を確認してみよう。

(31) a. 画家であり、スポーツマンで、全インドのハンマー投げのゴールドメダリストだとか。
（現代日本語書き言葉コーパス）

b. 「葛原さんなら、うちにはいないよ。先週の日曜の晩だったかな。車で…事故を起こしたとかで。おとつい家族と親戚の人が来て、荷物を引き取って行った。」
（現代日本語書き言葉コーパス）

c. なにしろ盛夏期には、日中４５度Ｃを超えることもあるとか。
（現代日本語書き言葉コーパス）

d. 私も人から聞いたのですが、昔ハワイで津波が起こったとき日本人が「津波」と言っ

たので広まったとか？（Yahoo!知恵袋/ニュース、政治、国際情勢/ニュース、事件）

e. ライアン牧師から聞いたんですが、二、三年前に事故に遭われたとか。

（現代日本語書き言葉コーパス）

f. 噂では、御自分の容貌と比べられて美容の参考にされるとか。

（現代日本語書き言葉コーパス）

以上のように、伝聞用法「とか」は情報源が明示されないのが普通で、疑問詞「か」の影響で話し手の情報に対する不確実・不確かといった認識態度が窺える。また、(31. e)のようにあえて情報源が明示されると、「とか」を用いて伝えられる内容が話し手や聞き手にとってあまり好ましくない・人に知られたくないような内容に触れている場合が多い。また、伝聞用法「とか」は「って」と同じように、「とか」の前に「言う・聞く」など発話動詞が続く場合、以下のように「言う・聞く」の発話動詞にテンスが委ねられる。

(32) a.「･･･ええお姉さんが知り合いで良かったな。前も夏尾がホントのお姉さんだったらいいのにとか言うてたけど」由香をだしに、遠回しに夏尾を褒めてみたりして。

（現代日本語書き言葉コーパス）

４．３．４．４伝聞用法「とか」の話し手の心的態度を表す戦略

伝聞用法「とか」を、伝聞「そうだ」と伝聞用法「という」に置き換えて、話し手の心的態度を表す戦略を比較してみると以下のようになる。

(33) a. キリストをえらぶかどうかの時期を迎えると、とたんに先祖や両親と同じ墓には入れなくなるとか、位牌はクリスチァンになったさい、つくってもらえないから、遺族たちの手で日毎、、（現代日本語書き言葉コーパス）

b. ステージからファンに報告・・・ファンはみなアゼンとしたとか。

（Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ）

c. 噂では、御自分の容貌と比べられて美容の参考にされるとか。

（現代日本語書き言葉コーパス）

d. 役にたつ人になって欲しいと言う人はゼロ、具体的な職業を書く人も少なくなっているとか。（現代日本語書き言葉コーパス）

e. 大和生命が・・・倒産したとか ・・うちの主人も保険が好きなのかたくさん入っています・・・大丈夫なの大和生命で。（Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ）

f. 私も人から聞いたのですが、昔ハワイで津波が起こったとき日本人が「津波」と言ったので広まったとか？(Yahoo!知恵袋/ニュース、政治、国際情勢/ニュース、事件)

以上の「とか」は、「以前そのような話をどこかで聞いたり読んだりしたことがあるが、それが本当かどうかは分からない」といった話し手の認識態度が窺える。上記の用例を「という」に置き換えると以下のようになる。

(34)a. キリストをえらぶかどうかの時期を迎えると、とたんに先祖や両親と同じ墓には入れなくなるという、位牌はクリスチァンになったさい、つくってもらえないから、遺族たちの手で日毎、、

b. ステージからファンに報告・・・ファンはみなアゼンとしたという。

c. 噂では、御自分の容貌と比べられて美容の参考にされるという。

d. 役にたつ人になって欲しいと言う人はゼロ、具体的な職業を書く人も少なくなっているという。

e. 大和生命が・・・倒産したという ・・・うちの主人も保険が好きなのかたくさん入っています・・・大丈夫なの大和生命で。

f. *私も人から聞いたのですが、昔ハワイで津波が起こったとき日本人が「津波」と言ったので広まったという？

伝聞用法「とか」を「という」に置き換えると、話し手の情報に対する不確かな認識はあまり感じられない。(34.a～e)は、ただ単に入手した情報を淡々と伝えているだけで、話し手の情報への関与も低く感じられる。また、(34.f)が文として成立しない理由のは、伝聞用法「という」には、①他から入手した情報に対する不確かといった気持ちを表すことができない、②伝聞用法「という」と伝聞用法「とか」は、話し手の心的態度を表す戦略が違うため、「という」は「?」を付けて聞き手に情報確認を求めることができず、③伝聞用法「という」は情報源を提示してもしなくてもいいが、伝聞用法「とか」は情報源が提示されないのが普通で、さらに伝聞用法「という」は情報源が提示される場合でも「人から聞いたのですが、」のように不確かに情報源を提示することはないため、この場合は「とか」を「という」に置き換えることができないの 3 点であると考えられる。言い換えると、「とか」は自分の持っている情報が不確かなゆえに、情報を伝達する上で相手に情報の確認を求めることができる。そういった面において「とか」を用いる際の話し手は情報の真偽判断に介入することができるが、伝聞用法「という」は、もともと情報の真偽判断には関与しておらず、主に情報伝達のみに関わっていると

いう違いがある。

また、これらを「そうだ」に置き換えてみると以下のようになる。

(35)a. キリストをえらぶかどうかの時期を迎えると、とたんに先祖や両親と同じ墓には入れなくなるそうだ、位牌はクリスチァンになったさい、つくってもらえないから、遺族たちの手で日毎、、

b. ステージからファンに報告・・・ファンはみなアゼンとしたそうだ。

c. ??噂では、御自分の容貌と比べられて美容の参考にされるそうだ。(愛と死の輪舞)

d. 役にたつ人になって欲しいと言う人はゼロ、具体的な職業を書く人も少なくなっているそうだ。

e. 大和生命が・・・倒産したそうです ・・・うちの主人も保険が好きなのかたくさん入っています・・・大丈夫なの大和生命で。

f. *私も人から聞いたのですが、昔ハワイで津波が起こったとき日本人が「津波」と言ったので広まったそうですが？

以上のように、伝聞用法「とか」を伝聞「そうだ」に置き換えると、話し手の情報に対するある程度の確信や肯定的な姿勢が窺え、入手した情報に対して、よく知らない・不確かといった表現意図は表れない。そのため、(35.c)のような噂話には、「そうだ」よりは「という」を用いて、情報の真偽判断を聞き手に委ねるか、「とか」を用いて、よく知らない・不確かな情報といった表現意図を表した方が適切であろう。(35.f)をみると、伝聞「そうだ」を用いる際の話し手は、情報に対する肯定的姿勢が現れるため、聞き手に情報の確認を求めることができず非文になる。

その一方で、これまでの研究において「とか」の情報に対する認識態度は、「ぼかし・曖昧」という用語で一様に纏められてきたという印象を受けるが、本稿では、伝聞においての「とか」の用法を掘り下げて確認する。

以下の通り、伝聞用法「とか」を、①ぼかし(ぼやかし)、②入手した情報に対するよく知らない・不確かといった認識態度を表すことで、話し手の責任回避・距離感・衝突回避を目的とする曖昧表現、③聞き手のフェイス[53]をも考慮に入れた、(間)主観化された表現の三つ

53Tragott(2010)では話し手の態度や信念が表されている場合を主観化、それに聞き手をも考慮に入れている場合を(間)主観化としている。本稿では聞き手の社会的地位(丁寧体)による配慮はもちろん、広い意味で相手のフェイスを保つための配慮的なものも(間)主観化と見做している。

に分けて考察する。このような観点から考察を進めることで、これまでの話し手中心の伝聞研究における伝聞の定義、つまり「情報の受け渡し(宮崎 他 2002)、命題内容の入手の仕方(仁田 2009)」では不十分であるということを確認し、伝聞が話し手の聞き手に対する配慮を表すこともできるため、情報、話し手、聞き手の 3 要素に対する理解の中で考慮されるべきであるということを強調したい。

①ぼかし(ぼやかし)

(36)a.「･･･夏尾がホントのお姉さんだったらいいのにとか言うてたけど」由香をだしに、遠回しに夏尾を褒めてみたりして。さすがに面と向かって褒めたりするのって照れくさいからな…。(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

b. 三日三晩の難産だべさ。キナコは力つきて、もうだめだとかいってた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

(36. a～b)は、以前他から聞かされたことを直接引用的に「“”」で囲うように、「そっくりそのまま再現できないが、それらしきことを言った」とはっきり覚えていないことを、「ぼかして(ぼやかして)」現発話に用いている。このようなぼかし(ぼやかし)は、話し手の対人関係上の責任回避や情報と話し手の間に距離を置くような意図はみられず、ただ以前のコミュニケーションの場で入手した元の情報が、現発話の場で「そっくりそのまま再現できない」だけであるため、ぼかし(ぼやかし)て話していると考えられる。

②話し手の責任回避・距離感・衝突回避を目的とする曖昧表現

(37)a.(写真が破られている理由を継母から聞いてはいるが)

(継母によると)幼い私を捨てて去った母を憎むあまりに父が顔を破ったとか。(ヤネ)

b. 大和生命が・・・倒産したとか ・・うちの主人も保険が好きなのかたくさん入っています・・・大丈夫なの大和生命で。(Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ)

c.(患者の容態を聞かれ、容態を直接確認してはないが)

会長の主治医いわくすごい回復力だとか。(ツ)

d.(検事の事務官が事件担当弁護士について検事に話すとき)

勝訴率は 9 割だが気が向く事件だけ受けるとか。(ケ)

e.「それに、あのテレビの特集、すごい人気らしいよ。視聴率が、二十パーセント以上とかいってた。(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

(37.a)は直接聞かされた情報であるが、それが本当かどうかは確認できないといった、話し手の情報に対する距離感が感じられる。(37.b)はおそらくメディアを介した情報を、(37.c)は主治医からの情報を伝達していると思われるが、情報と話し手の間に距離感が感じられる。(37.d～e)は、直接聞かされた話でない(第 2 次伝聞)がゆえに、情報伝達においての話し手の自信のなさ、責任回避といった態度が窺える。伝聞用法「とか」のこのような距離感・責任回避は、伝聞用法「らしい」が持つ不確かさによる距離感・責任回避と共通していることが分かる。上記の伝聞用法「とか」を「らしい」と置き換えてみると以下のようになる。

(38)a.(写真が破られている理由を継母から聞いてはいるが)
(継母によると)幼い私を捨てて去った母を憎むあまりに父が顔を破ったらしい。
b.大和生命が・・・倒産したらしい ・・・うちの主人も保険が好きなのかたくさん入っています・・・大丈夫なの大和生命で。
c.(患者の容態を聞かれ、容態を直接確認してはないが)
会長の主治医いわくすごい回復力らしい。
d.(検事の事務官が事件担当弁護士について検事に話すとき)
勝訴率は 9 割だが気が向く事件だけ受けるらしい。
e.「それに、あのテレビの特集、すごい人気らしいよ。視聴率が、二十パーセント以上らしい。

以上のように、責任回避・距離感・衝突回避を目的とする「とか」は、「らしい」と置き換えても意味的違いはあまり感じられない。また、両方とも客観的証拠を必要とするとはいえ、責任や衝突を避け、距離を置きたいといった話し手の主観が介入できるやや主観的伝聞表現である。

しかしながら、伝聞用法「とか」は引用「と」の影響で「とか」の前に「疑問・命令・勧誘・丁寧形」が来ることができるが、伝聞用法「らしい」は推論由来の伝聞表現であるため、「疑問・命令・勧誘・丁寧形」は「らしい」の前に来ることができない。また伝聞用法「とか」は丁寧形をとらないのに対し、伝聞用法「らしい」は丁寧形をとり得るが、「とか」が丁寧形をとらないのは、疑問を表す助詞「か」が文の一番末尾に付くので「か」の後ろに他の助詞や助動詞が付くことができないからである。

一方で、伝聞用法「とか」は以下の用例(39)をみると分かるように、話し手の聞き手に対

する考慮が窺えるものも確認できた。Lewis(2006:57)[54]では、信念や評価のような話し手中心の表現が聞き手のフェイスを含む場合、聞き手のフェイスをどのようにするかの戦略として、はっきり言い切るよりは推論のように話すと述べている。以下のような用例を用いる際の話し手は、情報にある程度信頼を寄せながらも、敢えて「とか」を用いることでよく知らないコトガラのように述べているため、聞き手のフェイスを保つ戦略としてその役割を果たしているとみて差し支えないだろう。そのため、本稿ではこのような「とか」を相手のフェイスを保つ伝聞表現とする。

③聞き手のフェイスを考慮に入れた表現

(39)a.(会長に自ら推薦した人が入社試験で何点取ったのかと聞かれて秘書が)
3人とも全科目0点だとか。(ヤ)
b.(かなりの金額の)お金を一日で使ったとか。(ヶ)
c.(現在の聞き手と話し手の状況に比喩して)
書記長の様態が好転した。側近たちは不安になり目が覚めたら自分たちが危ないと、そして6人は書記長を暗殺したとか。(ツ)

用例(39)から、話し手は他から入手した情報に信頼を寄せながらも、情報内容が聞き手と何らかの関りを持っているため、「とか」を用いて聞き手を配慮していることが分かる。さらに、伝聞用法「とか」のこのような意味機能は情報にある程度信頼を寄せているにも拘わらず、敢えて情報源を明かさず、「とか」を用いることで入手した情報を不確かなものとして提示するのが、この場合の話し手の表現意図である。

以上の例を「そうだ」に置き換えてみよう。

(40)a.3人とも全科目0点だそうですが。
b.お金を一日で使ったそうですが。
c.書記長の様態が好転した。側近たちは不安になり目が覚めたら自分たちが危ないと、そして6人は書記長を暗殺したそうだ。

「そうだ」は、情報にある程度確信を持っている時に用いられる伝聞表現であるため、用

54 Lewis(2006:57)argues that “the expression of speaker oriented meaning such as beliefs and evaluation involves face, and one strategy for managing face is to invite inferences rather than be explicit”

例(39)のように情報を不確かに提示する場合には用いられない。しかし、上記(40.a～c)の伝聞用法「とか」を伝聞「そうだ」に置き換えると、文の成立は問題ない。ただし、他から入手した情報を肯定的な姿勢で伝えるということになり、聞き手に対する配慮は窺えない。(40)の伝聞用法「とか」を「という」に置き換えると以下のようになる。

(41)a. 3 人とも全科目 0 点だという。
b. お金を一日で使ったという。
c. 書記長の様態が好転した。側近たちは不安になり目が覚めたら自分たちが危ないと、そして 6 人は書記長を暗殺したという。

(39)の話し言葉による伝聞用法「とか」の用例を、「という」に置き換えた場合、「という」が主に書き言葉で用いられ、情報内容にあまり介入せず、ただ単に情報を客観的に提示しているため、置き換えが少々不自然に感じられるところもある。また「という」は、相手に対する配慮も感じられず、他から入手した情報をただ伝えているのみである。このことから、伝聞用法「とか」は伝聞「そうだ」や伝聞用法「という」より、相手のフェイスを保つ(間)主観化が進んでいる伝聞表現であると思われる。次は、(39)の伝聞用法「とか」を「って」に置き換えて比較してみよう。

(42)a. 3 人とも全科目 0 点だって。
b. お金を一日で使ったって。
c. 書記長の様態が好転した。側近たちは不安になり目が覚めたら自分たちが危ないと、そして 6 人は書記長を暗殺したって。

以上のように、伝聞用法「とか」を「って」に置き換えた用例(42)は、用例(41)の「という」と意味的に違いがなく、他から入手した情報をただ伝えているように見える。最後に用例(39)の伝聞用法「とか」を「らしい」に置き換えてみると以下のようになる。

(43)a. 3 人とも全科目 0 点らしいですが、
b. お金を一日で使ったらしい。
c. 書記長の様態が好転した。側近たちは不安になり目が覚めたら自分たちが危ないと、そして 6 人は書記長を暗殺したらしい。

(39)の伝聞用法「とか」を、(43)のように「らしい」に置き換えると、「らしい」と伝聞用法「とか」が、情報を不確かなものとして認識しているという面で共通しているため、問題なく置き換えできると言える。つまり、「らしい」に置き換えても、話し手は入手した情報を直接的に提示せず、敢えて不確かなコトガラのように提示し、聞き手に配慮していると思われるため、伝聞用法「らしい」も(間)主観化が進んでいる伝聞表現であると言え、「とか」も話し手による情報再構築が行われると考えられる。ただし、「とか」を「らしい」に置き換えることにより、「とか」の情報確認の機能はなくなる。

以上、伝聞用法「とか」の話し手の表現意図を、他から得た情報を直接引用的にそのまま再現できない代わりに、それらしきことを聞いたという意味の①ぼかし(ぼやかし)と、情報を不確かに持ち込むことによる、②責任回避・距離感・衝突回避、また、話し手と聞き手の関係や情報と聞き手の関係を考慮した、③相手のフェイスを保つ、という三つに分類することができる。さらに、「とか」の前文に「命令・疑問・勧誘・丁寧形」が入らない上、ただ情報を受け渡すという伝聞機能だけではなく、話し手の認識作用により情報から距離を置くといった面で、他の伝聞用法「という」、「って」より主観的であると言える。また情報伝達の際に聞き手を考慮するといった面では、伝聞「そうだ」より主観的伝聞表現であることが分かった。

また伝聞用法「とか」は、「らしい」と共通している面があり、用例(36)、(37)のように、情報を不確かなものとして認識している話し手の姿勢を表すこともでき、場合によっては、(43)の例のようにはっきり言われたことであっても、話し手の表現意図により不確かなもののように持ち込むことで、聞き手への配慮が窺え、相手のフェイスを保つという面で共通している。

４．３．４．５伝聞用法「とか」の情報が聞き手に及ぼす影響

「とか」の情報共有の確保手段は、他から得た情報を伝えることであるが、話し手の心的態度を表す戦略は、①もとの情報をそっくりそのまま思い出せることはできないが、大方このようなことを言っていたというぼかし(ぼやかし)以外にも、②責任回避・距離感・衝突回避、③聞き手のフェイスを保ちつつ確認する伝聞表現であると解釈される。

しかし、聞き手の立場から考えると、上記の①の場合は、情報内容をそっくりそのまま思い出せないだけであるため、情報の真偽判断にあまり介入できず、②、③の場合は、情報が不確かに提示されているため、情報の真偽判断に介入できると言える。

以上で確認したように、「とか」は話し手の聞き手に対する配慮も表すことができる伝聞表現である。Taougott(2010)によると、文法化の段階において主観化が間主観化より先行し、これらが一方向性を持っていて、話し手(書き手)の信念や態度を表す「主観的な」意味から、

さらに、聞き手(読み手)の信念や社会的地位(認識的・社会的注意)などに対する、話し手の注意を表す「間主観的な」意味へと変化すると述べている。このように発話の基本構成を作り、話し手が自分の信念の表出や社会的注意を目的として意味を採用する理由に聞き手が考慮されていると考えると、「とか」が「並列」から「ぼかし」、「伝聞」として用いられ、さらには聞き手のフェイスを保つ表現にまで意味拡大してきたことは、話し手の認識的変化の語用論的動機付けによるものであると言える。また、「らしい」も「様態」表現から推論、情報を伝達する「伝聞」に意味拡大し、さらには話し手だけではなく、聞き手のフェイスをも保つ表現として用いられるようになった。これら「らしい」と「とか」のもつ不確かさ・曖昧さが、伝聞において情報を不確かに提示したい話し手の表現意図と結びつきやすかったことが、意味拡大の原因ではなかろうか。

これまで伝聞とは、他から入手した情報を取り次ぐ・受け渡すこととされてきた。本稿は、伝聞の第一義は情報共有の確保であるが、情報共有の確保手段やそれぞれの表現に込められた話し手の表現意図が異なるため、伝聞表現の選択は、情報と話し手、聞き手を取り巻く状況に対する考慮により選ばれると考えている。また、伝聞表現内の構造的機能変化(という・って)や表現の意味拡大(らしい・とか)は、語用論的動機付けにより起こると考えられる。

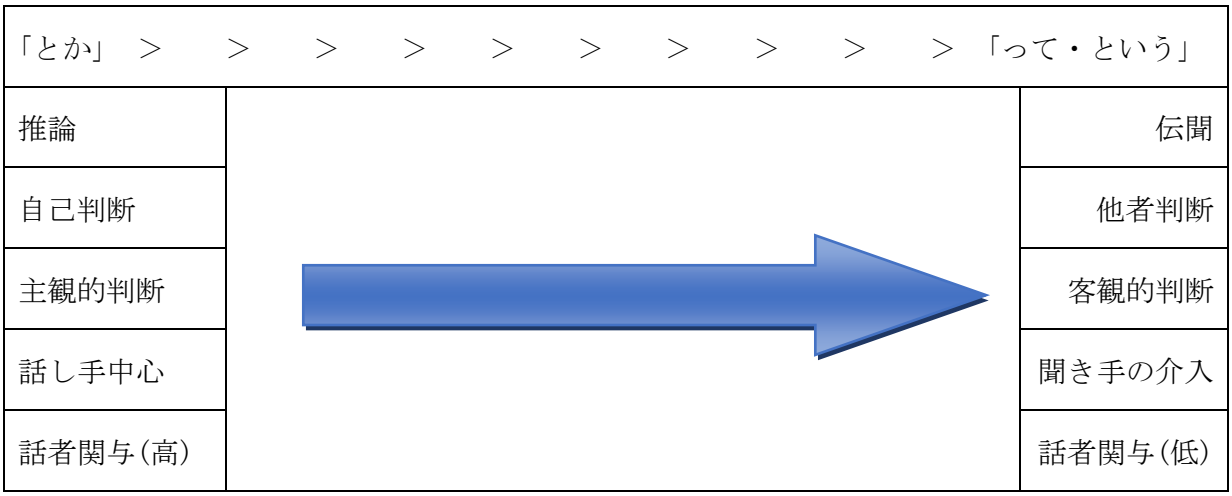
４．３．５伝聞用法「という」「って」「とか」の情報とモダリティの関係

これまでの考察の結果、伝聞用法「という」は直接引用とまでは言えないが、「という」の前接の「命令・疑問・勧誘・丁寧形」がそのまま残っているため、これらを取り除くなどの話し手の認識作用が見られず、直接引用に近い感じで用いられる。伝聞用法「という」が主に書き言葉で用いられることに対し、伝聞用法「って」は「という」の「と」の変化形、若しくは「という・と聞く」の縮約形であり、主に話し言葉で用いられるため、意味用法の拡大が多く、終助詞や情意を含む表現と共起できる。このことから、情報伝達の面においては「って」が「という」より積極的であると言えるが、情報を直接引用に近い感じで用いるという点に変わりはない。「とか」は並列助詞からぼかし、最近では伝聞に用いられ、「①ぼかし(ぼやかし)」、「②責任回避・距離感・衝突回避」、「③聞き手のフェイスを保つ」領域にまで用法が発展しているが、基本的には情報の真偽に関わらず不確かなものとして提示していることから、情報への依存度は低い。以上の考察を纏めると以下の〈表 8〉のようになる。

＜表 8. 伝聞用法「という」「って」「とか」の話し手の表現意図＞

伝聞用法	特　　徴	情報依存	話者関与
「という」	主に書き言葉に用いられ、他から入手した情報をできるだけ入手した形のまま伝える。話し手の情報判断は保留され、情報の真偽判断は聞き手に委ねられる。	高 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 低	低 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 高
「って」	他から入手した情報を直接引用に近い感じで用いるが、「という」に比べて用法が多岐に意味拡張しており、主に話し言葉で用いられることから、終助詞や情意を含む表現と共起しやすい。		
「とか」	話し手は情報の真偽にはあまり興味を持っておらず、ただ情報を不確かなものとして提示している。具体的な用法を以下の三つに分けることができる。 ①ぼかし、②責任回避・距離感・衝突回避、 ③情報と聞き手を考慮し、聞き手のフェイスを保つ。		

以下の〈図 15〉は、「という」が直接引用に近い感じで用いられることを踏まえ、話し手の認識態度と情報判断の主体により並べ替えたものである。ただし、「って」は「という」の「と」の変化形、若しくは「という・と聞く」の縮約と思われるため、「という」と同じ位置に属させた。



＜図 15. 伝聞用法「という」「って」「とか」の情報とモダリティ＞

４．３．６推論表現と伝聞表現の連続性とモダリティ関係

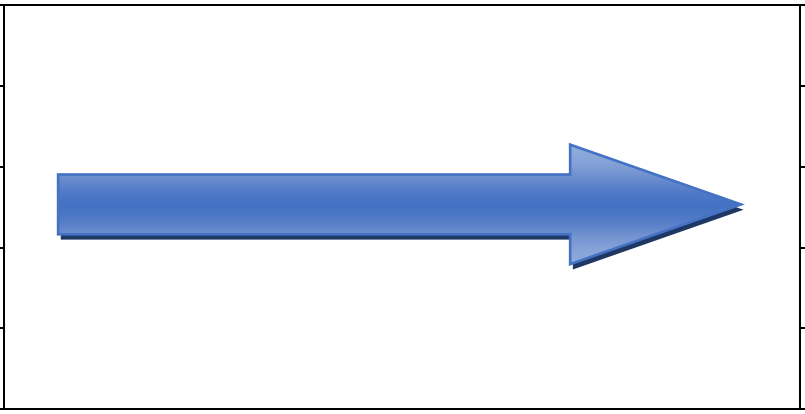
さらに、これまで考察してきた推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」、伝聞「そうだ」、伝聞用法「という」、「って」、「とか」を、証拠・情報と話し手の認識態度という観点から纏めて

みると、次の〈表 9〉のように表すことができる。

＜表 9. 推論表現と伝聞表現の話し手の表現意図＞

推論と伝聞用法	特　　徴	情報依存	話者関与
伝聞用法 「という」	主に書き言葉に用いられ、他から入手した情報をできるだけ入手した形のまま伝える。話し手の情報判断は保留され、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。	高 ・ ・	低 ・ ・
伝聞用法 「って」	他から入手した情報を直接引用に近い感じで用いるが、「という」に比べて用法が多岐に意味拡張しており、主に話し言葉で用いられることから、終助詞や情意を含む表現と共起しやすい。	・ ・ ・	・ ・ ・
伝聞「そうだ」	「そうだ」の前文に命令・疑問・勧誘・丁寧形が入らず、話し手は情報の再構築に関わっている。情報にある程度確信を持ち、肯定的姿勢で伝える。	・ ・ ・	・ ・ ・
推論・伝聞用法 「らしい」	視覚・聴覚・内的考察・外的証拠による考察、内面的考察・資料など文字化されたもの・人の話による思考的判断に用いられる。証拠への依存を暗示している客観的推論判断であるが、証拠を不確かなものとして提示しているため、伝聞用法の「らしい」においても、情報に対する不確かという話し手の表現意図が窺える。	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・
伝聞用法 「とか」	話し手は情報の真偽にはあまり関わっておらず、ただ情報を不確かなものとして提示している。具体的な用法を以下の三つに分けることができる。①ぼかし、②責任回避・距離感・衝突回避、③情報と聞き手を考慮し、聞き手のフェイスを保つ。	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
推論・伝聞用法 「ようだ」	視覚・聴覚・味覚・嗅覚・内的感覚・内的考察・資料など、文字化されたもの・人の話といった証拠が、話し手の認識において内面化されたものとして言語化される。「ようだ」は主観的判断・思考的判断に用いられるため、伝聞用法「ようだ」においても他から入手した情報が話し手の認識世界の中で内面化され、話し手の主観が介入している。	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・
推論「そうだ」	視覚・聴覚・内面的感覚・内的考察・人の話による直観的気づきを表しているため、証拠の言語化まで時間的に短く、思考による主観的推論判断にも用いられる。	・ ・ 低	・ ・ 高

さらに、これらの話し手の認識態度と情報判断の主体は次の<図 16>のようになり、矢印が右に進むほど、情報に対する話し手の認識態度は客観的になる。また、入手した情報に対する話し手の判断は保留され、情報の真偽判断は聞き手に委ねられる。逆にいうと、矢印が左に進むほど情報に対する話し手の主観の介入が高くなるため、たとえ他から入手した情報であっても、それが話し手の推論のように提示されると言える。したがって情報判断の主体は話し手になる。

「(し)そうだ」 ＞ 「ようだ」 ＞ 「とか」 ＞ 「らしい」 ＞ 「(する)そうだ」 ＞ 「って・という」		
推論		伝聞
自己判断		他者判断
主観的判断		客観的判断
話し手中心		聞き手の介入
話者関与(高)		話者関与(低)

＜図 16. 推論表現から伝聞表現までの情報とモダリティ＞

４．４連体修飾形「とのことだ」「ということだ」の情報とモダリティ

「とのことだ」、「ということだ」は「連体節＋「との・という」＋こと(事)」の形で形成されている連体修飾形伝聞表現である。「とのことだ」、「ということだ」は日常生活よりビジネスの場や新聞、ニュースなどやや堅い場面で用いられることが多いため、これらは共に客観的伝聞表現と認識されている。この節では「とのことだ」、「ということだ」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場における話し手、聞き手、情報の関係の中からこれらに込められた話し手の表現意図を考察し、最後に本稿で対象としている伝聞表現8つを広義の意味で、伝聞表現というカテゴリーの中から話し手のモダリティの位置づけを試みたい。

４．４．１伝聞「とのことだ」の情報とモダリティ

伝聞「そうだ」が日常会話で多用され、情報にある程度確信を持って肯定的姿勢で伝える伝聞表現であるのに比べ、伝聞「とのことだ」はビジネスの場や新聞、ニュースなどやや堅い

場面で用いられるため、情報と距離を置きたい話し手の心的態度が感じられる。この項では「ということだ」と比較しながら、「とのことだ」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞「とのことだ」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．４．１．１伝聞「とのことだ」の先行研究

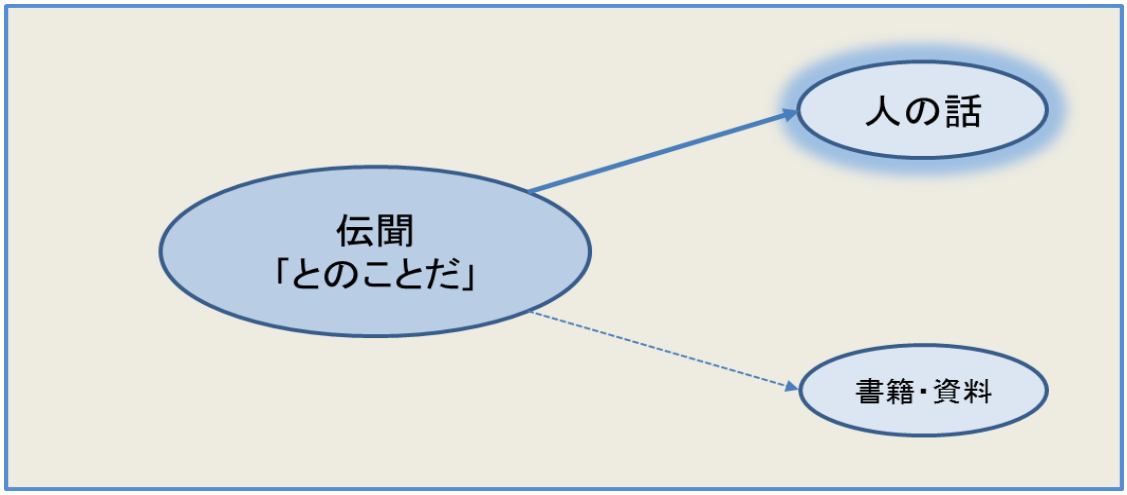
宮崎 他(2002:163)では、「とのことだ」、「ということだ」が伝聞の受け渡しや内容を要約して伝えるという特徴が窺えるとし、これらは、基本的に情報源が特定されている場合でなければ使用できないと述べ、次のような例を提示している。

(a) 専門家の分析では、あの会社はもうすぐ倒産するかもしれない
{そうだ/とのことだ/ということだ}
(b) 噂では、あの会社はもうすぐ倒産するかもしれない
{そうだ/*とのことだ/ということだ}

また、澤西(2002:41)は、{そうだ/らしい/とのことだ/ということだ/と聞く}を比較し、「とのことだ」は、「メッセージ性の強いもの」が一番居座りがいいと述べ、「とのことだ」は、情報から距離を保っておきたいとする、話し手の心理態度が表出したものと指摘している。

４．４．１．２伝聞「とのことだ」の情報の入手経路

伝聞「とのことだ」は聞き手と話し手の間に情報共有認識がなく、「とのことだ」の話し手の情報共有の確保手段は、話し手が他から入手した情報を聞き手に伝達することである。また、話し手の情報の入手経路は以下の<図 17>の通りである。



＜図 17. 伝聞「とのことだ」の情報の入手経路＞

「とのことだ」は、書籍など資料による伝聞表現に用いることもできるが、主に話し手が直接聞かされた、あるいは頼まれたことの報告に用いられる。

４．４．１．３伝聞「とのことだ」の情報源とテンス

「とのことだ」は、「との」に「こと」が加わり、「と＋の＋こと」の構造を成し、連体修飾形「との」の特徴を引き継ぐ客観的伝聞表現である。情報源に関しては「そうだ」、「という」が言い伝えに用いることができる反面、「とのことだ」は言い伝えや諺などには用いられず、文中や文脈から情報源が現れない場合にも用いることができない。

(44) a. 隊長は「家政婦のミタ」にも出演した人気子役の本田望結が務め、２月にお披露目イベントが予定されているとのこと。　（2012 年 1 月 20 日　読売新聞）

b. 「来ていただけるのはありがたい」が、さすがに心配になったとのこと。
（2012 年 1 月 26 日　読売新聞）

c. 関係者によると宿泊客の多くはアメリカ人だが、最近は日本人も増えているとのこと。　（2012 年 1 月 30 日　読売新聞）

d. 同社によると、本製品はクラウド市場をターゲットにしたビジネスユース向け製品とのこと。　（2012 年 2 月 15 日　読売新聞）

e. 同社によれば、（中略）特に、北の地方ほど寒波の影響が長引くため、桜の開花も遅くなる可能性が高いとのこと。　（2012 年 2 月 6 日　読売新聞）

f. 各回、ネイティブ講師 1 名を除き、生徒最大 9 人まで参加可能。授業内容は、各回の参加者を見て決定するとのこと。　（2012 年 2 月 1 日　読売新聞）

g. 君は？と聞き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情已むを得んから処決してくれと言われたとの事だ。（坊ちゃん）

以上のように、「とのことだ」は「c. 関係者によると」、「d. 同社によると」、「e. 同社によれば」のように情報源が明示され、(44. a, b)はインタビューの内容であると思われ、文脈から情報源が分かる。また(44. f)のように新聞の英会話教室の紹介記事であるため、情報源がすぐ分かる、「g. 校長室で」のように、文脈から情報源が分かるようなものでなければ、伝聞「とのことだ」を用いることはできない。さらに、伝聞「とのことだ」は主にビジネスの場で用いられるという特徴から、「とのことです」のように丁寧体として出現する頻度が多かった。また、伝聞「とのことだ」のテンスに関して、今回の調査の限り、小説や映画、ドラマでは「とのことでした」形が現れなかったが、実際のブログやメモ、メッセージなどでは以下の(45)のように、「とのことでした」形が現れた。伝聞「そうだ」が、「そうだった」形をとらないという点を踏まえると、これは、伝聞「とのことだ」が持つ特徴であると言えるのではないだろうか。

そのため本稿では、このような「とのことでした」をテンスと考えるより、過去のある時点においての出来事に対し、それを話し手が気づいた時点が発話時現在より過去という時間相の観点で捉え、情報と時間的距離を置くことで心理的距離を表しているとみる。もともと、伝聞「そうだ」、「とのことだ」は、両方とも伝聞のみに用いられる表現であるが、「とのことだ」の方が、「とのことでした」、「とのことだった」を用いることで情報と心理的距離を置き、さらに客観的に伝えることができると考える。

(45) a. 社外への映像提供もされているとのことでしたので、鎌倉などの映像をお探しの際は、是非ご利用下さいとのことでした。（http://www.sony.jp/products）

b. 弁護士に聞きましたところ、有料ではあるが事前調査をかけた方がよいのではないかとのことでした。（http://q.hatena.ne.jp/1334046947）

４．４．１．４伝聞「とのことだ」の話し手の心的態度を表す戦略

まず、用例(44)の伝聞「とのことだ」を伝聞「そうだ」に置き換えて、これらの情報に対する話し手の心的態度を表す戦略を比較してみよう。

(46) a. 隊長は「家政婦のミタ」にも出演した人気子役の本田望結が務め、２月にお披露目イベントが予定されているそうだ。（2012 年 1 月 20 日 読売新聞）

b.「来ていただけるのはありがたい」が、さすがに心配になったそうだ。
(2012 年 1 月 26 日 読売新聞)

c. 関係者によると宿泊客の多くはアメリカ人だが、最近は日本人も増えているそうだ。
(2012 年 1 月 30 日 読売新聞)

d. ?同社によると、本製品はクラウド市場をターゲットにしたビジネスユース向け製品だそうだ。 (2012 年 2 月 15 日 読売新聞)

e. ?同社によれば、(中略)特に、北の地方ほど寒波の影響が長引くため、桜の開花も遅くなる可能性が高いそうだ。 (2012 年 2 月 6 日 読売新聞)

f. ?各回、ネイティブ講師 1 名を除き、生徒最大 9 人まで参加可能。授業内容は、各回の参加者を見て決定するそうだ。 (2012 年 2 月 1 日 読売新聞)

g. *君は？と聞き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情已むを得んから処決してくれと言われたそうだ。(坊ちゃん)

(46. a, b)は文脈から情報源が分かる用例、(46. c)は情報源が明示されている典型的な伝聞「とのことだ」であり、(46. d, e)は、「同社によると(よれば)」のように文脈から情報源が明らかであるといえる文である。(46. f)は、英会話教室の無料体験レッスンの紹介記事であるが、用例(46)の置き換えから「とのことだ」を伝聞「そうだ」に置き換えると、伝聞「そうだ」が主に話されたことに用いられるため、情報に対する話し手の肯定的態度が窺えるため、用例(46)のように新聞記事には返って不自然になる場合もある。(46. g)は「君は？と聞き返すと」と伝聞「そうだ」が共起できず、非文になる。伝聞「とのことだ」を「ということだ」に置き換えると、以下のようになる。

(47)a. 隊長は「家政婦のミタ」にも出演した人気子役の本田望結が務め、２月にお披露目イベントが予定されているということ。 (2012 年 1 月 20 日 読売新聞)

b.「来ていただけるのはありがたい」が、さすがに心配になったということ。
(2012 年 1 月 26 日 読売新聞)

c. 関係者によると宿泊客の多くはアメリカ人だが、最近は日本人も増えているということ。 (2012 年 1 月 30 日 読売新聞)

d. 同社によると、本製品はクラウド市場をターゲットにしたビジネスユース向け製品ということ。 (2012 年 2 月 15 日 読売新聞)

e. 同社によれば、(中略)特に、北の地方ほど寒波の影響が長引くため、桜の開花も遅くなる可能性が高いということ。 (2012 年 2 月 6 日 読売新聞)

f.各回、ネイティブ講師1名を除き、生徒最大9人まで参加可能。授業内容は、各回の参加者を見て決定するということ。（2012年2月1日 読売新聞）

g.君は？と聞き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情已むを得んから処決してくれと言われたということだ。（坊ちゃん）

以上の(47.a～g)は、伝聞「とのことだ」を伝聞用法「ということだ」(4.4.2 参照)に置き換えても構文的には問題なく成立し、意味的にはやや柔らかい伝聞表現になる。また以下の(48.a,b)は、一つの文の中に「とのことだ」と「ということだ」が一緒に現れている場合であるが、(48.a)は、これらの順番を変えても問題が生じない反面、(48.b)の場合は、「ということだ」を「とのことだ」に変えると意味の差が生じる。これは「ということだ」の意味機能によるもので、「ということだ」は、(49.b)のように「～の理由で」という意味機能を持っているが、「とのことだ」はそのような機能を持っていないことから起因していると言える。

(48)a.KDDI の高橋誠執行役員専務と剛力さんによるトークセッションでは、剛力さんおススメのアプリとして、「空気読み。」や「昔から『ぷよぷよ』が大好きなので」ということで「ぷよぷよフィーバーTOUCH」、そして「仕事運や恋愛運が気になるので手相も気になる」とのことから「ザ・手相」、「友だちとメールをするのが好きなので」と「デコデコメール」を紹介した。(2012年3月5日 読売新聞)

b.この分野はユーザーに「楽しさ」を提供したということで評価をしているとのこと。 (2012年2月14日 読売新聞)

以上の用例(48)の伝聞「とのことだ」を伝聞用法「ということだ」にそれぞれ置き換えると、以下のようになる。

(49)a.KDDI の高橋誠執行役員専務と剛力さんによるトークセッションでは、剛力さんおススメのアプリとして、「空気読み。」や「昔から『ぷよぷよ』が大好きなので」とのことで「ぷよぷよフィーバーTOUCH」、そして「仕事運や恋愛運が気になるので手相も気になる」ということから「ザ・手相」、「友だちとメールをするのが好きなので」と「デコデコメール」を紹介した。

b.*この分野はユーザーに「楽しさ」を提供したとのことで評価をしているということ。
→この分野はユーザーに「楽しさ」を提供したという理由で評価をしているということ。

以上の考察から、伝聞機能のみを果たしていて、伝聞「とのことだ」は「との+被修飾名詞」と同じように情報源が特定されていない場合には使いにくいことが分かる。また、伝聞「とのことだ」がビジネスの場面で用いられる際には、話し手の社会的注意により丁寧体を加えることが可能である。つまり、他から入手した情報を伝える際に、社会的上下関係を考慮し、話し手の主観的認識作用により、丁寧体を加える場合もあるということだ。例えば、(平社員の私は部長に)“木村課長に 3 時に会議室に来てくれと伝えてほしい”といわれ、それを木村課長に伝える際には、(a)も(a')も成立する。

(a)部長が 3 時に会議室に来てくれとのことです。
(a′)部長が 3 時に会議室に来てくださいとのことです。

また「とのことだ」は、以下の(b)のように名詞・ナ形容詞に繋がる際は「との」と同じく、終止形「-だ」が省略された形で繋がる場合が殆どである。

(b)米国、韓国、ロシアが発射取りやめを求め、中国も「深刻な事態」との認識を示している。 (2012年3月27日　読売新聞)
(b′)米国、韓国、ロシアが発射取りやめを求め、中国も「深刻な事態だ」との認識を示している。

本稿の調査で(b′)のように省略されている終止形「-だ」を補って日本語母語話者10人にアンケートを行ったところ、(b′)は「-だ」の部分で一度文が切れ、終止形「-だ」を含む連体修飾節を強調するような印象が受けられ、「-だ」を補わない方がスムーズであるとの意見が得られた。これは、「とのことだ」が伝聞機能のみ有しているため、①命題が他から入手した情報であることをさらに強調する必要がなく、②主に新聞やニュース、ビジネスの場といった堅い場面で用いられる表現であるため、「とのことだ」だけで、すでに事実を客観的、且つ簡潔に伝えることができ、「-だとのことだ」から終止形「-だ」が省略されたと考えられる。

４．４．１．５伝聞「とのことだ」の情報が聞き手に及ぼす影響

伝聞「とのことだは主に新聞やニュース、ビジネスの場といった堅い場面で用いられ、入手した情報を簡潔で客観的に伝える伝聞表現である。しかし聞き手の立場から考えると、情報と距離を置いて客観的に伝えようとする話し手の表現意図により、情報の真偽判断は聞き

手に委ねられ、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。

４．４．２伝聞用法「ということだ」の情報とモダリティ

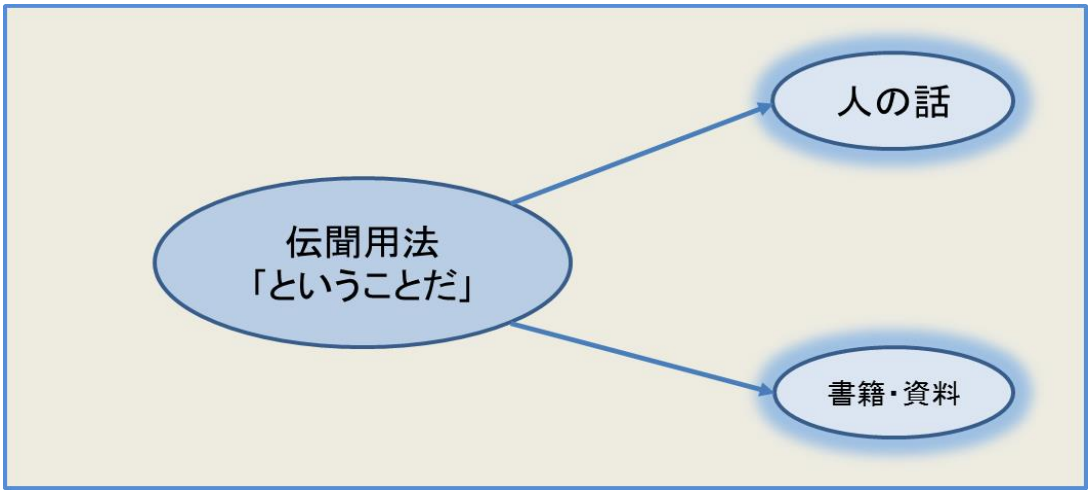
「ということだ」は伝聞以外にも物事の真偽を説明的に伝えたり、他人や話し手の考え、話し手の以前の発話をより詳しく伝える際にも用いられる。しかし、このように他人や話し手の発話をより詳しく伝えようとする過程で他から得た情報に話し手の主観が介入する余地があり、この点において伝聞「とのことだ」より優しい、やや主観的伝聞表現であると言えるだろう。この項では「とのことだ」と比較しながら、「ということだ」のモダリティを確認するため、コミュニケーションの場におけ情報の入手経路、話し手の心的態度を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響の中から伝聞用法「ということだ」に込められた話し手の表現意図を考察する。

４．４．２．１伝聞用法「ということだ」の先行研究

澤西(2002)では「ということだ」の形態、統語的特徴は、「ということだ」が伝聞以外の概言のモダリティとも共起できること、「ことだった」形をとること、また命令、意志、疑問といった表現とも共起できることであると述べている。

４．４．２．２伝聞用法「ということだ」の情報の入手経路

以下の〈図18〉は伝聞用法「ということだ」を図式化したものである。



＜図 18.　伝聞用法「ということだ」の情報の入手経路＞

伝聞用法「ということだ」の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達である。伝聞「と

のことだ」は、主に話された情報に用いられる場合が多いのに比べ、伝聞用法「ということだ」は、書籍などの資料による情報であっても話された情報であってもよい。

４．４．２．３伝聞用法「ということだ」の範疇

伝聞用法「ということだ」は、伝聞以外にも自分の前述の発話の意味を詳しく述べたり、説明文などにも用いられる。

(50)a. それは狐にこしらえたものを、賢い少しも酔わない人間の子さんが食べて下すったということです。(注文の多い料理店)

b. つまり、それは、完全にはいやされていない、ということだ。(小さな王子)

c. このカブトガニは実は大きな秘密を持っています。それは、カブトガニが、二億年も昔から、ほとんど形を変えることもなく生き続けてきた動物だと言うことです。
(4 年生の教科書)

d. 二つ目は、食べ物がおどろくほど少なくてすむと言うことです。(4 年生の教科書)

(50. a, b)は、自分の前述の発話の意味を詳しく述べている例であるが、「b. つまり、それは」という表現をみるとそれがはっきり分かる。(50. c, d)は説明文に用いられ、何らかの事態を説明するように語っている用例で、伝聞ではない。このことは、伝聞用法「ということだ」を伝聞「とのことだ」に置き換えるとさらに明確になる。

(51)a. *それは狐にこしらえたものを、賢い少しも酔わない人間の子さんが食べて下すったとのことです。

b. *つまり、それは、完全にはいやされていない、とのことだ。

c. *それは、カブトガニが、二億年も昔から、ほとんど形を変えることもなく生き続けてきた動物だとのことです。

d. *二つ目は、食べ物がおどろくほど少なくてすむとのことです。

上記の用例から分かる通り、(51. a, b)は、自分の前述の発話の意味を詳しく述べているものではなくなり、(51. c)は、「カブトガニ」が持つ秘密についての説明文から非文になり、(51. d)は、話し手の説明補充文から非文になる。以上のことから、伝聞用法「ということだ」には、伝聞以外にも自分の前述の発話の意味を詳しく述べる用法、あるいは説明用法があるが、伝聞「とのことだ」には、このような機能がないことが分かる。以下、伝聞用法「という

ことだ」の情報源とテンスについて考察してみよう。

４．４．２．４伝聞用法「ということだ」の情報源とテンス

(52)a. 屋台もいちど売ってしまって、佐久間町の古道具屋の店に出ていたのを、わけを話してとりかえしたということです。(雁)

b. 言い伝えによると、そこには宝が埋まっているということだった。(小さな王子)

c. いつか花月新誌で読んだが、成島柳北も横浜でふいと思いたって、即座に決心して舟に乗ったということだった。(雁)

d. 研究所北條裕子さん、個別の活動は次回以降に譲るが、取材を通して見えてきたのは、宿はやはり癒やしの場であるということだ。(2015 年 02 月 13 日読売新聞)

以上をみると、伝聞用法「ということだ」は(52. a)のように情報源が現れない場合はもちろん、(52. b)のように言い伝えなどにも用いられることが分かる。また、(52. c)のような雑誌などの資料による伝聞、(52. d)のように他者の話による内容整理にも用いられる。また、(52. b, c)のように「ということだった」形をとることができるが、それにより情報と距離を置くことが可能である。

４．４．２．５伝聞用法「ということだ」の話し手の心的態度を表す戦略

以上の用例(52)の伝聞用法「ということだ」を伝聞「とのことだ」に置き換えてみると、以下のようになる。

(53)a. 屋台もいちど売ってしまって、佐久間町の古道具屋の店に出ていたのを、わけを話してとりかえしたとのことです。

b. 言い伝えによると、そこには宝が埋まっているとのことだった。

c. *いつか花月新誌で読んだが、成島柳北も横浜でふいと思いたって、即座に決心して舟に乗ったとのことだった。

d. *研究所北條裕子さん、個別の活動は次回以降に譲るが、取材を通して見えてきたのは、宿はやはり癒やしの場であるとのことだ。

以上をみると、(53. a, b)は、「とのことだ」が伝聞のみに用いられるため、「ということだ」を「とのことだ」に置き換えることによって、文が硬くなっている印象を受ける。また、伝聞「とのことだ」は、主に話し言葉による情報の伝達に用いられるため、(53. c)のような記

録によるものとは共起できない。他にも、「とのことだ」は、情報と距離を置き客観的に伝えるのみで、話し手の情報内容に対する主観的関与はできないため、情報を簡潔に纏めることは可能であっても、(53.d)のように話し手の主観の介入余地がある情報の内容整理には用いられない。

４．４．２．６伝聞用法「ということだ」の情報が聞き手に及ぼす影響

伝聞用法「ということだ」は、伝聞以外にも説明文や話し手自身の前述の発話の再引用、話し手による情報の内容整理にも用いられる上に、書かれたこと、話されたことの両方に用いられることから、伝聞「とのことだ」より柔らかくてやや主観的伝聞表現であると言える。しかし、聞き手の立場から考えると、情報判断において客観的伝達姿勢がみられ、情報の真偽判断は聞き手に委ねられるため、聞き手は情報判断に介入することが可能である。

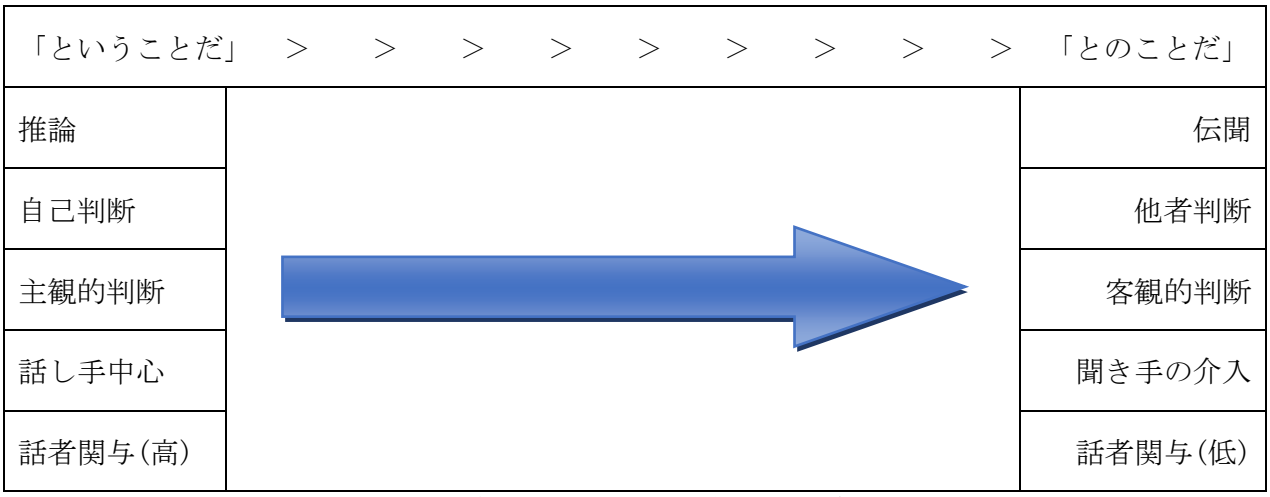
４．４．３伝聞表現「とのことだ」「ということだ」の情報とモダリティの関係

伝聞用法「ということだ」は話されたこと、記録されたこと、話し手による情報の内容整理にも用いられる客観的で柔らかい伝聞表現であるが、伝聞「とのことだ」は主に話されたことに用いられる。また、伝聞「とのことだ」は伝聞のみに用いられることから、伝聞用法「ということだ」に比べると使われる範囲が狭い。その他にも、他から入手した情報を自分と距離を置き、できるだけ主観を排除して伝えようとする話し手の表現意図が窺えるため、やや堅い印象を与えると言える。伝聞「とのことだ」と伝聞用法「ということだ」の情報による話し手の表現意図を纏めてみると以下の〈表 10〉のようになる。

＜表 10. 伝聞「とのことだ」、伝聞用法「ということだ」の話し手の表現意図＞

伝聞と伝聞用法	特　　徴	証拠依存	話者関与
伝聞 「とのことだ」	伝聞機能のみを果たしているが情報と距離を置く客観的な伝聞表現であるため、情報の真偽判断は聞き手に委ねら、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。主に新聞やニュース、ビジネスの場、メッセージなどで用いられる。	高 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 低	低 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 高
伝聞用法 「ということだ」	伝聞用法「ということだ」は話されたもの、記録によるものはもちろん、話し手による情報の内容整理にも用いられることから、伝聞「とのことだ」よりは柔らかい伝聞表現である。		

さらに詳しく、伝聞「とのことだ」と伝聞用法「ということだ」の話し手のモダリティを確認してみると、以下の〈図 19〉のように、伝聞用法「ということだ」から伝聞「とのことだ」へシフトするほど直接引用に近くなる。また、情報の真偽判断に関しても、聞き手に委ねられる客観的判断という性質が強くなるため、情報の真偽判断に対する聞き手の介入可能性が高くなり、話し手の情報への関与は低くなる。



＜図 19. 連体修飾形伝聞表現の情報とモダリティ＞

４．５推論表現と伝聞表現の情報とモダリティ関係

第 4 章の考察を通して、日本語伝聞表現は推論から由来するものと引用から由来するもの、助詞から由来するものの 3 種類があり、推論から由来しているものは他から得た情報に話し手の主観が介入し、話し手の推論のように提示する(「そうだ」、「ようだ」、「らしい」)ことができる反面、引用から由来しているものは他から得た情報に対し、客観性を維持しようとする傾向が強い(「という」、「って」、「ということだ」、「とのことだ」)。また、助詞から由来するものは情報を不確かに提示する(「とか」)。しかし、他から得た情報を話し手の推論のように提示する場合であっても、伝聞用法「ようだ」のように情報源の提示が必要なことから、日本語伝聞表現は客観性を維持しようとする傾向が強い特徴があると言える。以上を纏めると〈表 11〉のようになる。

＜表 11. 日本語伝聞表現の推論表現と伝聞表現における話し手の表現意図＞

推論･伝聞･伝聞用法	特　　徴	証拠依存	話者関与
伝聞「とのことだ」	伝聞機能のみを果たしているが、情報と距離を置く客観的な伝聞表現であるため、情報の真偽判断は聞き手に委ねられる。主に新聞やニュース、ビジネスの場、メッセージなどで用いられる。	高 ・ ・ ・

	提示している。具体的な用法を以下の三つに分けることができる。 ①ぼかし②責任回避・距離感・衝突回避 ③情報と聞き手を考慮し、聞き手のフェイスを保つ。	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 低	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 高
推論・伝聞用法 「ようだ」	視覚・聴覚・味覚・嗅覚・内的感覚・内的考察・資料など文字化されたもの・人の話といった証拠が、話し手の認識において内面化されたものとして言語化される。主観的判断・思考的判断に用いられるため、伝聞用法「ようだ」においても、他から入手した情報に話し手の主観が介入している。		
推論「そうだ」	視覚・聴覚・内的感覚・内的考察・人の話による直観的気づきを表しているため、証拠の言語化まで時間的に短く、弱思考・弱証拠による主観的推判断である。		

以上のように推論「そうだ」>「ようだ」>「とか」>「らしい」>「(する)そうだ」>「って・という」>「ということだ」>「とのことだ」の順に、推論表現から伝聞表現になり、情報判断の主体が話し手から聞き手へ移ることになる。それにより情報判断への話し手の主観の介入可能性が少なくなり、情報への話し手の関与も低くなる。以上を図式化すると、次のページの〈図20〉のようになる。

「(し)そうだ」 ＞ 「ようだ」 ＞ 「とか」 ＞ 「らしい」 ＞ 「(する)そうだ」 ＞ 「って・という」 ＞ 「ということだ」 ＞ 「とのことだ」		
推論		引用に近い
自己判断		他者判断
主観的判断		客観的判断
話し手中心		聞き手中心
話者関与(高)		話者関与（より低)

＜図 20. 日本語伝聞表現における推論表現から伝聞表現までの情報とモダリティ＞

４．６日本語伝聞表現の情報共有認識

伝聞の第一義は情報伝達であるため、本稿対象の日本語伝聞表現、つまり「ようだ、らしい、そうだ、という、って、ということだ、とのことだ」は全て情報伝達の機能を基本的に持っている。しかし、話し手が用いる情報が聞き手にとって常に新情報ではなく、聞き手も既知の情報である場合もあり、さらに話し手は聞き手が自分と同じ情報、若しくは自分より正確な情報を持っていることを期待して情報を確認したり、さらなる情報を要求する場合もあるため、情報要求と情報確認の意味機能には話し手と聞き手の情報共有認識が前提となる。

第5章において韓国語伝聞表現が情報伝達以外に情報要求、情報確認の意味機能を併せ持っていることが確認できたが、これは韓国語伝聞表現が「命題めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の境界が明確ではなく、語彙的に現れるためであり、日本語伝聞表現はこれらの境界が明確で、本稿対象の日本語伝聞表現は「命題めあてのモダリティ」に当たるため、主に情報伝達の機能を果たしている。情報要求、情報確認といったそれ以外の機能は「発話・伝達のモダリティ」であるため、「ね」、「よ」、「な」のような終助詞によって表れる場合が多い。

終助詞は本稿の研究対象ではないため、これ以上言及しないことにするが、伝聞用法「って」において、以下の用例のように情報確認と情報要求の機能が確認できる。この点から「って」は「と」の変化形、若しくは「という」の縮約でありながら、文中における機能は終助詞的であると言えるだろう。まずは「って」の情報要求の機能から確認してみよう。

(54)情報を発話当事者に要求する場合

a.ねえ、何と何がちがうって？

b.A:ここは夜の館だからさ。

B:夜の館だって？　　(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

c.A:伊原さんは、電話で知ったんだよ。

B:電話って？

A:小泉さんが伊原さんに電話をかけたのを、おぼえていない？

(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

(54.a)は目の前の相手に言われたことがよく聞き取れなかったり、話し手には理解できなかったため、もう一度話してもらうための質問であり、(54.b,c)は相手が話していることが理解できないため、付言を求める用例である。これらは上昇イントネーションの「って」を

用いて更なる状況を要求しているが、聞き手と話し手の発話交代が２者間で行われること、もとの発話と現発話の間に時間の経過、場の移動が見られないことから伝聞ではなく引用とする。

以下は情報確認の用例であるが、用例(55)は引用、用例(56)は伝聞とするのが妥当であると考える

(55) 情報を当事者に確認する場合

a.「私は兄のところへとんでゆきました。そして兄に思わず言いました。十一月十二日神戸へおつきになるのですって。兄はぱかっとして『十一月十二日、ずいぶん先の話じゃないか。』と言いました。嫂のほうが察しがよく、『十一月十二日ですって、おたのしみね、すぐ来ますわ。と言ってくれました。

b.病気だったって、もういいのかい。

c.A:あいつの練習ぶりを見たまえ。あいつは負けることをいさぎよしとしない男だ。そこが欠点なんだ。

B:アランが負ける、ですって？　　(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

用例(55)は他から入手した情報、または直前に相手から聞かされた情報を当事者に聞いている用例である。(55.a)は情報を確認する相手が情報の当事者であり、尚且つ話し手の発話と嫂の発話の間に場に移動や時間差が見られず、(55.b)は場の移動や時間差は感じられるが、情報を確認する相手が情報の当事者であるため、引用になる。(55.c)は話の内容が納得がいかないことを上昇イントネーションの「って」を用いて表わしているが、聞き手と話し手の発話交代が２者間で行われること、もとの発話と現発話の間に時間の経過、場の移動が見られないことから伝聞ではなく引用とする。

(56)情報を第3者に確認する場合

a.大宮さんが西洋にいらっしゃるって、ほんとう。

b.話は元に戻るけど、栃木大学の青山には五十万円も余分に、ふんだくられたんだって？　　(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

c.A：ガンで死んだって？

B：五十七歳だったって。それで百万円をなんとかお願いしたいって書いてあるのよ。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

d.A：千恵ちゃんから聞いたんだけど、お見合い、断ったんだって？

B：当然だよ。薫には、お見合いなんて似合わねえよ。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス）

上記の用例(56)は他から入手した情報を第3者に確認している用例であり、上昇イントネーションで用いられている。また、(56.c,d)の「B」の答えから、聞き手にも情報共有認識があり、逆に話し手に情報を提供していることが分かる。もし聞き手に情報共有認識がない場合も情報伝達という伝聞の第一義は果たしているため、伝聞用例(56)は伝聞とする。

上記の考察から、日本語伝聞表現は主に助動詞、複合助動詞により「命題めあてのモダリティ」が、終助詞により「発話・伝達のモダリティ」が現れ、これらの境界が明確であるため、情報伝達以外の情報要求、情報確認機能は終助詞によって表れるのが一般的であるが、伝聞用法「って」は情報の要求機能は確認できなくても、情報確認機能が確認できることから、伝聞用法「って」の文末の機能は終助詞的であると言えるだろう。

４．７日本語伝聞表現と意外性

Mirativity は日本語では意外性と訳され、コミュニケーションの場で用いられている命題が話し手にとって心の準備のない、未予測(unexpected)の新情報(new information)であることを表す文法範疇と言われている。‘未予測の新情報’はある事態が話し手にとって未認知・未認識の情報であれば、意外性といえるため、本稿では、命題に対する話し手の信じられない・驚きの気持ちを意外性とする。

Aikhenvald(2004:1)と DeLancey(1997:33)では、モダリティと意外性を個別の文法範疇としているが、以下の用例(57)の「って」のように、モダリティの下位範疇である証拠モダリティと意外性が関わることがしばしばある。DeLancey(1997:41)では、多くの言語において間接（推論）証拠と意外性が密接な関りを持っていることを指摘している。また、Aikhenvald(2004)でも、伝聞証拠(reported evidential)はある種の証拠システムの中で、意外の意味として受け入れられる場合もあると述べられている。

日本語においては、伝聞用法「って」に意外性表示の機能があることが諸研究者により指摘されて来た。加藤(2010:127)においても、「意外だ」、「腹立たしい」などの話し手の否定的心情を表出する「って」を意外感表示用法としているが、以下の用例の限り、伝聞用法「って」には他からの情報に対する話し手の信じられない、驚きといった認識状態を表現することができる。

(57)a. A:みどりちゃん、二がっきからてんこうするんだって。

B:とうきょうへいっちゃうんだって。　　(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

b. 子供が三人もいて、このお腹の子はモデルで女優で歌までうたってるんですって。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

c. ここは月夜の晩はとなりのお墓から幽霊たちが出てきて、パーティをするんですって。

だから月夜の夜なかに起きると、いろんな楽器の音や、ざわざわ衣ずれの音がしてる

なんて…ねえ、うそでしょう。　　(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

上記の用例は他から入手した情報を第3者に伝えつつ、(57.a)は上昇イントネーションでその情報が話し手にとって信じられない・驚きであることを示しており、話し手は聞き手の情報共有認識の有無に関係なく自分の驚き・意外な気持ちを述べている。(57.b,c)は下降イントネーションで情報に対する話し手の意外な気持ち・驚きを表している。

以上の用例から、少なくても伝聞表現における意外性の表出はイントネーションに関係なく表れると言える。

４．８日本語伝聞表現の機能的分類とカテゴリー化

これまで日本語伝聞表現にコミュニケーションの場を取り入れ考察してきた。考察の結果、日本語伝聞表現は主に助動詞、複合助動詞が「命題めあてのモダリティ」を、終助詞が「発話・伝達のモダリティ」を表しており、両文末モダリティの境界が明確であることを確認した。助動詞、複合助動詞、連体修飾形により現れる本稿対象の伝聞表現「そうだ、ようだ、らしい、という、とか、ということだ、とのことだ」は情報伝達機能のみを有していると言える。ただし、伝聞用法「って」に関しては「ってね」のように「って」の次に終助詞が付くことが可能であるにも拘わらず、「情報確認」、「意外性」表示機能があることから、日本語伝聞表現を機能別に分類してみると、以下の〈表12〉ようになる。

＜表 12. 日本語伝聞表現の機能的分類＞

機　能	伝聞表現
情報伝達	そうだ

	ようだ らしい って・という とか ということだ とのことだ
情報伝達＋確認	って(上昇イントネーションのみ)
意外性	って

以上、現代日本語伝聞表現を考察した。

第4章の考察を通して、現代日本語伝聞表現は「ようだ＞とか＞らしい＞そうだ＞って・という＞ということだ＞とのことだ」順に話し手の主観が介入し難く、情報の真偽判断を聞き手に委ねることになるため、客観的伝聞表現になるが、逆に聞き手の情報判断への介入可能性は高くなることが分かった。

また、日本語は「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界が明確であるため、「命題めあてのモダリティ」に属する本稿対象の伝聞表現は情報伝達の機能のみ現れると推測していたが、情報伝達の機能はもちろん「って」により情報確認と意外性の意味機能を表わせることを確認した。次章では韓国語伝聞表現のモダリティはどのように現れ、どのような意味機能を持っているかを確認する。

５章 現代韓国語伝聞表現のモダリティとカテゴリー化

韓国語のモダリティは최현배(1937)における「終止法:베풂월,물음월,시킴월,꾀임월」以来、文終結法として文の分類に重点をおいた研究が主流を成していたが、英語学の導入以来、モダリティ、様態、叙法、法などの名で話し手の心的態度を中心に研究されはじめ、現在は文終結形はもちろん、助詞、副詞、名詞、動詞、形容詞など幅広い範疇に広がっている。

しかし、韓国語の文末モダリティは日本語の複合助動詞に当たる複合語尾、連体修飾形で現れる場合が多いにも拘わらず、これまでの先行研究においては文法体系を重視する観点から、‘-겠(keyss)-、-더(te)-、-구나(kwuna)、-네(ney)、-지(ci)’など限られた範疇で研究されているか、韓国語にムード形式が存在することから、ムードを「命題めあてのモダリティ」とし、それ以外の文終結形を「発話伝達のモダリティ」とするなど、研究者によりモダリティの領域や範疇設定に大きな違いが見られるが、本稿での考察の限り、韓国語は「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界を明確に画すことが難しい。

韓国語における認識のモダリティの現れ方は、大きく三つに分かれている。まず①‘-겠(keyss)-、-더(te)-、-던(ten)-、-는(nun)-’などムード形式で表すことができ、②‘-구나(kwuna)、-네(ney)、-지(ci)’など終結語尾で表すこともできる。さらに伝聞表現においては③‘-다더구나(tatekwuna)’のように上記の①と②の複合語尾で表すこともできる。その上、第 3 章で確認したように韓国語伝聞表現はそのほとんどが引用形式から由来しているにも拘わらず、情報に話し手の主観が介入しやすく、また連体修飾形伝聞表現や接尾が加えられた伝聞表現は聞き手を話し手の方へ誘導する主観的傾向が強い特徴がある。同じく、韓国語の場合、推論表現が伝聞に用いられた際には、情報源を提示せず‘-것 같다(kes kathta)、-모양이다(moyangita)’のように完全な話し手の推論として提示されることも、韓国語伝聞表現が主観的傾向が強いことを裏付けるものである。

５．１現代韓国語伝聞表現の分類

韓国語の代表的な伝聞表現は‘-다고 하다(takohata)’、‘-대(tay)’であるが、日本語伝聞表現「そうだ、ようだ、らしい、という、って、とか、とのことだ、ということだ」8つに当たる韓国語伝聞表現は、‘-다고 하다(takohata)’、‘-대(tay)’を含め少なくとも

37[56]種にのぼり、①伝聞に用いられる表現の数が多く、②複雑な縮約・省略段階を経ていて、③動詞・名詞・形容詞といった述語の種類により異なる接続ルールがあり、④文の種類を、平叙文・命令文・勧誘文・疑問文の四つのうちどれかに区別しなければならない、⑤膠着語ならではの特徴が伝聞表現にも現れ、接辞が複雑に重なっている。このように韓国語伝聞表現は独特な接続ルールを有している上に、複雑な縮約・省略過程を経て文法化されている。当然これらの表現は日本語伝聞表現と 1 対 1 の関係を成さないため、ただ単に日韓両国語の伝聞表現を対照するだけでは物足りないと言える。

また、前述した通り、韓国語はムードが存在しテンスの役割を兼ねているため、‘-더(te)-’や‘-던(ten)-’は、テンスを表しながら、話し手の過去の経験・体験を表すムード形式でもある。通常の報告にも用いられ、‘-더라(tela)’、‘-던데(tentey)’のように文終結形に組み込まれると話し手の過去の感覚的経験・体験を、‘-다더라(tatela)’、‘-다던데(tatentey)’は、他人の言葉、つまり伝聞を表すが、周知の通り日本語伝聞表現は「(し)そうだ」、「(する)そうだ」以外にこのような形態的繋がりは見られない。

これまでの先行研究はモダリティの体系確立のみを重視し、‘-더라(tela)、-다더라(tatela)’、‘-더군(tekwun)、-다더군(tatekwun)’ に組み込まれているムード形式‘-더(te)-’や、一部の文終結モダリティ形式‘-구나(kwuna)、-네(ney)、-지(ci)’にのみ主眼が置かれ、文終結モダリティ表現の研究は疎かになっていると言っても過言ではない。しかし例えば‘-더(te)、-던(ten)’や‘-더라(tela)、-던데(tentey)’の意味が‘-다더라(tatela)、 - 다던데(tatentey)’にそのまま引き継がれるかというと、必ずしもそうではない。そのため、少なくとも伝聞表現においての話し手の表現意図を把握するためには、ムード形式に対する考察だけでは不十分であると思われ、文末伝聞表現からムード形式を分離せず、一つの固まりとしてコミュニケーションの場という伝聞の特殊な状況を考慮すべきであり、このような広義の意味のモダリティ研究が必要だということを指摘したい。

今回、日本の小説の日韓対訳文庫約 40 冊、日本の映画 10 本の韓国語訳、韓国映画 10 本の日本語訳、韓国ドラマの日本語訳(10 巻/200 本)から、日本語伝聞表現「そうだ、ようだ、らしい、という、って、とか、とのことだ、ということだ」に対応する韓国語伝聞表現を以

56 韓国語伝聞表現は平叙文以外にも疑問・命令・勧誘が可能であるため、多くの伝聞表現が‘-다/냐/자/라(ta/nya/ca/la)’と、それぞれ4つのパターンを持つ。そのため、例えば‘-다고 하다(takohata)’においても‘-냐고 하다/자고 하다/라고 하다(nyako hata/cako hata/lako hata)’が可能であるため、韓国語伝聞表現の数はさらに増える。本稿ではこれらの代表格として‘-다고 하다(takohata)’のみ提示し、韓国語伝聞表現の量的負担を最小限にしている。さらに本稿では37の韓国語伝聞表現を取り上げているが、これは用例収集において日本語伝聞表現8つに対応していた韓国語伝聞表現が37あったということであり、韓国語伝聞表現が全体が37であるという意味ではない。

下の<表 13>のように纏めた。

＜表 13. 韓国語伝聞表現＞

다고 (말)하다 (tako (mal)hata)	대(tay)	답니다(tapnita)	단다(tanta)
다고 하던데 (tako hatentey)	다던데(tatentey)	다던가(tatenka)	다데(tatey)
다고 하더라고 (tako hatelako)	다더라고(tatelako)	다더라(tatela)	다고(tako)
다고 하네 (tako haney)	다네(taney)	다고 듣다 (tako tutta)	다고들 하다 (takotul hata)
다고 하는데 (tako hanuntey)	다는데(tanuntey)	다는 거다 (tanun keta)	다고 하는 거 있지 (lako hanun ke issci)
다지 뭐야 (taci mweya)	다지(taci)	다더구만(tatekwuman)	다나(tana),
다고 하더군 (tako hatekwun)	다더군(tatekwun)	다고 하니까 (tako hanikka)	다니까(tanikka)
다며(tamye)	다면서(tamyense)	다고 그러다 (tako kuleta)	다 그러다 (ta kuleta)
다고 해서 (tako hayse)	대서(tayse)	다잖아(tacanha)	모양이다 (moyangita)
것 같다 (kes kathta)			

上記の<表13>のように韓国語伝聞表現は‘-다고 하다(tako hata)’で代表される複合語尾伝聞表現から、‘-대(tay)’で代表される縮約形、‘-다더라고(tatelako)’のような後文省略形はもちろん、‘-다는 거다(tanun keta)’のような連体修飾形、‘-다잖아(tacanha)’のようなモーダル性の強い複合形伝聞表現などさまざまな形態がある。

<表13>の表現を補足すると、韓国語伝聞表現は、引用から由来しているため、その形態も引用を基本とするが、韓国語の引用・伝聞表現は述語の品詞により違う形をとるため、動詞(‘-ㄴ/는(n/nun)-’)、形容詞(‘ø’)、名詞(‘-이(i)-’)を文終結形の前に介在させる

必要がある。その上、文の種類を平叙文(‘-다(ta)’)、疑問文(‘-냐(nya)’)、命令文(‘(-으)라((e)la)’)、勧誘文(‘자(ca)’)の四つに区別する必要がある。さらに、伝聞表現はその後部に引用格助詞‘-고(ko)’と補助動詞‘-하다(hata)’を加えるのが韓国語の引用・伝聞の基本的な形になる。以上を表で纏めると以下の<表14>のようになる。

＜表 14. 韓国語の引用・伝聞の基本構造＞

文型	動詞	形容詞・存在詞	指定詞
叙述文	-ㄴ/는다고 하다	-다고 하다	-이라고 하다
疑問文	-느냐고 하다	-냐고 하다	-이냐고 하다
命令文	-(으)라고 하다	存在詞있다のみ可能	×
勧誘文	-자고 하다	存在詞있다のみ可能	×

さらに、日本語の伝聞「そうだ」、伝聞用法「ようだ」、「らしい」などの推論由来の伝聞表現は、前接に「命令・疑問・勧誘」が入ることができないのに比べ、韓国語伝聞表現は引用から由来しているため、動詞の場合‘-대(tay)’、‘-답니다(tapnita)’を含む殆どの表現が‘-다(ta)’以外に‘-래/재/내(lay/cay/nyay)’、‘-랍니다/잡니다/냅니다(lapnita/capnita/nyapnita)’のように「命令・勧誘・疑問」をとることができるため、韓国語は形式的には引用と伝聞の境界がはっきり分かれていない特徴があるが、本稿では便宜上、韓国語伝聞表現の代表形として平叙文の‘-다(ta)’形のみ提示している。

結論から先に述べると<表 13>の韓国語伝聞表現は、大きく分けて、四つの意味機能が見られる。まず、伝聞の第一義である「①情報伝達」の機能をなしているのは、<表 13>の表現全てであるが、加えて②「情報確認：-다며(tamye)、-다면서(tamyense)」、③「情報要求：-다지(taci)」、④「意外性と関りを持つ：-다네(taney)、-다면서(tamyense)、-다며(tamye)」と、単なる情報伝達以上の意味機能を兼備している。そのため、韓国語伝聞表現においては以上の伝聞表現の四つの意味機能と、伝聞表現の使用における社会的注意(敬語・タメロ)が最大限充足できる形で、韓国語伝聞表現をカテゴリー化し、その上で、37 の表現を「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」という側面から、①情報共有の確保手段(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③情報に対する話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)を考察する。 ただし、上述したように日本語伝聞表現に関わる助詞、助動詞はムード形式をとら

ないのに比べ、韓国語伝聞表現はムード形式をとる上に、韓国語伝聞表現においてはその殆どが引用から由来しているため、〈表 14〉のように終結語尾‘-다/자/냐/라(ta/ca/nya/la)’の介在が必要であり、情報の入手経路が他者の話によるものであっても、書籍など資料によるものであってもいい。しかし、‘-다고 듣다(tako tutta)、-다며(tamye)、다면서(tamyense)’のような一部表現に関しては平叙文のみ伝聞に用いられ、書籍など資料による情報伝達にはあまり用いられない。

よって、この章の考察においては、‘-다/자/냐/라(ta/ca/nya/la)’形をとる伝聞表現においては、情報の入手経路は問題とせず、①情報共有の確保(自己判断か他者判断か)、②話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、③情報が聞き手に及ぼす影響に重点を置いて確認するが、‘-다고 듣다(tako tutta)、-다며(tamye)、다면서(tamyense)’と伝聞状況が話し手の認識世界において内面化され、完全に推論にずれ込んでいる表現(‘-것 같다(kes kathta)’、‘-모양이다(moyangita)’)に関しては、情報の入手経路にも触れ考察することにする。

５．２伝聞表現の文法範疇と意味範疇

これまで確認してきたように、日本語伝聞表現「そうだ、ようだ、らしい、という、って、とか、とのことだ、ということだ」に対応する韓国語伝聞表現は少なくとも 37 にのぼる。その上、韓国語伝聞表現は情報伝達以外にも情報要求、情報確認、意外性と関わりを持っている。したがって、本稿では韓国語資料で収集した伝聞表現の用例のみならず、日本語伝聞表現を韓国語に翻訳した資料も含め、収集した韓国語伝聞表現を「文法範疇」と「意味範疇」と名づけて分類する作業を試みた。

５．２．１伝聞表現の文法範疇

前記の〈表 13〉韓国語伝聞表現は日本語伝聞用法 8 つの韓国語訳である。表の通り、韓国語伝聞表現の数は日本語に比べて遥かに多いため、本稿では、〈表 13〉からコミュニケーションの場における話し手の表現意図を中心に韓国語伝聞表現のプロトタイプを設定し、それを韓国語伝聞表現の文法範疇と名づけた。

本稿でいう韓国語伝聞表現の文法範疇は、主に複合形伝聞表現が文法化の段階[57]におい

57 P.Jホッパー、E.Cトラウゴット(2003:108、172-178、2010)では、文法化の段階において意味の移動、文法的構造の変化、

て縮約・省略[58]され、その形が一つの表現として定着し、もはや縮約・省略されていると思われる部分を復元することができないもの、あるいは、縮約・省略されている表現がすでに意味分化を起こし、もとの縮約・省略される前の表現と意味的に違いが生じているものを指すが、이현희(1986:221)は後期中世韓国語の属格(日本語助詞「の」に当たる)の‘ㅅ’が冠形形(日本語の連体形に当たる)‘ㄴ’に変わり、20世紀には「세습ᄃᆡᄃᆡ로 닉ᄅᆡᆫ다ᄂᆞᆫ 말(공과신격 언해 上5)」で見られるように‘ㄴ’が‘ᄂᆞᆫ’に変わり、「닉ᄅᆡᆫ다 ᄒᆞᄂᆞᆫ 말」のように‘ᄒᆞ-’が形式的に省略される現象が拡大され、現代韓国語引用・伝聞における‘-고 하(ko ha)-’省略に繋がると考えている。<表13>の韓国語伝聞表現から縮約・省略されていると思われる、‘-고 하(ko ha)-’を復元し考察を進め、もはや復元できないもの、又は縮約・省略形と復元形が意味的違いをみせているものを選別したのが以下の<表15>である。

＜表 15. 伝聞表現の文法範疇＞

文法範疇	단다(tanta)	다나(tana)
	대(tay)	다지(taci)
	다더라(tatela)	다며(tamye)
	답니다(tapnita)	다면서(tamyense)

音韻論的変化は欠かせない要素である、その中で、意味の移動と文法的構造変化は同時に起こる反面、音韻論的変化は後から起こるとしている。

意味の移動(+)＞文法的構造変化(+)＞音韻論的変化(±)

このように、ある文法表現の文法的構造変化は意味の移動と同時に起こるものであるため、韓国語伝聞表現の縮約・省略されたものと縮約・省略される前の表現においての意味が、全く同じであるとは言い難い。さらに、P.Jホッパー、E.Cトラウゴット(2003:47)では、文法化の一方向性の過程をA＞A/B＞Bのように説明しているが、これによると、Aという規則は、A/B(重層化)という中間段階を経ずにBという規則になることはできず、AからBに変化してもともとの形式(A)と新しい形式(B)は、話者や言語共同体において長年共存し続けることができるとされているため、本稿では韓国語伝聞表現においても、縮約・省略された表現と縮約・省略される前の表現は共存することができると考えている。

58 이기문 외(1984:234-235)によると、縮約(contraction)とは、ある言語形態から単語の一部を減らす過程や結果で、また省略(elision,omission)とは、連続した言葉から単語や音節の間の音を抜き取る現象の総称であり、脱落ともいうと述べられている。이필영(1992:130)では、広義の意味で縮約という用語を省略(あるいは脱落)と区別せず用いている。本稿においては、韓国語伝聞表現においての‘-대(tay)’のようにある形態から単語の一部を減らす過程を「縮約」、‘-다고 해(tako hay)’が‘-다고(tako)’になるのと同じように単語や音節を一部抜き取るものを「省略」という用語を用いて説明していく。

５．２．１．１終結語尾形伝聞表現

引用表現において이필영(1992:151)は、‘-다(ta)’と‘-대(tay)’の置き換えが可能な場合は、上位動詞‘-하-(ha)’の実質動詞としての機能が残存している「‘-하(ha)-’縮約」とし、また、‘-다(ta)’と‘-대(tay)’の置き換えが不可能な場合を「‘-하(ha)-’脱落」としている。「‘-하(ha)-’縮約」は内包節が人の話を引用していることを指し、「平常・疑問・命令・勧誘」形が可能で、上位文の終結語尾は引用した言葉に対する話し手の態度を表していると述べ、「‘-하(ha)-’脱落」は、内包節が話し手の観念(考え)に対する態度を表すと述べている。

これによると、本稿で伝聞表現の文法範疇としている<表 15>の表現のなかで以下の<表 16>の終結語尾形伝聞表現は、‘-다(ta)’と‘-대(tay)’の置き換えが可能で、さらに平叙文のみならず「疑問・命令・勧誘」が可能であるため、「‘-하(ha)-’縮約」と言え、情報に対する話し手の態度を表している。よって他から入手した情報に対する①情報共有の確保、②話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、③情報が聞き手に及ぼす影響が確認できる。因みに以下の<表 16>は上記の<表 15>から終結語尾形伝聞表現を抜き取ったものである。

＜表 16. 伝聞表現の文法範疇-終結語尾形伝聞表現＞

文法範疇・終結語尾形伝聞表現	단다(tanta)	다나(tana)
	대(tay)	다지(taci)
	다더라(tatela)	답니다(tapnita)

以下、<表16>の表現から縮約されていると考えられる‘-고 하(ko ha)’を復元し、これら伝聞表現において‘-고 하(ko ha)’縮約形が定着しつつあることを確認し、このような現象が文法化と関わっているということを主張したい。

(1)‘-단다(tanta)’

a. お前が記者会見を中止すれば病院に連れて行くと。(ツ[59])

니가 기자회견을 취소해야 병원에 데리고 간단다.

59 略語に関しては参考文献の用例出典の③のドラマを参照。

nika kicahoykyenul chwisohayya pyengweney teyliko kantanta.

b. 去年は 0.2 点差で 60 位も違ったそうだぞ。(カ)

작년에 0.2 점 차이로 60 등이 왔다갔다 했단다.

caknyeney 0.2cem chailo 60tungi wasstakassta haysstanta.

c. 相手は今でもお前の話をするってさ。(ヤネ)

그 집 아들 선보고 나서 아직까지도 너 얘기만 한단다.

ku cip atul senpoko nase acikkkacito ne yaykiman hantanta.

d. おばあ様まだ待っているらしい。(ヤネ)

할머니 아직 지키고 계신단다.

halmeni acik cikhiko kyeysintanta.

(2) '-다고 한다(tako hanta)'

a. *니가 기자회견을 취소해야 병원에 데리고 간다고 한다.

nika kicahoykyenul chwisohayya pyengweney teyliko kantako hanta.

b. *작년에 0.2 점 차이로 60 등이 왔다갔다 했다고 한다.

caknyeney 0.2cem chailo 60tungi wasstakassta haysstako hanta.

c. *그 집 아들 선보고 나서 아직까지도 너 얘기만 한다고 한다.

ku cip atul senpoko nase acikkkacito ne yaykiman hantako hanta.

d. *할머니 아직 지키고 계신다고 한다.

halmeni acik cikhiko kyeysintako hanta.

'-단다(tanta)[60]'は、'-다고 한다(tako hanta)[61]' の縮約として伝聞の役割を果たす場合もあるが、自分のことや自分の知っている知識を客観化して人に伝える時にも用いられることから、主語の違いに注意する必要がある。국립국어연구원(2005:336)では、'-단다(tanta)'は友達や年下の人に用いられ、人から聞いた話を伝えていることを表す表現としている。伝聞表現において、'-단다(tanta)'が'-다고 한다(tako hanta)'の縮約で

60 本稿では、'-단다(tanta)'の伝聞表現としてのモダリティの側面を論じているが、厳密に言うと、韓国語の'-단다(tanta)'の'-ㄴ(n)'はテンスを表す役割を果たすものでもある。

61 이필영(1992:162)によると、'-단다(tanta)'について、'-이(i)(又は-이시(isi))'の後には'-다(ta)'が '-라(la)'に代わることから'-다 한다(ta hanta)'の融合としているが、本稿では、第2言語・外国語教育の観点から、伝聞表現のプロトタイプである'-다고 한다(tako hanta)'を'-단다(tanta)'のもとの形式とする。

あっても、特に話し言葉においては用例(2)のように縮約された’-고 하(ko ha)-’を復元することができないため、本稿では‘-단다(tanta)’を伝聞の文法範疇に属させることにする。‘-단다(tanta)’を用いる際の話し手は、聞き手が知らないだろうと思われる情報を伝えているため、情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、‘-단다(tanta)’を用いる際の話し手の心的態度は、情報と距離を置き客観的に述べることである。しかし聞き手の立場から考えると、‘-단다(tanta)’により用いられた情報の話し手の真偽判断が保留されるため、情報真偽判断は聞き手に委ねられることになる。

(3) ‘-다나(tana)’

a. 受験に落ち姿を消していて戻ってきてケンカしたようです。(カ)
   시험에 떨여졌다고 코빼기도 안 비추다가 들어와서는 싸움을 했다나 뭘 했다나.
   sihemey ttelyecyesstako khoppaykito an pichwutaka tulewasenun ssawumul haysstana mwel haysstana.

b. テヨン似の男を見つけたらしい。(ヤネ)
   그, 뭐, 태용이 닮았다는 사람을 찾았다나.
   ku, mwe, thayyongi talmasstanun salamul chacasstana.

c. 大金持ちの息子でアメリカ帰りらしい。(ケ)
   뭐 엄청 부잣집 아들에 미국에서 왔다나?
   mwe emcheng pwucascip atuley mikwukeyse wasstana?

d. 作った人の気持ちが見えるとか言ってた。(ケ)
   만들고 있는 사람의 마음이 보인다나 뭐라나?
   mantulko issnun salamuy maumi pointana mwelana?

e. (犯人と疑われる人を落とすための尋問で検事が容疑者にウソの質問をしている)
   恋人と旅行中に作曲したとか。その恋人があなただと？旅行はどこへ？(ツ)
   연인하고 여행가서 작곡한 거라나? 그 연인이 당신입니까? 어디로 여행을 갔습니까？
   yeninhako yehayngkase cakkokhan kelana? ku yenini tangsinipnikka?etilo yehayngul kasssupnikka？

(4) ‘-다고 하나(tako hana)’

a. *시험에 떨여졌다고 코빼기도 안 비추다가 들어와서는 싸움을 했다고 하나 뭘 했다고 하나.
   sihemey ttelyecyesstako khoppaykito an pichwutaka tulewasenun ssawumul haysstako

hana mwel haysstako hana.

b.*그, 뭐, 태용이 닮았다는 사람을 찾았다고 하나.

ku, mwe, thayyongi talmasstanun salamul chacasstako hana.

c.*뭐 엄청 부잣집 아들에 미국에서 왔다고 하나?

mwe emcheng pwucascip atuley mikwukeyse wasstako hana?

d.*만들고 있는 사람의 마음이 보인다고 하나?

mantulko issnun salamuy maumi pointako hana?

e.*연인하고 여행가서 작곡한 거라고 하나? 그 연인이 당신입니까?

어디로 여행을 갔습니까？

yeninhako yehayngkase cakkokhan kelako hana? ku yenini tangsinipnikka?

etilo yehayngul kasssupnikka？

‘-다나(tana)’を用いる際の話し手の情報共有の確保手段は、他から得た情報の伝達である。표준국어대사전(1999)では、‘-다나(tana)’は話し手が引用している内容が気に入らない、面倒であることを表すと述べられている。고영근(1976：29)は、‘-다나(tana)’は他者から聞いたことを無関心な態度で、不確かに伝える時に用いられるが、話し手の本心には主体の行為に対する怨望や嘆くような意味が内在されていると述べている。また、이필영(1992:152)は、先行発話に対する不満を‘-다나(tana)’の基本意味としているが、今回収集した用例をみる限り、‘-다나(tana)’は(3.a,b,d)のように、他から入手した情報であっても、その情報が話し手にとって気に入らない、不愉快であることを表す場合と、(3.c,e)のように、一次伝聞ではない場合や情報に自信がないため、不確かなものとして伝えている場合の二つの用法に分けられる。

以上のように、‘-다나(tana)’の話し手の心的態度を表す戦略は、情報に対する不愉快・不確かな気持ちを示すことであると言える。さらに、‘-다나(tana)’が、(3.e)のように話し手による情報の創造・ねつ造に用いることができるのは、話し手の主観が介入しやすく、話し手の表現意図により、情報を不確かに提示していることに起因していると思われる。また、話し手は情報を不愉快なもの・不確かなものとして受け入れているため、話し手の主観が表れ、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。

‘-다나(tana)’に縮約・省略されている’-고 하(ko ha)-’を復元すると、すべて非文になることから、本稿では‘-다나(tana)’も伝聞の文法範疇に属させる。

(5)‘-다지(taci)’

a. 出産日が近いそうですね。(ツ)

해산일이 가까웠다지요?

haysanili kakkawesstaciyo?

b. お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね。(坊ちゃん)

할머니 코가 씨는 휴가로 간다지요?

halmeni khoka ssinun hyukalo kantaciyo?

c. するとある日いたちに見つかって食べられそうになったんですって。(銀河鉄道の夜)

그런데 어느날 족제비에게 들켜서 잡아 먹히게 되었다지.

kulentey enunal cokceypieykey tulkhyese capa mekhikey toyesstaci.

(6) '-다고 하지(tako haci)'

a. *해산일이 가까웠다고 하지요?

haysanili kakkawesstaciyo?

b. *할머니 코가 씨는 휴가로 간다고 하지요?

halmeni khoka ssinun hyukalo kantako haciyo?

c. *그런데 어느날 족제비에게 들켜서 잡아 먹히게 되었다고 하지.

kulentey enunal cokceypieykey tulkhyese capa mekhikey toyesstako haci.

'-다지(taci)'の話し手の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手と聞き手の情報共有認識が認められ、話し手の心的態度を表す戦略は情報伝達に加え、さらに詳しい情報を要求することである。また、'-다지(taci)'は伝聞だけではなく、単独で独り言として用いる[62]こともできるが、この際は必ず疑問符「?」を必要とする。

伝聞として用いられた(5.a,b)は、聞き手に何かの情報を要求しているものの、必ずしも答えを求めているものではないと思われる。(5.c)は、聞き手に情報を要求するというより、以前聞いたことがはっきり思い出せないため、自分の記憶に疑いを持ち、不確かな推論のよ

62 たとえば、以下のような作例が可能である。

a. 지갑이 어디 갔다지?「財布はどこに置いちゃったのかしら」

(cikapi eti kasstaci?)

b. (출장을)누구를 보낸다지?「(出張を)誰を行かせればいいのかな」

((chwulcangul)nwukwulul ponayntaci?)

ただし、以上のように独り言として用いられる際には、文末敬語体'-요(yo)'をつけることはできない。

うに伝えることで、情報と距離を置きたい話し手の心的態度が表れている[63]。(5.a,b)のように、何か情報を要求している場合の話し手は、聞き手と情報の共有認識が認められるため、聞き手に情報共有認識があれば、話し手に情報を提供することもある。一方で、(5.c)は自分の記憶に疑いを持っているために不確かに提示しているだけで、情報共有の認識はないと判断される。さらに、聞き手の立場からは、(5.c)のように情報が不確かなものとして提示されている場合は、話し手の主観が表れるため、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。

(7) '-대(tay)'

a. あれ、ティファニーの店で二千二百ドルもしたんですって。(オーヘンリ傑作選)
그거, 티파니에서 2 천 2 백 달러나 했대요.
kuke, thiphanieyse 2chen2payk tallena haysstayyo.

b. 昔はこの海にぞくぞくとくじらが現れたってね。(6 年生の教科書)
옛날에는 이 바다에 계속해서 고래가 나타났었대.
yeysnaleynun i pataey kyeysokhayse kolayka nathanassesstay.

c. 今日も何某がだんなさまの格子戸をおはいりになるのをみたそうでございます。(雁)
오늘도 주인 어른이 격자문으로 들어가는 것을 보았대요.
onulto cwuin eluni kyekcamwunulo tulekanun kesul poasstayyo.

d. 弁償しろとは言わないそうよ。(ヤネ)
물건 부순 거 배상하라고 그러는 거 절대 아니래.
mwulken pwuswun ke paysanghalako kulenun ke celtay anilay.

e. だが、空港へ行く前にどこかに寄るらしい。(ヤネ)
지금 공항 가기 전에 어딜 잠깐 들른대.
cikum konghang kaki ceney etil camkkan tulluntay.

(8) '-다고 해(tako hay)'

a. *그거, 티파니에서 2 천 2 백 달러나 했다고 해요.
kuke, thiphanieyse 2chen2payk tallena haysstako hayyo.

63 この場合、以下のように日本語の「多分」に当たる副詞 '아마(ama)' と共起する場合が多い。
a. 요즘이 포도나무 가지를 쳐주는 시기거든. 내일모레면 끝나고 간다지, 아마.
yocumi photonamwu kacilul chyecwunun sikiketun. nayilmoleymyen kkuthnako kantaci, ama.

b.*옛날에는 이 바다에 계속해서 고래가 나타났었다고 해.

yeysnaleynun i pataey kyeysokhayse kolayka nathanassesstako hay.

c.*오늘도 주인 어른이 격자문으로 들어가는 것을 보았다고 해요.

onulto cwuin eluni kyekcamwunulo tulekanun kesul poasstako hayyo.

d.*물건 부순 거 배상하라고 그러는 거 절대 아니라고 해.

mwulken pwuswun ke paysanghalako kulenun ke celtay anilako hay.

e.*운전기사하고 연락이 돼서 알았는데 지금 공항 가기 전에 어딜 잠깐 들른다고 해.

wuncenkisahako yenlaki twayse alassnuntey cikum konghang kaki ceney etil camkkan tulluntako hay.

표준국어대사전(1999)によると、‘-대(tay)’は‘-다고 해(tako hay)’の縮約であり、直接経験した事実ではなく、人の話を間接的に伝えるときに用いられると述べている。‘-대(tay)’の話し手の情報共有手段は他から得た情報の伝達であるが、聞き手と話し手の間に情報の共有認識がなく、話し手の表現意図による心的態度を表す戦略は、情報を肯定的姿勢で伝えることにある。そのため、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。用例(7)の‘-대(tay)’を‘-다고 해(tako hay)’に置き換えると、(8.a～e)のようにすべて非文になる。さらに、‘-다고 하다(tako hata)’は話し手本人の前述の発話を現在のコミュニケーションの場で引用することができるが、‘-대(tay)’はもっぱら他者の言葉のみ伝えるため、‘-다고 하다(tako hata)’から意味縮小が起きて文法化された表現と見做し、伝聞の文法範疇とする。

(9)‘-다더라(tatela)’

a.不幸も伝染するそうよ。(ヤ)

재수없는 것도 전염된다더라.

cayswuepsnun kesto cenyemtoyntatela.

b.お前等二人もあまり仲が好過ぎるとて人がかれこれいうそうじゃ。(野菊の墓)

너희들도 사이가 너무 좋다고 남들이 이러쿵저러쿵 말한다더라.

nehuytulto saika nemwu cohtako namtuli ilekhwungcelekhwung malhantatela.

c.毒々しさが10倍に増したと。(サ)

예전보다 10배는 더 지독해 졌다고 생각하면 된다더라.

yeycenpota 10paynun te citokhay cyesstako sayngkakhamyen toyntatela.

d.でも変な事件があったそうよ。

딱 한 번 이상한 일이 있긴 했다더라.

ttak han pen isanghan ili isskin haysstatela.

(10) ‘-다고 하더라(tako hatela)’

a.?재수없는 것도 전염된다고 하더라.

cayswuepsnun kesto cenyemtoyntako hatela.

b.*너희들도 사이가 너무 좋다고 남들이 이러쿵저러쿵 말한다고 하더라.

nehuytulto saika nemwu cohtako namtuli ilekhwungcelekhwung malhantako hatela.

c.??예전보다 10 배는 더 지독해 졌다고 생각하면 된다고 하더라.

yeycenpota 10paynun te citokhay cyesstako sayngkakhamyen toyntatela.

d.*딱 한 번 이상한 일이 있긴 했다고 하더라.

ttak han pen isanghan ili isskin haysstatela.

송재목(1998:154)では、’-더(te)-’を証拠モダリティとしている。고영근(2009:320)では、発話・伝達の方法から‘-더(te)-’を回想法とし、経験を表すと述べている。국립국어원(2005:311)によると、‘-다더라(tatela)’は人から聞いた話や事実を伝えることを表すと述べられている。また、Chung(2005:197)は、間接報告証拠性(reportde indirect evidentials)としている。しかし、‘-더(te)-’が伝聞に組み込まれたときは、それが話し手の直接体験・経験ではなく、間接体験・経験における話し手の心的態度、つまり話し手が情報をどのように受け入れ、伝えているのかという情報伝達時の情報に対する心的態度を表している。

用例(9)をみると、‘-다더라(tatela)’は情報を肯定的に受け入れているものの、情報と距離を置いて伝えたいという、話し手の表現意図が窺える。よって、‘-다더라(tatela)’を用いる際の話し手の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手の表現意図による心的態度を表す戦略は、情報の真偽を肯定的に受け入れていることを示しつつも情報と距離を置くことである。そのため、聞き手は情報の真偽判断にはあまり介入できないが、情報を話し手と心理的に離れたものとして認識することになる。‘-다더라(tatela)’に関しても、縮約されていると思われる‘-고 하(ko ha)-’を復元することが容易ではなく、‘-고 하(ko ha)-’を復元した(10a,c)と、(9.a,c)とはまったく同じ意味ではないように考えられる。つまり、省略された‘-고 하(ko ha)-’を復元した(10.a,c)は、情報と距離を置いて伝えることを表すというより、代動詞‘-하다(hata)’の指す行為そのものに重点が置かれ、話し手の情報内容に対する強い不満が窺える。したがって、本稿

では‘-다더라(tatela)’を縮約形が文法化しており、意味的にも分化が起きているとみて伝聞の文法範疇とする。

(11)‘-답니다(tapnita)’

a.父は死ぬ時叔父にこの子はうまく教育すれば世界に一人という人間になるのだがと言って、僕のことをくれぐれもたのんだそうです。(愛と死)

아버지는 돌아가실 때 숙부에게 이 아이는 교육만 잘 시키면 세계 제일의 사람이 될거라고 하시며, 저를 간곡히 부탁하셨답니다.

apecinun tolakasil ttay swukpwueykey i ainun kyoyukman cal sikhimyen seykyey ceyiluy salami toylkelako hasimye, celul kankokhi pwuthakhasyesstapnita.

b.お父上が帰られたそうです。(ケ)

검사님 아버님 방금 나가셨답니다.

kemsanim apenim pangkum nakasyesstapnita.

c.大学卒業後、就活を5年も続けてイカれたらしい。(ケ)

대학 졸업하고 5년을 취업 준비만 하다가 정신이 이상해 졌답니다.

tayhak colephako 5nyenul chwiep cwunpiman hataka cengsini isanghay cyesstapnita.

(12)‘-다고 합니다(tako hapnita)’

a.?아버지는 돌아가실 때 숙부에게 이 아이는 교육만 잘 시키면 세계 제일의 사람이 될거라고 하시며, 저를 간곡히 부탁하셨다고 합니다.(愛と死)

apecinun tolakasil ttay swukpwueykey i ainun kyoyukman cal sikhimyen seykyey ceyiluy salami toylkelako hasimye, celul kankokhi pwuthakhasyesstapnita.

b.?검사님 아버님 방금 나가셨다고 합니다.(ケ)

kemsanim apenim pangkum nakasyesstapnita.

c.??대학 졸업하고 5년을 취업 준비만 하다가 정신이 이상해 졌다고 합니다.(ケ)

tayhak colephako 5nyenul chwiep cwunpiman hataka cengsini isanghay cyesstapnita.

‘-답니다(tapnita)’は、‘-단다(tanta)、-다지(taci)’と同じく1人称で用いられ、自分のことを客観的に伝えることもできるが、この場合は、縮約されていると思われる’-고 하(ko ha)-’を復元することはできない。伝聞表現として用いられる‘-답니다(tapnita)’の情報共有の確保手段は、‘-단다(tanta)’と同じく他から得た情報の伝達であるが、話し手の表現意図による心的態度を表す戦略は、情報に対する客観的な姿勢

を示すことである。しかし、聞き手の立場からは情報が客観的に提示されるため、情報の真偽判断に介入できる。また、用例(12)のように縮約されていると思われる‘-고 하(ko ha)-’を復元すると、情報内容より代動詞‘-하다(hata)’の指す行為を強調して距離を置いているように推察され、(12.a, b, c)のように文が不自然になる。さらに、‘-단다(tanta)’と‘-답니다(tapnita)’を比べると、‘-답니다(tapnita)’は‘-단다(tanta)’の丁寧形で社会的注意を払っているのみであると見ることもできる。しかし ‘-단다(tanta)’は縮約されている‘-고 하(ko ha)-’を復元することができないが、‘-답니다(tapnita)’は不自然ではあるものの一部の用例において‘-고 하(ko ha)-’を復元することができるため、本稿では‘-단다(tanta)’と‘-답니다(tapnita)’を個別項目として取り扱う。

以上のことから、‘-답니다(tapnita)’も伝聞表現の文法範疇に属させる。

５．２．１．２接続語尾形伝聞表現

‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’は聞き手が第 3 者ではなく、もとの話し手である場合も成立するが、これについては本稿の 5.4 で詳しく確認することとし、ここでは聞き手が第 3 者である伝聞用法のみ確認することにする。

これからは、伝聞表現の文法範疇の中で<表 17>の接続語尾形伝聞表現‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’を縮約前の形に復元して、果たして復元できるのか、また、復元した元の表現と縮約・省略形が同じ意味を成すのかを確認するとともに、これら伝聞表現の情報共有の確保手段、話し手の心的態度を表す戦略と、情報が聞き手に及ぼす影響を確認する。

＜表 17. 伝聞表現の文法範疇-接続語尾形伝聞表現＞

文法範疇・接続語尾形伝聞表現	다며(tamye)	다면서(tamyense)

(13) ‘-다며(tamye)’

a. 株主総会があるそうよ。(コ)

김 변호사 말이 주주총회가 뭔가 할거라며?

kim pyenhosa mali cwucwuchonghoynka mwenka halkelamye?

b. マ検事また手柄だって？(ヶ)

마검사 또 한 건 했다며?

makemsa tto han ken haysstamye?

c.追加シーンが入ったと。(シ)

추가로 뭐 찍을 거 생겼다며.

chwukalo mwe ccikul ke sayngkyesstamye.

(14) '-다고 하며(tako hamye)'

a.*김 변호사 말이 주주총회가 뭔가 할거라고 하며?

kim pyenhosa mali cwucwuchonghoynka mwenka halkelamye?

b.*마검사 또 한 건 했다고 하며?

makemsa tto han ken haysstako hamye?

c.*추가로 뭐 찍을 거 생겼다고 하며.

chwukalo mwe ccikul ke sayngkyesstako hamye.

韓国語の伝聞表現はその殆どが引用表現から由来しているため、引用と伝聞の境界をはっきり画し難い特徴があるが<表 17>の'-다며(tamye)、-다면서(tamyense)'の場合、伝聞で用いられた際には常に平叙文で、疑問・命令・勧誘形が現れないのが特徴である。

これまで伝聞は情報の受け渡しにのみ関わるとされてきたが、'-다며(tamye)'は、話し手の聞き手に対する情報共有認識が窺える。'-다며(tamye)'の話し手の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、主に話された情報の伝達に多用される。話し手の心的態度を表す戦略は情報に対する驚き・信じられない気持ち・不確かさから、情報確認を求めることにある。ただし、'-다며(tamye)、-다면서(tamyense)'の場合、次の二つに分けることができる。

まず、①聞き手が話し手の用いる情報の当事者である場合は、単なる情報伝達より情報確認の意味が強く、命令・疑問・勧誘形が可能である、②聞き手が話し手の用いる情報の当事者でない場合は、平叙文で現れ、必ずしも聞き手に答えを求めているのではなく、話し手が情報を何らかのルートで入手し知っているということの表明である。

しかし、上記の①の情報を当事者に確認するのは、情報の伝達という伝聞の基本的機能を果たしているとは思えないため、本稿では伝聞としない[64]。さらに聞き手の立場から考えると、聞き手に情報共有認識がある場合は話し手に聞かれたことに答える場合(逆に情報を

64 1.4.3を参照。

提供する)もあるが、情報の共有認識がない場合は情報を不確かなものとして受け入れ、情報の真偽判断に介入できるが、その程度は強くない。‘-다며(tamye)’は、’-고 하(ko ha)-’が復元できないことから、すでに文法化が進んでいると判断され、伝聞表現の文法範疇とする。

(15) ‘-다면서(tamyense)’

a. 従弟が携帯をなくしたそうね。(ヤ)

태무 씨 사촌 동생 핸드폰 잃어버렸다면서요?

thaymwu ssi sachon tongsayng hayntuphon ilhepelyesstamyenseyo?

b. ユン先生の噂は聞いてるぞ。研究員がやめていくってな。(ヤ)

나도 윤지훈선생 이야기 다 들었거든. 연구사들이 남아나질 않는다면서.

nato yuncihwunsensayng iyaki ta tulessketun. yenkwusatuli namanacil anhnuntamyense.

c. 警察署でも飛びかかったとか。(カ)

가해자가 경찰서에서도 자기를 죽이려고 했다면서?

kahaycaka kyengchalseeyseto cakilul cwukilyeko haysstamyense?

d. 最高裁の判決に不満があるそうだな。(カ)

대법원에서 판결이 확정된 사건을 무죄라고 주장한다면서?

taypepweneyse phankyeli hwakcengtoyn sakenul mwucoylako cwucanghantamyense?

e. 同じ写真をお持ちだと聞きました。(ヤネ)

똑같은 사진을 가지고 계시다면서요.

ttokkathun sacinul kaciko kyeysitamyenseyo.

(16) ‘-다고 하면서(tako hamyense)’

a. *태무 씨 사촌 동생 핸드폰 잃어버렸다고 하면서요?

thaymwu ssi sachon tongsayng hayntuphon ilhepelyesstamyenseyo?

b. *나도 윤지훈선생 이야기 다 들었거든. 연구사들이 남아나질 않는다고 하면서.

nato yuncihwunsensayng iyaki ta tulessketun. yenkwusatuli namanacil anhnuntamyense.

c. *가해자가 경찰서에서도 자기를 죽이려고 했다고 하면서?

kahaycaka kyengchalseeyseto cakilul cwukilyeko haysstako hamyense?

d. *대법원에서 판결이 확정된 사건을 무죄라고 주장한다고 하면서?

taypepweneyse phankyeli hwakcengtoyn sakenul mwucoylako cwucanghantako hamyense?

e.*똑같은 사진을 가지고 계시다고 하면서요.

ttokkathun sacinul kaciko kyeysitako hamyenseyo.

‘-다면서(tamyense)’も引用から由来しているにも拘らず、伝聞として用いられる際には命令・疑問・勧誘形をとらない。‘-다면서(tamyense)’を用いる際の話し手の情報共有の確保手段は、他から得た情報の伝達であるが、主に話された情報の伝達に用いられる特徴がある。이필영(1992:154)では、‘-다면서(tamyense)’を‘-고 하(ko ha)-’非還元の融合形であり、終結形として現れ、命題に対する事実性を確認するときに用いられるとした。

上述した‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’の情報確認の背景にある、話し手の表現意図による心的態度を表す戦略は、情報に対する驚き・信じられない・不確かといった話し手の気持ちを明示することである。(13.a,b)、(15.c,d)も、驚き・信じられない・不確かといった話し手の気持ちから情報の確認を求めているが、その程度は必ずしも強いものではない。しかし、聞き手の立場から考えると、聞き手に情報共有認識がある場合は情報を提供する場合もあるが、情報共有認識がない場合は、話し手により提示される情報を不確かなものとして認識することになり、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。

以上用例(1)～用例(16)の伝聞表現は、縮約・省略されていると思われる‘-고 하(ko ha)-’を復元しにくく、‘-단다(tanta)、-대(tay)、-다더라(tatela)、-답니다(tapnita)、-다나(tana)、-다지(taci)、-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’の形で文法化が進み、意味の移動が文法的構造変化、音韻変化を起こしたと思われることから、これらを伝聞表現の文法範疇とする。

以上の表現は、韓国語伝聞表現の四つの機能と言語使用の社会的注意も満たしている。つまり、これらの表現は伝聞の第一義である「①情報の受け渡し」を基本として、「②情報の確認：-다며(tamye)、-다면서(tamyense)」、「③情報の要求：-다지(taci)」、「④意外性表示：-다며(tamye)、-다면서(tamyense)」を満たしている。さらに、情報伝達時の社会的注意に関しては、‘-답니다(tapnita)、-단다(tanta)’が対応でき、情報と話し手の関係という面では、‘-대(tay)、-다더라(tatela)、-다나(tana)’が情報と距離を置きたいという話し手の表現意図を表していると考えられる。

ここまでの考察を纏めると、これまで伝聞は情報の受け渡しにのみ関わるとされてきたが、韓国語伝聞表現は情報の受け渡しだけではなく、‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’を用いて情報を確認・意外性を表すことができ、さらに、‘-다지(taci)’を用いて情報伝達に加え、より詳細な情報を要求することもできる。また‘-

다며(tamye)、-다면서(tamyense)、-다지(taci)’を用いる際の話し手は、聞き手と情報共有認識がある上に、情報を不確かなものと認識していると言える。そのため、情報を確認、あるいはより正確な情報を聞き手に要求しているものの、情報確認・情報要求の程度は必ずしも強いものではない。また聞き手の立場から考えると、情報共有認識がある場合は情報を提供する場合もあるが、情報共有認識がない場合は情報を不確かなものとして認識し、情報の真偽判断に介入することになるが、その程度は必ずしも強いものではない(情報共有認識の詳細は5.4を参照)。

５．２．２伝聞表現の意味範疇

先ほど5.2.1で確認したように韓国語伝聞表現はその殆どが複雑な縮約・省略の過程を経ている。本稿では韓国語伝聞表現の意味範疇を二つに分けているが、まず、複合語尾伝聞表現がその縮約語と一緒に用いられている場合を伝聞表現の意味範疇①に、縮約されている‘-고 하(ko ha)-’が復元できなかったため、伝聞表現の文法範疇に属させるべき表現であるが、使用頻度が非常に少なく、尚且つ文法範疇に属させている表現と意味的違いが見られない表現(‘-다데(tatey))や縮約形がない表現(‘-다고 듣다(tako tutta)’)、膠着語ならではの特徴から文法要素が複雑に重なり合っている表現を伝聞表現の意味範疇②に属させた。

５．２．２．１伝聞表現の意味範疇①

韓国語伝聞表現の意味範疇の中で、特に以下の<表 18>のように、複合語尾と縮約形が共に用いられている伝聞表現を、伝聞表現の意味範疇①に属させた。これらは縮約形が一つの表現として固まりつつある、即ち文法化が進んでいる伝聞表現と言える。

＜表 18. 伝聞表現の意味範疇①＞

意味範疇①	다고 하네(tako haney)	다네(taney)
	다고 하더군(tako hatekwun)	다더군(tatekwun)
	다고 그러다(tako kuleta)	다 그러다(ta kuleta)
	다고 하더라고(tako hatelako)	다더라고(tatelako)
	다고 해서(tako hayse)	대서(tayse)
	다고 하던데(tako hatentey)	다던데(tatentey)
	다고 하니까(tako hanikka)	다니까(tanikka)

	다고 하는데(tako hanuntey)	다는데(tanuntey)

５．２．２．１．１終結語尾形伝聞表現

ここでは、韓国語伝聞表現の意味範疇①の中でも終結語尾形伝聞表現を確認するが、〈表19〉のような表現がそれに当たる。

＜表 19. 伝聞表現の意味範疇①-終結語尾形伝聞表現＞

意味範疇① 終結語尾形 伝聞表現	다고 하네(tako haney)	다네(taney)
	다고 하더군(tako hatekwun)	다더군(tatekwun)
	다고 그러다(tako kuleta)	다 그러다(ta kuleta)

(17)-다고 하네(tako haney)/-다네(taney)

a. 昨日、ある競売で、本物のロコーの絵が、その金額で取引されたそうだ。

(オーヘンリ傑作選)

어제, 어느 경매에서 진짜 로코의 그림이 그 금액으로 거래되었다고 하네.

ecey, enu kyengmayeyse cincca lokhouy kulimi ku kumaykulo kelaytoyesstako haney.

b. これほどの量は服用でなく注入しないと出ないって。(ツ)

이 정도 용량으로는 복용이 아니라 직접 주입해야만 가능하다고 하네요.

i cengto yonglyangulonun pokyongi anila cikcep cwuiphayyaman kanunghatako haneyyo.

c. 数千の下請け会社が倒産するとか。(カミ)

JD 그룹 오너 구속하면 수천개 하청업체가 도산한다네요.

JDkulwup one kwusokhamyen swuchenkay hachengepcheyka tosanhantaneyyo.

d. 来年度の人事異動のことで僕に相談したいらしい。(シ)

이건 사실 대외빈데 내년도 인사이동 건을 나랑 의논 좀 했으면 좋겠다네.

iken sasil tayoypintey naynyento insaitong kenul nalang uynon com hayssumyen cohkeysstaney.

用例(17)のように‘-다고 하네(tako haney)/-다네(taney)’は、縮約前の形と縮約形が一緒に用いられている表現である。장경희(1985)によると、モダリティ表現‘-네(ney)は현재지각(現在知覚)を表すと述べられており、윤석민(2000:112)によると、‘-네(ney)’は説明法と感嘆法の用法があるが、感嘆法として用いられた際は命題内容の伝達のみならず、

それについての話し手の驚きや感嘆のような強い情感的態度が表れると述べられている。‘-다고 하네(tako haney)、-다네(taney)’の話し手の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手と聞き手の間に情報共有認識はなく、話し手の心的態度を表す戦略は、用例(17)の例から、他から入手した情報に驚き・感嘆を込めて伝えることにある。また、聞き手には未知の情報を説明するように伝達する場合は‘-다고 하네(tako haney)’が用いられるが、上昇イントネーションで、命題内容に対する話し手の驚きや感嘆を込めて伝えるときは縮約形の‘-다네(taney)’が用いられている。このことから、‘-다고 하네(tako haney)’より‘-다네(taney)’の方が、命題内容に対する話し手の感情が表現しやすくなっていると考えられる。

さらに聞き手の立場からは、未知の情報が説明的に提示されるか、話し手の驚き・感嘆を込めて伝えられて、肯定的・否定的・間接的・不確かといった話し手の情報判断が示されないため、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。

(18)‘-다고 하더군(tako hatekwun)/-다더군(tatekwun)’

a. 会議のあとはウィスキーを飲まれるとか。(サ)
   회의가 끝나면 언제나 위스키를 드신다고 하더군요.
   hoyuyka kkuthnamyen enceyna wisukhilul tusintako hatekwunyo.

b. これからは証拠だけではなく証人も信じると言ってたわ。(サ)
   평생 증거를 믿어 왔지만 이젠 증인을 믿어 보겠다고 하더군요.
   phyengsayng cungkelul mite wassciman iceyn cunginul mite pokeysstako hatekwunyo.

c. 刑務所で感電死したそうですね。(サ)
   교도소에서 감전 사고로 죽었다고 하더군요.
   kyotosoeyse kamcen sakolo cwukesstako hatekwunyo.

d. なに。ぼくはこのままでいく。Wさんのいうには、日本で洋服をこしらえていったって、むこうでは着られないそうだ。(雁)
   뭐 난 이대로 갈걸세. W 씨가 그러는데 일본에서 양복을 맞춰 가 봤자 그쪽에서는 어차피 못 입는다더군.
   mwe nan itaylo kalkelsey. Wssika kulenuntey ilponeyse yangpokul macchwe ka pwassca kuccokeysenun echaphi mos ipnuntatekwun.

표준국어대사전(1999)によると、‘-더군(tekwun)’は‘-더구나(tekwuna)’の縮約語であり、過去のある時に直接経験し知り得た事実を現発話でそのまま伝え、話し手が知り得た

ことに注目していることを表す終結語尾である。先行研究において‘-군(kwun)’は‘-구나(kwuna)[65]’の縮約語という認識が強い。しかし、正確には‘-군(kwun)’は‘두루낮춤(下称)体’であり、聞き手との年齢差・親疎関係により、‘-군요(kwunyo)’のように‘-요(yo)’をつけると、‘-해요(hayyo)体[66]’の‘두루높임(略待丁寧形)’になり、社会的注意を払うことができるが、‘-구나(kwuna)’は‘두루낮춤(下称)’の‘-해라(hayla)体[67]’であるため、‘-요(yo)’をつけることができない。また、‘-구나(kwuna)’は、장경희(1995:198)においては、新しく知り得たことを表すと述べられ、박재연(2014:239)においては、情報の内面化過程を表し、思考による認識が基本的意味であるため、推論と密接な関りがあると述べている。しかし、‘-다고 하더군(tako hatekwun)/-다더군(tatekwun)’の形で、伝聞に用いられる際には、新しく知り得たことや、内面化による推論というより、用例(18)のように他人により間接的に知り得た情報に、ある程度信頼を寄せながらも客観性を保って伝えるのが本来の機能であると考えられる。なぜなら、(18.a～d)から、話し手が新しく知り得たことを述べているものの、情報と距離を置き、客観的に伝えていることが分かるが、これはおそらく‘-더(te)-’の影響を受けているためであると推測され、’-더(te)-’の持つ客観性と‘-구나(kwuna)’の新しく知り得た意味が統合された結果であると思われる。特に(18.d)の用例をみると、話し手は新しい洋服を新調する必要がない、このまま行くと言い、その証拠としてW氏の話を挙げているが、話し手のこのような判断はW氏の話に信頼を寄せている結果であると言える。

そのため、‘-다고 하더군(tako hatekwun)/-다더군(tatekwun)’の話し手の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手の心的態度を表す戦略は‘-다더라(tatela)’と同じく、他から得た情報にある程度信頼を寄せながらも話し手と距離を置き、情報を客観的に伝達することである。また情報が聞き手に及ぼす影響は、話し手により情報が客観的に提示されているため、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。

(19)‘-다고 그러다(tako kuleta)/-다 그러다(ta kuleta)’

---

65 남기심・고영근(2009)によると、‘-군(kwun)’以外にも‘-구먼(kwumen)’、‘-구려(kwulye)’も‘-구나(kwuna)’の異形態であると述べられている。

66 韓国語の対者敬語法の一つで、李翊燮　他(2004:256)によると、聞き手が自分より上位の人であったり、上位になくても丁重に遇すべき人であったりするときに使う言葉遣いとして、今日最も広く使われている等級であると述べられている。

67 李翊燮　他(2004:251)によると、気の置けない友達に、あるいは父母が子供に、あるいは年配の話者が小学生や中学生程度の幼い子供を相手に使う等称と述べられている。

a. ヤン刑事が検視結果を保険会社に連絡すると。(サ)
양형사님이 부검결과 나오면 보험회사에 연락해야 된다고 그러셨어요.
yanghyengsanimi pwukemkyelkwa naomyen pohemhoysaey yenlakhayya toyntako kulesyesseyo.
b. バスジャックのときに一緒だった刑事に全部話すと言ったきりだ。(スクラップ・ヘブン)
버스 사건 때 같이 있던 형사에게 다 말한다고 그랬어.
pesu saken ttay kathi issten hyengsaeykey ta malhantako kulaysse.

‘-다고 그러다(tako kuleta)/-다 그러다(ta kuleta)’の話し手の情報共有の確保手段は、他から得た情報の伝達である。(19.a,b)のように話し手の心的態度を表す戦略は他から得た情報を自分と距離を置いて客観的に伝えることであるため、そういう面においては‘-다고 하다(tako hata)’と同じくらい客観的伝聞表現であり、代動詞‘-하다(hata)’を‘-그러다(kuleta)’に置き換えただけの形式である。しかし、‘-다고 하다(tako hata)’が書き言葉と話し言葉両方に用いられることに比べ、‘-다고 그러다(tako kuleta)/-다 그러다(ta kuleta)’は主に話し言葉に用いられる違いがある。また‘-다고 하다(tako hata)’は‘-고 하(ko ha)-’が縮約され、‘-대(tay)’になるが、‘-다고 그러다(tako kuleta)’は‘-고 (ko)-’縮約により‘-다 그러다(ta kuleta)’になる。さらに、‘-대(tay)’は話し手本人の以前の発話を伝えることができないが、‘-다 그러다(ta kuleta)’は話し手の以前の発話を伝えることもできる。‘-다고 그러다(tako kuleta)/-다 그러다(ta kuleta)’の情報が聞き手に及ぼす影響は、話し手により情報が客観的に提示されるため、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。ただし、‘-다고 그러다(tako kuleta)/-다 그러다(ta kuleta)’は話し手本人が第3者に話したことを聞き手に伝えるときにも用いられるが、この場合は伝聞ではなく引用になる。

５．２．２．１．２接続語尾形伝聞表現

ここでは、以下の<表 20>のように韓国語伝聞表現の意味範疇①の中で、接続語尾形伝聞表現を確認するが、これらの伝聞表現は、非終結語尾が文末に用いられ、文終結の機能を果たしているため、김태엽(1998:186)では非終結語尾の終結語尾化[68]としている表現である。

68 김태엽(1998 : 178)は、非終結語尾の終結語尾化過程を以下のように提示している。
ㄱ. 후행절의 삭제(後行節の削除)
ㄴ. 끊어짐의 수행～억양 얹힘(文の切れ～イントネーション追加)

＜表 20. 伝聞表現の意味範疇①-接続語尾形伝聞表現＞

意味範疇① 接続語尾形 伝聞表現	다고 하더라고(tako hatelako)	다더라고(tatelako)
	다고 해서(tako hayse)	대서(tayse)
	다고 하던데(tako hatentey)	다던데(tatentey)
	다고 하니까(tako hanikka)	다니까(tanikka)
	다고 하는데(tako hanuntey)	다는데(tanuntey)

(20) ‘-다고 하는데(tako hanuntey)/-다는데(tanuntey)’

a. 胃も切り取ったそうだ。(ケ)

위 절제술도 받았다는데?

wi celceyswulto patasstanuntey?

b. 2、3 日休むそうです。(ケ)

2,3 일 못 나올 것 같다는데요?

2,3il mos naol kes kathtanunteyyo?

c. 私を諦めれば示談にするそうです。(シ)

그냥 나 포기하면 김주원 씨가 합의해 준다는데.

kunyang na phokihamyen kimcwuwen ssika hapuyhay cwuntanuntey.

국립국어원(2005)によると、‘-다는데(tanuntey)’は話し手が他から聞いた事実を余韻を残しつつ伝えることで情報を間接的に表す表現と述べられている。しかし、(20.a,b)は上昇イントネーションを伴い、他から聞いた事実を間接的に伝えているのみで、それにより聞き手の意見を求める機能はないが、(20.c)は、同じく上昇イントネーションを伴い、聞き手に何らかの意見・行動を求めることで聞き手に働きかける機能がある。‘-다고 하는데(tako hanuntey)’に関しては、今回資料とした小説やドラマ、映画からは、文末に用いられる用例を探すことはできないほど、‘-다는데(tanuntey)’への文法化が進んでいると思われるが、‘여자 친구가 친구들이랑 여행 간다고 하는데요.(yeca chinkwuka chinkwutulilang yehayng kantako hanunteyyo.)’のような用例がネットで見つかることか

ㄷ.문장 종결 기능 획득(文終結機能の獲得)

ら、縮約前の形式と縮約形が一緒に用いられる表現として意味範疇①に属させた。

‘-다고 하는데(tako hanuntey)/-다는데(tanuntey)’の話し手による情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であり、話し手の心的態度を表す戦略は情報と距離を置き、間接的に伝えるか、聞き手に何らかの意見・行動を求め働きかけることにある。そのため、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。

(21)‘-다고 하던데(tako hatentey)/-다던데(tatentey)’

a.誰かに会いに来たそうね。(ヤ)

누굴 만나러 왔다고 하던데.

nwukwul mannale wasstako hatentey.

b.その幽霊は一生住みつくともいうわ。(ケ)

저 근데 그날 집을 알려주면 평생 같이 산다던데.

ce kuntey kunal cipul allyecwumyen phyengsayng kathi santatentey.

c.お金を一日で使ったとか。(シ)

봉투 줬더니 냉큼 받아 하루만에 다 썼다던데.

pongthwu cwessteni nayngkhum pata halwumaney ta ssesstatentey.

‘-다고 하던데(tako hatentey)/-다던데(tatentey)’も非終結語尾の終結語尾化である。もともと接続語尾‘-던데(tentey)’は、‘A-던데(tentey)B’の形でBをいうための背景を述べたり、AとBの関係が対照関係にある時に用いられるが、終結語尾‘-던데(tentey)’は過去の事実に感嘆を込めて伝えたり、聞き手にある種の反応を期待しながら伝える時に用いられる。用例(21)のように伝聞‘-다고 하던데(tako hatentey)/-다던데(tatentey)’は、‘A-다고 하던데(tako hatentey)/-다던데(tatentey)B’の形で他から入手した情報をある程度確定的なものとして認識していながらも、情報と距離を置いて提示している伝聞表現である。よって、情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手の心的態度を表す戦略は情報と距離をおいて間接的に伝えることにある。また、聞き手の立場からは、話し手により提示された情報が間接的なものとして提示されるため、情報の真偽判断に介入できる。

(22)‘-다고 하더라고(tako hatelako)/-다더라고(tatelako)’

a.突然若い女性教師に殺すと突っかかったの。両親が来てうまくもみ消したそうよ。(ツ)

갑자기 젊은 여선생님한테 죽여버리겠다고 대든 적이 있었대. 부모님들이 와서 잘

무마해서 넘겼다고 하더라고.

kapcaki celmun yesensayngnimhanthey cwukyepelikeysstako taytun ceki issesstay. pwumonimtuli wase cal mwumahayse nemkyesstako hatelako.

b. 検事さんが言ってた日に買ったといってた。(ケ)

그날 검사님이 말씀하셨던 날 샀다고 하더라고요.

kunal kemsanimi malssumhasyessten nal sasstako hatelakoyo.

c. チュ部長の話では次官に急かされたと。(サ)

주인혁 부장님 말씀으론 차관님께서 독촉을 하셨다고 하더라구요.

cwuinhyek pwucangnim malssumulon chakwannimkkeyse tokchokul hasyesstako hatelakwuyo.

これまでの先行研究においては、ムード形式の先語末語尾‘-더(te)-’に主眼が置かれ、‘-다고 하더라고(tako hatelako)/-다더라고(tatelako)’に関する先行研究はほとんどなされていない。それは‘-더라(tela)’と‘-다고 하더라고(tako hatelako)/-다더라고(tatelako)’の相違点に関しても同様である。남기심(2001:342)においては、‘-더(te)-’は話し手が経験したことを客観化し、時間的・空間的に現場の外[69]で、当時の状況をその通り他人に報告する機能があるが、ただし、観察・経験の時点は過去のある時であると述べられている。‘-더(te)-’は、남기심・고영근(2009)においては回想法、박재연(1999:205)においては直接見たり観察し知覚したことや新しく知り得たことを表し、이홍식(2003:250)は過去認識・過去・回想としている。また、장경희(1995)は‘-더(te)-’を認識のモダリティとし、話し手の知覚を表すとしている。用例(22)の限り‘-다고 하더라고(tako hatelako)/-다더라고(tatelako)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達である。‘-다고 하더라고(tako hatelako)/-다더라고(tatelako)’は他から入手した情報を思い浮かべ、客観的に伝えていることにより、情報と距離を置きたい話し手の心的態度を表す戦略が窺えるが、伝聞に組み込まれた際には、박재연(1999)で言うような情報を新しく知りえたり、知覚したという意味はない[70]ため、ムード形式’-더(te)-’の意味が‘-

69 場の移動を表す。

70 ‘-다고 하더라고(tako hatelako)/-다더라고(tatelako)’に新しく知り得たり、知覚したという意味がないことは以下のような用例からも確認できる。

a. 역시나 못 도와준다더라고. (やっぱり手伝えないんだって。)

yeksina mos towacwuntatelako.

(a)の副詞‘역시나(yeksina)’から分かるように、話し手は情報内容のような結果をすでに予測していたため、新しく

다고 하더라고(tako hatelako)/-다더라고(tatelako)’にそのまま引き継がれないことが分かる。聞き手の立場から考えてみると、情報が客観的に提示されているため、聞き手は情報の真偽を不確かに受け入れ、情報の真偽判断に介入できる。

(23) ‘-다고 해서(tako hayse)/-대서(tayse)’

a. ライムさんが見学したいと。(シ)
   길라임 씨가 현장 꼭 보고 싶다고 해서요.
   killaim ssika hyencang kkok poko siphtako hayseyo.

b. 妊娠中の妻がどうしてもここのパンを食べたいって。(コ)
   제 와이프 될 사람이 임신을 했는데 여기 빵이 죽어도 먹고 싶대서요.
   cey waiphu toyl salami imsinul hayssnuntey yeki ppangi cwuketo mekko siphtayseyo.

c. 宿題を出されたそうですね。(コ)
   백이사님이 숙제 내 주셨대서요.
   paykisanimi swukcey nay cwusyesstayseyo.

d. タイヤがパンクして車は動かない、修理は2時間半もあとだって。(ケ)
   서울 갈라고 했는데 차는 펑크나서 주저 앉아 있고 AS 기사는 두시간 반 후에나 온대서요.
   sewul kallako hayssnuntey chanun phengkhunase cwuce anca issko ASkisanun twusikan pan hwueyna ontayseyo.

‘아서/어서(ase/ese)’は、理由・原因を表す代表的な接続語尾である。伝聞表現‘-다고 해서(tako hayse)/-대서(tayse)’も例えば、(23.a)の「길라임 씨가 현장 꼭 보고 싶다고 해서요.(*그래서 같이 왔어요*)(killaim ssika hyencang kkok poko siphtako hayseyo.*(kulayse kathi wasseyo)*)」や、(23.d)の「서울 갈라고 했는데 차는 펑크나서 주저 앉아 있고 AS 기사는 두시간 반 후에나 온대서요.(*그러니까 그 때까지 여기 있으면 안돼요?)*(sewul kallako hayssnuntey chanun phengkhunase cwuce anca issko ASkisanun twusikan pan hwueyna ontayseyo.(*kulenikka ku ttaykkaci yeki issumyen antwayyo?)*)」の()の中のような後文が想定できることから、理由・原因の意味が引き継がれている考えられる。‘-다고 해서(tako hayse)/-대서(tayse)’の話し手の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手の心的態度を表す戦略は、他から得た情報を理由に、現在の話し

知り得たり知覚した情報を伝えているとは言えない。

手の行動を説明する、あるいは聞き手に働きかけることである。さらに情報が聞き手に及ぼす影響は、話し手により何らかの行動を働きかけられ、情報を肯定的に受け入れるため、情報の真偽判断にあまり介入できない。

(24)‘-다고 하니까(tako hanikka)/-다니까(tanikka)’

a.おばあ様が食べに来いって。(ヤネ)

할머니가 집으로 점심 먹으러 오라고 하셨다니까.

halmenika cipulo cemsim mekule olako hasyesstanikka.

b.幸福をもたらす靴だって。(ケ)

이 웨딩라인 신은 여자들은 다 행복해졌다니까.

i weytinglain sinun yecatulun ta hayngpokhaycyesstanikka.

c.アメリカに行くと。(ヤ)

나한테 분명히 미국으로 떠나겠다고 했다니까요.

nahanthey pwunmyenghi mikwukulo ttenakeysstako haysstanikkayo.

用例(24)をみると、‘-다고 하니까(tako hanikka)/-다니까(tanikka)’は、話し手により用いられる情報が初出ではなく、一度話したことが聞き手に聞き入れてもらえなかったり、話し手が他から入手した情報に信念を持って、もう一度強調して言う場合に用いられている。このことから、‘-다고 하니까(tako hanikka)/-다니까(tanikka)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手の心的態度を表す戦略は「強調」と言える。よって、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。また、‘-다니까(tanikka)’は話し手本人の先行発話を繰り返して話す場合にも用いられるが、この場合は伝聞ではなく引用になる。

これまでの考察を纏めると、本稿で韓国語伝聞表現の意味範疇①としている伝聞表現は、現在のところ、縮約・省略形と縮約・省略前の形が一緒に用いられているため、縮約・省略が進んでいる、つまり文法化が進んでいる表現と言える。

次項では、縮約・省略されていると認めにくい伝聞表現や、依存名詞などが付き複合語尾を構成することで、モーダル性の強い表現になっている伝聞表現を韓国語伝聞表現の意味範疇②とし確認する。

５．２．２．２伝聞表現の意味範疇②

本稿において縮約されている‘-고 하(ko ha)-’が復元できなかったため、伝聞表現の文法範疇に属させるべき表現であるが、使用頻度が非常に少なく、尚且つ文法範疇に属させ

ている表現と意味的違いがあまり見られない表現(‘-다데(tatey))や、連体修飾形伝聞表現、縮約形がない表現、膠着語ならではの特徴から文法要素が複雑に重なり合っている表現を<表 21>の通り伝聞表現の意味範疇②に属させた。

＜表 21. 伝聞表現の意味範疇②＞

意味範疇②	다데(tatey)
	다잖아(tacanha)
	다는 거다(tanun keta)
	다고 듣다(tako tutta)
	다더구만(tatekwuman)
	다던가(tatenka)
	다고들 하다(takotul hata)
	다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)
	다지 뭐야(taci mweya)

(25) ‘-다데(tatey)’

a. 아무개 집이 이번에 도로로 들어 간다데.(国立国語院)

amwukay cipi ipeney tololo tule kantatey.

b. 난 싸우고 싶은데 그는 사랑을 하고 싶다데요.(国立国語院)

nan ssawuko siphuntey kunun salangul hako siphtateyyo.

c. 俺が親分の愛人を侮辱したって言うんだ。(シ)

내가 지들 두목 애인을 모욕했다데?

nayka citul twumok ayinul moyokhaysstatey?

표준국어대사전(1999:1537)によると、‘-데(tey)’は話し手が直接経験した事実を報告するように伝える時に用いられ、‘-더라(tela)’と同じ意味であるのに比べ、‘-대(tay)は直接経験した事実ではなく、人が話したことを間接的に伝えるときに用いられると述べられている。しかし、‘-데(tey)’は‘-다데(tatey)’の形で(25.a,b)のように平叙文として表れる場合は、人の話を客観的に伝えることができ、(25.c)のように上昇イント

ネーションで、情報に対する話し手の不満・不信を表すこともできる。よって、‘-다데(tatey)’の情報共有の確保手段は、他から得た情報の伝達であり、話し手の心的態度を表す戦略は、情報と距離を置いて客観的に伝えるか、情報に対する話し手の不満・不信を表すことである。また聞き手の立場からは、情報が客観的に提示されるため、情報の真偽判断に介入できる。

(26)‘-다잖아(tacanha)’

a.携帯を届けたら、預かれないって。(ヤ)

아니, 핸드폰만 맡기고 가려고 했는데 물건은 안 맡아 준다잖아.

ani, hayntuphonman mathkiko kalyeko hayssnuntey mwulkenun an matha cwuntacanha.

b.養子縁組に支援だと。(ヤ)

국내 입양아를 위한 사업을 한다잖아.

kwuknay ipyangalul wihan saepul hantacanha.

c.去年首席だった子もダメだと思ったって。(カミ)

작년에 수석한 영준이도 과락만 안 되길 그렇게 빌었다잖아.

caknyeney swusekhan yengcwunito kwalakman an toykil kulehkey pilesstacanha.

‘-잖아(요)(canha(yo))’は、話し手の聞き手に対する確認要求表現として、聞き手と話し手の情報共有認識を作り出す手段であると理解されてきた。온쓰카(2003)においては、‘-잖아(요)(canha(yo))’を日本語の「じゃないですか」に対比させ、若者言葉としての‘-잖아(요)(canha(yo))’は、話し手と聞き手の情報共有認識とは無関係で、話し手と聞き手(目上やよく知らない人)との間の距離を狭め、情報共有の場、会話の契機を提供する前置き表現として、また新敬語表現として用いられると述べている。

しかし、伝聞表現‘-다잖아(tacanha)’は、基本的には(26.b,c)のように話し手と聞き手の情報共有認識が認められるが、(26.a)の如く、話し手と聞き手の情報共有認識が認められない場合にも用いることができ、この場合は情報内容を強調し、事態に対する話し手の弁解、つまり言い訳を表す。

‘-다잖아(tacanha)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達で、話し手の心的態度を表す戦略は、(26.a)のように、話し手が用いる情報が他者の話であることを強調し、自己弁護のように用いるか、(26,b,c)のように、話し手は自分が伝えている情報にある程度信頼を寄せながら、話し手と聞き手の情報共有認識を強調し、念を押す形で聞き手を話し手の方へ誘導することである。このように話し手により情報が強調されて提示されるため、聞

き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。

(27) ‘-다는 거다(tanun keta)’

a. 今国道監視カメラを確認しているそうだ。(ツ)

이 근처 국토 CCTV 를 관리하는 지역도로공사에서 수색중이라고 잠시 대기하라는 거야.

i kunche kwuktho CCTVlul kwanlihanun ciyektolokongsaeyse swusaykcwungilako camsi taykihalanun keya.

b. 名誉毀損はもちろんのこと、強引な捜査を続けたせいで命を失ったと。(サ)

수사과정에서의 명예회손은 물론이고 결국 무리한 수사 때문에 정차영 대표가 목숨을 잃게 됐다는 거야.

swusakwacengeyseuy myengyeyhoysonun mwulloniko kyelkwuk mwulihan swusa ttaymwuney cengchayeng tayphyoka mokswumul ilhkey twaysstanun keya.

c. テヨンがパク・ハを好きなんだって。(ヤネ)

태용이가 박하를 좋아한다는 거야 글쎄.

thayyongika pakhalul cohahantanun keya kulssey.

‘-다는 거다(tanun keta)’の‘-거(ke)-’は依存名詞であるため、‘-다는 거다(tanun keta)’は連体修飾形伝聞表現である。‘-다는 거다(tanun keta)’は話し言葉では主にパンマル体の‘-다는 거야(tanun keya)’の形で用いられる。‘-다는 거야(tanun keya)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達で、話し手の心的態度を表す戦略は、情報に対する話し手の信じられない気持ち・驚きなどを表すことであるが、(27.c)の‘글쎄(kulssey)’のようにモーダル性の強い表現を文の前後に加え、話し手の驚きの気持ちをさらに強調すると共に聞き手を話し手の方へ誘導する表現である。また次の如く、‘강준혁 후보 측에서 검찰 내부에 힘을 쓰기 시작했어(kangcwunhyek hwupo chukeysekemchal naypwuey himul ssuki sicakhaysse).’と話し手が他から得た何らかの情報から、‘수단과 방법을 가리지 않고 재수사를 *막겠다는 거야*(swutankwa pangpepul kalici anhko cayswusalul makkeysstanun keya).’と、その情報に内在されている意味を類推して伝える場合にも用いられるが、この場合は伝聞ではなく引用とする[71]。‘-다는

71 本稿4.2.2の伝聞用法「ようだ」は、話し手が他から得た情報が話し手の認識世界で内面化され、話し手の自己責任のもとで推論のように言語化すると述べたが、この用例の場合、他から得た情報を完全に話し手の推論として言語化しているため、伝聞と認めることはできない。

거야(tanun keya)’により提示される情報が聞き手に及ぼす影響は、情報が話し手の驚きなどの気持ちを込めて提示され、聞き手を話し手の方へ誘導しているため、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できなくなることである。このことから日本語の連体修飾形伝聞表現は情報を客観的に提示するのに比べ、韓国語の連体修飾形伝聞表現は情報に話し手の主観が介入し、聞き手を話し手の方へ誘導しているため主観的であると言える。

(28) ‘-다고 듣다(tako tutta)’

a. 明洞の遊説５千人が聞いていたそうだ。(ツ)

명동 유세에 모인 인파가 5 천명이 넘었다고 들었습니다.

myengtong yuseyey moin inphaka 5chenmyengi nemesstako tulesssupnita.

b. 一つ頼んでも。スジョンとホンソクの事件を調査中だとか。(ツ)

부탁 하나만 드려도 되겠습니까? 수정이하고 홍석이 사건을 조사한다고 들었습니다.

pwuthak hanaman tulyeto toykeysssupnikka? swucengihako hongseki sakenul cosahantako tulesssupnita.

c. UBC 放送の社長に顔が利くそうですね。(ツ)

UBC 방송국 사장단을 움직일 수 있다고 들었습니다.

UBCpangsongkwuk sacangtan wumcikil swu isstako tulesssupnita.

d. 行政安全部の次官が来てたとか。(ツ)

그날 행안부 차관님의 방문이 있었다고 들었습니다.

kunal haynganpwu chakwannimuy pangmwuni issesstako tulesssupnita.

伝聞として用いられる‘다고 듣다(tako tutta)’は命令・疑問・勧誘形をとらず、‘다고 듣다(tako tutta)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、主に話されたことの伝達で用いられる特徴がある。話し手の心的態度を表す戦略は‘-듣다(tutta)’、つまり「聞く」という動詞が物語っているように、情報と距離を置き間接的に伝えることである。さらに(28.c,d)のように、話し手が用いている情報内容が他から得た情報であるということを示す上に、聞き手に情報の真偽を確認する機能も持っている場合もあるが、それが常ではなく、この際の話し手の情報確認の度合いは必ずしも強いものではない。よって情報が聞き手に及ぼす影響は、話し手により情報が間接的に提示されるため、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。聞き手は話し手に情報の確認を求められる場合もあるが、聞き手の情報提供は、‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’が用いられた際の情報提供より消極的に行われる可能性もある。そのため、‘다고 듣다(tako tutta)’は情報を間

接的に伝えることが基本的意味であると言える。

(29) ‘-다더구만(tatekwuman)’

a. 3ヵ月ほど先になるそうだ。(国立国語院)

한 삼개월 걸린다더구만.

han samkaywel kellintatekwuman.

b. 녀석이 희랍의 조각 같은 몸매를 아주 사랑했다더구만. 자신도 보디빌딩인가 하면서 몸매를 가꾸었고. 녀석의 몸매도 자네 못지않았어. 사진을 보니 그렇더군.

(国立国語院)

nyeseki huylapuy cokak kathun mommaylul acwu salanghaysstatekwuman. casinto potipiltinginka hamyense mommaylul kakkwuessko. nyesekuy mommayto caney moscianhasse. sacinul poni kulehtekwun.

c. 박창일 선생이 에덴 살롱에서 기다리겠다더구만……. (国立国語院)

pakchangil sensayngi eyteyn sallongeyse kitalikeysstatekwuman…….

‘-다더구만(tatekwuman)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であり、話し手の心的態度を表す戦略は、情報と距離を置いて客観的に伝えることである。特に(29.b)を見てみると、‘아주 사랑했다더구만(acwu salanghaysstatekwuman)’の後文に‘자신도 보디빌딩*인가* 하면서 ・ ・ ・ *사진을 보니 그렇더군*(casinto potipiltinginka hamyense・・・*sacinul poni kulehtekwun*)’、つまり「ボディービル*か何か*やりながら・・・*写真をみたらそのようだった*」の斜体で表記している文字から分かるように、情報内容をかなり客観的に提示していることが分かる。そのため、聞き手は情報の真偽判断に介入できる。

(30) ‘-다던가(tatenka)’

a.聞いたところセヨンと付き合ってるそうだな。(コ)

내 듣기론 세연이하고 만나는 사이라던가.

nay tutkilon seyyenihako mannanun sailatenka.

남기심(2001:356)によると、‘-던(ten)-’は過去のある時点を基準とし、そのときの出来事や、過去のある時点の現状や完了を表し、回想報告の機能を持っているという点において’-더(te)-’と同じであると述べられている。しかし、‘-던가(tenka)’は過去の出来事

に対する疑問の意味を持っているため、その影響で伝聞に用いられる‘-다던가(tatenka)’も、情報を不確かなものとして伝える伝聞表現になる。‘-다던가(tatenka)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手の心的態度を表す戦略は、情報と距離をおいて不確かに伝えることである。情報が聞き手に及ぼす影響は、話し手により情報が不確かに提示されているため、聞き手は情報の真偽判断に介入できることである。

(31)‘-다고들 하다(takotul hata)’

a.最近似てきたとか言われます。(天国の本屋)

제가 쇼코 이모를 많이 닮았다고들 해요.

ceyka syokho imolul manhi talmasstakotul hayyo.

b.신혼여행지로는 제주도가 제일 좋다고들 합니다. (延世韓国語 4-1)

sinhonyehayngcilonun ceycwutoka ceyil cohtakotul hapnita.

c.올해 대학교 입학시험은 아주 어려웠다고들 해요.(延世韓国語 4-1)

olhay tayhakkyo iphaksihemun acwu elyewesstakotul hayyo.

‘-다고들 하다(takotul hata)’の情報共有の確保手段は、他から得た情報の伝達であり、話し手の心的態度を表す戦略は、複数を表す接尾辞‘-들(tul)の存在から分かるように、話し手が用いる情報が話し手の個人的な意見や、単に他から得た情報ではなく、複数の人、あるいは一般にそう言われている、ということを全面的に示し、情報に対する聞き手の信頼度を高めることである。よって、情報が聞き手に及ぼす影響は、話し手により、情報が信頼度の高いものとして提示されるため、聞き手は情報の真偽判断に消極的になり、あまり介入しないことになる。また、‘그 문제에 대해 사람들은 뭐라고들 합니까?(ku mwunceyey tayhay salamtulun mwelakotul hapnikka?)’つまり、「その問題についてみんな何と言っていますか。」のように、複数の人の見解を尋ねるときにも用いられるが、この場合は伝聞ではなく引用になる。

(32)‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’

a.なのにジュナさんは警察に男を捕まえるなって。(カミ)

근데 사소한 싸움이라고 경찰한테 그냥 가라고 하는 거 있지?

kuntey sasohan ssawumilako kyengchalhanthey kunyang kalako hanun ke issci?

‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’の‘-거(ke)-’は依存名詞であるため、

‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’も連体修飾形の‘-다고 하는 거다(tako hanun keta)’に‘-있지(issci)’が付いた形である。장경희(1985)によると‘-있지(issci)’の‘-지(ci)’は이미 앎(既知)を表すモダリティ表現である。しかし上記の‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’においての‘-지(ci)’は既知を表すというより情報内容が話し手にとって納得できないものであることを聞き手に訴えている。‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達で、話し手の心的態度を表す戦略は、情報に対する話し手の未予測の喜び・不満・不愉快といった心的態度を表すと同時に、聞き手を同調させ、話し手の方へ誘導することにある。よって、情報が聞き手に及ぼす影響は、情報に話し手の主観が強く介入することにより、聞き手は逆に情報の真偽判断にあまり介入できなくなることである。

日本語の連体修飾形伝聞表現が情報を客観的に提示するのに比べ、韓国語の連体修飾形伝聞表現‘-다는 거다(tanun keta)’、‘-다고 하는 거 있지(tako hanun ke issci)’の例から、韓国語の連体修飾形伝聞表現は情報に話し手の主観が介入しやすく、聞き手を話し手の方へ誘導していることが分かった。言語類型学的に類似していると言われている日韓両国語伝聞表現のこのような違いは、日本語と韓国語の根底にある思惟的違いに起因すると言えるのではなかろうか。

(33)‘-다지 뭐야(taci mweya)’

a.それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいというて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。　　(羅生門)

이 여편네가 파는 생선포는 맛이 좋다고 하면서 위병들이 거르지 않고 반찬거리로 사갔다지 뭐야.

i yephyenneyka phanun sayngsenphonun masi cohtako hamyense wipyengtuli keluci anhko panchankelilo sakasstaci mweya.

‘-다지 뭐야(taci mweya)’は、前述の用例(5)の‘-다지(taci)’と違い、聞き手への情報要求機能がない。また、‘-다지(taci)’の‘-지(ci)’も既知の意味より後接する‘-뭐야(mweya)’と相俟って、聞き手に話し手の主張を訴える意味がある。‘-다지 뭐야(taci mweya)’の話し手の情報共有の確保手段は他から得た情報の伝達であるが、話し手の心的態度を表す戦略は、情報内容が話し手にとって未予測の喜びや不満であることを表すことにあり、聞き手を話し手の方へ誘導するモーダル性の強い表現である。情報が聞き手に及ぼす影響は、情報に対する話し手の強い感情表出により、聞き手は情報の真偽判断に

あまり介入できなくなることである。(5.2.1.１の用例(5)参照)

また、日本語は助動詞、複合助動詞などが「命題めあてのモダリティ」を、終助詞が「発話伝達のモダリティ」を表すとされているが、韓国語はムード形式が存在することによりムードが「命題めあてのモダリティ」を、文末表現が「発話伝達のモダリティ」を表すと定義している研究もある。しかし、‘-다지(taci)’と‘-다지 뭐야(taci mweya)’のような用例から考えると、‘-다지(taci)’と‘-다지 뭐야(taci mweya)’の場合、ムード形式が現れないため「命題めあてのモダリティ」が現れず、‘-지(ci)’、と‘-지 뭐야(ci mweya)’が「発話伝達のモダリティ」を表すことになるが、この際の、‘-지(ci)’と‘-지 뭐야(ci mweya)’の違いは説明し難いと思われる。そのため、本稿では韓国語はムードとモダリティの区別ははっきりしているが、「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界ははっきり区別できず、語彙的に表れる場合もあると見ている。

この項では、本稿において伝聞表現の文法範疇(縮約・省略されている‘-고 하(ko ha)-’が復元できないもの)や、伝聞表現の意味範疇①(縮約・省略形ともとの形が一緒に使われている)に入れることができなかった複合形伝聞表現や、モーダル性の強い伝聞表現を、仮に韓国語伝聞表現の意味範疇②と名づけて確認した。韓国語伝聞表現の意味範疇②の表現は、これまではあまり研究されていない表現であるが、話し手の心的態度を表す戦略の面からは、話し手の心的態度を強く表すことで聞き手を話し手の方へ誘導するのみならず、聞き手の真偽判断に影響を及ぼす表現であるため本稿で取り上げることとした。

５．２．２．３推論表現と伝聞表現の連続性

日本語の推論「ようだ」、「らしい」が、伝聞状況から話し手の推論にずれ込みやすいことは第 4 章で確認してきたが、韓国語においても推論表現が伝聞に用いられ、伝聞状況が話し手の推論にずれ込む、つまり伝聞表現が話し手の認識世界において内面化され、話し手の自己責任のもとで推論のように用いられる<表 22>のような表現が確認できた。

＜表 22. 推論表現と伝聞表現の連続性＞

推論表現と伝聞表現の連続性	-ㄹ/을 모양이다 (l/ul moyangita)	-ㄹ/을 것 같다 (l/ul kes kathta)

(34)‘-ㄹ/을 모양이다(l/ul moyangita)’

a. ジミンお母さんが遅れるそうだ。(ケ)

지민아 엄마가 좀 늦으실 모양인데?

cimana emmaka com nucusil moyangintey?

b. ほかのメディアも流すそうです。UBC は取材もするそうです。(ツ)

다른 언론사들도 속보 시작할 거래요. UBC 에선 후속 취재까지 시작한 모양이에요.

talun enlonsatulto sokpo sicakhal kelayyo. UBCeysen hwusok chwicaykkaci sicakhan moyangieyyo.

(34.a)は、子供の迎えが遅くなると子供の母親から電話を受けた塾の先生が子供に話した台詞である。先生は子供の母親から遅くなるとはっきり言われたにも関わらず、‘-ㄹ/을 모양이다(l/ul moyangita)’を用い、あたかも話し手本人の推論のように伝えている。(34.b)においても他から UBC が取材を始めたとの話を聞いているにも関わらず、話し手の推論のように提示することで、情報を話し手の責任のもとで、断定せず優しく話している。そのため、伝聞の場に‘-ㄹ/을 모양이다(l/ul moyangita)’を用いる際の話し手の情報の入手経路は他からの情報で、中でも主に音声言語による情報であり、情報共有の確保手段は他からの情報を話し手の推論として情報伝達することである。話し手の心的態度を表す戦略は、情報が話し手の認識世界で内面化され、話し手の責任のもとで言語化することで断定を避け、優しく伝えることにある。しかし、聞き手の立場から考えると、情報が主観性の高い推論として提示されているため、聞き手は情報の真偽判断に介入できるがその程度は低い。

(35) ‘-ㄹ/을 것 같다(l/ul kes kathta)’

a. (お客さんに車の整備士がいつ着くのか調べてもらいたいと頼まれたホテルマンがお客に)

2 時間半はかかるそうです。(ケ)

최소한 두시간에서 두시간 반정도 기다리셔야 될 것 같습니다.

choysohan twusikaneyse twusikan pancengto kitalisyeya toyl kes kathsupnita.

b. 姉はずいぶん夫のしつっこいのをいやがっていたらしい。(愛と死)

누나는 꽤나 남편의 치근덕거리는 걸 싫어했던 것 같아.

nwunanun kkwayna namphyenuy chikuntekkelinun kel silhehayssten kes katha.

‘-ㄹ/을 것 같다(l/ul kes kathta)’は本来、推量・推論表現であるが、用例(35)のように伝聞の場に用いることもできる。(35.a,b)は他からの情報が、話し手の認識世界で内面化され、自己責任のもとで断定を避け、推論のように優しく話している用例であるが、このような特徴は特に(35.a)を見るとはっきり分かる。(35.a)はホテルマンがお客に頼まれたことについて話しており、しかもその話の内容というのはお客にとって好ましくない内容であ

るため、断定を避けて優しく話しているのである。また、(35.b)は姉や家族から聞かないと知り得ない情報であるため、他からの情報を伝えているにも関わらず、断定を避けて話し手の推論のように話している。

よって、‘-ㄹ/을 것 같다(l/ul kes kathta)’の情報の入手経路は他から得た情報であり、情報共有の確保手段は他からの情報を話し手の推論として情報伝達することである。話し手の心的態度を表す戦略は、他からの情報が話し手の認識世界で内面化され、話し手の責任のもとで推論として話すことにより、断定をさけ優しく伝えることにある。しかし、聞き手の立場から考えると、情報が主観性の高い推論として提示されているため、聞き手は情報の真偽判断に介入できるがその程度は低い。

以上の‘-ㄹ/을 모양이다(l/ul moyangita)’、‘-ㄹ/을 것 같다(l/ul kes kathta)’から、韓国語も日本語と同じく、話し手の認識世界において「証拠」と「認識」が情報の入手経路、話し手の表現意図を表す戦略、情報が聞き手に及ぼす影響といった話し手を取り巻く状況から、「認識的再構築」により「結び付けられる」ものであると言える。その過程において推論表現が伝聞に用いられ、伝聞状況が推論にずれ込むことができる。本稿ではその点において推論と伝聞が連続していると見做している。しかし、日本語の伝聞用法「ようだ」、「らしい」は情報源が提示され、他からの情報が話し手の認識世界で内面化される過程で話し手の推論が交ざっていることを意味するのに比べ、韓国語の‘-ㄹ/을 모양이다(l/ul moyangita)’、‘-ㄹ/을 것 같다(l/ul kes kathta)’は情報源の提示がなく、他から得た情報であっても、完全に話し手の推論として言語化されるため、この点において日本語より韓国語の方が伝聞に話し手の主観が介入しやすいと言える。

さらに、日韓両国語の伝聞表現は同じく推論表現が伝聞に用いられるが、韓国語と日本語は少し状況が異なる点がある。つまり、日本語伝聞表現は推論形式から由来するもの(「ようだ」、「らしい」)、助詞から由来するもの(「とか」)は話し手の主観を含むが、引用形式から由来するものは客観性を維持しようとする傾向が強い特徴があるのに比べ、韓国語伝聞表現はそのほとんどが引用形式から由来しているにも関わらず、情報に話し手の主観が介入しやすく、また複合構成で聞き手を話し手の方へ誘導する主観的傾向が強い特徴があるため、伝聞に用いられる表現の数が日本語より遥かに多い。

５．３韓国語伝聞表現の情報とモダリティ

これまで日本語伝聞表現8つに対する韓国語伝聞表現は少なくとも37に上り、さらに‘-고 하(ko ha)’縮約の可能性により文法化されつつあることを確認した。各表現のモダリテ

ィを考察した結果、日本語の連体修飾形伝聞表現は情報を客観的に提示する傾向があるのに対し、韓国語の連体修飾形伝聞表現は聞き手を話し手の方に誘導する表現であり、推論表現においても日本語は推論表現が情報源を提示することで伝聞に用いられるが、韓国語は推論表現が伝聞表現に用いられると、伝聞状況が完全に推論に変わるため、総合的に判断すると主観的傾向があることが分かった。そして、本稿では‘-고 하(ko ha)’縮約の可能性と伝聞における待遇関係を考慮し、韓国語伝聞表現を文法範疇、意味範疇①、意味範疇②に分け、本稿で設定した伝聞表現の文法範疇を韓国語伝聞表現のプロトタイプとしている。ここでは、本稿で伝聞表現のプロトタイプとしている表現同士のモダリティ関係を<表23>の通り考察し、韓国語伝聞表現のモダリティに対する理解を深めることとする。

＜表 23. 韓国語伝聞表現における話し手の表現意図＞

伝聞表現	特　　徴	証拠依存	話者関与
-답니다(tapnita) -단다(tanta)	‘-답니다(tapnita)’は‘-다고 하다(tako hata)’の丁寧体、‘-단다(tanta)’は‘-다고 한다(tako hanta)’の縮約形であるため、それぞれ形成は違うものの、これらは情報と距離を置き、客観的に提示する点で共通している。話し手の情報判断が保留され、情報の真偽判断は聞き手に委ねられる。	高 ・	低 ・
-다더라(tatela)	情報を肯定的に受け入れているものの、情報と距離を置いて提示する伝聞表現である。聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。		
-대(tay)	‘-대(tay)’他から入手した情報を肯定的姿勢で提示する伝聞表現である。話し手により情報がある程度確かなものとして提示されるため、聞き手は情報の真偽判断にあまり介入できない。		
-다며(tamye)	情報に対する話し手の疑問・信じられない気持ちから、聞き手に情報の真偽を確認することができるため、意外性とも関わりがある伝聞表現である。聞き手に情報共有認識がある場合には、情報の確認を求めることができるが、必ず答えを求めているのではないため、聞き手は情報の真偽判断に介入できるが、その程度は低い。		

-다면서(tamyense)	情報に対する話し手の疑問・信じられない気持ちから、聞き手に情報の真偽を確認することができるため、意外性とも関わりがある伝聞表現である。聞き手に情報共有認識がある場合には、情報の確認を求めることができるが、必ず答えを求めているのではないため、聞き手は情報の真偽判断に介入できるが、その程度は高くない。	・ ・ ・

다나(tana)＞다네(taney)＞다지(taci)＞다면서(tamyense)＞다며(tamye)＞대(tay)＞다더라(tatela)＞단다(tanta)・답니다(tapnita)		
伝聞		引用に近い
自己判断		他者判断
主観的判断		客観的判断
話し手中心		聞き手中心
話者関与(高)		話者関与(より低)

＜図 21. 韓国語伝聞表現における情報とモダリティ＞

５．４韓国語伝聞表現の情報共有認識

韓国語伝聞表現において、話し手によりコミュニケーションの場に用いられる情報が、聞き手にとって常に新情報であるとは限らない。前章で情報伝達に加えて、話し手は自分の持っている情報が正しい情報であるかどうかを確認する表現として‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’、また話し手が用いている情報以上のより詳しい情報を要求する表現として‘-다지(taci)’を確認した。これら三つの伝聞表現の前提になるのが、話し手と聞き手の間の情報共有認識である。しかしながら、情報伝達の場で話し手が用いている情報は聞き手も知っている情報であるという意味を内包しているのは、‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)、-다지(taci)’のいずれも同じであるが、‘-다며(tamye)’と‘-다면서(tamyense)’、‘-다지(taci)’とでは、話し手の表現意図により情報共有認識の度合い、話し手の情報確認の度合いや聞き手が当事者か第 3 者かの人称によってその機能に違いが見られる。

まず‘-다며(tamye)’と‘-다면서(tamyense)’の話し手の情報共有認識の度合いと聞き手の人称を確認してみよう。

(36)他から入手した情報を当事者に確認する場合

a.私の協力が必要だそうね。

다 들었어. 두 사람한테 내 도움 필요하다며. (シ)

ta tulesse. twu salamhanthey nay towum philyohatamye.

b.契約やめたって。

너 슬이랑 계약 안 한다고 했다며?(シ)

ne sulilang kyeyyak an hantako haysstamye?

c.まだ息子のそばをうろついてるそうね。

너 아직도 정신 못 차리고 우리 주원이 옆에 얼씬댄다며.(シ)

ne acikto cengsin mos chaliko wuli cwuweni yephey elssintayntamye.

(37)他から入手した情報を当事者ではなく第 3 者に確認する場合

a.追加シーンが入ったと。

추가로 뭐 찍을 거 생겼다며.(シ)

chwukalo mwe ccikul ke sayngkyesstamye.

b.株主総会があるそうよ。

김 변호사 말이 주주총회가 뭔가 할 거라며?(コ)

kim pyenhosa mali cwucwuchonghoynka mwenka hal kelamye?

c.男は濃い化粧を嫌うそうだけど本当なの？

남자들은 여자 화장 진하면 싫어한다며? 정말 그러냐?(コ)

namcatulun yeca hwacang cinhamyen silhehantamye? cengmal kulenya?

‘-다며(tamye)’は、用例(36)のように他から入手した情報の真相を当事者に確認する場合に用いることも可能である。この場合、聞き手は情報内容の当事者であるため、情報の真偽を誰より正確に知っていると思われるが、伝聞というには無理がある。なぜなら、伝聞の第一義は話し手による情報共有の確保であるが、用例(36)のように他から入手した情報を当事者に確認するのは、情報の伝達という伝聞の基本的機能が欠けているからである(本稿1.4.2 引用の定義⑦を参照)。この際の‘-고 하(ko ha)’縮約形である‘-다며(tamye)’のみ用いられ、疑問・命令・勧誘の‘-냐며/라며/자며(nyamye/lamye/camye)’は用いられない特徴がある。

用例(37)は、他から入手した情報を第 3 者に伝えながら情報の真偽を確認している用例であるが、(37.a,b)は、他から入手した特定のコトガラに関する情報、(37.c)は一般的情報の確認である。用例(37)のように‘-다며(tamye)’を用いる際の話し手は、聞き手が情報を持っていることをある程度期待しているが、必ずしも聞き手に情報の確認を要求しているのではなく、用例(38)のように聞き手が情報を持っていないこともちろん想定内である。しかし、この場合は情報共有の確保(情報伝達)という伝聞の第一義は果たしているため伝聞と見做す。

(38)情報共有の確認

a.A:추가로 뭐 찍을 거 생겼다며.(シ)

chwukalo mwe ccikul ke sayngkyesstamye.

B:글쎄, 모르겠는데.

kulssey, molukeyssnuntey.

A:추가 씬 생겼다고 서둘러 갔는데.

chwuka ssin sayngkyesstako ppalli olako hayssnuntey.

b.A:김 변호사 말이 주주총회가 뭔가 할거라며?(コ)

kim pyenhosa mali cwucwuchonghoynka mwenka halkelamye?

B:그래? 언제 한대?

kulay? encey hantay?

A:다음달 초에 할거라던데.

taumtal choey halkelatentey

用例(38)をみると、話し手は聞き手が情報を持っていると予測して情報の確認を求めているが、話し手の期待に反し、聞き手が情報を持っていないため、情報伝達の機能のみ果たしているのである。

次に、‘-다면서(tamyense)’の用例を用いて情報共有認識の度合いと情報確認の度合い、聞き手の人称を確認した後、‘-다며(tamye)’と‘-다면서(tamyense)’の情報共有認識の度合いと、情報確認の度合いを比較してみる。‘-다면서(tamyense)’も、‘-다며(tamye)’と同じく用例(39)のように、他から入手した情報を当事者である聞き手に直接確認することができるが、これは情報共有の確保という伝聞の第一義を果たしていないと思われるため伝聞とはしない。

(39)他から入手した情報を当事者に確認する場合

a.会ってないと聞いたよ。

형은 나랑 미국에서 안 만났었다면서?

hyengun nalang mikwukeyse an mannassesstamyense?

b.出ていかせたって？

이 집 비우는데 돈 많이 썼다면서요?

i cip piwununtey ton manhi ssesstamyenseyo?

c.私がクビになって辞めようとしたそうね。

나 짤렸다고 했을 때 김비서님 사표 낼려고 하셨다면서요?

na ccallyesstako hayssul ttay kimpisenim saphyo nayllyeko hasyesstamyenseyo?

d.今夜アメリカに逃げるそうですね。

오늘 저녁에 미국으로 도망간다면서요?

onul cenyekey mikwukulo tomangkantamyenseyo?

以下の用例(40)は、他から入手した情報について第3者に真偽を確認する用例である。

(40) 他から入手した情報を当事者ではなく、第3者に確認する場合

a. 従弟が携帯をなくしたそうね。

태무 씨 사촌 동생 핸드폰 잃어버렸다면서요?

thaymwu ssi sachon tongsayng hayntuphon ilhepelyesstamyenseyo?

b. 同じ写真をお持ちだと聞きました。

똑같은 사진을 가지고 계시다면서요.

ttokkathun sacinul kaciko kyeysitamyenseyo.

c. 住所も名前も知らないでしょ。顔も覚えてないと？

그여자 어디 사는지 주소도 이름도 모른다면서요? 인상착의도 기억 못 하고요.

kuyeca eti sanunci cwusoto ilumto moluntamyenseyo? insangchakuyto kiek mos hakoyo.

d. ユン先生の噂は聞いてるぞ。研究員がやめていくってな。

나도 윤지훈선생 이야기 다 들었거든. 연구사들이 남아나질 않는다면서.

nato yuncihwunsensayng iyaki ta tulessketun. yenkwusatuli namanacil anhnuntamyense.

用例(40)のように、他から入手した情報を第 3 者に確認する場合は、話し手の認識の中で聞き手が情報を持っていないことも想定しているため、情報伝達の機能は果たしていると言える。

次に、用例(37)の‘-다며(tamye)’を‘-다면서(tamyense)’に置き換えて、これらの置き換えの可能性と、情報共有認識の度合い、情報確認の度合いを確認してみる。

(41) ‘-다면서(tamyense)’

a. 추가로 뭐 찍을 거 생겼다면서.(シ)

chwukalo mwe ccikul ke sayngkyesstamye.

b. 김 변호사 말이 주주총회가 뭔가 할거라면서?(コ)

kim pyenhosa mali cwucwuchonghoynka mwenka halkelamye?

c. 남자들은 여자 화장 진하면 싫어한다면서? 정말 그러냐?(コ)

namcatulun yeca hwacang cinhamyen silhehantamye? cengmal kulenya?

用例(41)を見てみると、情報確認の‘-다며(tamye)’と‘-다면서(tamyense)’が同じく

他から入手した情報を曖昧なもの、不確かなものとして認識し、聞き手に確認を求めているため置き換えできるが、‘-다며(tamye)’を‘-다면서(tamyense)’に置き換えることにより、情報内容に対する話し手の情報確認の度合いが高くなると考えられる。さらに、‘-다면서(tamyense)’を‘-다며(tamye)’に置き換えてみると、以下のようになる。

(42)‘-다면서(tamyense)’を‘-다며(tamye)’に置き換えた用例

a.태무 씨 사촌 동생 핸드폰 잃어버렸다며?(ヤ)

thaymwu ssi sachon tongsayng hayntuphon ilhepelyesstamyenseyo?

b.똑같은 사진을 가지고 계시다며.(ヤ)

ttokkathun sacinul kaciko kyeysitamyenseyo.

c.*그여자 어디 사는지 주소도 이름도 모른다며? 인상착의도 기억 못 하고요.(ケ)

kuyeca eti sanunci cwusoto ilumto moluntamyenseyo? insangchakuyto kiek mos hakoyo.

d.나도 윤지훈선생 이야기 다 들었거든. 연구사들이 남아나질 않는다며.(サ)

nato yuncihwunsensayng iyaki ta tulessketun. yenkwusatuli namanacil anhnuntamyense.

用例(42)の限り、‘-다면서(tamyense)’と‘-다며(tamye)’を置き換えると、両方とも話し手の情報に対する不確か、曖昧といったニュアンスは感じられるが、‘-다며(tamye)’を用いる際の話し手は、‘-다면서(tamyense)’を用いる際より情報確認の度合いが弱くなる。つまり、‘-다면서(tamyense)’の方が情報に対する驚きという話し手の心的態度が強いため、聞き手に対する情報確認の度合いが高く、話し手の情報共有認識の度合いも高いと思われる。ただし、(42.c)が文として成立しないのは、‘-다면서(tamyense)’は‘-요(yo)’をつけて‘두루높임(略待丁寧形)’にすることができても、‘-다며(tamye)’はできないためである。

次に、‘-다며(tamye)’‘-다면서(tamyense)’両方を用いている用例を使って、これらを用いる際の話し手の情報共有認識の度合いを確認する。

(43)‘-다며(tamye)’‘-다면서(tamyense)’の情報共有認識の度合い

a.ナイフで刺されて死ぬところだったそうね。

칼에 찔렸다며. 옆에 의사 없었음 죽을 뻔 했다면서.(コ)

khaley ccillyesstamye. yephey uysa epsessum cwukul ppen haysstamyense.

a′.칼에 찔렸다면서. 옆에 의사 없었음 죽을 뻔 했??다며.

‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’による情報確認の背景には、話し手の表現意図による驚き・信じられないといった心的態度が含まれている場合が多いが、用例(43)からも話し手の驚きが感じられる。上記の用例(43)の‘-다며(tamye)’と‘-다면서(tamyense)’の位置を置き換えてみると、文の流れに大きい影響は与えない。しかし、‘-다면서(tamyense)’を‘-다며(tamye)’に置き換えると‘-다면서(tamyense)’の方が、‘-다며(tamye)’より情報に対する驚きという話し手の心的態度や、情報確認度が高いと思われ、一つの文で、‘-다면서(tamyense)’の後に‘-다며(tamye)’が続くと不自然になる。つまり、‘-다면서(tamyense)’は必ずしも情報共有認識がなく、聞き手に答えを要求していないという点は‘-다며(tamye)’と同じであるが、‘-다며(tamye)’より‘-다면서(tamyense)’の方が情報確認の度合いが強いため、一つの文の中で、‘-다면서(tamyense)’の後に‘-다며(tamye)’が続く場合は文が不自然になる。

次は、‘-다지(taci)’の話し手と聞き手の情報共有認識と聞き手の人称、話し手の表現意図について確認してみよう。まず、話し手と聞き手との情報共有認識がある用例から確認する。

(44)他から入手した情報の詳細を、当事者に要求する場合
a.訪問調査も予定しているとか。
얼마 전에는 방문조사를 할라고 했었다지?(ツ)
elma ceneynun pangmwuncosalul hallako hayssesstaci?

‘-다지(taci)’は、基本的に他から入手した情報の詳細を当事者に要求することは不自然であるが、(44.a)をみると分かるように、情報内容を当事者に確認要求している用例があった。しかし、他から入手した情報を当事者に直接確認することは、情報の伝達という伝聞の基本的な機能を果たしていないため伝聞とはしない。

以下、‘-다지(taci)’を情報の要求と不確かな情報の伝達の二つに分けて分類してみた。用例(45)は、入手した情報を第 3 者に伝える際の‘-다지(taci)’の情報共有認識を確認したものである。

(45)他から入手した情報の詳細を第3者に要求する‘-다지(taci)’の用例
a.弁護士から聞いた。検定で高卒の資格を入手したらしいな。

변호사한테 얘기 들었어. 검정고시 패스했다지?(コ)

pyenhosahanthey yayki tulesse. kemcengkosi phaysuhaysstaci?

b. 出産日が近いそうですね。(ツ)

해산일이 가까웠다지요?

haysanili kakkawesstaciyo?

用例(45)の‘-다지(taci)’は、話し手が用いている情報を聞き手も持っていると考えられる。つまり、情報共有認識を前提としているが、この場合の話し手は他から入手した情報に自信がないため、聞き手に情報を伝えると同時により詳しい情報を要求していると考えられる。一方で以下の用例(46)は話し手と聞き手の間に情報の共有認識がなく、情報を不確かなものとして提示している。

(46)情報共有認識がなく情報を不確かに用いる‘-다지(taci)’の用例

a. とうとういたちに押さえられそうになったわ。(銀河鉄道の夜)

그런데 어느날 족제비에게 들켜서 잡아 먹히게 되었다지.

kulentey enunal cokceypieykey tulkhyese capa mekhikey toyesstaci.

b. 요즘이 포도나무 가지를 쳐주는 시기거든. 내일모레면 끝나고 간다지, 아마.

(韓国国立国語院コーパス)

yocumi photonamwu kacilul chyecwunun sikiketun. nayilmoleymyen kkuthnako kantaci, ama.

c. 그리고 이혼은 했지만 약속대로 영화는 끝까지 찍겠대. 아마 추석 때 개봉된다지?

(韓国国立国語院コーパス)

kuliko ihonun haysscіman yaksoktaylo yenghwanun kkuthkkaci ccikkeysstay. ama chwusek ttay kaypongtoyntaci?

用例(46)の‘-다지(taci)’は、話し手の認識の中に聞き手との情報共有認識がなく、話し手は自分が伝えている情報内容に自信がないため、不確かに用いている。このような場合、日本語の「たぶん」にあたる副詞‘아마(ama)’と一緒に用いられる場合が多い。用例(45)と用例(46)から、不確かというのが‘-다지(taci)’の基本的意味であると解される。

以上を纏めると、‘-다며(tamye)’と‘-다면서(tamyense)’は、両方とも情報伝達に加え情報確認の意味を含めているが、必ずしも聞き手に答えを要求しているわけではない。ただし、‘-다면서(tamyense)’が‘-다며(tamye)’より情報確認という話し手の表現意図が強いため、一つの文の中で、‘-다면서(tamyense)’の後に‘-다며(tamye)’が続くと不自

然な文になる。

‘-다지(taci)’の基本的意味は不確かと推測され、聞き手と情報共有認識がある場合、話し手は自分が用いている情報を不確かなものと認識しているため、聞き手により正確な情報を要求していると言える。一方、聞き手と情報共有認識がない場合は、情報内容に対する話し手の自信のなさが感じられ、日本語の「たぶん」にあたる副詞‘아마(ama)’と共起する場合が多い。

５．５韓国語伝聞表現と意外性

加藤(2010:66)によると、日本語は「って」に意外性があるとされているが、韓国語は今回の調査で集めた伝聞表現の日本語翻訳をみる限り、〈表 24〉の伝聞表現が意外性の意味を持ち合わせる場合もあると考えられ[72]、‘-다네、-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’の情報に対する未認知・驚き・信じられない気持ちが、意外性に繋がっていると考える。

＜表 24. 意外性に関わる伝聞表現＞

意外性	다네(taney)
	다며(tamye)
	다면서(tamyense)

‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’は 5.2 で触れているので、ここでは伝聞表現‘다네(taney)’と意外性の関りについて確認する。

(47)‘다네(taney)’

a. JD の下請けは数千社あるとか。(カ)

JD 그룹 오너 구속하면 수천개 하청업체가 도산한다네요.

JDkulwup one kwusokhamyen swuchenkay hachengepcheyka tosanhantaneyyo.

b. 法医学の専門家に聞いたら 4～5 年前のものなら DNA 分析が可能だと。(カ)

72 ‘-다지 뭐야(taci mweya)’‘-다는 거야(tanun keya)’にも意外性が認められるが、伝聞表現の意味範疇②に属させているため、今回は考察の対象としない。

법의학 권의자하고 통화해 봤는데 4～5 년 전 사건이면 DNA 분석이 가능하다네.

pepuyhak kwenuycahako thonghwahay pwassnuntey 4 ～ 5nyen cen sakenimyen DNApwunseki kanunghataney.

c. 大女優の愛用ブランドで、毎年限定品が発売されているそうです。

女性に大人気らしいです。(ケ)

이 브랜드가 그레이스 켈리 옷을 거의 전담했대요. 지금도 그레이스 라인이라고 해서 해마다 한정판이 나오는데 이게 아주 여자들 환장하게 한다네요.

i pulayntuka kuleyisu kheylli osul keuy centamhaysstayyo. cikumto kuleyisu lainilako hayse haymata hancengphani naonuntey ikey acwu yecatul hwancanghakey hantaneyyo.

d. アメリカの資料が変なの。出どころは合っていてもそんな調査はしてないと。(カ)

미국 교통사고협회 자료가 이상해요. 분명 그 쪽에서 보낸 자료는 맞는데 그런 조사는 실시한 적이 없다네.

mikwuk kyothongsakohyephoy calyoka isanghayyo. pwunmyeng ku ccokeyse ponayn calyonun macnuntey kulen cosanun silsihan ceki epstaney.

e. 来年度の人事異動のことで僕に相談したいらしい。(シ)

이건 사실 대외빈데 내년도 인사이동 건을 나랑 의논 좀 했으면 좋겠다네.

iken sasil tayoypintey naynyento insaitong kenul nalang uynon com hayssumyen cohkeysstaney.

(48) '다고 하네(tako haney)'

a. ??JD 그룹 오너 구속하면 수천개 하청업체가 도산한다고 하네요.

JDkulwup one kwusokhamyen swuchenkay hachengepcheyka tosanhantako haneyyo.

b. 법의학 권의자하고 통화해 봤는데 4～5 년 전 사건이면 DNA 분석이 가능하다고 하네.

pepuyhak kwenuycahako thonghwahay pwassnuntey 4～5nyen cen sakenimyen DNApwunseki kanunghatako haney.

c. ??이 브랜드가 그레이스 켈리 옷을 거의 전담했대요. 지금도 그레이스 라인이라고 해서 해마다 한정판이 나오는데 이게 아주 여자들 환장하게 한다고 하네요.

i pulayntuka kuleyisu kheylli osul keuy centamhaysstayyo. cikumto kuleyisu lainilako hayse haymata hancengphani naonuntey ikey acwu yecatul hwancanghakey hantako haneyyo.

d. 미국 교통사고협회 자료가 이상해요. 분명 그 쪽에서 보낸 자료는 맞는데 그런 조사는

실시한 적이 없다고 하네.

mikwuk kyothongsakohyephoy calyoka isanghayyo. pwunmyeng ku ccokeyse ponayn calyonun macnuntey kulen cosanun silsihan ceki epstako haney.

e. 이건 사실 대외빈데 내년도 인사이동 건을 나랑 의논 좀 했으면 좋겠다고 하네.

iken sasil tayoypintey naynyento insaitong kenul nalang uynon com hayssumyen coh keysstako haney.

정경숙(2012:1014)では、‘-네(ney)’を意外性とし、証拠性と関りがあるものとしており、송재목(2009、2011)では、‘-네(ney)’を推論として扱っている。しかし、用例(47)に見られるように‘-다네(taney)’の前には、まず状況説明(波線部分)がなされ、続いてそれによる結果が述べられ、文末に‘-다네(taney)’を用いて、話し手の未認知・驚き・信じられない気持ちを表しているため、本稿では伝聞表現‘다네(taney)’も‘-네(ney)’の意味を引継ぎ、他から得た情報に対する意外性を表すものとする。

‘다네(taney)’の情報共有の手段は情報伝達であるが、話し手の表現意図による心的態度を表す戦略は、‘未認知・驚き・信じられない気持ちを表すことにある。‘다네(taney)/다고 하네(tako haney)’は縮約形と復元形が一緒に使われているものの、(48.a,c)のような一部用例から‘-고 하(ko ha)-’復元形が不自然に感じられることから、縮約・省略形の‘다네(taney)’の文法化が進んでいると思われる。さらに、‘다네(taney)’以外に、‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’においても、情報に対する話し手の不確かな認識態度のみならず、情報内容に対する話し手の未認知・驚き・信じられないといった意味が含まれると思われるため、本稿では、‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’にも意外性を認めることとする。

５．６韓国語伝聞表現の機能的分類とカテゴリー化

これまでの考察で、‘-다고 하다(tako hata)’から‘-고 하(ko ha)-’が縮約・省略され、その形で文法化が進み、すでに‘-고 하(ko ha)-’が復元できない場合や、縮約・省略形と復元形が同じ意味を成さない表現に関しては、文法化がある程度完了したと見做し、伝聞表現の文法範疇に属させた。なお、縮約・省略形と復元形が一緒に用いられている表現に関しては、文法化が進行していると見做し伝聞表現の意味範疇①に属させた。また、それ以外の複雑な膠着によりモーダル性が強くなっている複合語尾や、依存名詞などが加えられた

連体修飾形伝聞表現、そして文法範疇に属させるべきか意味範疇①に属させるべきか、現状では判断し難い表現などを伝聞表現の意味範疇②に属させた。

さらにこれまでの考察において、話し手の心的態度を表す戦略として、客観的・間接的・情報確認・情報要求・不確か・曖昧などの用語を用いて考察を進めてきたが、伝聞表現は機能の面から厳密にいうと、情報を客観的、あるいは間接的に提示することと、情報を確認する、あるいはさらなる情報を要求することとは違う範疇である。なぜなら、情報を客観的・間接的に提示することは、情報伝達時の命題に対する話し手の表現意図による心的態度を表す方法であるが、情報を確認する・情報を要求することは話し手の心的態度を表すと同時に、情報伝達における一定の機能を果たしているからである。

この節では、情報伝達のカテゴリーに客観的・間接的・不確か・曖昧・不満・不愉快など、情報伝達時の話し手の心的態度を表す方法を情報伝達に入れ、伝聞表現の機能に①情報伝達、②情報伝達＋確認、③情報伝達＋要求、④意外性を入れ、韓国語伝聞表現を四つに分類することを試みた。これを表で示すと以下の<表 25>の通りである。

＜表 25. 韓国語伝聞表現の機能的分類＞

機　能	文法範疇	意味範疇①	意味範疇②
情報伝達	-단다(tanta)、 -대(tay)、 -다더라(tatela)、 -다나(tana)、 -답니다(tapnita)	-다고 하는데(tako hanuntey)/ -다는데(tanuntey)、 -다고 하던데(tako hatentey)/-다던데(tatentey)、 -다고 하더라고(tako hatelako)/ -다더라고(tatelako)、 -다고 해서(tako hayse)/ -대서(tayse)、 -다고 하더군(tako hatekwun)/ -다더군(tatekwun)、 -다고 하니까(tako hanikka)/-다니까(tanikka)、 -다고 그러다(tako kuleta)/-다 그러다(ta kuleta)	-다데(tatey)「下降イントネーションの場合」、 -다잖아(tacanha)、 -다는 거야(tanun keya)、 -다더구만(tatekwuman)、 -다고들 하다(takotul hata)、 -다고 하는 거 있지 (tako hanun ke issci) -다지 뭐야 (taci mweya)

情報伝達＋確認	-다며(tamye)、 -다면서(tamyense)		-다고 듣다(tako tutta)
情報伝達＋要求	-다지(taci)		
意外性	-다며(tamye)、 -다면서(tamyense)	-다고 하네(tako haney)/ -다네(taney)	-다데(tatey)「上昇イントネーションの場合」

〈表 25〉からも分かるように、本稿で伝聞表現の文法範疇としている表現のみで伝聞の四つの機能、つまり①情報伝達、②情報伝達＋確認、③情報伝達＋要求、④意外性との関りがカバーできるため、伝聞表現の文法範疇を韓国語伝聞表現のプロトタイプとする。ただし、意外性に関して、‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’が非終結語尾の終結語尾化であることを勘案し、文法化が進行中の終結語尾形伝聞表現‘-다네(taney)’を伝聞表現のプロトタイプに追加した。その結果、本稿で設定した伝聞表現のプロトタイプのみで、伝聞表現発話時の社会的注意(‘-답니다(tapnita)、-단다(tanta)’)と、情報確認(‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’)、情報要求(‘-다지(taci)’)、意外性(‘-다네(taney)’)以外にも、肯定的(‘-대(te)’)、不確か(‘-다나(tana)’)、客観的(‘-다더라(tatela)’)という話し手の表現意図を表すことができる。

伝聞表現の機能分類に関するこのような考え方は、たとえば、「とか」が話し手と聞き手の間の情報共有の確保という伝聞の第一義に加え、情報確認の機能を持っているという点、「って」が意外性と関りを持っている点を考慮すると、日本語伝聞表現の研究にも有意義な分類方法であると判断する。

これまでの第 5 章の考察を通して、韓国語伝聞表現は日本語と文末形式が違い、一部表現を除いては命令・疑問・勧誘をとることができ、「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の区別が明確ではなく、語彙的に表れる場合もあることを確認した。また韓国語伝聞表現はムード形式をとり、テンスがムードにより表れ、ムード形式の意味機能の把握やモダリティの体系確立のみに主眼が置かれ、個別表現の研究や広い意味での伝聞表現研究は疎かになってきたと言える。しかし、ムード形式の意味が伝聞にそのまま引き継がれるのではなく、さらに韓国語伝聞表現は複雑な縮約・省略を経ている上、モーダル性の強い表現が多いことを確認してきた。このことから、少なくとも韓国語伝聞表現に関しては、ムード形式を分離せず、一つの表現として考察する必要があり、広義の意味でのモダリティ研究が今後に残された課題であると主張したい。

６章 日本語伝聞表現と韓国語伝聞表現の比較

日本語と韓国語は共に膠着語(agglutinative language)に属し、統語論的観点からは主語・目的語・動詞と語順が一致し、主語が省略されても文が成立する。また両国語は共に動詞が文の一番後に位置する核後置言語(head-final language)であるなど言語類型的に共通点が多いと言える。しかし、両国語のモダリティの範疇や文構造、伝聞表現の由来の違いから伝聞表現のモダリティはおのずと相違が生じているので、ここに焦点をおいて日韓両国語の伝聞表現を比較考察する。

６．１日韓両国語のモダリティの範疇

日本語のモダリティは山田(1936)の「陳述論」から始まり、命題と共に文を2大別するとされ、副詞、助詞、助動詞、敬語、終助詞、イントネーションまで広い範疇に及んでいる。韓国語のモダリティは최현배(1937)の「終止法」における文の分類(終止法:베풂월,물음월,시킴월,꾀임월)以来、文終結法として研究され続けた。英語学の導入によりモダリティ研究が活発化され、法、叙法、膠着素などの名で研究されていたが、現在はモダリティ又は様態という名で副詞、名詞、動詞、形容詞など、幅広い範疇に広がっている。しかし、韓国語の文終結モダリティにおいては複合語尾、連体修飾形で現れる場合が多いが、文法体系を重視しているため、‘-겠(keyss)-、-더(te)-、-구나(kwuna)、-네(ney)、-지(ci)’など、限られた範疇で研究されている側面もある。また、日本語のモダリティは「(う)よう、まい」以外は他のモダリティ範疇と重複されることがないため、大方モダリティの非多様性を持っていると言えるが、韓国語のモダリティは‘-을 수 있(ul swu iss)-’、‘-어야 하(eya ha)-’などが認識のモダリティ以外にも義務モダリティ(deontic modality)と力学的モダリティ(dynamic modality)にも関ることからモダリティの多様性が認められている。

６．２日韓両国語伝聞表現の文構造の比較

日本語と韓国語のモダリティを文構造の観点から比較してみると、日本語のモダリティは以下の(1)のようにテンスの外に置かれ、話し手の命題に対する心的態度を表す「命題めあてのモダリティ」と、話し手の聞き手に対する心的態度を表す「発話伝達のモダリティ」の二つに分けられる。そのため、本稿対象の日本語伝聞表現「そうだ、ようだ、らしい、という、

って、とか、ということだ、とのことだ」は「命題めあてのモダリティ」に属し、「ね、よ」のような終助詞が「発話伝達のモダリティ」に当たる。

（1）[[[[[[格]態]相]成立]時制]モダリティ]

↓

↓　モダリティはさらに 2 大別される

↓

[[[　　彼も来る　　]だろう　　]ね　　]

[[[　　命題　　]命題めあてのモダリティ]発話・伝達のモダリティ]

韓国語のモダリティは以下の(2)のようにムードがテンスの役割を兼ねており、ムードがモダリティに組み込まれた形で現れる。さらに、韓国語は日本語のように「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界を明確にすることが難しい。なぜなら、日本語の「発話伝達のモダリティ」は「ね、よ」のような終助詞により表され、「命題めあてのモダリティ」の外に付くため、品詞的にも明確な違いがあり、その境界も明確であるが、韓国語の場合は‘-다지(taci)’と‘-다지 뭐야[73](taci mweya)’‘-다는 거 있지(tanun ke issci)’のような用例から考えると、まずこれらはムード形式が現れていないため「命題めあてのモダリティ」が欠けていることになり、‘-지(ci)’と‘-지 뭐야(ci mweya)’、‘-는 거 있지(nun ke issci)’が「発話伝達のモダリティ」を表すことになる。従って、この‘-지(ci)’と‘-지 뭐야(ci mweya)’、‘-는 거 있지(nun ke issci)’の違いは文法的に説明し難い。なぜなら‘-지(ci)’は‘-다지(taci)’においては情報要求を表す「命題めあてのモダリティ」に、‘-다지 뭐야(taci mweya)’、‘-다는 거 있지(tanun ke issci)’においては情報にある程度確信を持ち、聞き手を話し手の方へ誘導する「発話伝達のモダリティ」になるためである。一方で、윤석민(2000:26)によると、韓国語の文終結法はテンスが命題に対する話し手の心的態度を、文末語尾が聞き手に対する話し手の心的態度を表すと述べられている。しかし、このような立場に立つと‘-다지 뭐야(taci mweya)’のような用例には命題に対する話し手の心的態度が表れていないことになるため、本稿では韓国語のモダリティの表れ方は様々であり、「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界を明確

[73] ‘-다지 뭐야(taci mweya)’を‘-다지(taci)’＋‘뭐야(mweya)’に分析し、さらに、‘-다지(taci)’の‘-지(ci)’を「既知」の意味と分析する研究者もいるが、‘-다지(taci)’は‘내가 지갑을 어디에 뒀다지?(財布、どこに置いたのかしら)’のように 話し手の独り言に用いられると、「既知」の意味を消失してしまう。

に画すことは難しく、これらが一つの表現として溶け込まれ語彙的に実現される場合もあると見做す。

さらに、日本語の連体修飾形伝聞表現は情報を客観的に提示しようとする特徴があるが、韓国語連体修飾形伝聞表現は聞き手を話し手の方へ誘導しているため、主観的特徴があると言える。以下は韓国語の文末におけるムードとモダリティを図式化したものである。

(2)[[[[[[格]態]相]成立]ムード]モダリティ]

↓

↓　ムードがモダリティに組み込まれて現れる

↓

[[[　철수도 같이 먹　]　는　]　다고 해요/대요　]

[[[　命題　]　時制・ムード　]　モダリティ　]

上記の(2)のように韓国語はムード形式を持ち、話し手の心的態度の表れ方も①‘-겠(keyss)-、-더(te)-、-던(ten)-、-는(nun)-’などムード形式で表すことができ、②‘-구나(kwuna)、-네(ney)、-지(ci)’など終結語尾で表すこともできる。伝聞表現においても韓国語はムード形式がモダリティに組み込まれた形で現れるため、③‘-다더구나(tatekwuna)’のように上記の①と②の複合語尾で表される場合もある。また、上述したように韓国語のムード形式はテンスの役割もしているため、上記の①の‘-겠(keyss)-、-더(te)-、-던(ten)-、-는(nun)-’はムード形式であると同時にテンスを表す。例えば‘-더(te)-’は過去回想、報告を表すと同時に、③の伝聞表現‘-다더구나(tatekwuna)’に組み込まれると、他から得た情報を間接的に提示したい話し手のモダリティを表すが、この際に‘-더(te)-’が常にムード形式の意味をそのまま引き継いでいるとは言い難い。

６．３日韓両国語伝聞表現の由来と文法形式の比較

日韓両国語の伝聞表現をその由来から見てみると、日本語伝聞表現は推論から由来するもの(「そうだ」、「ようだ」、「らしい」)と、助詞から由来するもの(「とか」)、引用から由来するもの(「という」、「って」、「ということだ」、「とのことだ」)の3種類がある。推論から由来するものと助詞から由来するものは話し手の主観を含むものの、伝聞として用いられる場合、情報源を提示するなどの認識的措置を用い、話し手が用いている情報が他から得た情報であ

ることを明らかにすることができ、引用形式から由来するものは情報と距離を置き、客観性を維持しようとする傾向が強いため、総合的に判断すると日本語伝聞表現は客観的であると言える。

韓国語伝聞表現はそのほとんどが引用から由来しており、伝聞表現においても形式的には引用形式を基準とする。ただし、韓国語の引用・伝聞表現は述語の品詞により違う形をとるため、動詞(-ㄴ/는(n/nun)-)、形容詞・存在詞（‘ø’)、名詞(‘-이(i)-’)を文終結形の前に介在させる必要がある。その上で文の種類を平叙文(‘-다(ta)’)、疑問文(‘-냐(nya)’)、命令文(‘(-으)라((e)la)’)、勧誘文(‘자(ca)’)の四つに区別する必要があるが、伝聞に「命令・疑問・勧誘」のようなもとの話し手のモーダルが強く表れるものは入らないとする中畠(1992)の定義は少なくとも韓国語伝聞表現には適用できず、日本語伝聞表現においても引用から由来している伝聞表現に適用できないことが確認できる。さらに、韓国語伝聞表現はその後部に引用格助詞‘-고(ko)’と補助動詞‘-하다(hata)’を加えるのが引用・伝聞の基本的な形になる。以上の韓国語伝聞表現の基本形の構造を再度示すと以下の〈表26〉になる。

＜表 26. 韓国語引用・伝聞の基本構造＞

	動詞	形容詞・存在詞	指定詞
叙述文	-ㄴ/는다고 하다	-다고 하다	-이라고 하다
疑問文	-느냐고 하다	-냐고 하다	-이냐고 하다
命令文	-(으)라고 하다	存在詞있다のみ可能	×
勧誘文	-자고 하다	存在詞있다のみ可能	×

日韓両国語伝聞表現をその文法形式から比較してみると、日本語伝聞表現は助動詞(そうだ、ようだ、らしい)、複合助動詞(という、って、とか)、連体修飾形(ということだ、とのことだ)の三つの文法形式に分かれているのに比べ、韓国語伝聞表現は、〈表26〉の基本形から‘-고 하(ko ha)’が縮約・省略されたり、補助動詞‘-하다(hata)’を他の補助動詞に代えることができ、依存名詞‘-거(ke)-、-것(kes)-’が付くと連体修飾形伝聞表現を形成することができる。そうすることで情報伝達時の話し手の心的態度の違いを表すが、日本語の連体修飾形伝聞表現と違い、韓国語の連体修飾形伝聞表現は主観的特徴がある。また、このような韓国語の引用・伝聞表現の構造の複雑さは、韓国語伝聞表現の数にも影響を与え、韓

国語伝聞表現は少なくとも37にのぼる。

６．４日韓両国語伝聞表現の総合比較

日本語伝聞表現と韓国語伝聞表現の心的態度の表れ方を総合的に比較してみると、日本語伝聞表現は推論から由来しているもの、助詞から由来しているもの、引用から由来しているものの3種類があり、文法形式においても助動詞、複合助動詞(複合助詞を含む)、連体修飾形の3つの文法形式により構成されている。日本語伝聞表現は情報を話し手の認識世界で内面化し、推論のように提示(ようだ)するか、情報を肯定的なもの(そうだ)、あるいはよく知らないもの、曖昧なものとして不確かに提示(らしい、とか)することができる一方、話し手の情報判断を保留することで情報を客観的に提示(という、って、ということだ、とのことだ)し、情報と距離を置いている客観的表現もある。しかしながら推論由来の表現、たとえば推論表現「ようだ」などが伝聞に用いられ、話し手の主観を含み、情報を話し手の認識世界で内面化されたものとして提示する場合であっても、情報源を提示することで話し手が用いている情報が他から入手したものであることを明らかにし、情報と距離を置くことができるため、日本語伝聞表現は客観的性質が強い特徴があると言える。

韓国語伝聞表現は殆んどが引用から由来しているため、文法形式も複合語尾、連体修飾形になるが、多くの場合命令・勧誘・疑問を含み、複雑に縮約・省略されている。それにも拘わらず韓国語伝聞表現は情報を間接的に提示するか、他者からの情報を話し手の責任のもとで、完全なる話し手の推論として提示することができる。

以上の日本語伝聞表現と韓国語伝聞表現の特徴から、推論由来、助詞由来の伝聞表現が多い日本語の方が情報が話し手により再構築される可能性が高いため、情報と話し手の距離が近く、主観的であり、殆どの伝聞表現が引用から由来している韓国語伝聞表現が情報が話し手により再構築される可能性が低く、情報と話し手が一定の距離を保ち、客観的であると考えがちであるが、実際はそうではなく、日本語伝聞表現の方が客観的であり、韓国語伝聞表現の方が主観的であることが確認できた。

さらに、日本語は「命題めあてのモダリティ」は助動詞、複合助動詞などにより現れ、「発話伝達のモダリティ」は終助詞により、「命題めあてのモダリティ」の外に現れるため、文終結モダリティが体系化・文法化されていると言えるが、韓国語は膠着語の特徴が文終結に強く現れ、‘-뭐야(mweya)’など語彙的接辞によりモーダル性の強い伝聞表現になるが、「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界を明確に画すことが難しく、語彙

的に表されると推測される。そのため、伝聞表現の数も日本語より遥かに多いと考えられる。また、日本語の連体修飾形伝聞表現「とのことだ」、「ということだ」は話し手による情報再構築があまり見られず、直接引用に近いと述べたが、韓国語の依存名詞‘-거(ke)-’が付いた連体修飾形伝聞表現は聞き手を話し手の方へ誘導する主観的伝聞表現になる。このことからも、韓国語伝聞表現は他からの情報に話し手の主観が介入しやすく、聞き手を話し手の方に誘導しようとする(特に、意味範疇②)特徴があることが分かる。

以上のことから、少なくとも伝聞表現においては韓国語の方が日本語より膠着語的性質が強く現れると思われ、モダリティの表出においても積極的で、且つ感情的であると言える。日本語伝聞表現と韓国語伝聞表現におけるこのような相違は、責任を曖昧にする傾向がある日本語表現と、自らの主張の正当性を押し通そうとする傾向がある韓国語表現の特徴が、それぞれの伝聞表現の根底に存在するからだと推察できる。

この章では日韓両国語のモダリティ、伝聞のモダリティを統辞的、統語的、文末構造など多方面から比較して見たが、韓国語モダリティは英語学のモダリティの分類を導入しており、文法体系のもとでのモダリティ分類に重点を置いているため、日本語モダリティ研究ほどモダリティの下位範疇の研究が進展していない。これは、これから韓国語モダリティ研究がさらに幅を広げる可能性と必要性があることを示唆していると言える。

7章 結論

本稿は、日韓両国語モダリティ研究の第一歩として両国語の伝聞表現を考察したものである。英語学のモダリティと違い、日本語モダリティは文を命題とモダリティに2大別し、副詞、助詞、文終結、イントネーションなども含む広い範疇として理解されている。韓国語のモダリティはムード形式が存在することからムードと対比される概念として文終結のみをモダリティとする傾向が強かったが、最近その範疇が拡大されつつある。

日本語伝聞表現は引用から由来するもの、推論から由来するもの、助詞から由来するものの３種類があるのに比べ、韓国語伝聞表現はその殆んどが引用から由来している。しかし、本稿はこのような引用、推論、助詞と言った文法的属性にとらわれず、広義の意味で伝聞表現のカテゴリー化を目標としている。そして伝聞表現研究に「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」という観点を導入し、伝聞表現をコミュニケーションの場における話し手、聞き手、情報の3要素の関係の中から考察することで、両国語伝聞表現の特徴を含む全体像を描くことに主眼を置いて考察している。

まず、第1章ではムードとモダリティ、証拠性の位置づけを行っている。証拠性とモダリティの関係に関しては、最近多くの研究者において汎言語的に証拠性をモダリティとは違う独立した文法範疇とする傾向がある。しかし、上代日本語の詠嘆表現「なり」が、「(～が聞こえる)」という聴覚による様態表現から次第に伝聞に用いられるようになり、その他にも、「やうなり」が様態から推量・推論に用いられ、近来「ようだ」の形で伝聞にも用いられ、近年には「とか」が曖昧さを表す並列語尾から「伝聞」に用いられるようになったことから、言語体系は、それぞれの言語社会で通時的観点を縦軸に共時的観点を重ね合わせる形で考察されるべきであると考える。また、伝聞においては、情報の出所を明かすことは情報と距離を置きたいと言う話し手の認識態度が窺え、話し手の表現意図と間接的に関わっていると考えられるため、少なくとも日本語においては証拠性とモダリティを分離せず、証拠性を認識のモダリティの下位範疇に位置づけ、仮に証拠モダリティと名づけた。

第2章では日韓両国語のモダリティと伝聞表現における先行研究を概観した。欧州においてモダリティがModal logic、つまり論理学から発展しているのに比べ、日本語のモダリティは山田(1936)の「陳述論」とそれに対する批判から始まったと言っても過言ではない。「陳述」以外にも時枝誠記の「詞・辞」、三尾砂の「主観的表現・客観的表現」、芳賀綏「モドゥス」、寺村秀夫・三上章「コト・ムード」、渡辺実「陳述・叙述」、仁田義雄「言表態度・言表事態」などがモダリティと類似の概念であると判断される。韓国語においては최현배(1937)における

文の分類から始まり、英語学のモダリティ研究の導入からモダリティの範疇が文全体の要素に拡大された。また、韓国語は日本語と違いムードとモダリティの対立があり、伝聞表現においてもムード形式が終結語尾に組み込まれた形で現れるが、ムード形式の意味が終結語尾にそのまま引き継がれるとは言えないにも関わらず、これまでの先行研究はムード形式に対する研究が主流を成し、終結語尾に対する研究は疎かになっている傾向がある。さらにムードとモダリティという用語以外にも、諸研究者により法、叙法、様態、膠着素、文終結法などの用語で呼ばれているが、その用語と概念が混在している。

第3章では日韓両国語伝聞表現を通時的観点から考察した。推論「そうだ」と伝聞「そうだ」が、現在のような「連用形＋そうだ」「終止形＋そうだ」に機能分化したのは近世後期に入ってからのことで、それ以前は「連用形＋そうだ」が伝聞としても用いられていた。「ようだ」に当たる表現としては話し言葉には「めり」、漢語には「ごとし」が用いられたが、後に消滅した。「らしい」は古語「らし」の系統を引くと言われている。「そうだ、ようだ、らしい」はもともと物事の「様態」を表す表現であったが、後に「推量・推論」として用いられ、次第に「伝聞」にも用いられるようになっている。この「様態」＞「推量」＞「伝聞」の意味拡大の順番が、話し手の認識世界において一つの発展プロセスであるということを指摘した。さらに「という」と「とか」は「と＋いう」、「と＋か」の構成で、「という」においては「と」の持っている並列の意味が前件と後件を対等に結びつけ、「とか」においては「と」の持つ並列の意味と「か」の持つ疑問の意味が衝突し、不確か・曖昧と言った意味を持つようになったと推察される。

後期中世韓国語伝聞表現は引用をベースとしており、間接引用において文の性格を叙述法・疑問法・命令法・勧誘法の四つのうちどれかに属するものの、直接引用と間接引用の区別が難しい。後期中世韓国語引用表現は引用動詞が被引用文に先行する[引用動詞－[被引用文]]、[引用動詞－[被引用文]－(하-)]、[[被引用文]－引用動詞]の3つのパタンが見られ、直接引用と思われる文が多かった。[引用動詞－[被引用文]]の構成はSVO言語である中国語の影響を受けているもので、[引用動詞－[被引用文]－(하-)]の構成においては敬語体先語末語尾‘-(으)시((u)si)’が両方の引用動詞に現れ、バランスを取っていることが分かる。現代韓国語と同じ形の[引用動詞－[被引用文]]も確認できた。中世韓国語は引用格助詞‘고(ko)’‘라고(lako)’がなく、ムード形式‘-더(te)-、-던(ten)-’なども現代ほど積極的に使われなかったことが分かった。

第4章では現代日本語において伝聞に現れる情報、話し手、聞き手の３要素に対する理解を含む「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」に注目し、①情報共有の確保手段(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③情報に対する話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)を

中心に、情報に対する話し手の主観の介入余地、話し手の関与の程度、情報判断の主体を考察し、カテゴリー化した。考察の結果、推論「そうだ」>「ようだ」>「とか」>「らしい」>伝聞「そうだ」>「って・という」>「ということだ」>「とのことだ」の順で、矢印が右に移動するほど情報判断における話し手の主観性、情報判断への介入が弱くなる反面、聞き手の介入余地は高くなり、情報への真偽判断は聞き手に委ねられることが分かった。また、日本語伝聞表現の意味機能を考察した。日本語伝聞表現は助動詞、複合助動詞などが「命題めあてのモダリティ」を担っているため主に情報伝達の機能を果たし、終助詞が「発話・伝達のモダリティ」を担っているため情報確認などの意味機能を担っていると思われたが、「って」に情報確認と意外性が確認できることから、文末における「って」の機能は終助詞的であると考えられる。さらに推論「ようた」、「らしい」が伝聞に用いられ、伝聞表現として意味拡大していくことを推論と伝聞の連続性と名づけているが、日本語伝聞表現は推論から由来する表現(「そうだ」、「ようだ」、「らしい」)と助詞から由来する表現(「とか」)は話し手の主観が介入しやすいことが分かった。

第5章では韓国語伝聞表現に主眼を置いて考察した。これまでの韓国語モダリティ研究はモダリティの体系確立のみ重視し、さらに‘-더라(tela)、-다더라(tatela)’、‘-더군(tekwun)、-다더군(tatekwun)’ に組み込まれているムード形式’-더(te)-’や、一部の文終結モダリティ形式‘-구나(kwuna)、-네(ney)、-지(ci)’に主眼が置かれ、文終結モダリティ表現の研究は疎かになっていたと言っても過言ではない。しかし、例えば‘-더라(tela)、‘-던데(tentey)’の意味が‘-다더라(tatela)’、 - 다던데(tatentey)’にそのまま引き継がれるかというと、必ずしもそうではない。さらに日本語は伝聞に用いられる表現が8つあるのに対し、韓国語伝聞表現は引用形式をもとに複雑な縮約・省略過程を経て文法化されているため、伝聞表現の数も少なくとも37にのぼる。そのため、本稿では文末伝聞表現からムードを分類せず、一つの塊とし、個別表現が伝聞の場でどのように話し手の表現意図を表しているのかを含めて考察した。したがって、37の韓国語伝聞表現をその意味機能に注目し、1)情報の伝達、2)情報確認、3)情報要求、4)意外性と関りがある四つに絞り、韓国語伝聞表現を文法範疇と意味範疇に分類した。その上で、37の表現全てにおける話し手の表現意図を、①情報共有の確保(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③情報に対する話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)に主眼を置いて考察することで、本稿で設定した韓国語伝聞表現の意味機能四つを再検討し、本稿の論旨を固めつつ、‘-단다(tanta)、-다나(tana)、-다지(taci)、-대(te)、-다더라(tatela)、-답니다(tapnita)、-다며(tamye)、-다면서(tamyense)、-다네(tane)’を韓国語伝聞表現のプロトタイプとして選別し表現意図によりカテゴリー化したが、

‘-단다(tanta)・-답니다(tapnita)＞-다더라(tatela)＞-대(te)＞-다며(tamye)＞-다면서(tamyense)＞-다지(taci)＞-다네 ＞-다나(tana)の順に右に移動するほど話し手の主観の介入が強いため、情報判断が話し手中心である反面、聞き手の介入可能性が低くなると判断した。

第6章では、日韓両国語のモダリティと伝聞表現のモダリティを比較した。日本語と韓国語は言語類型的に類似しているが、モダリティの由来と現れ方には違いが見られ、日本語伝聞表現は推論・引用・助詞から由来し、助動詞、複合助動詞、連体修飾の3形式により現れるが、韓国語伝聞表現はその殆んどが引用から由来しているため、複合語尾、連体修飾形により現れ、さらに複雑な縮約・省略の過程を経ている。また、日本語の認識のモダリティはムードを持たず、「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」に2分類されるのに対し、韓国語はムードがテンスの役割を兼ねているため、ムードとモダリティの対立がある上に、接辞が付くこともでき、語彙的に現れる場合もあることから「命題めあてのモダリティ」と「発話伝達のモダリティ」の境界を明確にし難い。さらに、日本語伝聞表現の中で推論から由来しているものと助詞から由来しているものは話し手の主観を含みやすいが、引用から由来(連体修飾形を含む)しているものは情報と距離を置き、客観的に提示しようとする話し手の認識態度が窺えるが、韓国語伝聞表現はその殆んどが引用から由来しているにも拘わらず、情報に話し手の主観が介入しやすく、連体修飾形伝聞表現においても日本語は情報を客観的に提示するが、韓国語は聞き手を話し手の方へ誘導しようとしているため、韓国語伝聞表現は主観的特徴があることを指摘した。

日本語伝聞表現と韓国語伝聞表現におけるこのような相違は、責任を曖昧にする傾向がある日本語表現と、自らの主張の正当性を押し通そうとする傾向がある韓国語表現の特徴が、それぞれの伝聞表現の根底に存在するからだと推察できる。

情報伝達時において他からの情報を主観的に提示するのか、客観的に提示するのか、あるいは既知情報として提示するのか、未知情報として提示するのかなど、伝聞表現の適切な使い分けはコミュニケーションの場における誤解を減らすと共に、話し手の表現意図に合わせて物事を運ぶための重要な機能を果たしている。それにも拘わらず、これまでの先行研究においては伝聞表現が引用表現の副次的ものとして扱われ、伝聞表現に込められている話し手の表現意図を中心とした研究は、管見の限り見当たらなかったので本稿で試みた。

ただし、日韓両国語の伝聞表現の情報に対する話し手の発話態度の表れ方にはずれがあり、日本語の場合は伝聞「そうだ」、伝聞用法「らしい」が主に終助詞を用いて発話態度を表すのに対し、韓国語はムード形式が存在し、ムードが終止形語尾の中に組み込まれた形で表れ、依存名詞などを付けることで話し手のモダリティを強調し、聞き手を話し手の方へ誘導する

こともできる。こうした相違点をめぐり、分析されるべき日本語の終助詞には今回触れることができなかった。また、韓国語伝聞表現の変遷史においても引用・伝聞表現が現代のような形になったのは近代であるが、その正確な時代と背景、伝聞表現の見分け方を明らかにすることができなかったため、今後の研究課題として取り組んでいく考えである。

【参考文献】

・日本語文献

岩井良雄(1974)『日本語法史』笠間書院

岩男考哲(2003)「引用文の性質から見た発話「～ッテ」について」『日本語文法』3 巻 2 号、日本語文法学会、pp146-162.

大野晋(1955)『時代別作品別解釈文法』至文堂

岡部嘉幸(2011)「江戸語の推定表現」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編、pp195－213、くろしお出版

大久保忠利(1968)『日本文法陳述論』明治書院

大鹿薫久(2004)「モダリティを文法史的に見る」北原保雄監修・尾上圭介編『朝倉日本語講座 6　文法Ⅱ』pp193－214.

_____(2005)「叙法の組織と「のだ」文・規定文」『日本語学会 2005 年度春季大会シンポジウム報告』pp137－140.

大槻文彦(1982)『大言海』冨山房

尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版

沖森卓也(1989)『日本語史』桜楓社

沖森卓也　他(2010)『日本語史概説』朝倉書店

加藤陽子(2010)『話し言葉における引用表現-引用標識に注目して-』くろしお出版

鎌田修(2000)『日本語の引用』　ひつじ書房

韓先熙・飯干和也(2011)「「(し)そうだ」と「ようだ」の用法に関する考察」『日本文化学報第 48 輯』pp59-78.

木下りか(2013)『認識のモダリティと推論』ひつじ書房

工藤真由美(2003)「現代日本語における過去の出来事の表現」『日本語とアジア諸言語との対照的研究-テンスとアスペクト』1991-1992 年度科学研究費報告書

_____(2006)「話し手の感情・評価と過去の出来事表現」『日本語教育から研究へ』土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会編、くろしお出版

黒滝真理子(2005)『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性 ： モダリティの日英語対照研究』くろしお出版

金田一春彦　他(1988)『日本語百科大事典』大修館書店 pp132-162.

_____(1953)「不変化動詞の本質（上）」『国語国文』22 巻 3 号 pp1-19.

_____(1953)「不変化動詞の本質（下）」『国語国文』22 巻 4 号 pp15-35.

金東昭(2003)『韓国語変遷史』明石書店

金善眞(2004)「日本語の文末引用形式について」、「岡山大学大学院文化科学研究科紀要」第 17 号、pp81-97.

金普仁・上原聡(2010)「韓国語の引用を表す連体形式の対照研究」、「日本言語文化」第 16 輯、한국일본언어문화학회 pp87-105.

金普仁(2011)「連体節で現れる「という」の介在可否決定要因」、「日語日文学」第 50、대한일어일문학회、pp41-53.

金成燁(2010)「「(し)そうだ」に関する一考察」『日語日文学第 45 輯』pp69-88.

_____(2013)「伝聞表現の「そうだ」「らしい」「ようだ」に関する一考察
－事態内容に対する話し手の認識的判断との関わりから－」『日語日文学第 57 輯』pp63-78.

金昌奎(2013)「推量の助動詞「そうだ」「ようだ」「らしい」の使い分けに関する研究」　日語日文学、第 59 輯 pp25～37.

『現代用語の基礎知識』(1993)、自由民主社

此島正年(1966)『国語助詞の研究』桜楓社
_____(1973)『国語助動詞の研究：体系と歴史』桜楓社
呉先珠(2015)「韓国語伝聞表現の文法範疇－外国語としての韓国語伝聞表現教育の観点から－」『韓国言語文化研究』第 21 号、九州大学韓国言語文化研究会、pp45～62.
_____(2014)「伝聞と推量表現の連続性と話者の関与度に関する一考察－伝聞の「そうだ」と推量の「そうだ」「ようだ」「らしい」の比較を中心に－」『日本語教育研究』第 29 輯、韓国日語教育学会、pp135～157.
_____(2012)「伝聞「との」「とのことだ」の構文と意味－日本語母語話者の認識および韓国語との対照を通して」『日本語教育研究』第 24 輯、韓国日語教育学会、pp75～92.
小林好日(1936)『日本文法史』刀江書院
小松光三(1980)『国語助動詞意味論』笠間書院
三枝令子(1997)「「って」の体系」『言語文化』34、一橋大学語学研究室、pp21-38.
澤西稔子(2002)「伝聞における判断性、及びその特性」、「日本語、日本文化」第 28 輯、 大阪大学、pp29-49.
上代語辞典編修委員会編(1967)『時代別国語大辞典』、三省堂
澤田治美(2006)『モダリティ』開拓社
上代語辞典編修委員会(2000)『時代別国語大辞典』三省堂
砂川千穂(1999)「日本語における「とか」の文法化について－並立助詞から引用マーカーへ」日本女子大学大学院文学研究科紀要第 6 号、pp61－73.
柴田武(1981)「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」国廣哲彌・柴田武・長島善郎・山田進・浅野百合子『ことばの意味 3－辞書に書いてないこと－』平凡社、pp87-94.
田中章夫(1977)「助詞 3」大野晋・柴田武編『岩波講座　日本語 7　文法Ⅱ』岩波書店 pp359-454.
田窪行則(2010)『日本語の構造－推論と知識管理』くろしお出版
趙佳姫(2013)「推量の助動詞「ようだ」・「らしい」に関する比較研究」『日本文化研究第 45 輯』、pp515-539.
高橋太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』12 号 pp18-26.
辻大介(1999)「若者語と対人関係-大学生調査の結果から-」東京大学社会情報研究所紀要 57 号、pp17-42.
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
_____(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ、Ⅲ』くろしお出版
_____(1995)『寺村秀夫論文集Ⅰ』くろしお出版
時枝誠記(1937a)「文の概念について(上)」『国語と国文学』14 巻 11 号 pp1603-1619.
_____(1937b)「文の概念について(下)」『国語と国文学』14 巻 12 号 pp18-35.
_____(1941)『国語学原理』岩波書店
中右実(1979)「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしお出版
_____(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
_____(1999)「モダリティをどう捉えるか」『月刊言語』28(6)pp26-33.
芳賀綏(1962)『日本文法教室』東京堂出版
南美英(2010)「『との』の構文と意味的環境」、「日本言語文化」第 17、한국일본언어문화학회、pp27-51.
中島義明　他(1992/1999)『心理学辞典』有斐閣
中園篤典(2006)『発話行為的引用論の試み』ひつじ書房
中畠孝幸(1992)「不確かな伝達－ソウダとラシイ－」『三重大学日本語学文学第 3 号』、pp15-23.

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』　ひつじ書房
_____(1992)「判断から発話・伝達へ－伝聞・婉曲の表現を中心に－」『日本語教育』、日本語教育学会 77, pp1-13.
_____(2000)「日本語のモダリティとその周辺」 森山貞郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3　モダリティ』
岩波書店、pp81-159.
_____(2009)『日本語のモダリティとその周辺』 ひつじ書房
仁田義雄・益岡隆志(1989)『日本語のモダリティ』くろしお出版
日本大辞典刊行会(1975)『日本国語大辞典 14』小学館
日本大辞典刊行会(1976)『日本国語大辞典 20』小学館
日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語の文法 4』くろしお出版
_____(2008)『 現代日本語文法 6』 くろしお出版
遠藤織枝(1995)『概説日本語教育』三修社
_____(2007)『日本語教育を学ぶ』三修社
関正昭・平高史也(1997)『日本語教育史』アルク
野田尚史　他(2002)『複文と談話』岩波書店
野林靖彦(1999)「類義のモダリティ形式「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」－三水準にわたる重層的考察－」
『国語学』、197 集、pp89-75.
野村剛史(2003)「モダリティの分類」『国語学』54(1)、 国語学会、pp1-17.
橋本進吉(1934)『國語法要説』明治書院
_____(1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店
早津恵美子(1988)「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』7(4)、明治書院、pp46-61.
原田芳起(1955)「上代日本語動詞の時について」『樟蔭文学』七号. pp32-45
日野資成(2001)『形式語の研究-文法化の理論と応用』九州大学出版会
藤田保幸(2002)『国語引用構文の研究』和泉書院
_____(2014)『引用研究史論』和泉書院
堀口純子(1995)「会話における引用の「ッテ」による結語について」『日本語教育』85、日本語教育学会、
pp. 13-28.
松尾捨治郎(1961)『助動詞の研究』白帝社
益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版
_____(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
_____(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
_____(2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版
_____(2013)『日本語構文意味論』くろしお出版
松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』紀元社
松下大三郎(1930)『標準日本口語法』中文館書店
松重敏(1965)『日本文法-主語と述語-』武蔵野書院
_____(1971)『日本文法の諸問題』笹間書院
松村明編(1989)『大辞林』三省堂
三浦昭(1974)「「と」と「って」」『日本語教育』24-4、日本語教育学会、pp. 23-28.

三尾砂(1939)「文に於ける陳述作用とは何ぞや」『国語と国文学』16 巻 1 号、pp66-78
三矢重松(1908)『高等日本文法』明治書院
三宅武雄(1937)「動詞の連体形に関する一つの疑ひについて」『国語と国文学』14 巻 11 号、pp1672-1681.
三宅知宏(2006)「「実証的判断」が表される諸形式－ヨウダ・ラシイをめぐって－」益岡隆志・野田尚史・
森山貞郎編『日本語文法の新平地 2　文法編』くろしお出版 pp119-136.
南不二男(1985)「質問文の構造」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味』朝倉新書
宮崎和人 他(2002)『モダリティ』くろしお出版
宮崎裕　他(1990)『講座日本語と日本語教育』明治書院
森田良行(1980)『基礎日本語 2』角川書店
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
森山卓郎(1995)「「伝聞」考」『京都教育大学国文学会誌第 26 号』pp25-36.
森山卓郎 他(2000)『モダリティ』岩波書店
李翊燮　他(2004)『韓国語概説』大修館書店
山田孝雄(1922)『日本文法講義』宝文館
_____(1936)『日本文法學概論』寶文館
山崎誠(1993)「引用の助詞「と」の用法を再整理する」、「研究報告集」、国立国語研究所、pp1-30.
_____(1996)「引用・伝聞の『って』の用法」、「研究報告集」、国立国語研究所、pp1-22.
山本佐和子(2012)『モダリティ形式「らしい」の成立　日本語文法史研究 1』高山善行　他編、ひつじ書房、
2012、pp165-188.
湯澤幸吉朗(1954)『江戸言葉の研究』明治書院
_____ (1957)『増訂　江戸言葉の研究』明治書院
湯本久美子(2004)『日英語認知モダリティ論:連続性の視座』くろしお出版
吉田金彦(1971)『現代語助動詞の史的研究』明治書院
_____(1972)『品詞別日本文法講座 7』 鈴木一彦・林巨樹編 明治書院
_____(2010)『現代語助動詞の史的研究 6、7』明治書院
渡辺実(1967)「叙述と陳述－述語文節の構造」国語学会、pp20-34
_____(1968)「終助詞の文法的地位－叙述と陳述－」『国語学』国語学会、pp127-134.
_____(1972)『国語構文論』塙書房
羅聖榮(1992)「日本語モダリティ表現における推論型の意味機能」『言語論叢』10、啓明大日本文化研究、
_____(1995)「日本語モダリティにおける推論型の意味機能」『日本学報』、35pp127-148.
_____(1996)「日本語と韓国語のモダリティ対照研究」筑波大学博士論文
陸心芬(2007)「「ようだ/らしい/そうだ/という」の連続性－話し手の情報の扱いの観点から」
『日本文化学報第 32 輯』pp111-123.
P. J, ホッパ. E. C, トラウゴット(2003)『文法化』九州大学出版会

・韓国語文献

고영근(1974)「現代國語의 終結語尾에 대한 構造的 硏究」『어학연구』10(1) 서울대학교 언어교육원,pp118-157.
_____(1976)「現代國語의 文體法에 대한 硏究」『어학연구』12(1) 서울대학교 언어교육원,pp17-53.
_____(2007)『한국어의 시제 서법 동작상(보정판)』태학사

_____(2009)『표준중세국어문법론(개정판)』 집문당
고영근・구본관(2008)『우리말문법론』 집문당
고영근・남기심(2009)『표준국어문법론(개정판)』 집문당
국립국어연구원(2005)『외국인을 위한 한국어 문법』 커뮤니케이션 북스
권재일(1982)「어미 체계와 통사 기술」『언어학』 5 한국언어학회,pp3-12.
_____(1992)『한국어 통사론』 민음사
_____(1998)『한국어 문법론』 태학사
_____(1998)「한국어 인용 구문 유형의 변화와 인용 표지의 생성」『언어학』 22 한국언어학회,pp59-79
김민수(1971)『國語文法論』 一潮閣
김진웅(2012)「한국어 증거성의 체계: 유형론을 중심으로」『한국어 의미학』 39, pp101-124.
김태엽(1998)「국어 비종결어미의 종결어미화에 대하여」『언어학』 한국언어학회 22,pp171-189.
_____(2001)『국어 종결어미의 문법』 국학자료원
남기심(1972)「현대국어 시제에 관한 문제」『국어국문학』 55-57 합병호
_____(2001)『현대국어 통사론』 태학사
박종국(1996)『한국어 발달사』 문지사
박재연(1999)「국어 양태 범주의 확립과 어미의 기술-인식 양태를 중심으로-」『국어학』 국어학회 34,pp199-225.
_____(2014)「한국어 종결어미 '-구나'의 의미론」『한국어 의미학』 43,한국어 의미학회,pp219-245.
서정수(1990)『증보개정판 국어문법의 연구』 한국문화사
송재목(1998)「안맺음씨끝 '-더-'의 의미 기능에 대하여」『국어학』 32,국어학회,pp.135-169.
_____(2009)「인식 양태와 증거성」『제 50 차 한국어학회 전국학술대회 발표논문집』 pp.17-24.
_____(2011)「한국어 증거성 표지의 중복 실현」『비교문화연구』 22, pp.355-373.
안명철(1990)「국어의 융합현상」『국어국문학』 103,pp121-137.
안주호(1999)「연결어미'-기에/-길래'의 특성과 형성과정」『담화와 인지』 6,권 1 호,담화인지학회 pp.101-120.
안주호(2003)「인용문과 인용표지의 문법화에 대한 연구」『담화와 인지』 10,권 1 호,담화인지학회 pp.145-165.
윤석민(2000)『현대국어의 문장종결법 연구』 집문당
이기갑(2006)「한국어의 양태(modality)표현-언어유형론의 관점에서」,담화인지언어학회 10,pp.67-83.
이기문(1961)『国語史概説(改訂版)』,民衆書館
이기문 외(1984)『국어음운론』 학연사
이동림(1959)『釋譜詳節:注解』 東國大學校出版部
이선영(2014)「명제와 양태」『한국어 의미학』 43,한국어 의미학회, pp.355-373.
이익섭(1994)『國語學槪說』 學硏社
_____(1997)『한국의 언어』 신구문화사
李弼永(1992)『현대국어의 인용구문에 관한 연구』 서울대학교대학원 박사학위논문
李浩權(2001)『석보상절의 서지와 언어』 태학사
이홍식(2003)「선어말 어미 '-더-'의 의미에 대하여」『한국어 의미학』 13,한국어 의미학회,pp229-255.
이현희(1982 ㄱ)「국어의 의문법에 대한 통시적 연구」서울대 석사학위 논문
_____(1982 ㄴ)「국어 종결어미 발달에 대한 관견」『국어학』 11,pp143-163
_____(1986)「중세국어 내적화법의 성격」『한신논문집』 3,pp191-228

_____(1994)「중세국어 구문연구」신구문화사
임동훈(2008)「한국어 서법과 양태체계」『한국어 의미학』26,pp211-249.
임채훈(2008)「`감각적 증거' 양태성과 한국어 어미 교육-`-네',`-더라',`-더니',`-길래' 등을 중심으로」『이중언어학』37,pp.199-234.
임홍빈(2005)『우리말에 대한 성찰 1,2』태학사
온쓰카 치요(2002)「「-잖아요(ジャナイデスカ)에 대해-이른바 「확인요구표현」이라고 하는 것으로부터 경어표현으로의 이행-」」『일본문화연구』7,동아시아일본학회,pp.517-532.
유춘평(2012)「중세 한국어 인용문 구조에 대한 연구」『국학연구』20,한국국학진흥원,pp.311-333.
장경희(1995)「국어의 양태범주 설정과 그 체계」『언어』20(3),pp.191-205.
_____(1985)「國語의 認知樣態」『동아시아 문화연구』8,한양대학교 동아시아 문화연구소,pp.523-534.
_____(1997)「국어 대화에서의 敍法과 樣態」『국어교육』93,한국어교육학회,pp.255-275.
장윤희(2002)『중세 국어 종결어미 연구』,국어학회
정경숙(2012)「한국어 종결어미 '-네'의 의미:증거성 및 의외성과 관련해서」『언어』37(4),pp.995-1016.
정하준(2009)「한일 전문표현의 번역례 연구」,「日語日文**学研**究」第 69 輯,대한일어일문학회,pp449-469.
진정란(2005)「한국어 이유 표현 '-길래'의 담화 문법 연구」담화와 인지,12 권 3 호,담화인지학회,pp.137-154.
최현배(1937)『우리말본』연희전문학교출판부
_____(1961)『우리말본』정음사
홍택규(2008)「증거성과 동사범주의 주관화」『러시아어문학연구논집』28,한국러시아문학회,pp.155-191.
_____(2010)「'구세계 증거성 벨트'와 발칸언어연합 : 연구를 위한 시론」, 한국노어노문학회, 『노어노문학』 22(4), pp.189-217.
표준국어대사전(1999)두산동아

・英語文献

Aikhenvald, Alexandra(2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
Bybee,J,L(1984) *Diagrammatic iconicity in stem-inflection relations*. In J. Haiman(ed.) Iconicity in syntax. Amsterdam:John Benjamins.pp11-47.
_____(1985) *Morphology:A Study Of Relation Between Meaning And Form*. John Benjamins Publishing Company.
_____(1995) *MODALITY IN GRAMMAR AND DISCOURSE*. John Benjamins Publishing Company.
Bybee et al(1994) *The evolution of grammar : tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago, United States. 1994. University of Chicago Press.
Chung, Kyung-Sook(2005) *Space in Tense: The Interaction of Tense, Aspect,Evidentiality and Speech Act in Korean.Doctoral Dissertation*. SimonFraser University.
Crowley,Terry(1992) *An Introduction to Historical Linguistics*. New York:Oxford University Press.
Deci,E.L.,&Ryan,R.M.(1985) *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*.New York; Plenum Press.
De Haan,F(2001) *The Relation Between Modality and Evidentiality*. In Modalität und Modalverben im Deutschen Helmut Buske Verlag, Hamburg.

DeLancey, Scott(1997) *The mirative and evidentiality*. Journal of Pragmatics 33: 369-382.

_____(1997) *Mirativity: The grammatical marking of unexpected information.* Linguistic typology.,Vol.1(1).pp33-52.

Floyd, Rick(1999) *The Structure of Evidential Categories in Wanka Quechua*. Dallas: Summer Institute of Linguistics and the University of Texas at Arlington Publications in Linguistics.

Givon,T. (1995) *Functionalism and Grammar*, John Benjamins.

Halliday,M.A.K(1970) *Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English.Foundations of Language* .Vol.6.pp322-361.

Halliday,M.A.K(1978) *Language as social semiotic.* Edward Arnold.

Heine,Bernd,Urlike Claudi and Friederike Hunnemeyer(1991) *From cognition to grammer: Evidence from African languages*.In Traugott and Heine.,Vol.1.pp87-149.

Huddleston,R.,&Pullum,G.K(Eds.)(2002)*The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.

Jespersen,O(1924) *THE PHILOSOPHY OF GRAMMAR*. LONDON GEORGE ALLEN & UNWIN LtD

Lewis,D.M(2006) *Discourse marker in english: a discourse pragmatic view*. In K.Fischer(Ed.), Approaches to Discourse Particles(pp43).Amsterdam:Elsevier.pp15-23.

Lim, Dongsik(2010) *Evidentials and Interrogatives: A Case Study from Korean*.Doctoral Dissertation. University of Southern California.

Langacker,R.W.(1991) *Foundations of Cognitive Grammar*,Vol.2:Deescriptive Application,Stanford University Press,Stanford.

Langacker,R.W.(1998) *On Subjectification and Grammaticization*,Discourse and Cognition: Bridging the Gap,ed.by.J.-P.Koenig,71-89,CSLI Publications,Stanford.

Lyons,J(1969) *Introductions to theoretical linguistics*. Cambridge university.

_____(1969) SEMANTICS２. Cambridge university.

Mary Shin Kim(2006) *Negotiating epistemic rights to information in Korean conversation: An examination of the Korean evidential marker -tamye*.

R.Suzuki(2007)「(Inter)subjectification in the quotative tte in Japanese conversation-Local change, utterance-ness and verd-ness-」,pp207-237

Traugott, Elizabeth Closs(2010) *Topics in English Linguistics: Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*. kristin Davidse and Lieven Vandelanotte and Hubert Cuyckens(Eds.).De Gruyter Mouton.

Sweetser,E.E(1990) *From etymology to pragmatics:Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*.Cambridge University Press.

Palmer,F.R (1984) *Grammar*.Harmondsworth:Penguin.

_____(1986) *Mood and Modality*. Cambridge University Press.

_____(2001) *Mood and Modality*(2nd ed). Cambridge University Press.

Plungian(2001) *The place of evidentiality within the universal grammatical space*. Journal of Pragmatics 33. pp349-357.

日本語教材

岡野喜美子　他(2008)『TOTAL JAPANESE1, 2(早稲田大学日本語教育研究センター)』、凡人社

小山悟(2007)『J BRIDGE1,2』、凡人社

スリーエーネットワーク著編(2012)『みんなの日本語初級 1,2(2001),中級 2』

坂野永理　他(2011)『GENKI』、The Japanese Time

東京外国語大学留学生日本語教育センター偏(2005)『新装版　日本語初級、中級、上級』、凡人社

東海大学留学生教育センター(2002)『新装版　日本語初級ⅠⅡ』、東海大学出版会

韓国語教材

新大久保語学院(2007)『できる韓国語』初級ⅠⅡ、中級ⅠⅡ、DEKIRU 出版

野間秀樹・金珍娥(2008)『Viva 中級韓国語』、朝日出版

油谷幸利・南相瓔『総合韓国語』3(2003)、4(2013)、白帝社

【用例出典】

①対訳文庫

題　名	作　者	出版社	出版年
近代名作短編小説	芥川龍之介 他	다락원	2010
最後の授業	尾崎達治	다락원	2012
セロ弾きゴーシュ	宮沢賢治	다락원	2012
注文の多い料理店	宮沢賢治	다락원	2010
野菊の墓	伊藤左千夫	다락원	2008
‘ビー’の話	群ようこ	다락원	2009
坊ちゃん（上）	夏目漱石	다락원	2009
坊ちゃん（下）	夏目漱石	다락원	2009
羅生門	芥川龍之介	다락원	2010
吾輩は猫である	夏目漱石	다락원	2011
３年生の教科書	表記なし	다락원	1995
日本の小学校５年生の国語教科書選	高田敏子 他	다락원	2012
日本の小学校６年生の国語教科書選	黒田三郎 他	다락원	2012
日本の中学校の教科書選	俵万智　他	다락원	2012
日本の高等学校の教科書選	秋原朔太郎　他	다락원	2010
オ・ヘンリ傑作選	大久保康雄 日訳	다락원	2009
銀河鉄道の夜	宮崎賢治	다락원	2012
小さな王子	尾崎連治 日訳	다락원	2012
太宰治の女学生	太宰治	다락원	2011
小さな王国	谷崎潤一郎	시사일본어사	2008
愛と死	武者小路実篤	시사일본어사	2008
友情	武者小路実篤	시사일본어사	2008
雁	森鴎外	시사일본어사	2008

②映画

題　名	制作年	題　名	制作年
彼女を信じないでください	2004	花影	2007
ダンサーの純情	2005	僕の世界の中心は君だ	2005
裸足のギボン	2008	シュリ	1999
ラスト・プレゼント	2002	青春漫画	2006
マイ・リトル・ブライド	2004	あなたを忘れない	2007
月はどこに出ている	2008	ヒノキオ	2006
茶の味	2007	亀は意外と速く泳ぐ	2006
ピンポン	2006	天国の本屋	2006
スクラップ・ヘブン	2006	サッド　ヴァケイション	2008
OUT OF THIS WORLD	2007	約三十の嘘	2006

③ドラマ

題　名	制作年	題　名	制作年
アー秋の童話	2003	カー神の天秤	2010
ケー検事プリンセス	2010	コー恋人	2008
サーサイン	2011	シーシークリットガーデン	2012
ツー追撃者	2012	フー冬のソナタ	2003
ャー野王	2014	ヤネー屋根部屋のプリンス(	2012

④読売新聞インタ-ネット版
⑤現代日本語書き言葉均衡コーパス
⑥韓国国立国語院コーパス
⑦独立新聞(1986.04－1899.06)

付録:日韓両国語の学習教材分析

従来の消極的情報社会では、情報のやり取りが口伝や手紙などに限られていた。そのため伝わる情報の量も限られており、その真偽判断も容易であったと推測される。しかし、IT産業の発達に伴い、現代の積極的情報化社会ではネットやスマートフォンから世界中の数えきれないほどの情報にアクセスできることから、情報伝達の際の話し手の責任問題が重視されるようになった。これに伴い、個別表現の表現意図や類似表現との使い分けなどが重要になってきているが、果たしてこのような時代の変化は、外国語教育教材にどのように反映されているのだろうか。かかる観点で、本論に加え外国語教育教材の伝聞表現を伝聞表現研究史の観点から考察する。

ここでは教育用教材を用い、第 2 言語・外国語を通して両国語伝聞表現をどのような表現が、どの段階で提示されているのかを確認する。本稿で用いている両国語の第 2 言語・外国語としての日本語教材は、2000 年以降発売されているもので、日本国内外において認知度の高いものを選別の基準とした。

日本語教材は初中級用として Vol1,2 に分かれている教材が多いが、「みんなの日本語」のように初級 1、2・中級 1、2・高級とさらに細分化されている教材もある。また、韓国語教材は日本で韓国語教育に用いられているものの中から、一般向けに販売されているものだけではなく、大学の韓国語授業においても用いられているものから選別した。

１．１日本語学習教材の分析

第2言語、外国語としての日本語教材は2～3冊完結の初中級教材が多かったため、各教材において扱っている推論・伝聞表現の数はそれほど多くない。さらに推量・伝聞表現の提示レベルにばらつきが見られ、推論表現が伝聞表現として用いられている用例においても、文法的説明が欠けている場合がある。まずはどのような教材に、どのような表現が、どのレベルで、どのように提示されているのかを他の教材と比較しながら確認する。

１．１．１機能的分析

本研究で伝聞表現の分析用として選別した日本語教材は、第 2 言語・外国語教育教材として用いられる『J BRIDE』『TOTAL JAPANESE』『GENKI』『みんなの日本語』『日本語初級1,2』『日本語』の６種で、中でも『みんなの日本語』は、韓国の大学において日本語教育

用教材として用いられるなど日本国内外で高い認知度を誇っている。今回調査した 6 種教材の詳細は以下の<表 1>の通りである。

＜表 1. 伝聞表現分析に用いた日本語教材＞

教　　材	学習レベル	出版社	出版年
J BRIDE	1、2	凡人社	2007
TOTAL JAPANESE	1、2	凡人社	2008
GENKI	初級 1、2	GENKI japan times	2011
みんなの日本語	初級 1、2、中級 1、2、高級	スリーエーネットワーク	2001、2012
日本語初級	Ⅰ、Ⅱ	東海大学出版会	2002
日本語	日本語初級、中級、上級	凡人社	2005

これらの教材から日本語伝聞表現の教育段階を纏めてみると以下の<表 2>の通りである。

＜表 2. 各日本語教材の推論・伝聞表現のレベル＞

教材名	レベル	教育段階	機　　能
J BRIDE 2007 2008	Vol1	21 課～しそうですね	
	Vol2	2 課～と聞いたけど、 ～と言っていた、 ～と聞きました	
		12 課～ようです(推論)	
		21 課～って、そうです(伝聞)	
TOTAL JAPANESE 2007	Vol2	23 課～しそうですね。	
		28 課～そうです、って、 ～らしい、 ～って言ってました	
		30 課～らしい(伝聞)	

		40 課～ようだ(推論)	
GENKI	1 2011	8 課～と言っていました、 ～と言いました	
	2 2012	13 課～そうです(推論)	
		17 課～そうです(伝聞)、って	
		23 課～ようです	
みんなの日本語	初級 2 2001	33 課～と言っていました	
		43 課～そうです(推論)	
		47 課～そうです(伝聞)	
	中級 1 2008	4 課～ということだ(伝聞)	伝言を頼む、受ける。留守番電話に伝言を残す。
		11 課～らしい(推論・伝聞)	提案する。提案を受け入れる。
	中級 2 2012	13 課～って	日常的な社交場面でおしゃべり、雑談、会話を続ける。エピソードを話す。
		15 課～という	説明文を読む。条件と結果を表わす文を読む。
		21 課～とか	意見を表明する文を読む。筆者の主張をその根拠や具体例から読み取る。
日本語初級 (東海大学留学生教育センター)	初級Ⅰ	21 課～といいました、 ～と言っていました	
	初級Ⅱ	28 課～って、って言っていた	
		44 課～そうです(推論)	
		45 課～ようです(推論)	
		46 課～そうです(伝聞)	
日本語 (東京外		23 課～そうです(推論)	
		25 課～ようです(推論)	

国語大学留学生日本語教育センター)	初級	26 課～そうです(伝聞)、 ～と言いました	
		28 課～らしいです(推論・伝聞)	
	中級	6 課～ということだ、 ～とのことだ	
		16 課～という	

〈表 2〉の『J BRIDE』は推論「そうだ」が最も最初に提示され、「と言ってる、と聞いた」と、推論「ようだ」、伝聞の「そうだ」の順に提示されていることが分かる。『GENKI』は、言語の実用的なプロトタイプの提示に重点を置いているためなのか、Vol1 で「と言ってる、と言った」を、Vol2 で推論「そうだ」と伝聞「そうだ、って」、付録の読み書きの部分に推論「ようだ」が提示されているが、提示されている推論・伝聞表現の数は一番少なかった。それに比べ、『みんなの日本語』は「と言っていた」、推論「そうだ」、伝聞「そうだ」以外にも、中級で「ということだ、んだって、という、とか」が提示され、『日本語初級』は「という、といっている」が初級 1 に、「って、って言っている」、推論「そうだ、ようだ」、伝聞「そうだ」が初級 2 に提示されている。『日本語』は推論「そうだ、ようだ、らしい」以外にも伝聞「そうだ、とのことだ」、伝聞用法「ということだ、という」を提示している。しかし、今回の調査の限り推論・伝聞表現を証拠と話し手の表現意図によりイメージ化して提示している教材は、管見の限り見当たらなかった。

その理由として考えられるのは今回対象としている教材のみならず、多くの日本語教材が 2 冊完結の初中級教材として編纂されていることから、代表的な推論・伝聞表現のみを提示することに重点を置き、伝聞表現間の意味の違いや話し手の表現意図までとりあげてイメージ化することができなかったのではないかと推測される。さらに、今回の日本語教材分析の過程で一番物足りなかったことは、個別文法項目を学習することにより何ができるようになるのか、また、どのような場合に用いればいいのかという学習の機能的な面とコミュニケーションの場を提示している教材が、少ないということである。

よってこれからの日本語教材の開発はこのような点を踏まえて、学習機能、個別表現の表現意図や類似表現の使い分けのイメージ化も考慮に入れるべきであると思考する。

１．１．２項目分析

以下の日本語教材に提示されている各伝聞表現を比較してみよう。

教材名	教育段階	説　　明
J BRIDE	Vol1	例) ①おいしそうですね。 ②まじめそうですね。 →視覚的推論判断として「そうだ」を提示している。
TOTAL JAPANESE	Vol2	例) ①重そうですね。 →副次的表現として本文で一例のみ提示している。
GENKI	Vol2	例) ①このりんごはおいしそうです。 ②あしたは天気がよさそうです。 →推測(Guess)や印象(Impress)を表す表現として「そうだ」を提示している。
みんなの日本語	初級 2	例) ①今にも雨が降りそうですね。 ②面白そうですね。 →視覚・聴覚的推論判断として「そうだ」を提示している。
日本語初級	初級Ⅱ	例) ①雨が降りそうです。 ②A:田中さんは今週は忙しいと言っていましたよ。 B:じゃ、今日行くのはやめたほうがよさそうですね。 →主に視覚・聴覚的推論判断として提示している。
日本語	初級	例) ①あの荷物は重そうです。 ②上着のボタンが取れそうです。 ③高い波が来たので、船がしずみそうになりまし

		た。 →視覚・印象による主観的推論判断として提示している。

以上のように全ての教材で推論「そうだ」を主に「天気」など、目でみてすぐ判断できる視覚的推論判断や何かの物音を聞いて判断する聴覚的推論判断、又は相手の話を聞いて判断する思考的推論判断として取り扱っているが、『TOTAL JAPANESE』では副次的なものとして文法説明なしに、本文の会話でのみ提示されていた。

以下は「と言っていた」の各教材の記述である。

教材名	教育段階	説　　明
J BRIDE	Vol2	例） ①リンダさんは「テストが終わったら、旅行します」と言っていました。 ②リーさんは「香港に帰ったら、メールします」と言いました。 →情報源が提示される直接引用表現として「と言っている」、「と言う」、「と聞く」を提示している。
TOTAL JAPANESE	Vol2	例） ①向こうで好きなインテリア・デザインの勉強をしたいって言ってましたよ。 ②仕事がつまらないって言って(い)ました。 →「と」と「って」の置き換え可能性はすでに学習済みなので「って言って(い)る」形で提示し、言語使用の実用的な側面を重視している。
GENKI	Vol1	例） ①メアリーさんは忙しいと言っていました。 ②明日は寒くないと言っていました。 →伝聞表現として「と言っていました」を提示している。
みんなの日本語	初級 2	例） ①ミラーさんは来週大阪へ出張すると言っていました。 ②A:小川さんから電話がありましたよ。

		B:そうですか。何か言っていましたか。 A:夕方５時半ごろ戻ると言っていました。 →情報源が提示される伝聞表現として「と言っている」を提示している。
日本語初級	初級Ⅰ	例） ①A:先生は何と言っていましたか。 B:あしたは第3課の試験をすると言っていました。 ②A:お兄さんは電話で何と言いましたか。 B:すぐ帰って来いと言いました。 →主に質問に対する答えとして「と言っていました」を提示している。

「という」は小説など書き言葉では「という・といった」の形で用いられるが、話し言葉では「と言っている・と言っていた」の形で用いられる場合が多い。しかし、「という」と「と言っていた」が全く同じものとは言い難い。『J BRIDE』は、「と言っている」と共に「と言う」、「と聞く」を、別の課では伝聞「そうだ」も提示しているものの、「と言う」と「と言っている」、伝聞の「そうだ」における話し手の表現意図の違いまでは触れていない。つまり、伝聞として用いられる「という」や「と聞く」は、情報源の明示が必要ではないが「と言っていた」は、文脈上情報源が提示されないと用いられない。しかし、今回の分析対象の教材をみた限りその指摘はなされておらず、さらに「と言っている」は、主に質問に対する答えに用いられるやや消極的伝聞表現である反面、伝聞の「そうだ」は質問されたことに対する答えはもちろん、話し手が自ら進んで情報伝達に臨む積極的で自発的伝聞表現として用いられる。「と言っている」は、情報源が必ず明示されるが、伝聞「そうだ」はそのような制約がないため、「と言っている」と「そうだ」を比較すると「と言っている」の方が情報と距離を置いた客観的伝聞表現であると言えるが、そのような指摘はなされていない。さらに教育の実用的側面を重視しているからか、「と言っている」は今回分析の対象としているすべての教材において初級1に提示される場合が多かった。

推論「ようだ」に関しては、『J BRIDE』と『みんなの日本語』『日本語初級』『日本語』では文法項目として提示されているが、『TOTAL JAPANESE』『GENKI』では文法説明が欠けている状態で本文や例文で副次的な表現として提示されていた。

教材名	教育段階	説　　明
J BRIDE	Vol2	例） ①A：人がたくさんいますね。 B：ええ。何かあったようですね。 ②町には水道が整備されていて、町中にきれいな水を送っていたようです。 →視覚や観察、考察など証拠による主観的判断として提示している。
TOTAL JAPANESE	Vol2	例） ①結局多くの学生にとって、アルバイトをするのは小遣いをかせぐためのようです。 ②給料が高いですし、人気があるようです。 →本文においてアンケートの調査結果を発表しており、調査の結果から原因を推論する表現として提示しているが、文法説明が欠けている。
GENKI	Vol2	例） ①最近の研究によると、うれしいときの顔とびっくりした時の顔は、言葉や文化が違っても、ほとんど同じようです。 →推論とも伝聞とも取れる曖昧な用例であるにも拘らず、文法的説明が欠けている状態で付録の読み書き編の本文に提示している。
みんなの日本語	初級 2	例） ①A:にぎやかな声がしますね。 B:ええ。パーティーでもしているようですね。 ②部長はイギリス文学がすきなようです。 →視覚・聴覚・体験による観察・考察を証拠とする主観的推論判断として提示している。
日本語初級	初級Ⅱ	例） ①このサインはパスポートのサインと少し違うようです。 ②きのう調べてみたんですが、かなり難しいようです。 →視覚・聴覚・体験による観察・考察を証拠とする主観的推論判断として提示している。
日本語	初級	例）

		①この機械はどうも古いようです。あまり動きません。 ②熱があるようですね。顔が赤いですよ。 ③ニュースで聞きましたが、最近交通事故が減ったようです。 →証拠による話し手の主観的推論判断のみならず、③のように他から入手した情報の伝達にも用いられるものとして提示している。

以上のように推論「ようだ」を提示している教材のなかで、『J BRIDE』『TOTAL JAPANESE』『みんなの日本語』『日本語初級』は、「視覚・聴覚・体験による観察・考察を証拠とする主観的推論表現」として提示しているが、『日本語』は証拠による主観的推論判断のみならず、伝聞機能も提示している。しかし、推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」、伝聞「そうだ」、伝聞用法「ようだ」、「らしい」の話し手の表現意図の違いに関して比較している教材はなかった。そのため、『GENKI』のように話し手の主観的判断とも伝聞ともとれる曖昧な「ようだ」が、文法的説明が欠けている状態でいきなり本文で登場することは学習者の混乱を招く恐れがある。このことから、これからの日本語教材開発の際には学習者の理解を深めるため、推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」の個別文法項目の提示が先行された後、それぞれの表現に含まれている話し手の表現意図の違いを纏めてイメージ化して提示するのも、学習者の理解を深める一つの方法になるのではなかろうか。

日本語の代表的伝聞表現「そうだ」は 6 種教材とも初級のほぼ最後の段階に提示されていた。

教材名	教育段階	説　　明
J BRIDE	Vol2	例） ①先生の話では、明日のテストは難しいそうです。 ②天気予報によると、明日は雨が降るそうです。 →「情報源＋そうだ」の形で、推論「そうだ」が同じ課で一緒に提示しているため、学習者は自然に両方の接続の違いや機能の違いを身につけることができる。
TOTAL JAPANESE	Vol2	例） ①結婚するそうです。 ②あしたは天気がよくないそうですね。 →伝聞用法「って」「って言ってる」を不確かな推論「らし

		い」と共に提示している。
GENKI	Vol1	例） ①きのう宝くじを買ったそうです。 ②ニュースによると、長野で大きい地震があったそうですよ。 →伝聞「そうだ」と推論「そうだ」との形式的・意味的違いがわかるように本文で一緒に提示している。
みんなの日本語	初級 2	例） ①天気予報によると、あしたは寒くなるそうです。 ②クララさんは子どものとき、フランスに住んでいたそうです。 →伝聞「そうだ」と推論「ようだ」を同じ課で一緒に提示している。
日本語初級	初級Ⅱ	例） ①今度、東京でレオナルド・ダ・ヴィンチの展覧会をやるそうですね。 ②A:チンさんはどこにひっこしたんですか。 B:リーさんの話では、八王子の方だそうです。公園のすぐそばで、とても静かだそうです。 →伝聞「そうだ」を推論「らしい」と一緒に提示している。
日本語	初級	例） ①ニュースによると、未成年者の交通事故が増えてきたそうです。 ②統計によると、最近、男性の人口は女性の人口より多いそうです。 →人から聞かされたことだけではなく、統計や手紙の内容を伝達するときにも用いられる伝聞表現として提示している。

以上のように、『J BRIDE』『GENKI』では伝聞「そうだ」と推論「そうだ」が同じ課で一緒に提示され、接続形式の違いや意味機能の違いが自然に分かるようになっていた。『TOTAL JAPANESE』では、「って」、「って言ってる」、推論「らしい」と伝聞「そうだ」が一緒に、『日本語初級』では、推論「らしい」と伝聞「そうだ」が同じ課で一緒に提示され、『みんなの日本語』では推論「ようだ」と一緒に学習するようになっている。他の教材が伝聞「そうだ」を、主に人やニュースのようなメディアからの情報伝達に用いられる伝聞表現として提示している

反面、『日本語』では、報告書の統計や手紙などによる情報伝達にも用いられる表現として提示されている。さらに各教材には工夫もみられ、伝聞「そうだ」と観察や証拠による主観的推論判断に用いられる「ようだ」を一緒に提示することにより、情報判断の主体が話し手なのか他者なのかを分からせることができるようにされている。しかし、推論「ようだ」と「らしい」は伝聞にも用いられることから、これらを用いる際の話し手の表現意図による主観的認識態度の違いについてのイメージ化が欠けていると、学習者の混乱を招く可能性もある。

つまり、伝聞「そうだ」と推論「そうだ」、「ようだ」、「らしい」を比較し、意味的関連性をイメージ化することにより、情報の入手経路、話し手の表現意図の違いと、情報が聞き手に及ぼす影響(情報の他者判断性と自己判断性、それによる話し手の主観の介入可能性)についての理解を深める効果がある。また、伝聞「そうだ」を「って」、「と言っている」のような同じ伝聞表現と比較し、これら伝聞表現における話し手の表現意図の違いをイメージ化することにより、伝聞表現同士の意味的共通点や相違点の提示ができる。しかし、今回の分析対象教材の限り、伝聞表現を他の伝聞表現と、推論表現を他の伝聞表現と一緒に提示しているだけで、コミュニケーションの場における話し手の表現意図の違いをイメージ化している教材は見当たらなかった。

伝聞用法「って」に関しては多くの教材で伝聞「そうだ」と一緒に提示され、「そうだ」のInfomal 体として説明しているが、『TOTAL JAPANESE』では「ですって」の形を提示し、「って」は単なる「そうです」の Infomal 体ではなく、「丁寧形＋って」の形で聞き手に対する社会的注意を表すこともできるということを見せている。また、『日本語初級』では伝聞表現としての「って」は提示されておらず、話し手の前述の発話の再引用に用いられる表現としてのみ、「って」を提示している。

教材名	教育段階	説　　明
J BRIDE	Vol2	例) ①先生の話では、明日のテストは難しいって。 ②天気予報によると、明日は雨が降るって。 →伝聞「そうだ」と一緒に提示されているが友達同士の会話には「って」を、インタビュー形式のような堅い場面には「そうだ」を用い、「って」と「そうだ」の違いを提示している。
TOTAL JAPANESE	Vol2	例) ①大学の時の友だちで、テニスのサークルでいっしょだ

		ったんですって。 →他の教材で伝聞用法「って」を主に「そうだ」の Infomal 体として扱っているのに比べ、「ですって」の形で単なる「そうだ」の Infomal 体ではなく Fomal と Infomal の間の表現として提示している。
GENKI	Vol2	例） ①メアリーさん、今日は忙しいって。あした、試験があるんだって。 ②A:あきらさんは何て言ってた？ B:チョコレートを食べすぎたって言ってた。 →伝聞用法「って」を伝聞「そうだ」の Infomal 体として、また「と言う」の引用助詞「と」に置き換えできるものとして提示している。
みんなの日本語	中級 2	例） ①太郎がおばあさんに道を聞かれて、その場所まで連れて行ってあげたって言うんですよ。 ②サントスさん、いずみさんの結婚式でスピーチをしたんだって？ →伝聞・問い返し・確認要求など複数の「って」の表現を会話文に組み込んで提示することにより、多様な「って」の用法に触れることができる。
初級日本語	初級Ⅱ	例） ①この前も頼んだよね。静かにしてくれって。 →自己の前述の発話の再引用として提示している。

伝聞用法「って」に関して、『J BRIDE』『GENKI』では「そうだ」の Informal 体として提示されているが、『TOTAL JAPANESE』『みんなの日本語』では「ですって」を用い、「です」の後に「って」をつけることにより Fomal と Infomal の間くらいの表現として提示していた。『みんなの日本語』では、「って」を引用助詞「と」に置き換えできるものとして、「って言っている」、「っていう意味」、「って思っている」のような多様な「って」の接続可能性を提示し、また、「いずみさんの結婚式でスピーチをしたんだって？」のような情報確認[74]の文末疑問形「って？」も一緒に提示されていた。『J BRIDE』『GENKI』『TOTAL JAPANESE』では、伝聞用法「という」「とか」は提示されず、「らしい」は『TOTAL JAPANESE』と『日本語』には推論判断と

74 ただし、この場合は当事者に情報の確認を求めているため伝聞とは言い難い。

して提示、『みんなの日本語』は推論と伝聞の両方を提示している。まず、『TOTAL JAPANESE』『みんなの日本語』『日本語』の「らしい」の記述を確認してみよう。

教材名	教育段階	説　　明
TOTAL JAPANESE	Vol2	例） ①よくわからないですけど、退学したらしいですね。 ②はっきり聞かなかったんですけど、転勤らしいですね。 ③はっきり言わなかったんですけど、出ないらしいですね。 →「よくわからない」「はっきり聞かなかった」などと共起し話し手の不確かな推論判断として提示している。
みんなの日本語	中級１	例） ①愛子さん、最近うれしそうですね。 ・・うん、高橋さんに聞いたんだけど、婚約したらしいよ。 ②いいにおいがしてくる。隣の晩ご飯、すき焼きらしい。 ③テレサちゃんは水泳が苦手らしく、水泳の時間になると、お腹が痛いという。 →伝聞と推論の両方の用法を提示している。
日本語	初級	例） ①中村さんはしあいで友だちに勝ったらしいです。喜んでいます。 ②あの人は、どうも部屋にいないらしいです。電気が消えています。 ③ニュースで聞きましたが、明日は天気が悪いらしいです。 →①、②のように証拠を提示し、証拠による話し手の主観的推論表現にも、③のように伝聞表現にも用いられる表現として提示している。

IT 産業の発達により、インターネットやスマートフォンで世界中のあらゆる情報に簡単にアクセスできる情報化社会が到来した。しかし、これらの情報がすべて真であるとは限ら

ないため、情報伝達においての話し手の責任は多くなったと言える。そのため、話し手は情報伝達による責任問題から逃れる為に、情報を不確かなものとして用いるようになった。このような理由で、伝聞用法「らしい」が日常生活で多用されるようになっているが、これを学習項目として取り上げている日本語教材はいまだ少なく、「らしい」を取り上げていても『TOTAL JAPANESE』のように不確かな推論としてのみ取り上げている場合が多い。

本稿の 4.3.4.5 で、伝聞用法「とか」と「らしい」を(間)主観化された伝聞表現とし、話し手の聞き手に対する配慮が感じられるものとして考察したが、『TOTAL JAPANESE』に(間)主観化とみられる「らしい」の記述があった。

教材名	教育段階	説　　明
TOTAL JAPANESE	Vol2	例)秋山：けさ、だいぶ遅刻したらしいですね。 原：ええ。・・いつものように 7 時半に家を出たんですけどね。 →偶然道で会った 2 人の会話から提示された上記の「らしい」は、‘原’の遅刻を何らかの証拠から推論したというより、‘原’が遅刻したことを誰かに聞かされたとみたほうが妥当で、‘秋山’は‘原’に気遣い、遠慮しながら直接‘原’に確認していると思われる。

上の用例をみると、‘秋山’は‘原’の遅刻を誰かに聞いて知っておきながら「らしい」を用いているが、このように遅刻した本人を気遣いながらも、直接確認することで‘原’を気遣っていると受け取られる。しかし、この場合は他から入手した情報を当事者に確認しているため、本稿では伝聞とはせず引用として取り扱う。とりわけ、「らしい」を推論表現としか学習していない学習者にとっては、このような用例が引用・伝聞に用いられること、ましてや話し手の聞き手に対する配慮が含まれているということは知り得ないことである。

伝聞用法「という」は、話し言葉では「と言いました」、「と言っていました」、「と言ってた」の形で現れることは上述した。以下で、書き言葉の「という」と「と言いました」を確認して置くことにする。

教材名	教育段階	説　　明
みんなの日本語	中級 2	例) ①日本で最も古い大学が京都にあるという。

		②昔は砂糖は薬として用いられたこともあるという。 昔は砂糖は薬として用いられたこともあるそうだ。 →伝聞用法「という」を伝聞「そうだ」に置き換えられる表現として提示しているが、話し手の主観的認識態度や表現意図の違いに関しては触れていない。
初級日本語	初級 2	例） ①先生はテストをすると言いました。 ②先生は試験はむずかしいと言いました。 →伝聞と「名詞＋と言います」を一緒に提示している。
日本語	中級 上級	例） ①10 メートルの高さから落ちたものが水をたたく力は、相当激しいもので、飛び込みの選手がかぶっている布の帽子は、練習を続けているうちに、裂けて、ぼろぼろになってしまうという。 ②わたしたちの地球は銀河系宇宙の中にあるという。 →伝聞として「という」を提示しているが、伝聞「そうだ」との話し手の主観的認識態度や表現意図の違いに関しては触れていない。

さらに伝聞用法「とか」は 6 種教材の中で『みんなの日本語』のみ提示されていた。

教材名	教育段階	説　　明
みんなの日本語	中級 2	例） ①隣のご主人、最近見かけないと思ったら、2 週間前から入院しているとか。 ②お嬢さんが近々結婚なさるとか、おめでとうございます。 ③先週のゴルフ大会では社長が優勝なさったとか。 →主に情報源が現れない噂的な話に用いられている。また②、③のように他で入手した情報を話題の本人に直接確認する際には不確かなもの・よく知らないものとして用いることで話し手の聞き手に対する配慮が窺える表現として提示している[75]。

75 しかし、本稿では②③のように他から得た情報を本人に直接確認しているものは伝聞とは認めない。

以上のように伝聞用法「とか」は『みんなの日本語中級Ⅱ』に提示されていたが、他の教材が初中級教材であるのに対し、『みんなの日本語』は初級Ⅰ Ⅱ、中級Ⅰ Ⅱ、高級に細分化されており、提示できる文法項目の数が他の教材より多いため、伝聞用法「とか」にも触れることができたのだろう。

また、「ということだ」の提示も『みんなの日本語』と『日本語』の中級にのみ提示されていたが、『みんなの日本語』は他者の話を伝える伝聞表現、他者の話を確認する引用表現の両方の用法が提示されていた。『日本語』は伝聞というより「様態」を説明する表現として提示されていると解される。

教材名	教育段階	説　　明
みんなの日本語	中級 1	例） ①市役所の説明によると、電気製品を捨てる場合はお金を払わなければならなくなったということです。 ②部長に 30 分ほど遅れると伝えてください。 ・・はい、わかりました。30 分ほど遅れるということですね。 →他者の話を伝える伝聞表現と他者の話を確認する引用表現として提示している。
日本語	中級	例） ①昔の中国では、珍しい貝がらがお金として使われていたということである。 ②それを、ほしいものと交換していたということである。 →「と言われている」と同じ課で提示されていて一般に広く知られている知識の提供に用いられている。

以上、各日本語教材の推論・伝聞表現の文法項目や提示レベルにバラつきがあることを確認した。また教材によっては推論「そうだ」、推論・伝聞用法「らしい」を文法説明が欠けているにも拘わらず、本文や応用練習で副次的な表現として提示していたり、「ようだ」に関しても、推論とも伝聞ともとれる曖昧な表現を文法説明なしに付録の読み書きで提示している教材もあり、学習者の混乱を招く可能性がある。

さらに、それぞれの推論表現・伝聞表現を学習することによって得られる効果、つまり、

その学習項目をマスターすることにより何ができるようになるのかという学習目標や学習機能が提示されている教材は少なかった。加えて、日常生活の中で学習者が触れることの多い表現から推論表現・伝聞表現をボトムアップ式に提示した後、類似表現を纏め、各表現間の証拠や情報による話し手の表現意図の変化(情報の他者判断性と自己判断性、それによる話し手の主観の介入可能性)などの意味的関連性について触れている教材も管見の限り見当たらなかった。

また、「とのことだ」のような伝聞表現は、今回分析の対象としているすべての日本語教材で学習項目として選ばれていない。これらの伝聞表現は日本語教育の段階において、少なくとも推論の「そうだ」、「ようだ」、「らしい」、伝聞「そうだ」や直接引用と間接引用についての学習が終わった段階で提示されるべき文法項目であるが、現在の第 2 言語・外国語としての日本語教材の多くは初中級教材が主流をなしているため、教育項目として選ばれなかったと推測される。

加えて、コミュニケーションの場において、たとえば「ようだ」、「らしい」が他から入手した情報であっても、話し手の自己責任のもとで言語化している場合もあるが、このような推論表現の意味拡大が充分に説明・例示されているとは言い難い。例えば、推論「ようだ」と「らしい」、伝聞用法「らしい」と伝聞「そうだ」など、意味的に類似している推論・伝聞表現の話し手の表現意図の違いをイメージ化して提示する必要があると考える。

具体的方法としては、本稿でこれまで論じてきた≪推論「そうだ」「ようだ」「らしい」の証拠とモダリティの関係(4.1.4 参照)≫≪「伝聞表現「そうだ」「ようだ」「らしい」の情報とモダリティ(4.2.4 参照)≫や、≪「推論・伝聞表現の「そうだ」「ようだ」「らしい」の情報とモダリティの関係(4.2.5 参照)≫、≪「という」「って」「とか」の情報とモダリティの関係(4.3.5 参照) ≫、≪「とのことだ」「ということだ」の情報とモダリティの関係(4.4.3 参照)≫ を用いて、意味的に類似している推論表現と伝聞表現に対する話し手の表現意図をイメージ化する作業が必要であると考える。

１．２韓国語学習教材の分析

韓国語伝聞表現は、第2言語・外国語として韓国語を学習している人にとって学習困難項目の一つである。その理由は、まず韓国語はムードとモダリティの対立を持っている言語で、①伝聞表現として用いられる表現の数が多く(今回の調査で集められた表現だけでも少なくても37にのぼる)、②複雑な縮約・省略段階を経ているため、第2言語・外国語として韓国語

を学習している人にとってはその意味を把握するまでにかなりの訓練を要し、③動詞・名詞・形容詞といった述語の種類により異なる接続ルールがあり、④文の種類を、平叙文・命令文・勧誘文・疑問文の四つのうちどれかに区別しなければならない、⑤膠着語ならではの特徴が伝聞表現にも現れ、複雑に重なっているためである。このような理由で第2言語、外国語としての韓国語教材において伝聞表現は初級の最後か中級に提示されている場合が多いが、その提示レベルや提示項目数にはばらつきがある。この節では韓国語の伝聞表現が、どのような教材に、どのような表現が、どのレベルで、どのように提示されているのかを他の教材と比較しながら確認する。

１．２．１機能的分析

この項では各学習教材において、韓国語伝聞表現のどのような項目が、どのように提示されているのかを伝聞表現の教育史の一環として確認しておきたい。分析に用いた教材は以下<表 3>、<表 4>の通り、日本で韓国語教育に用いられるものの中から、一般向けに販売されているだけではなく、大学の韓国語授業においても用いられているものから選別した。

＜表 3. 伝聞表現分析に用いた韓国語教材＞

教　　材	学習レベル	出版社	出版年
できる韓国語	初級ⅠⅡ、中級ⅠⅡ	DEKIRU 出版	2007
Viva 中級韓国語	中級	朝日出版社	2008
総合韓国語	1～4	白帝社	2005

＜表 4. 各韓国語教材の推論・伝聞表現のレベル＞

教　材	レベル	文法項目	機　　能
	初級Ⅱ	22 課-냐고 하다・-내요	
		23 課-다고 하다・-ㄴ/-는대요	
		24 課-(으)라고 하다・-(으)래요	
		25 課-자고 하다・-재요	
		9 課-아/어 달라고 하다 -(ㄴ/는)다니까(요)	伝達

できる韓国語	中級Ⅰ	11課-나 보다/-(으)ㄴ가 보다	電話
		17課-(ㄴ/는)다면서요?	描写
		18課-다고 하더라구요	パンマル
		19課-다고 하네요	相談
	中級Ⅱ	1課-다/자고 하던데 -(ㄴ/는)다는 말이에요	挨拶
		6課-ㄴ 것 같군요	助言
		9課-(ㄴ/는)다고 그러다	伝達
		10課-(으)ㄴ/는/(으)ㄹ 듯하다	感情
		11課-ㄴ다더니	説明
		15課-(으)ㄴ/느/(으)ㄹ 모양이다 -(으)ㄴ/느/(으)ㄹ 것 같다 -(이)라잖아・-다고 하잖아	推測
		17課-다고 하니	主張
		19課-다나? -다고 하더라	理由
Viva中級韓国語	中級	10課-ㄴ대요/-는대요・-대/내/재/래요	韓国語で韓国語の表現を尋ねる。
		11課 -다고/자고/라고 그래요(그러는데요) -라고 하죠? -한댔/하냈/하쟀/하랬어(요) -ㄴ답니다/-냡니다/잡니다/랍니다 -ㄴ단다/-냔다/-잔다/-란다 -냐고 하는데요 -다고 하던데 -ㄴ다면서요 -ㄴ다고 하네요	伝聞を語る。

		13 課-나보다・-ㄴ가 보다 -다던데	提案
		15 課-하는/한 모양이다	判断を述べる。推量を述べる。
総合 韓国語	2	12 課-다고 한다 -래요	
	3	1 課-고 하다	
		3 課-대/래요・-답/랍니다・-단/란다	
		12 課-것 같다	
		14 課-다고 듣다	
	4	5 課課-다/라면서요？	
		9 課-다고	
		12 課-다나요	

以上の 3 種教材で提示している韓国語の引用・伝聞表現は、本稿考察対象の文末伝聞表現だけで合わせて 18 種類以上が学習項目として組み込まれているが、各表現の提示レベルや提示の仕方は教材によって違う。ここでは、それぞれの教材において、どのような表現がどのように記述されているのかを項目別に確認すると共に、本稿 5.2.1 で設定した韓国語伝聞表現の文法範疇の‘-단다(tanta)、-다나(tana)、-다지(taci)、-대(te)、-다더라(tatela)、-답니다(tapnita)、-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’と、5.3 の意外性の意味を含んでいる‘-다네(taney)’がどのように提示されているのかを確認する。

１．２．２項目分析

‘-다고 하다(tako hata)’は韓国語の代表的引用・伝聞表現であり、本稿の分析用教材においても、多くの教材で引用・伝聞表現の教育項目の一番最初に提示される表現である。

教材名	教育段階	説　　明
できる韓国語	初級Ⅱ	提示：-냐고　하다/-내요 ・ -ㄴ는다고　하다/-ㄴ/는대요 ・ -

		(으)라고 하다/-(으)래요・-자고 하다/재요 (nyako hata/-nyayyo・nnuntako hata/n/nuntayyo・(u)lako hata/(u)layyo・cako hata/cayyo) 例) ①선생님이 휴가 때 뭐 하냐고 물었어요.(=하냬요) sensayngnimi hyuka ttay mwe hanyako mwulesseyo. (=hanyayyo) ②내일 회사에 간다고 해요.(=간대요) nayil hoysaey kantako hayyo.(=kantayyo) ③의사가 술은 마시지 말라고 했어요.(=마시지 말래요) uysaka swulun masici mallako haysseyo. (=masici mallayyo) ④친구가 일요일에 골프치러 가자고 했어요.(가재요) chinkwuka ilyoiley kolphuchile kacako haysseyo. (kacayyo) →縮約される前の形と縮約形を一緒に提示しているので縮約の仕組みが分かりやすく、‘-아/어 달라고 하다(a/etallako hata)’形も提示している。
viva 中級韓国語	中級	提示：-ㄴ대요/-는대요・-냬요・-재요・-래요 (ntayyo/nuntayyo・nyayyo・cayyo・layyo) 例) ①수진이는 자주 배탈이 난다고 해요. swucininun cacwu paythali nantako hayyo. ②다음달에 제 친구가 결혼을 한대요. taumtaley cey chinkwuka kyelhonul hantayyo. ③민아가 선생님 집이 크냬요. minaka sensayngnim cipi khunyayyo. ④민아가 너한테 점심 같이 먹재. minaka nehanthey cemsim kathi mekcay. ⑤민아가 잠깐 여기 있으래요. minaka camkkan yeki issulayyo. →引用表現を纏めて提示している。最初に引用の仕組みを提示し、その後接続語尾形、引用連体形、縮約形を提示している。
総合韓国語	3	提示：-다/라고 해요・-대/래요

		(ta/lako hayyo・tay/layyo) 例) ①아무도 없다고 해요/아무도 없대요. amwuto epstako hayyo/amwuto epstayyo. ②학생이 아니라고 해요/학생이 아니래요. haksayngi anilako hayyo/haksayngi anilayyo. →縮約前の文型と縮約形を一緒に提示している上に、‘잘 안다고 합니다/잘 안답니다(cal antako hapnita/cal antapnita)’、‘멀지 않다고 한다/멀지 않단다(melci anhtako hanta/melci anhtanta)’も一緒に提示しているため、学習者にとっては伝聞表現の負担数が軽減される効果が期待できる。また一例のみではあるが、本文に文末省略形の‘-다고(tako)’も提示している。

「-다고 하다(tako hata)」は『できる韓国語』では初級の終わり、『viva 中級韓国語』『総合韓国語[76]』では中級に提示されていることから、初級と中級の境目にある引用・伝聞表現であると解される。さらに‘-(ㄴ/는)다고 하다((n/nun)tako hata)’は、平叙文の伝聞表現であるのに対し、‘-자고 하다(cako hata)’は勧誘文、‘-(으)냐고 하다/V-느냐고 하다((u)nyako hata/Vnunyako hata)’は、疑問文の引用・伝聞表現、‘-(으)라고 하다((u)lako hata)’は命令文の引用・伝聞表現である。しかし、『できる韓国語』は‘-냐고 하다(nunyako hata)’を先に提示した後、‘-다고 하다(tako hata)’、‘-자고 하다(cako hata)’、‘-(으)라고 하다((u)lako hata)’のように平叙・命令・勧誘の引用・伝聞表現をその縮約表現と一緒に提示している。『viva 中級韓国語』は引用・伝聞表現を纏めて提示しているため、最初引用の構造を提示し、その後接続語尾形、引用連体形、縮約形を提示している。『総合韓国語』は‘-다/라고 하다(ta/lako hata)’を‘-답니다(tapnita)、-단다(tanta)’と一緒に提示しているので、引用・伝聞表現の縮約のパターンと韓国語の対者敬語法に対する学習者の負担を軽減することができると推察する。

教材名	教育段階	説　明
できる韓国語	中級	提示：-(ㄴ/는)다고/-냐고・-자고・(으)라고・-아/어 달라고　그러다((n/nun)tako/nyako ・ cako ・

76 『総合韓国語2』に‘-다고 하다(tako hata)’、‘-래요(layyo)’が一例ずつあった。

		(u)lako・a/e tallako kuleta) 例) ①다음 주에 눈이 온다고 그러던데요. taum cwuey nwuni ontako kuletenteyyo. ②제가 듣기에 그 사람은 공무원이라고 그러던데요. ceyka tutkiey ku salamun kongmwuwenilako kuletenteyyo. →‘-ㄴ/는다고 하다(n/nuntako hata)’より話し言葉のニュアンスが強い表現として提示している。
viva 中級韓国語	中級	提示：-다고 그래요/냐고 그러는데요 (tako kulayyo/nyako kulenunteyyo) 例) ①매운 것도 잘 먹는다고 그래요. maywun kesto cal meknuntako kulayyo. ②언니도 같이 도서관에 가느냐고 그러는데요. ennito kathi tosekwaney kanunyako kulenunteyyo. →いろいろな伝聞表現が紹介されており伝聞表現の縮約のパターンも図式化して分かりやすく提示されているが、用例①と②の話し手の表現意図の違いは提示されていない。

学習者に見られる韓国語の文法的誤りは、韓国語伝聞表現に用いられる表現の数の多さや縮約・省略の複雑さに起因すると考えられるが、学習者の意味的誤りや不自然な文を生み出すことに関しては、話し手の表現意図やそれぞれの表現が用いられるコミュニケーションの場に対する理解が不十分なため起こると推察される。よって、例えば‘-다고/느냐고/(으)라고、자고 그랬다(tako/nunyako/(u)lako,cako kulayssta)’においても、‘-ㄴ/는다고 하다(n/nuntako hata)’が主に書き言葉で用いられ、話し言葉においては‘-다고/느냐고/(으)라고、자고 그랬다(tako/nunyako/(u)lako,cako kulayssta)’が用いられるといったことを書き加えることで学習者の理解を深めることができると考える。

以下は、情報伝達の場において情報と距離を置きたいという話し手の表現意図を表す伝聞表現‘-단다(tanta)’についての記述である。

教材名	教育段階	説　明

viva 中級韓国語	中級	提示：-단/냔/잔/란다(tan/nyan/can/lanta) ①요즘 일본에서도 매운 것을 좋아하는 사람들이 많단다. yocum ilponeyseto maywun kesul cohahanun salamtuli manhtanta. →引用以外に聞き手に対する言い聞かせに用いられたり、念を押して述べるときに用いられる表現として提示している。
総合日本語	3	提示：-단/란다(tan/lanta) 例) ①멀지 않다고 한다/멀지 않단다. melci anhtako hanta/melci anhtanta. ②여기는 무료라고 한다/여긴 무료란다. yekinun mwulyolako hanta/yekin mwulyolanta. →縮約される前の形と縮約形を一緒に提示し、さらに‘-다고 해요/대요(tako hayyo/tayyo)’、‘-다고 합니다/답니다(tako hapnita/tapnita)’と表を用い、縮約の仕組みが分かりやすく説明されているが、‘-자고 해요/재요(cako hayyo/cayyo)’、‘-라고 해요/래요(lako hayyo/layyo)’に関する記述は見当たらない。

‘-단다(tanta)’は伝聞として用いられる際は、情報と距離を置きたいという話し手の表現意図がみられ、また、情報伝達だけではなく話し手の知識や考えを客観的に述べるときにも用いられる。『viva 中級韓国語』は引用・言い聞かせ・念押しに用いられる表現として、『総合韓国語』は引用表現として提示しているが、両教材共に情報と話し手との距離に関する指摘がなされていない。

‘-답니다(tapnita)’は、‘-다고 하다(tako hata)’の‘-고 하(ko ha)-’縮約に丁寧体を加えた引用・伝聞表現であり、当然ながら‘-대요(tayyo)’より丁寧な表現である。

教材名	教育段階	説　明
viva 中級韓国語	中級	提示：-ㄴ답니다/-냡니다/잡니다/랍니다 (ntapnita/nyapnita/capnita/lapnita) 例)

		①매운 것도 아주 잘 먹는답니다. maywun kesto acwu cal meknuntapnita. →引用に用いられる表現を纏めて提示している。引用終止形の‘-해요(hayyo)’体である‘-한대요(hantayyo)’を‘-합니다(hapnita)’体にすると説明している。
総合日本語	3	提示：-답니다/랍니다(tapnita/lapnita) 例) ①잘 안다고 합니다/잘 안답니다. cal antako hapnita/cal antapnita. ②올 예정이라고 합니다/올 예정이랍니다. ol yeycengilako hapnita/ol yeycengilapnita. →引用文においての‘-고 하(ko ha)-’縮約の一つとして、縮約前の形と縮約形を一緒に提示している。‘-자고 합니다/잡니다(cako hapnita/capnita)’、‘-라고 합니다/랍니다(lako hapnita/lapnita)’に関する記述は見当たらないが、引用・伝聞表現の縮約パターンはイメージ化できる。

『viva 中級韓国語』と『総合日本語』は引用・伝聞表現を纏めて説明しているため、縮約や接続に対する話し手の想像力を働かせることができるが、例えば、‘-대(요)(tay(yo))’は話し手が自分のことや自分の知っていることを伝えることはできず、もっぱら伝聞のみに用いられるが、‘-단다(tanta)’、‘-답니다(tapnita)’は話し手自分のことや知っていることを述べる時にも用いられるなどの指摘は成されていない。

伝聞の第一義は「情報共有の確保」、つまり情報伝達であるが、情報伝達の過程において何らかの形で話し手の主観が入ることは避けられない。そのため本稿では、情報伝達に含まれる話し手の主観を「表現意図」と称しているが、以下の‘-다면서요(tamyenseyo)’のように情報確認の意味を持ち、さらに情報に対する話し手の驚きを表すこともできる。

教材名	教育段階	説　明
できる韓国語	中級Ⅰ	提示：-(ㄴ/는)다면서요((n/nun)tamyenseyo)? ①윤선 씨는 결혼했다면서요? yunsen ssinun kyelhonhaysstamyenseyo? ②이토 씨가 고등학교 선생님이라면서요?

		itho ssika kotunghakkyo sensayngnimilamyenseyo? →人から聞いた話の真偽を確認するときに用いられる表現として提示している。
viva 中級韓国語	中級	提示：-다면서요(tamyenseyo)? ①지은이네 집에서 설을 지내신다면서요? ciuniney cipeyse selul cinaysintamyenseyo? →引用接続形として接続形語尾で文が終止することに関する説明はなされているが、‘-다면서요(-tamyenseyo)?’という表現についての文法説明はなされていない。
総合日本語	3	提示：-면서(요)(myense(yo))? 例) ①회사를 그만 두셨다면서요? hoysalul kuman twusyesstamyenseyo? ②떨어졌다면서? ttelecyesstamyense? →引用文においての‘-고 하(ko ha)-’を省略した形に‘-면서(요)(myense(yo))？’を加え、噂として聞いた事柄を本人または第 3 者に確認する表現として提示している。

‘-다면서(요)(tamyense(yo))’は、接続語尾形としては‘-다고 하면서/다면서(tako hamyense/tamyense)’の両方を用いることができるが、文末疑問形としては‘-다면서(요)(tamyense(yo))’のみ用いることができる。またその際、話し手は自分が入手した情報を不確かなものとして認識しているか、情報に対する驚きを込めて当事者や第 3 者に確認するという面で意外性とも関りを持っている表現である。『できる韓国語』『総合日本語』では提示文法項目に組み込まれ、情報確認表現として提示されているが、『viva 中級韓国語』では副次的文法として文法説明なしに本文の会話に提示されている。

‘-라고 하죠(lako hacyo)?’の‘-죠(cyo)’は‘-지요(ciyo)’の縮約であり、‘-지(ci)’は平叙・疑問・命令・勧誘文の全ての文類型と共起できる。しかし、‘-다지(taci)’の形で平叙文で用いられる時は 5.2.1.1 のように独り言として用いられ、疑問文で用いられる時は伝聞で、話し手と聞き手の間に情報共有認識があり、話し手は情報内容を不確かなものとして認識しているため、聞き手に詳しい情報を要求する表現である。

教材名	教育段階	説　　明
viva 中級韓国語	中級	提示：-라고 하죠(lako hacyo)? 例) ①그 사람 담당이 아니라고 하죠? maywun kesto acwu cal meknuntapnita. →‘-라고 하다(lako hata)’に要求・確認の‘-지(요)(ci(yo))’が加わり、‘-죠(cyo)’に縮約された形。話し手の情報内容の真偽に対する不安から聞き手に情報を要求するときに用いられる表現であるが、文法説明には触れていない。

情報伝達に加え、情報を要求する意味機能を持っている‘-지요(ciyo)’は『viva 中級韓国語』で１例あったが、文法的説明はなされていない。

韓国語の先語末語尾‘-더(te)-’は「報告」の機能があることから、話し手の過去の経験や印象を表すものとしても用いられ、伝聞にも用いることができる。ただし、教材ごとに提示される用法はやや異なり、『できる韓国語』は過去の経験を表す表現の‘-더라(tela)’を挙げている。また、伝聞表現‘-다고 하더라(tako hatela) 、ㄴ다더라(ntatela)・-ㄴ다더니(ntateni)’は本文や例文で現れるが、これらの違いに関する文法説明はなされていない。『viva 中級韓国語』では、話し手の経験を述べる表現として‘-더라고요(telakoyo)’と、そのタメロ形の‘-더라(tela)’と‘-던데(요)(tentey(yo))、데(요)(tey(yo))’を、『総合韓国語』も直接見聞きしたことを主観的に述べる表現として提示し、伝聞としての機能には触れていない。

教材名	教育段階	説　　明
できる韓国語	中級ⅡⅢ	提示：-다고 하더라・ㄴ다더라・-ㄴ다더니 (tako hatela・ntatela・ntateni) 例) ①한국도 여름 날씨가 덥더라고요. hankwukto yelum nalssika teptelakoyo. ②사실은 기숙사에 들어가고 싶었는데 기숙사엔 빈방이 없다고 하더라구요. sasilun kiswuksaey tulekako siphessnuntey kiswuksaeyn pinpangi epstako hatelakwuyo.

		③그 사람도 불어 공부를 하는데 학원에서 한 번 봤다고 하더라구. ku salamto pwule kongpwulul hanuntey hakweneyse han pen pwasstako hatelakwu. ④오늘 김 사장님 만나신다더니 아직 못 만나셨어요? onul kim sacangnim mannasintateni acik mos mannasyesseyo? →本文ではなく副次的文法表現として①のような過去に経験して新しく分かったこと、発見したことを客観的な観点から伝える表現として‘-더라(tela)’を提示している。その他にも、‘-다더라(tatela)’のように伝聞として用いられている用例が本文や文型練習にあったが、それに関する説明はされていない。
viva 中級韓国語	中級	提示：-더라/더라고(요) (tela/tentey(yo)/telako(yo)/tey(yo)) 例) ①열심히 찍어서 그런지 결국 넘어오더라구요. yelsimhi ccikese kulenci kyelkwuk nemeotelakwuyo. ②요즘 약속만 하면 바람맞고 오더라. yocum yaksokman hamyen palammacko otela. ③가게에서 나오니까 우산이 없더라고요. kakeyeyse naonikka wusani epstelakoyo. →話し手の体験を述べる形としてのみ用いられ、伝聞に関しては触れていない。
総合韓国語	3	提示：-더라고(요)(telakoyo) 例) ①어저께 현수 애인을 봤는데, 아주 예쁘더라구요. ecekkey hyenswu ayinul pwassnuntey, acwu yeyppute lakwuyo. ②참 좋더라고. cham cohtelako. →話し手が直接経験したり、見聞きした内容を主観的に伝える表現として提示している。

韓国語の過去の経験を表す先語末語尾には、‘-더(te)-’以外に‘-던(ten)-’もあり、

‘-던(ten)-’は、以下のように‘-다고 하던데(요)(tako hatentey(yo))’やその縮約形‘-다던데(요)(tatentey(yo))’の形で用いられる。

教材名	教育段階	説　明
できる韓国語	中級	提示：-다/자고 하던데(ta/cako hatentey) 例) ①집사람이 다음에 어머니 모시고 같이 가자고 하던데요. cipsalami taumey emeni mosiko kathi kacako hatenteyyo. ②프랑스에서는 인사할 때 포옹하면서 가볍게 뺨을 비빈다고 하던데, phulangsueysenun insahal ttay phoonghamyense kapyepkey ppyamul pipintako hatentey, →文法説明なしに本文の会話に組み込まれている。
viva 中級韓国語	中級	提示：-다던데(tatentey) 例) ①요즘에 “태국기를 휘날리며”란 영화가 아주 재밌다던데. yocumey “thaykwukkilul hwinallimye”lan yeng hwaka acwu caymisstatentey. →話し手の体験を表す表現として‘-던데(tentey)’に関する説明はあるが、伝聞としての説明はなされていないにも拘わらず、①のような用例が提示されている。

‘-다고 하던데(tako hatentey)、-다던데(tatentey)’は、過去の経験の報告という意味で縮約形、復元形両方とも伝聞表現として用いることができる。現代韓国語における文の簡潔化、省略化は文末表現に限った現象ではなく、‘-다고 하던데(tako hatentey)’も‘-다던데(tatentey)’の形で日常生活の中で接続形語尾としてより、終結形語尾として多用されているように見受けられる。しかし、話し言葉では主に縮約形が用いられる場合が多い。

日本語の推論判断「ようだ」、「らしい」が伝聞に用いられ、他から入手した情報であってもそれが話し手の認識世界で内面化され、話し手の責任のもとで自己判断のように提示され

ることがあったが、韓国語の‘-모양이다(moyangita)[77]’も、他から入手した情報を話し手の推論のように提示することができる[78]。

教材名	教育段階	説　明
できる韓国語	中級Ⅰ	提示：-(으)ㄴ/ㄴ/(으)ㄹ 모양이다 ((u)n/nu/(u)l moyangita) 例) ①뉴스를 보니까 요즘 경제가 아주 안 좋은 모양이에요. nyusulul ponikka yocum kyengceyka acwu an cohun moyangieyyo. →「-모양이다(moyangita)」は、主に人から聞いた話や確信、確かな証拠をもとにしているにも拘わらず、主観的推論を述べる表現として提示している。
viva 中級韓国語	中級	提示：-하는/한 모양이다(hanun/han moyangita) 例) ①석우는 일본에 간 모양이에요. 통 안 보이네요. sekwunun ilponey kan moyangieyyo. thong an poineyyo. ②요즘에 바쁘신 모양이에요. 연락도 없으시구. yocumey pappusin moyangieyyo. yenlakto epsusikwu. →話し手に写った印象を述べるときに用いられる表現として提示している。

『できる韓国語』は「ニュース」で最近の経済状況を聞いているにも拘わらず、「-모양이다(moyangita)」を用いて話し手の推論のように言語化することで、情報の内容に関しては自己責任のもとで、情報内容の真偽に関しては主観的、尚且つ不確かに提示している。

77 ‘-모양이다(moyangita)’以外にも、‘-것 같다(kes kathta)’‘-나 보다(na pota)’なども他から得た情報が話し手の認識世界で内面化され、話し手の自己判断のもとで言語化することができる。

78 A子は最近欠席がちである。B子はA子からバイトで忙しくて、授業に来れないということを聞いている。A子に何かあったのか、なぜ学校に来ないのかと先生に聞かれたB子が:

B子:요즘 일이 좀 바쁜 모양이에요/바쁜 것 같아요/바쁜가 봐요.

yocum ili com pappun moyangieyyo./pappunka pwayo/pappun kes kathayo.

『viva 中級韓国語』は、話し手の主観的印象・様態を述べる用法のみ提示している。

次は意外性を含んでいる伝聞表現‘-다고 하네(tako haney)’の記述についてみる。

教材名	教育段階	説　　明
できる韓国語	中級Ⅰ	提示：-다고 하네요(tako haneyyo) 例) ①내일은 기온이 많이 내려간다고 하네요 nayilun kioni manhi naylyekantako haneyyo →文法的説明なしに文型練習に提示されている。
viva 中級韓国語	中級	提示：-다고 하네요(tako haneyyo) 例) ①그리구 설날 떡국을 먹으면 나이를 한 살 더 먹는다고 하네요. kulikwu selnal ttekkwukul mekumyen nailul han sal te meknuntako haneyyo. →文法的説明なしに本文の会話に組み込まれている。

韓国語語尾の‘-네(ney)’は、‘비가 오네(pika oney)’のように直接証拠を表せることはもちろん、‘(濡れている地面をみて)비가 왔네(pika wassney)’と間接証拠を表すこともできる。また、‘비가 왔다네(pika wasstaney)’のように伝聞を表すこともできる。さらに‘-네(ney)’は、話し手が今まで認知していなかった情報を語るという意味で意外性と関わっている語尾である[79]。

情報伝達においての話し手の表現意図が強く表れる伝聞表現として、『できる韓国語』は‘-(이)라잖아((i)lacanha)、-다고 하잖아(tako hacanha)’を、『viva 中級韓国語』は‘-한댔/하냈/하쟀/하랬어(요)(hantayss/hanayss/hacayss/halaysse(yo))’のような複合語尾を提示している。これらの‘-다고 하다(tako hata)’に加わる‘-잖아(canha)・-한댔/하냈/하쟀/하랬어(요)(hantayss/hanayss/hacayss/halaysse(yo))’が、情報に対する話し手の表現意図・情意を強調するモーダル性の強い表現になる。

79 정경숙(2012:1014)ではこのように‘-네(ney)’を意外性に属させながらも、‘-네(ney)’が直接証拠、間接証拠、伝聞証拠全てを包括していることから、意外性という文法カテゴリーだけで‘-네(ney)’の意味を説明することは難しいと述べられている。

‘-(이)라잖아((i)lacanha)、-다고 하잖아(tako hacanha)’は、コミュニケーションの場において情報が話し手と聞き手に共有されていることを前提とし、伝聞で用いられる際は何か証拠による話し手の強い主張を述べるときに用いられる表現である。

教材名	教育段階	説　　明
できる韓国語	中級Ⅱ	提示: -(이)라잖아・-다고 하잖아 ((i)lacanha・tako hacanha) 例) ①며칠째 연락두절이라잖아. myechilccay yenlaktwucelilacanha. ②가정부 아들도 며칠 전부터 안 보인다고 하잖아. kacengpwu atulto myechil cenpwuthe an pointak o hacanha. →文法説明はなされていない。
viva 中級韓国語	中級	提示：-한댔/하냈/하쟀/하랬어(요) (hantayss/hanayss/hacayss/halaysse(yo)) 例) ①매운 것도 아주 잘 먹는댔어요. maywun kesto acwu cal meknuntaysseyo. ②강 선배가 나한테 교실에 휴강이라고 써 놓으랬어. kang senpayka nahanthey kyosiley hyukangilako sse nohulaysse. →実際の発話において‘-ㄴ/는대(요)(n/nuntay(yo)’と‘-ㄴ/는댔어(요)(n/nuntaysse(yo))’はほとんど意味の差はないが、過去にそう言っていたということを明示的に述べたいときに用いられる表現として提示している。

これまで伝聞表現は情報の受け渡しのみに関わるとされてきたが、実際は情報の受け渡しだけではなく、情報に何らかの形で話し手のモダリティが現れることになる。本稿は伝聞表現における話し手のモダリティを、話し手の表現意図を中心に考察しているが、‘-다잖아(tacanha)/한댔어(요)(hantaysse(yo))’のように情意を強く表せる表現を身につけておけば、話し手の気持ちをよりはっきり聞き手に伝えることができる。

‘-다나(tana)’は、①もとの会話の内容が大方そのような内容であったとぼかして提示する、②情報内容が不愉快、あるいは情報の真偽に自信がない・信じられない・不確かであるという話し手の態度を表している。

教材名	教育段階	説　　明
できる韓国語	中級Ⅱ	提示：-다나(tana)? 例) ①그리고 뭐랬더라. 내가 말을 재밌게 한다나? kuliko mwelaysstela. nayka malul caymisskey hantana? →他で聞いたことを正確に思い出せないため、ぼかして提示しているが、文法説明がない。
総合韓国語	4	提示：-다나요(tanayo) 例) ①저희 어머니는 옛날부터 스모 팬이세요. 한국의 씨름보다 더 재미있으시다나요? cehuy emeninun yeysnalpwuthe sumo phayniseyyo. hankwukuy ssilumpota te caymiissusitanayo? →他で聞いたことを正確に思い出せないため、ぼかしている。

『できる韓国語』『総合日本語』では、共に①もとの会話の内容が大方そのような内容であったとぼかして提示する用例があったが、文法説明はなされていない。

さらに、意外性を含む‘-(ㄴ/는)다는 말이에요((n/nun)tanun malieyyo)’もあったが、もとの話者が聞き手であり、伝聞状況に必要な場の移動・時間の変化がみられないことから伝聞とはしない。

教材名	教育段階	説　　明
できる韓国語	中級Ⅱ	提示：-(ㄴ/는)다는 말이에요 ((n/nun)tanun malieyyo) 例) ①벚꽃 놀이 같이 갔던 그 프랑스 남자도 온 단 말이에요?

		pechkkoch noli kathi kassten ku phulangsu namcato on tan malieyyo? →相手が話した内容を確認するときに用いられる、主に驚きや問い詰めのニュアンスがある表現として提示している。

先述した通り、日本語伝聞表現「そうだ、ようだ、らしい、という、って、とか、ということだ、とのことだ」8 つに対する韓国語伝聞表現は、‘-다고 하다(tako hata)’‘-대(tay)’のような基本的伝聞表現以外にも少なくとも 37 にものぼるため、日本語より比較的数が多い。また、日本語と違い韓国語は平叙文・疑問文・命令文・勧誘文と、文類型により異なる接続方法をとるため、ボトムアップ学習の効果を期待するためにもそれぞれの文類型に対する理解が先行されるべきである。加えて、多くの韓国語学習教材の文類型の提示が短文＞複文＞内包文の順で提示されていることから、内包文構成である伝聞表現は、初級の終りか中級から教授されるべき文法項目である。さらに、文の拡大に関わる引用・伝聞表現の構成成分が多い場合、学習者の負担も大きくなるため、引用・伝聞表現の配置にも注意が必要である。

このような伝聞表現に対する学習者の負担を減らすためにも代表格となる伝聞表現を設定し、それを中心に提示項目数を限定した方がよいのではないかと考えられる。このような考えから一つの試みとして、本稿では話し手の表現意図を中心に伝聞表現の文法範疇というカテゴリーを設定し、‘-단다(tanta)、-다나(tana)、-다지(taci)、-대(te)、-다더라(tatela)、-답니다(tapnita)、-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’を提示しているが、これは韓国語伝聞の意味機能や、コミュニケーションの場における社会的注意も考慮したものである[80]。つまり、‘-다고 하다(takohata)’とその縮約形でありながら、情報を肯定的姿勢で伝える表現として‘-대(tay)’、縮約・敬語形の‘-답니다(tapnita)’、タメ口形の客観的伝聞表現‘-단다(tanta)’を提示することで韓国語文末伝聞表現の縮約のパターンが分かるようになり、コミュニケーションの場における社会的注意もクリアできる。また、接続形語尾‘-다며(tamye)、-다면서(tamyense)’を纏めて提示する、情報要求の‘-다지(요)(taci(yo))’を提示する、さらに過去の経験を表す‘-다더라(tatela)’、情報を不確かに伝える伝聞表現として‘-다나(tana)’を提示する、最後に意外性との関りの中か

80 文法項目の選定においては文法項目が用いられる頻度数、学習者の社会的環境も考慮に入れるべきであるが、頻度数を重視した場合、韓国語伝聞表現の4つの機能を適切に入れることができず、話し手の表現意図がうまく表せなかったため、本稿においては話し手の表現意図を重視しながら、頻度数においても劣らない項目を取り上げている。

ら‘-다네(taney)’を提示することで、伝聞の第一義である①情報伝達に加え、②情報確認、③情報要求、④意外性といった韓国語伝聞表現の持っている四つの意味機能を提示することが可能である。加えて、情報伝達の場における社会的注意もクリアでき、少ない表現数であるが学習者の表現意図に合わせて表現することができると考える。